

平成 25 年度  
山口大学の FD 活動

山口大学大学教育機構  
山口大学教学委員会

# はじめに

平成 25 年度から、新しい共通教育が導入された。山口大学は、この共通教育によって、すべての学部（共同獣医学部を除く。）の学生に共通の基盤としての資質・能力を保証し、その上に各学部・学科の専門的な資質・能力が育成されて学生が卒業していく教育システムを目指している。

従来の共通教育は、食事に例えるとバイキング方式であり、自由に自分が好きな（興味のある）授業科目を受講することができた。この方式では、嫌いな（興味のない）授業科目は受講しなくてもすむので、バランスが悪く、学習内容に偏りが出た。それに対して、新しい共通教育は定食メニューであり、バランスよく偏りのない必修の 30 単位を修得することになる。また、クォーターでメニュー内容（授業科目）が変わるので、飽きることなく授業を受けることができるものと期待される。

高校教育までは、生徒は「たどり着く道筋はいくつかあっても答えは一つ」という問題に向き合ってきた。ところが、一般社会で起こることはむしろ答えが一つである方が例外的であって、大学では、学生は「答えは一つではない」という問題に向き合わなければならなくなる。本学は、この新しい共通教育により、学びにそのような違いのある高校と大学とをうまくなめらかに接続したいと考えている。世の中には答えが一つではない問題がたくさんあり、そのような問題に向き合うには、特定の分野に偏らずに幅広く学んで、早期にさまざまな分野の考え方やものの見方を身につけることが必要である。新しい共通教育を初年次教育に位置づけたのは、そのような理由からである。

平成 25 年度からスタートした新しい共通教育では、課題探求型の能動的学修（アクティブラーニング）に取り組む授業科目「山口と世界」が必修化された。また、大学における学び方を学ぶ授業科目「知の広場」も必修化された。さらに、全教員出動体制による分科会制度から全部局出動体制への移行が行われた。これらにより、学生の授業外学習時間が大幅に増えるとともに、FD 活動がさらに活性化し、授業改善が大きく進むことが期待される場所である。

新しい共通教育の導入により、山口大学の教育理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする知の広場」の実質化を一步でも進めることができれば幸いである。本学の学生が、自分たちで課題を発見し、時間をかけてその解決策をはぐくみ、自分たちの解決策をかたちにするという体験を在学中に数多く積み、社会に飛び立っていくことを願ってやまない。

山口大学 大学教育機構  
副機構長・大学教育センター長  
糸長 雅弘

## 第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動	2
第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧	2
第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	8
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	72
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	74
第1節 実施方法・実施状況	74
第2節 授業評価の結果について（全学）	81
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	96

## 第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	109
第1節 授業公開（ピアレビュー）	109
第2節 学部・研究科主催FD研修会	113
第3節 教育改善に関する活動	116
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	121
第5節 FD実施経費報告書	125
第6節 来年度の課題	125
第5章 教育学部のFD活動	127
第1節 授業公開	127
第2節 学部主催FD研修会	128
第3節 教育改善に関する活動	131
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	132
第5節 FD実施経費報告書	136
第6節 来年度の課題	136
第6章 経済学部のFD活動	137
第1節 授業公開	137
第2節 学部・研究科主催FD研修会	137
第3節 教育改善に関する活動	137
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	162
第5節 FD実施経費報告書	162
第6節 来年度の課題	163
第7章 理学部のFD活動	164
第1節 授業公開	164
第2節 学部・研究科主催FD研修会	173
第3節 教育改善に関する活動	177

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	182
第5節	F D実施経費報告	185
第6節	来年度の課題	186
第8章	医学部のF D活動	187
第1節	授業公開	187
第2節	学部・研究科主催F D研修会	188
第3節	教育改善に関する活動	191
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	192
第5節	F D実施経費報告書	193
第6節	来年度の課題	193
第9章	工学部のF D活動	195
第1節	授業公開	195
第2節	学部・研究科主催F D研修会	197
第3節	教育改善に関する活動	200
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	201
第5節	F D実施経費報告書	203
第6節	来年度の課題	204
第10章	農学部のF D活動	205
第1節	授業公開	205
第2節	学部・研究科主催F D研修会	206
第3節	教育改善に関する活動	206
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	209
第5節	F D実施経費報告書	213
第6節	来年度の課題	213
第11章	共同獣医学部のF D活動	214
第1節	授業公開	214
第2節	学部・研究科主催F D研修会	217
第3節	教育改善に関する活動	218
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	219
第5節	F D実施経費報告書	221
第6節	来年度の課題	221
第12章	人文科学研究科のF D活動	222
第1節	授業公開	222
第2節	学部・研究科主催F D研修会	222
第3節	教育改善に関する活動	222
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	222



第 5 節	F D 実施経費報告書	223
第 6 節	来年度の課題	224
第 13 章	教育学研究科の F D 活動	225
第 1 節	授業公開	225
第 2 節	研究科主催 F D 研修会	225
第 3 節	教育改善に関する活動	225
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	225
第 5 節	F D 実施経費報告書	228
第 6 節	来年度の課題	228
第 14 章	経済学研究科の F D 活動	229
第 1 節	授業公開	229
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	229
第 3 節	教育改善に関する活動	229
第 4 節	学生授業評価・教員自己評価	229
第 5 節	F D 実施経費報告書	230
第 6 節	来年度の課題	230
第 15 章	医学系研究科の F D 活動	231
第 16 章	理工学研究科の F D 活動	232
理学系		
第 1 節	授業公開	232
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	232
第 3 節	教育改善に関する活動	232
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	233
第 5 節	F D 実施経費報告書	234
第 6 節	来年度の課題	234
工学系		
第 1 節	授業公開	235
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	235
第 3 節	教育改善に関する活動	236
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	236
第 5 節	F D 実施経費報告書	236
第 6 節	来年度の課題	236
第 17 章	農学研究科・医学系研究科（農学）の F D 活動	237
第 1 節	授業公開	237
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	238
第 3 節	教育改善に関する活動	238

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	238
第5節	FD実施経費報告書	239
第6節	来年度の課題	239
第18章	東アジア研究科のFD活動	240
第1節	教育改善に関する活動	240
第2節	FD実施経費報告書	245
第3節	まとめと来年度の課題	245
第19章	大学院技術経営研究科のFD活動	247
第1節	授業公開	247
第2節	学部・研究科主催FD研修会	247
第3節	教育改善に関する活動	248
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	250
第5節	FD実施経費報告書	250
第6節	来年度の課題	251
第20章	連合獣医学研究科のFD活動	252
第1節	授業公開	252
第2節	学部・研究科主催FD研修会	252
第3節	教育改善に関する活動	253
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	258
第5節	FD実施経費報告	264
第6節	来年度の課題	264
平成25年度	山口大学 教学委員会 名簿	265
平成25年度	山口大学 学部・研究科FD担当者 名簿	266
平成25年度	山口大学 大学教育センター 名簿	267

## 第 1 部 全学 F D 活動

# 第1章 大学教育機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む<sup>\*</sup>）。  
<sup>\*</sup>FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

## 第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成25年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は116名であった。また研修会は9種類・計11回開催され、参加者は計529名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計331名であった。延べ976名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	教授法が大学を変える —文系・理系の先進的なアクティブ・ラーニングの事例を学ぼう—	平成25年8月9日(金)	13:30～16:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室 工学部D11番教室 医学部総合研究棟多目的室	黒坂佳央(武蔵大学経済学部教授)、塚本真也(岡山大学自然科学研究科教授)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	学生の自主的・自律的な学修を促すアクティブ・ラーニングの事例紹介(文系・理系)と実施上の課題について講演およびパネル・ディスカッションを行う。	教職員115名 学生1名
									参加者計116名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	共通教育TA・SA研修会	平成25年4月2日(火)	13:00～15:15	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育1番教室 工学部D31番教室 医学部総合研究棟多目的室	糸長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)、森本宏志(保健管理センター准教授)、徳永和之(共通教育係長)	共通教育において前期にTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員28名 学生172名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	新任教員研修会(第1回)	平成25年4月3日(火)	15:00～ 16:40	吉田地区・小串地区	共通教育メディア講義室 医学部総合研究棟多目的室	丸本卓哉(学長)、瀨瀬厚(副学長)、三池秀敏(副学長)、糸長雅弘(大学教育センター長)、小川 勤(大学教育センター教授)、木下真(大学教育センター准教授)、石橋英二(情報環境部長)	平成24年9月25日以降に新規採用された助教以上の教育職員	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員55名
3	各学部・研究科FD担当者研修会	平成25年5月8日(水)	17:40～ 18:20	吉田地区・常盤地区・小串地区	各地区第1テレビ会議室	糸長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科のFD担当者	各学部・研究科のFD委員を対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の留意点などについて研修を行う。	教職員17名
4	山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法—学生を就職させるために—	平成25年9月18日(水)	10:00～ 11:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	大学生の就職活動の現状と本学の取り組みを説明。就職活動がうまくいかない事例を通じ、いま求められる就職指導のあり方を考える。また、新たに策定した「キャリア教育の基本方針」に基づき、本学のキャリア教育の方向性、学生ポートフォリオの活用や地域社会と連携した教育の取り組みについて語る。	教職員24名
5	山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法—学生を就職させるために—	平成25年9月18日(水)	13:30～ 14:30	吉田地区	理学部第11講義室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	大学生の就職活動の現状と本学の取り組みを説明。就職活動がうまくいかない事例を通じ、いま求められる就職指導のあり方を考える。また、新たに策定した「キャリア教育の基本方針」に基づき、本学のキャリア教育の方向性、学生ポートフォリオの活用や地域社会と連携した教育の取り組みについて語る。	教職員16名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
6	山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法—学生を就職させるために—	平成25年9月18日(水)	16:25～ 16:50	吉田地区	農学部2F会議室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	大学生の就職活動の現状と本学の取り組みを説明。就職活動がうまくいかない事例を通じ、いま求められる就職指導のあり方を考える。また、新たに策定した「キャリア教育の基本方針」に基づき、本学のキャリア教育の方向性、学生ポートフォリオの活用や地域社会と連携した教育の取り組みについて語る。	教員20名
7	山口大創基200周年記念 共育ワークショップ2013 「みんなで山大学の教育(共育)について語ろう！」	平成25年9月24日(火)	14:00～ 17:30	吉田地区	第二学生食堂きらら		希望者	山口大学創基200周年記念として新たに企画された参加型ワークショップである。山口大学の教育理念の一つである共育(共にはぐくむ)の場を創出し、教員・職員・学生が共に、大学教育のあり方を考え、学び合うことの大切さを自覚する。	教員16名 職員19名 学生40名 その他4名
8	今、山大学生は何を考え、悩み、不安を覚えているのか—学生相談所から見えてくる山大学生の実態—	平成25年10月30日(水)	15:00～ 16:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	今井佳子(学生相談所カウンセラー)	希望者	学生相談所における日々の面接を通して分かる学生の考え、悩み、不安の実態を紹介し、学生支援として何ができるのかを参加者と共に考える。	教員18名
9	大学教員として知っておくべき発達障害学生に対する対応と支援	平成25年10月30日(水)	16:10～ 17:30	常盤地区	工学部D棟1階D11教室	木谷秀勝(教育学部教授)	希望者	教員が授業やゼミなどの教育活動をする際に発達障害学生を巡るさまざまな問題にどのように対応・支援していったらよいかについて具体的な事例を交えて話す。さらに、発達障害学生の対応・支援に関するそれぞれの学部独自の課題についても具体的な解決策などをアドバイスする。	教職員48名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
10	平成25年度第1回障害学生支援のための研修会	平成25年12月19日(木)	17:00～18:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室	系長雅弘(大学教育センター長)、奥屋茂(保健管理センター所長)、宮田浩文(学生支援センター長)、木谷秀勝(教育学部附属教育実践総合センター教授)、今井佳子(学生相談所カウンセラー)、田中亜矢巳(CSRカウンセラー)他	障害学生・修学支援に関わる教職員・学生	発達障害のある学生の修学状況の把握と修学支援の方法および授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教職員18名
11	山口大学FDワークショップ「学士課程教育における学修成果測定について学ぶ～ルーブリック開発を目指して～」	平成26年3月5日(水)	13:30～17:00	吉田地区	大学会館2階会議室	松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)	希望者	大学教育学会・課題研究グループにおいてルーブリック開発実践を指揮している京都大学高等教育研究開発推進センター 松下佳代教授をお招きし、本学におけるアセスメント・ポリシーの構築やルーブリック開発の具体に関連する基調講演をいただくとともに、参加者によるグループワークを通して、授業科目『山口と世界』のCOMMONルーブリックの試作に取り組む。	教員27名 職員7名
									参加者 計529名

### Ⅲ 教育改善研修会

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと医学部医学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成25年7月10日(水)	13:00～13:30	小串地区	医学部第一会議室	系長雅弘(大学教育センター長)、川崎勝(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員26名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	大学教育センターと工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成25年9月4日(水)	14:00～14:30	常盤地区	工学部D棟1階 D11教室	系長雅弘(大学教育センター長)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員31名
3	大学教育センターと医学部保健学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成25年9月18日(水)	15:00～15:30	小串地区	医学部保健学科第2研究棟HD1講義室	系長雅弘(大学教育センター長)、川崎勝(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員35名
4	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科(教育学系)との教育改善FD研修会	平成25年9月18日(水)	17:10～18:00	吉田地区	教育学部21番教室	系長 雅弘(大学教育センター長)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員55名
5	大学教育センターと理学部、理工学研究科(理学系)・医学系研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成25年10月9日(水)	15:00～15:45	吉田地区	人文・理学部大会議室	系長雅弘(大学教育センター長)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員46名



	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
6	大学教育センターと農学部、農学研究科、医学系研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成25年10月17日(木)	14:30～15:00	吉田地区	農学部2F会議室	系長雅弘(大学教育センター長)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員15名
7	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成25年10月23日(水)	13:30～14:20	吉田地区	経済学部第1会議室	系長雅弘(大学教育センター長)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員54名
8	大学教育センターと共同獣医学部・連合獣医学研究科との教育改善FD研修会	平成25年11月13日(水)	14:30～15:00	吉田地区	農学部大会議室	系長 雅弘(大学教育センター長)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員23名
9	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成25年11月20日(水)	14:30～15:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	系長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、新しい共通教育導入に伴って明らかにになったさまざまな教育課題の解決のための意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。	教員46名
									参加者計331名

## 第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

### 1. 講演会

#### 教授法が大学を変える—文系・理系の先進的なアクティブ・ラーニング— の事例を学ぼう—

日時：平成25年8月9日（金）13:30～16:00

会場：吉田地区：メディア棟情報メディア講義室,常盤地区：工学部 D11 教室、小串地区：医学部総合研究棟 8階 多目的室

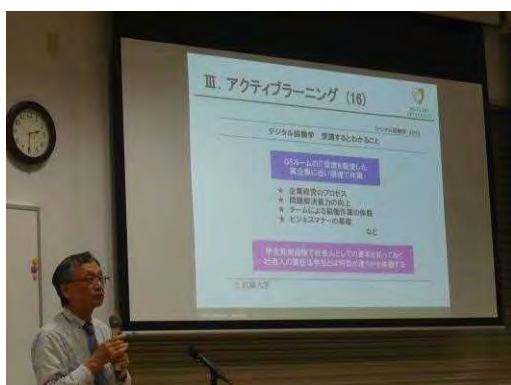
参加者：参加総数 116名（昨年101名）（学生1名、教職員115名）

〔内訳〕 山口大学（吉田地区45名（昨年度66名）、小串地区20名（昨年度9名）、常盤地区16名（昨年度4名）、下関市立大学3名、山口県立大学4名（昨年度7名）、東亜大学4名、徳山大学14名（昨年度10名）、山口学芸大学8名（昨年度5名）、山口福祉文化大学1名、水産大学校1名

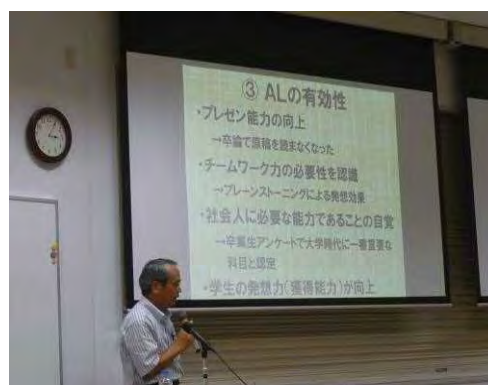
講師：武蔵大学経済学部 黒坂 佳央 教授、岡山大学自然科学研究科 塚本 真也 教授  
内容

講演会は3部構成で行われた。第1部では参加者の共通理解を得るために「アクティブ・ラーニングとは何か」をテーマに糸長大学教育センター長より、アクティブ・ラーニングの定義や本学でこれを導入することの意義、さらに、昨今のアクティブ・ラーニングの動向について説明があった。第2部では、アクティブ・ラーニングに関して先進的な取組を実践している文系・理系の2つの大学の講師から、それぞれの大学において、どのような特色を持ったアクティブ・ラーニングが展開されているのかを紹介していただいた。また、それぞれの大学でアクティブ・ラーニングを実施する上で課題になっていることも併せて紹介してもらった。それぞれの大学では方法は異なるが、学生参加型の授業を積極的に実施し、学生の自主的・自律的学修を促進するために大いに役立っていることがよく理解できた。

第3部では、アクティブ・ラーニングを実施する上で留意すべき点や成績評価などのさまざまな課題についてパネルディスカッションを通して明らかにした。また、会場から両講師に様々な意見や質問があり、時間的には短時間であったが、全体的に活発な意見交換が行われ充実したパネルディスカッションとなった。



武蔵大学 黒坂 佳央先生



岡山大学 塚本 真也先生

今回の講演では例年通り本学の3キャンパスを結ぶとともに、昨年度に引き続いて「大学コンソーシアムやまぐち」に参加している4つの大学（山口県立大学、山口学芸大学、徳山大学、東亜大学：昨年度は3大学、東亜大学はネット接続せず、当日吉田会場に直接参加）を遠隔授業システムを用いて講演会内容を同時に聴講するという試みを実施した。このため、学長戦略部国際・地域連携課やメディア基盤センターにも協力をお願いして事前準備を実施した。

講演内容は本学が本年4月から導入した新しい共通教育の中で「山口と世界」（後期開講）という科目でアクティブ・ラーニングを全新生2,000名に導入しようと考えていた時であったために両大学の事例は大変参考になった。アンケート結果を見ても、「非常に良かった」および「良かった」を合わせて87.1%に達し、最近開催された全学講演会の中では参加者の満足度が非常に高い研修会となった。参加者も全体的には昨年度に比べて15名多い116名となり、さらに、本学の3つのキャンパスの参加者合計も81名と昨年度の79名より2名多い結果となった。

今回の全学講演会は本学の教育方法を改善するために、具体的な方向性を考える上で意義のある講演会であった。



研修会の様子

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	15	21.4%
良かった	46	65.7%
どちらとも言えない	8	11.4%
あまり良くなかった	1	1.4%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	70	

## 2. 研修会

### (1) 平成25年度 共通教育TA・SA研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成25年4月2日（火）13:00～15:15

会場：全体研修：共通教育1番教室、常盤地区：工学部D31番教室、小串地区：総合研究棟多目的室（8階）

個別研修：共通教育棟（分科会ごと）

参加者：参加者総数200名（学生172名、教職員28名）

〔内訳〕吉田地区167名（教員23名 学生144名）、常盤地区32名（教員4名 学生28名）、小串地区1名（教員1名 学生0名）、：アンケート回収113枚

## 内容

共通教育の授業の補助を行うティーチングアシスタント (TA) およびスチューデントアシスタント (SA) のための研修会が 4 月 2 日 (火) 13:00 より吉田・常盤・小串地区で同時開催された。本研修会は年 1 回行われており、今年で 7 年目となる。一昨年度から学部 3・4 年生をスチューデントアシスタントに採用することになったため、参加者数は全体で 200 名であり、昨年より 17 名増加少した。これは新しい共通教育の導入に向けて TA・SA 候補者の採用が増加したためである。研修会の詳細は以下のとおりである。

まず、第一部では糸長大学教育センター長より山口大学の共通教育の特徴と TA・SA の職務内容と注意点について説明があった。今回は本年 4 月より「新しい共通教育」が開始されたため、その内容について詳しい説明があった。次に大学教育センターの岡田専任講師より出席確認システムと宿題提出機能の使い方について解説があった。特に、宿題提出機能は「新しい共通教育」の開始に伴って導入される機能であり、研修会終了後にも本システムの問い合わせがあり、関心の大きさが目立った。最後に教育支援課共通教育係より TA・SA の諸手続について説明が行われた。

本年度は例年全体研修で実施していた「大学の授業における安全衛生について」(担当: 全学労働安全衛生管理室主任・保健管理センター森本宏志准教授) を第 2 部の冒頭で関係する分科会の TA・SA に対して説明する研修形態に変更された。結果的には情報処理基礎分野と理系基礎・講義分野を除くほとんどの TA・SA が説明を聞くことになった。

第 2 部の個別研修では、共通教育棟の各教室に分かれてグループ別に TA の心得や機器の使用方法等について研修が実施された。ただし、グループ別研修に適さない科目については授業担当者が個別に事前研修を行うこととした。各グループの講師は共通教育授業科目別分科会にお願いしたが、多人数・講義系授業科目については多数の分科会に関係するため大学教育センターが担当した。各グループでは、TA の心構え、留意事項、共通教育係・印刷室等の案内、Windows 8 の操作方法、AV 機器操作実演、演習・実験補助の方法などについて研修が行われた。

参加した大学院生・教員からの事後評価では半数以上から肯定的な回答が寄せられた。自由記述では「TA になるにあたっての心構えが分かった」「共通教育の変更内容を詳しく聴くことができよかった」、「丁寧な説明でわかりやすかった」、「共通教育の変更点や TA 仕事の内容を詳しく聞くことができ、参考になった」などの意見が寄せられた。一方、「開始時間を厳守して欲しい」、「TA 経験者は変更した部分だけを聞けばよいと思った」、「大規模教室(共通 1 番、2 番)のプロジェクトの操作方法を聞きたかった」、「第 2 部の安全衛生の研修はわかりやすくなかった。プレゼンの字が小さく、講師の声が小さく、話もまとまっていなかった」、「安全衛生のスライドの文字は見えず、聞き取れなかった」、「もっと要点を絞って説明して欲しい」などの意見も寄せられた。

また、開催時期については、分科会や教学委員会の先生方から、4 月 2 日では入学式前であり、TA・SA 候補者が当該研修会に参加できないという指摘があった。このため、本年度は当日の研修会の様子をビデオ画像に撮り、後日ネット上から閲覧できるようにした。さらに、プレゼン教材や当日配布された資料もネット上からダウンロードできるようにした。

したがって、開催日時を含め、来年度は研修内容・方法の再検討を行い、改善を図ることが必要であることが明らかになった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	15	13.3%
良かった	55	48.7%
どちらとも言えない	32	28.3%
あまり良くなかった	7	6.2%
良くなかった	4	3.5%
無回答	0	0.0%
合計	113	100.0%



## (2) 平成 25 年度 新任教員研修会

日時：平成 25 年 4 月 3 日（水）15:00～16:40

会場：吉田地区：メディア講義室、小串地区：総合研究棟多目的室（8F）

参加者：55 名

〔内訳〕 吉田地区 27 名（内 URA 11 名）、小串地区 28 名（内 常盤より 4 名参加）

内容

年 2 回（第 1 回目 4 月、2 回目 9 月）開催されることになって 3 年目を迎えた。4 月に第 1 回目を開催する趣旨としては新任教員に対して就任当初の時期から本学の教育と研究に関する方針や具体的な取組方法について理解を深めていただくためである。丸本学長からは本学の現状と新任教員に対して期待することについて講話をしていただいた。また、三池理事兼副学長（学術研究担当）には本学の研究活動や競争的研究資金獲得の状況等について、額田理事兼副学長（教育学生担当）からは大学教員として本学で教育活動を行う際の心構えなどについて、それぞれ講話をしていただいた。その後、糸長大学教育センター長から「山口大学における教育の特徴について」というテーマで本年度から開始される「新しい共通教育」の概要を中心に説明があった（図 1 参照）。小川大学教育センター副センター長からは、「授業の実施方法について」というテーマで、大学における教授方法を中心に話しがあった。木下大学教育センター准教授からは「山口大学における授業評価と FD 活動」というテーマで、本学の授業評価の方法や研修体制について説明があった。また、石橋英二情報環境部長より図書館の学術文献や書籍の利用方法や管理方法について説明があった。

研修会に参加した全体の感想としては概ね好評であった。参加した先生方からの意見としては、「学長、副学長、大学教育センターの各先生方から熱いメッセージとともに、山口大学の置かれた状況などを直接聞くことができよかった」、「大学構成員としての自覚を持つためには良い機会になった」、「新しい研究外部資金調達の重要性が認識できてよかった」、「小川教授の話が面白く今後授業に活かしていけそうな気がした」、「新任なので授業の進め方に関してとても参考になった」という意見が多かった。しかし、一方で「講演時間を厳守して欲しい」、「学部のオリエンテーションの時間などが立て込んでるので、開催日時等を再検討してほしい」、「ホームページを見ろ。資料を後から見て欲しい」というだけでは研修に取り組み意欲が低下してしまう」という意見もあり、次年度以降、研修内容や研修時間をどのようにするか課題も残った。

今回、4 月開催が 3 回目ということであったが、開催日時については概ね好評であった。しかし、参加者からの意見にもあるように、「研修時間」や「研修内容」について再検討が必要であると感じている。今回は第 1 回目であり、スタートアップ的な研修会としての当該研修会の設定意義は果たせたと思うが、学部 FD や全学 FD と今後どのようにつなげていくかといったこと、「すなわち、「研修の体系化」が必要であることも痛感した。



図 1 講演中の糸長雅弘大学教育センター長

設問 1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	13.6%
良かった	20	45.5%
どちらとも言えない	13	29.5%
あまり良くなかった	3	6.8%
良くなかった	2	4.5%
無回答	0	0.0%
合計	44	100.0%

### (3) 平成 25 年度 F D 担当者研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 25 年 5 月 8 日（水）17:40～18:20

場所：第一テレビ会議室

参加者：17 名

〔内訳〕 吉田地区 14 名、小串地区 1 名、常盤地区：オブザーバー、大教センター主事・教員含む

#### 内容

最初に糸長大学教育センター長より、本研修会の開催趣旨が説明された。特に今年度から導入された「新しい共通教育」を巡る各種の教育課題を解決するために各学部と協議する予定の教育改善 FD 研修会の在り方やアラカルト型研修会の特徴について説明があった。

次に、大学教育センターの副センター長の小川勤教授より、本年度の教育機構主催の研修会の概要と各学部・研究科 F D 担当者に対してセンターからの依頼事項が明らかにされた。

本年度は新しい共通教育が開始された関係で、重要度を増している「アクティブ・ラーニング」に関する研修会が比較的多く開講されていることや全学講演会においてもアクティブ・ラーニングの他大学の先進事例を紹介するので多くの先生方や TA・SA の参加をお願いしたい旨、説明があった。

また、依頼事項としては、講師派遣型研修会の開催日時の報告、全学講演会の参加依頼、教育改善研修会の開催日時の報告については、締め切り期日までにそれぞれ報告をしてほしい旨、説明があった。さらに、独立研究科（技術経営研究科）の教育改善 FD 研修会については、本年度は共通教育に関することをテーマとして協議を行うため、必要に応じて開催される旨、説明があった。

次に、各学部が FD 計画を立てる際に、必要となる FD 予算要求について、大学教育センターの林准教授から説明があった。予算総額に限度があるため、必ずしもすべての予算要求に応えられないことなどの説明があった。

最後の意見交換では、全学講演会の講演についてどのような内容かを知りたいという意見があった。これに対して、大学教育センターの小川教授からは今月の教学委員会に機構主催研修会の「実施要項」を配布する予定であるのでこれを参考にして各学部・研究科で広報してほしいという回答があった。

当該研修会後のアンケートでは、研修全体の感想は約 67%の先生方から非常に良い、あるいは、良かったという感想をいただいた。研修時期については 93.3%がこの時期でよいという回答であった。また、今後受けてみたい研修としては「教育の質を向上させることができるような研修会」、「英語での授業方法に関する研修会」などの教育の質保証や英語を利用した授業等の高等教育の国際化に関する研修会への参加希望が多かった。



#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	6.7%
良かった	9	60.0%
どちらとも言えない	5	33.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

## (4) 山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法

### ー学生を就職させるためにー

日程：平成 25 年 09 月 18 日(水) 10:00～11:00

場所：人文・理学部大会議室

講師：平尾 元彦 (学生支援センター教授)

参加者：24 名

#### 内容

学生を就職させるためにと言うテーマで、卒業してどうなっていくかまで見守るという立場で聞いてもらいたいと希望を述べられ、山口大学で学んで良かったと 10 年後に感じられるように、就職支援をどのように考えて実行していけば良いのかという観点で話が始められた。



#### 就職活動と就職支援の変遷

今の 4 年生はバブル崩壊の 1991 年生まれで、1993 年には就職氷河期という言葉が出て来た。概ね 2000 年ころに就職ナビが登場し、2000 年前半にはインターネットによる就活が定着した。それ以前は、個々の学生にリクルートブックが届き、大学は送られて来た求人票を仲介していたが、それ以降は、大学を経由せずとも企業と学生が直接繋がる。これがこの 10 年間の大きな変化であった。

2008 年 9 月 15 日にリーマンショックがあり、内定取り消しが非常に大きな問題になった。派遣切りの問題も出た。フリーター、ニート問題は就職氷河期に入ってからずっとあったが、新たに新卒未就職が非常に問題視されるようになった。日本は新卒採用の社会なので高校・大学を卒業した時に就職せず、未就職のうちに社会に出ると社会的コストがかかる。文科省からは、予算は出すので何とかしてくれと言う話があり、山口大学でもキャリアカウンセラーを雇用し大学のうちに雇用が決まるように緊急対策を行った。吉田キャンパスの場合、以前は週 3 日、現在は 5 日来てもらっている。学生がしっかり就職活動できるように政府もサポートしていて、大学も後押ししている。

2011 年 4 月の大学設置基準改正では、「社会的及び職業的自立を図る」と言う文章が追加された。教育課程の実施及び厚生補導を通じて力を付ける。それが大学だということになった。新聞報道ではキャリア教育の義務化と報道された。

リーマンショックの背後では人手不足(2007 年問題)等の団塊の世代の定年が着々と進行していた。定年延長等で急激には進まなかったが、構造的には、企業は人手不足に陥っている。会社で活躍できる人財を求めたいが、不足している雰囲気は 2009～2010 年にかけてあった。

学生側の就職活動がうまく行っていないという事実がある一方で企業側、採用側も苦戦しているという事実もある。優秀な学生を採用したいが、優秀な学生はそんなに来てくれないという意味で、現在採用は過熱している。

最近出て来た言葉として、早期離職問題がある。3 年で 3 割離職することが問題になり、今は 4 割近くなっている。若者を使い捨てにするブラック企業問題は、この度、厚生労働省も、指導を強化しよう動き始めた。

まとめると、学生達の 2 極化現象が非常に進んでいる。決まる学生は決まるが、決まらない学生はなかなか決まらない。非常に疲弊する学生が出てくる一方で、採用が上手く行かない企業が特に中小企業を中心にいっぱいある。そのような会社は、企業は来年があるのであきらめて来年頑張ると言われる。10 人採用して新しい事をしたいのに、15 人内定を出しても 10 人に辞退され 5 人しか残らないという状況になる。5 人補充するのかと聞くと、うちのレベルの学生は、今からでは来ないので、採用はあきらめて、来年の新卒に賭けると言われる。本当はもっと仕事出来るのに、人がいないため

縮小気味にやらざるを得ないという話も聞く。

### 現在ホットなテーマ

「倫理憲章」をやめて「採用選考に関する指針」に変更すると、先般、経団連から発表され、新聞等で盛んに報道されている。経団連のホームページに、A4で1枚の「採用選考に関する指針」と、A4で4枚の「手引き」という資料が出ている。文面は倫理憲章とほとんど変わっていないが、決定的に違う点が2つだけある。倫理憲章では12月1日以降と書かれていた広報活動が3月1日以降、4月1日以降と書かれていた採用選考が8月1日以降と明記されている。この指針の中では、『政府が閣議決定（平成25年6月14日）した「日本再興戦略」において示されている開始時期より早期に行うことは厳に慎む。』のように、政府の方針に従うと書かれている。政府の方針である、3年生の3月1日以降、4年生の8月1日以降、経済界としてこの日付を尊重するというのがこの指針の趣旨となっている。これが適用されるのは今の2年生からなので、先生方に学生指導をお願いしたい。普通に就職活動していればわかるはずだが、時々3年生で勘違いしている学生がいる。変わるのは3年生ではなく今の2年生から。最初は3年生からやるという勢いがあったが、企業やリクルートは会場準備等を1年くらい前からやっていることで影響が大きいということで、今の2年生からスタート時期が変わることになった。「倫理憲章」も「採用選考に関する指針」も一緒だが、次のような理解が書いてあることは知っておいて頂きたい。採用広報、採用選考が一体何であるか、経団連（「採用選考に関する指針」の手引き）の中で定義があり、採用選考の開始時期より前に自粛すべき選考活動は面接と試験のみと書かれている。

今の3年生に関しては4月1日より前に自粛すべきこと、やってはいけないのは、面接と試験のみであり、その他、説明会、webテスト、テストセンターでの適性検査の受検、エントリーシートの提出等、これを学生に求めたりすることは問題ないと経団連の理解は言っている。国大協をはじめ大学はそれは違うだろう、それは選考活動だろうと言っているが、経団連の理解は、学生の自由度が高い、つまりエントリーシート書くのは休みの日に書けば良いし、学校学業終わって書けば良い、webテストも自分の好きな時間夜中でも出来るし、テストセンターも広島行った時について来れば良い。非常に自由度が高いものに関しては学業に影響ないだろう、学事日程に影響及ぼすものが少ないで良いでしょうと、そういう理解になる。

なんとなく不思議に見えるが、現在12月に就職ナビ、リクナビ等がオープンして、学生達はそれを見て一斉にエントリーする。エントリーシートや、テストセンター等、それは就職活動が始まっていると思うが、この理解によればそれは事前の情報提供、そして事前の選抜であって選考ではない。そういう理解のもとに各企業が動いている。

採用広報活動が12月1日から始まる。採用選考活動に関しては少し微妙で、何を持って選考するかというのを厳格に定義するのが難しいということもあり、実質的には2月、3月くらいに面接が始まる。学生達、今の3年生に関しては、2~4月くらいが事実上の就職活動の時期におそらくなる。

### 昨今特徴的に表れた点

昔は最初に大手企業が選考して、中小はそこでやっても取れないので、大手が終わった後に採用選考を行い、地方はその後と言うような、なんとなく秩序・自然の秩序みたいなのがあったが、現在は完全に崩れている。中小の方が先に動いているケースが非常にたくさんある。

2~3月に、経団連加盟の大手企業は、流石にうちやりますよと言ってやるわけにはいかないのに水面下で少しずつやっているが、中小はそんなことお構いなしにどんどんやっている。当然、その後大手に受かったから辞退しますというのは織り込み済みで、10人出して2人残れば良いくらいの感覚でかなり早目に動いている中小企業が沢山ある。おそらく今年もそうなると思われる。

ここ数年、特に顕著に表れており、本学でも重複内定が非常に増えている。昔は最初に大手でもらい1社で決まっていたが、最近は中小企業も同時に動いているので、同時に内定もらうケースあり、辞退するケースが非常に増えている。

学生たちも、決まる学生は決まるけど、決まらない学生は決まらない。企業もそんなことをしてい



るので採用が難しい。いっぱいエントリー来て、いっぱい説明会来て、いっぱい選考して、いっぱい落とされたけど、みんな辞退していなくなったという企業が実は続出している。就職も難しいけど採用も難しい。そんな時代になってきている。

こういうことが行われており、企業も、もう1回、学生も、もう1回のような形で動くので、今回の長期化の是正は、流石にそれは早過ぎるし長過ぎるということで、政府の大きな方針もあり、各企業、そして学校も新しいスケジュールで動くことになる。これが今の状況の説明になる。

### 今時の就職

相性就職というのが表している。部品のスペックが良い、なにか凄く出来るというよりも、全体のコーディネートが良い学生が好まれる傾向がある。コーディネートは、服と一緒に好き嫌いがある。私はこういうのが好きだけど私はこういうのが好きのように、企業もそうなのかなと思う。全体、総合力で選んでくる。学生もどこの業界が良いという学生は少なくなっている。最近の学生は、良い会社が良い、良い会社であればなんでも良いと言う。そんな感覚が企業側も学生側も進んでいる。

学生も良い会社入りたいし、企業も良い学生が欲しい。企業は元気でコミュニケーション能力が高い、10言ったら12くらい理解してくれるのが良いと言っているが、若者にそんなこと言っても難しい。

それと最近、特にストレス耐性を言われる。すぐやめる、すぐ折れる若者達が増えている。そういったストレスに対する耐性、耐える力を求めて、現在ストレス耐性に関するテストが売られているらしい。それで本当に分かるのかどうかは良く分からないが、企業のニーズは非常にあると聞いている。

若者達はどうかと言うと、私が受けている感覚では、分からないと言う学生が非常に増えたと思う。何をして良いのか分からない、どこの業界が良いか分からない、何になりたいか分からないと言う学生が増えた。そして、面倒くさいという学生も増えた。確かに面倒くさいと思が、就職活動が面倒という人がとても増えている。

私がやっている授業で、レポートや感想を書かせると、レポートが面倒臭かったと言う感想が非常に多い。そんな時代になっている。一方で何とかなるという感覚持っている学生もいるのは、先生方も感じていると思う。これは何を表しているかと言うと、何とかなっている人しか見えてないと思う。実は何とかなっている人もたくさんいて、その人を見て、先輩が何とかなっているから自分もなんとかなると楽観的に考える。楽観的なのは良いが、企業の考え方と若者の考え方で、こんな人たちがマッチするわけがないので、なかなか上手く行かないというのが、今進んでいると思う。

### 現在、何が起きていること

とにかく会ってみたいとわからないということが起こっている。これは、企業側もそうだが、学生側も何をしたいというのがあるわけじゃないので、会社に行ってなんとなく雰囲気良さそうだなと、そういう感じで就職活動進んでいる面がある。

そうすると数と量が非常に重要になる。いろんなところに行くことが実際に重要になる。これは間違いない。それにより、金銭的に交通費もかかるし、精神的な負担も相当なものだと思う。最初は2~3月くらいは勢いあるから良いが、だんだん疲れてくるし、お金ないし、もう嫌だ、面倒くさいとなる。5月くらいが結構重要な時期で、大手がやって追加が出る。非常に重要な時期だが、その頃になるとすっかり疲弊してやめている学生が結構いる。そんなことしていると決まる学生と決まらない学生に分かれて、いわゆる二極化現象というのが起きる。

決まらない学生はどういう学生かと言うと、まず活動してないと決まらない。企業もたくさんの学生を集めて面接して選考するので、面接下手だと損をする。面接が上手いから採用されるわけではなく、面接が下手であったり、上手く喋れなかったり、なんとなく態度が大柄だと損をする。疲れて途中でやめている学生も意外と多い。一番重要な5~6月くらいに疲れてやめてしまい、夏くらいに復活する学生が結構いるので、やめさせないというのが意外と重要になる。

何が重要かと言うと作戦で、学生には作戦を立てるように言っている。だいたい2~3月くらいに合同説明会して4月くらいに面接になるので、とりあえずたくさん行かないといけない。でも2~3

月くらいにお金も体力も使い果たすと4月くらいで本当に使わないといけない時になかなか上手く行かないという話を学生にしている。

凄く動いている学生は少しセーブさせながら、あまり動いてない学生は動かしながら、そんな舵取りも少し必要になる。それが出来る人はすんなりと言っているように思う。

現在の就職活動は、多くの会社に行って、その中で学生達も成長して、企業を見つけていくということになっている。現在、政府は、学業に専念、集中させないといけないと言っているが、重要なのは集中、専念ではなくて並行する事。学業をしながら就職活動もして、ある程度長い期間かけて、いろんな企業に行って話を聞いて、あるいは自分で勉強して、自分の道を選んで行く。これが今の就職活動。学業と並行しての就職活動が出来るように、我々は指導していかないといけないと考えている。そして、早くから活動する。量も必要なので多くの企業に行き、じっくりと考える。今の2年生からは、いわゆる短期決戦になる。ただし、最終は短期で間違いないが、その前の準備が重要になる。

#### 就職に関して山口大学における現在の問題

平成24年度卒業生の内定率は87.5%であった。こういった就職率が独り歩きして行くが、実はこれはあまり重視していない。我々が何を見ているかというと、進路未定者を見ている。進路未定率は卒業生から進学者を除いたものを分母とした未定者数。卒業した人のうちの何人が進路未定なのかと言う数字。人文学部は32.4%でダントツに高い状況にある。こういった学生達を出来るだけ次の進路をしっかりと確保して卒業できるように、指導しないといけないと考えている。未定率が高い、未定者が多いというのが本学の課題になる。

大企業が良いわけではないが、今どういう現象が起きているかというと、日立製作所等、大きな会社があるが、あんまり学生が行かない。全然行かないわけではないが、たくさんある日立〇〇等に割と行く。もっと言えば、日立中国〇〇等、地域会社、これは割と人気がある。上を目指さない、目指せない、そういった現象がある。

大手の地方会社は、結構激戦になっている。地方大手、中国電力や福岡銀行等も、かなり激戦になっている。出来るだけいろんなところに就職活動して、可能性があるのであれば大手も目指して行くことも少し考えて行かないといけない。

コミュニケーション能力が低いかどうかは分からないが、低いと思われる。なかなか社会人、大人との会話がうまく行かない学生が増えているように感じる。知識不足の学生も多い。会社のこと知らない、業界のことを知らない、あるいは準備不足で、「こんなことも調べてないの？」と企業から言われる。行動不足もある。用意された説明会には行くが、会社訪問、OBOG訪問等、自ら動いて行動するのは苦手な傾向がある。学内資源へのアクセスも弱い。大学で様々な学修活動行っているが、参加する学生が少ない。1つは知らないというのもあるが、知っていても反応しない学生が多くなっている。

#### 学生支援センターとして行っている就職支援

学生支援センターが平成15年に設置され、その時に来て10年やっている。この10年間、働くことをリアルに感じられるように取り組んできた。この環境なので本を読んだり実験したりするには良いが、企業や職場が感覚的に遠い。そういったものをリアルに感じられるように、就職活動だけにならないよう、学業もサークル活動も重要なので、早くじっくり活動するようなことを考えている。一人一人異なるので、教育連携、相談重視で出来るだけ個別に相談する体制も作っている。

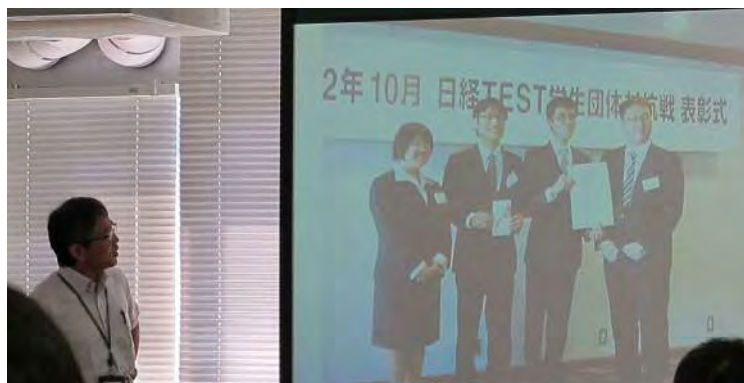
まとめると正課内外の教育ということで、授業だけではなく授業外も重要ということで、先ほど説明したような話が設置審から出た。政府としては、ああいう方針で、それはそれで分かったが、我々としては政府が言うからやるのではなく、我々自身、山口大学として自らの意思でキャリア教育しっかりやって行こうと、2011年にキャリア教育の基本方針を掲げている。

1番目が、「大学におけるすべての教育研究活動を通じて、学生のキャリア形成を支援する」。3番目が、「学生のキャリアビジョンを明確にさせ、社会的・職業的自立に向けて指導する」。2番目が本学の特徴かもしれない。「就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する」。

キャリア教育が大学としての教育と言うことであれば、キャリア学習というのは学生が自ら学ぶ、そんな学習の場を積極的に作ろうとしている。

キャリア学習は何を学ぶのかと言うと、キャリアとはどういうものなのか、いろんな人のいろんな生き方を学ぶ必要があると思う。やはり世の中のことも分かってないといけないので、今から自分が行く世界を分かるということで経済・社会を理解する。これも知識としては非常に重要。それからコミュニケーションを取り、あるいは物事を計画的に進めて行く、社会人基礎力を身に着けることをキャリア学習の目標として掲げて、授業だけではない、インターンシップだけではない、キャリアを学ぶ機会というのを作ってきた。

宣伝になるが、日経テストという、経済テストのような、経済知力と言われているテストがある。学生にはこんなテストがあるから新聞をしっかり読んで一緒に受けようと言って、昨年、団体戦に参加して、実は全国3位になった。人文学部の学生さんだが、過去に日経テストを5~6年一緒にやっていて、彼女の点数がおそらく一番高かった。



日本経済新聞には、就業力育て総合力ランキングというのが出た。山口大学は15位。驚いたことに、大学の就職支援などを聞いた職業観分野では山口大学が首位になった。「親と子のかしこい大学選び」(日経HR発行)という本に詳しく出ているが山口大学が就業観ランキングでトップになった。



キャリア教育で、我々が何をしているかと言うと、1つは正課の授業で、これは現在の「キャリアデザイン」と、「キャリアと就職」になる。今回共通教育の改変に伴い、1年生

の「知の広場」、3年次の「キャリア教育」が全学必修となった。必修の授業が全学的に展開されて行く。

キャリアと言うのは就職もそうだが、1人1人異なる。授業はあくまできっかけ。私の授業で何しているかと言うと、いろんな課題を出して、自分の問題として自分の社会人基礎力はどうかとか、自分は将来どういうことがやりたいのかと考えるレポートを出している。キャリアインタビュー等も出すので、おそらく先生方で学生からインタビューさせてくださいと言われた方もいると思う。親、先生、バイト先の店長等、そういった人にインタビューをする。それぞれの立場でしっかりと若者にアドバイスして頂いて、ああそうなんだ、ということがよく分かる。そんなことをやっている。

これは、あくまで授業でそんな具合に考えないといけないのかと、なるほど本って重要なんだと分かって、あとは自分でやるということで、特に本に力を入れていて、最近、就職支援室には本がたくさんある。貸し出しも出来るので、どんどん借りに来て頂ければと思う。図書館もリニューアルするので、もうちょっと良いキャリア学習就職支援コーナーが出来ると思う。

正課外の本から学ぶということだが、人から学ぶということも非常に重要。インターンシップは、

現在、山口県で220の学生達が行っている。インターンシップには定義があり、5日以上の職場での就業体験とあるが、なかなか5日以上やってくれる企業は多くない。

学生も都合があり、5日はちょっと、となる。5日じゃなくても学ぶ機会は出来るということで、1day学習会、1日ないし2~3日くらいで学べるような機会も大学の中で進めて来ている。西京銀行、中国警備保障、労働局、山口県庁等の方にも来てもらい学んでいる。時々外にも行こうと、バスに乗って会社見学にも行っている。

学内業界・企業研究会は、今年は10月から始まる。教室に企業の方に来てもらっている。常盤キャンパス会場の時はこちらからバスを出している。キャリア教育の一環として展開しており、あくまで学生にとって学習の場で、企業がここで説明会するという意味ではない。我々がお願いしてきて頂いているという主旨の研究会。

今年は10~2月まで、学習の期間を中心に、平日は16:30~18:00、土曜日、祝日、一部水曜日の午後も使い、いろんな企業の方に来て頂いている。この研究会があるので、本学は、普通に勉強しながら、ちょっとこの時間はこっちに行こうという形で20~30社、いろんな業界の人の話を聞ける。そういう場を今作っている。

こういう正課内外の様々な活動をしていく中で非常に重要な、それを支える基盤として、こういうものをどうやって知らせるのかと言う広報基盤がある。学生支援センター就職NEWS、これは人文学部の先生方にはおそらく皆さんに届いていると思う。毎週月曜日に1週間の就職支援室の全学情報を、先生方、学生の皆さんに配信している。人文学部の学生さんには全部行っているはず。先生方に活用して頂ければと思う。学生が結構見ていない。届いていること知らない学生もいる。

結構長いので、それもいけないのだが、こちらの事情もありこうなっている。3年生も4年生もあるいは理系も文系も全部を発信しないといけない。それを個別に分けて発信すると手に負えなくなる。先生方あるいは学生の皆さんには全部お届けして、それを皆さんでチョイスしてくださいと、そういう趣旨になっている。

自分にとって必要なものは何かというものを、学生にアドバイス頂くと共に、先生方も見られて、これは教えてあげようというものは切り取って教えて頂ければと思う。

学内に学生支援センターの掲示版は、17か所ある。まめに掲示版も見てもらいたい。ただ掲示版がそんなに大きくないので、全部貼れない時期がどうしても出て来る。ホームページにはすべてある。キャリア学習新聞と言うのを今年から作り初めた。これは1年生向けで、低学年向けにいろんな機会があるとか、本の紹介をしたりとか、そんな活動を現在行っている。

もう1つの相談の基盤として、やはり1人1人考え方も能力も違うので、個別に出会っていくことが非常に重要ということで、現在毎日こちらのキャンパスにはキャリアカウンセラーの方、ハローワークの方に来て頂き相談を受けている。何を相談してよいか分からないという学生が結構多いので、出来るだけ学生が来易くなるように、例えば「会話が苦手な学生のための相談会」とか、「就職活動再構築セミナー」とか、「今から始めよう・・・」とか、いろんなあの手この手のポスターを活用している。ほとんど中身は一緒だが、ポスターだけは変えている。これが本当に来る。4年生相談会とかやると、毎週同じような学生が来るが、変えると、なんか来て来ましたという人が1人くらいはいる。会話が苦手な学生と言うと、1人くらい本当に苦手な学生が来たりする。我々としては出来るだけそういった学生達と接触するようなメッセージを発信している。先生方もお気づきの学生がいたら、是非こんなのもあると紹介して頂ければと思う。

## お願い

先生方へ、学生を就職させ、本人の幸せのために、学生の次の進路を一緒に応援するというような観点から3点お願いがあった。

基本方針として、先生方をお願いしたいのは、暖かく見守り声をかけるということ。「どうなの？」みたいな感じで良いので、声をかけて頂きたい。相談の体制も作ってきているので、就職のことであれば就職支援室まで繋いで頂ければ、あとはこちらで情報提供等させて頂く。我々が一番分からない

のは、来る学生はわかるが、来ない学生の存在が分からない。その辺が弱点になっているので、そこは連携させて頂ければと思う。

大学生活の充実こそすべてというのはエントリーシートがまさにそうだが、どんな大学生活を送ってきたかを聞いている。私はこんな風に伸びましたとか、ゼミでこんなことやりましたとか、アルバイトでも良いが、そういったものを伝えることが出来るように1年生からしっかり考えて準備を、就職のためではなくて大学生活4年間しっかり送ろうという部分の指導をお願い出来れば、これがそのまま就職に繋がって行くと思う。

苦手な学生、就職活動が嫌だとか逃げたいという学生もいる。そして弱い学生、どうしても話が上手くできないとか、いろんな学生がいる。そういった学生達もやはり社会に出て自分なりの活躍をして頂くためには早目の準備がいると思う。とにかく重点的に支援を、ちょっと心配な学生さんいたら、1年生でも2年生でも構わないので声を掛けて頂いて、我々もその学生達が卒業・就職が上手く行くような形で、じっくり支援していきたいと思っている。

今も何人かいて、ほぼ毎週の如く来ている学生がいる。就職活動は、4年生になってからだとなかなか間に合わない面があるので、出来るだけ早くということでお願いしたい。

具体的には大学の電子メール、先ほど申し上げたように学生支援センター就職 NEWS 他、人文学部でも就職のメール出して頂いている。とにかく大学のアドレスを見よと、それを、ご指導頂ければと思う。携帯に転送設定しとく等して、いろんなメールが来るのでちゃんと見よと。

就職相談、キャリアカウンセリング、これは、なんだかわからないから来ましたが構わないし、我々が人文学部のゼミに行ってもかまわないので、そういった形で個別の接触に関して先生方にご協力を頂ければと思う。

そして最後に、内定状況調査、これが10月の末から始まる。正確な把握と適切な支援、これは調査が重要なのではなく、それを通じてその学生の今の状況を、正確に把握し、事実を掴んでおくということと、いろんな問題点に関して適切に支援していくということ。それに関して、我々も一緒にと考えているので、まず正確に把握していくことに関して先生方のご協力と、それにより学生達が就職ができるように支援させて頂ければと思う。

## 質疑

**Q:** 広島で適性検査受けるというのがあったが、私が就職した頃は学校で受けた記憶ある。最近はないのかと疑問持った。最近、公務員志望が非常に多くなってるが、公務員に向いてないと言うか民間企業の方が向いている学生もいる。だいたい親御さんの威光が強くてそうなってる印象が強いが、公務員志望だと民間は受けない。結果的に向いてない学生は、やはり公務員には現役で受からない。私も適性検査受けると、その中に教員があって、自分でも意外で自分向いてないと思っていたのに、教員もあるのかと初めて選択肢に入れたというのがある。どう指導したら良いか。

**A:** 適性検査という言葉は、あいまいに使われているところがあって、企業が言う適性検査はいわゆる知能と性格の部分。昔は紙でやっていたが今はwebでやっている。先生が今言われたのは適職診断であったり、あるいは性格検査と言われている適性検査の一種だけど、企業言うものとは若干違う。自分の性格であったり、自分の職業のマッチングを見る。これは個人で出来る。

山大では R-cap、これは割としっかりとしたフィードバックもしてもらえる診断で、有料だが年1回、団体受験で割引して実施している。それより手軽なものが、今、就職ナビでいくつかある。無料で、あなたはこういう性格ですよ、こういう職種が良いですよと、先生方も登録すれば出来るのでやって頂いたら、自宅でやれば結果が出てくるので、それは是非やって頂いた方が良いと思う。私は学生には勧めているので、意外と学生はやってると思う。

今、無料のテストは、非常にアクセスしやすくなったので、それを利用して自分の方向性見るけど、それをどう活用するという問題あり、思ってた通りだった、で終わるんじゃないかと、先生が言われたように意外とこういうのもあるのかと広がると良いんが、なかなかそこがやって終わりと言う学生が多い。



我々としてはR-capの説明会で実際に見てもらってワークをして自分のことを深く知るとのこと  
やっている。

Q: 逆に公務員が向いてない学生を、民間企業にというのは無理か。

A: それは分からない。実はこういうことがある。向いてないからダメかという、そうでもない。  
一般的に公務員のイメージがあるが、公務員も変わろうとしているので、実は旧来型の公務員タイプ  
じゃない人が欲しいといとか言われる。企業側も凄くわがままで、銀行は銀行志望じゃなくて商社志  
望が欲しいと、そんなわがまを言う。それは実際の会社の仕事が変わってきているというのがある  
と思う。

従来の公務員の仕事は、企画をして立案して本省行って交渉して、民間も巻き込んでとか、実際に  
仕事自体が変わってきていると面があるので、そこが難しい。

決めるのはもちろん本人が決めるので、あなたは多分従来の公務員タイプじゃないと思うので、そ  
ちらを強化するか、そうじゃないところを売りにしたらどうかとか、そういうアドバイスは出来る  
と思うが、それはケースバイケースなので必ずこうというのは分からないと思う。

### アンケートの回答等

#### 感想等

近年の就職状況が良く分かり、それに関する山大の取組が理解できた。自分ゼミ生の様子が現在の  
就職のあり方に合致していて驚いた。今後、いろいろとご指導して頂ければと思った。

良く知らなかった就活の概要を分かり易く教えていただき有り難かったです。

就職支援とういうのは、もっぱら教職、公務員にかかわるものとして意識にあったので、一般企業  
への就職の現状を知る良い機会となった。

講師の人柄が良さそう。学生に勧めたい。

講師の先生の説明がわかりやすく、熱意も伝わってよかった。

企業側、学生側双方の現状について、わかりやすく教えていただきました。

最近の動向がよく分かった。

#### どのような研修会に参加したいか

近年の授業設備に関する進歩は著しくぜひ新しい授業機器や文具等について知りたい。それらを使  
った授業を体験してみたい。

問題のある学生に対する指導法。

今回のようにすぐ役立つような企画を考えてほしい。技術的な授業はハードルが高いと思います。

教員と学生がいっしょに聞く。

「リテラシー教育とは何か？」について。

今回のような内容を毎年。

学生のメンタルケアに関する事。



資料の整理、ファイリング、OCR 読み込み等の使い分け。会議資料廃棄のタイミングなど。

学習障害など、問題のある学生への対処法。

学習困難者や発達障害に関する研修会。

初年次教育。

就職指導。

## 付録

当日は質問時間が殆ど取れなかったこともあり、折角の機会なので、その後人文学部 FD 部会で就職に関して学生支援室と連携するためにも教員が知っておくべき Q&A を作ってはどうかということになり質問集を作ったところ、講師からの以下のような回答を頂いた。

### 人文学部教員のための就職 Q&A

Q: 3 年次の前期と後期に外国の大学に留学する場合、帰国するのは 3 年次の 2 月後半～3 月前半になります。それから就活を始めると他の学生よりかなり遅れることとなりますが、留学中でも就活に関して何かできることはあるのでしょうか。

A: 現在の 2 年生 (2016 年 3 月卒) から就職活動のスケジュールが変更されます。現行の採用広報 12 月、採用選考 4 月スタートが、それぞれ、3 月、8 月に後ろ倒しされます。すべての企業がこの日程で行うかは疑問ですが、3 年生の 3 月以前の動きはかなり減ることが予想され、3 月頃に帰国することで不利となることは、ほぼ無いのではないかと思います。企業の採用活動はこのスケジュールで動きますが、学生の就職活動準備は、着実に進めておく必要があります。「働く意欲」や「社会を知る」ということです。留学中は外国で学ぶべきことに専念していただいて、よいでしょう。思いっきり勉強をしてください。帰国したらすぐにモードを切り替えて、就職活動に取り組む“覚悟”だけは持っていてください。留学する前に、帰国してどうなるのかのイメージを持っておくことをおすすめします。就職支援室で説明しますので、出発前にお寄りいただくよう指導してください。

Q: 就活の様子を尋ねると口ごもってあまり答えたがらなかったり、内定が決まったことは報告するが具体的な団体名を自分からは言わないといった学生さんに、どのように接したらよいでしょうか。

A: 何かの理由があるのかもしれません。うまくいってないので話をしたくない、怒られるから話したくない、やってないから話したくない、など。いろいろ考えられます。教員には言いたくないけど事務職員の方ならいい、キャリアカウンセラーならいい、などの場合もあります。無理をせずに他の方に報告・相談するよう促すことをおすすめします。企業名を言いたくない場合は、大学として必要であることを伝えて、事務室に報告書を提出することをお願いしてください。大学には、学生の卒業後の状況を把握して社会に説明する責務があります。ただし、なんらかの事情がある場合は、企業名を伝えなくてもよいように事務的に取り扱うことも可能です。

Q: メールで送られてくる「就職 NEWS」を教員としてどのように活用するのがよろしいでしょうか。

A: ざっとご覧いただいて、学生との会話のネタにしてください。必要な部分だけ切り取って、メール配信や印刷配布していただいてもかまいません。学内ではたくさんの行事があります。学外からたくさんのご案内をいただきます。その都度送るとたいへんなメールの数になりますので、週一回まとめて配信することにしています。就職支援室からの情報は、3 年生むけのものもあれば、4 年生むけのものもあります。理系も文系もあります。すべてまとめて配信するため混在しています。必要な情報だけ抜き出してご活用いただくようお願いいたします。

Q: ゼミの学生が「就職 NEWS」のメール登録しているのかどうか、教員側は現状全く把握できていませんが、就職支援室として学生の登録状況はどの程度把握しておられるのでしょうか。わかりましたらお知らせください。

A: 学生支援センター／就職 NEWS は、就職担当の教職員あてに送るメールです。人文学部では、そのメールを全学生に自動的に配信するように設定しています。したがって、すべての人文学部生に届いています（学生による任意の登録制ではありません）。一方で、学生が大学アドレスを見ていないケースは多々あります。大学アドレスのメールを見るようにするか、携帯電話等に転送設定して、必ず見るようご指導ください。

Q: 公務員志望の学生の就職内定が遅い（あるいは最終的に決まらない）ことが多く、学業との両立が難しいケースが見られ、対応に苦慮することがあります。就職支援室では、公務員志望の学生に対して、どのようなアドバイスをされているのか、教えてください。

A: すべての基本は、学業と並行した就職活動です。公務員志望の学生にもそのように指導しています。内定が遅いのは官公庁の採用時期の問題で、これは機会あるごとに人事院等に申し入れをしています（なかなか変わりません）。本学では、公務員志望の学生の就職が決まりにくいのは事実です。対策として、ひとつは、公務員採用試験に合格するよう早期かつ適切な準備をすること。もうひとつは、公務員志望者は決まらない（決まりにくい）リスクがあることを早い段階で知らせることが必要だと思っています。おおまかに言うと、二次試験（面接など）で半分は落ちます。仕事への理解と意欲を高めること、そして、大学生生活を寿実させることが大切だと、アドバイスしています。公務員や教員、民間企業もすべて同じですが、学生が希望する道に進めるような支援が基本です。公務員志望の学生たちが公務員になれるように支援することを基本としています。

Q: 内定を得た学生がその企業から研修という形で呼び出されることがあり、ひどい場合は学業に影響が出るぐらい拘束されます。学生は内定先ですので断りにくい状況にあります。教員としてどのように対応すればよろしいでしょうか。また世間でいうところのブラック企業を学生支援室は把握しておられるのでしょうか。

A: 内定先からの過度な拘束があることは把握しています。第一に、学生本人が内定先に申し入れる（相談する）ことを促してください。それが困難な場合は、就職支援室から企業に申し入れることもできます（学生本人が望んだ場合）。過去に企業へ申し入れをしたことはあります。つらいのは学生本人かと思しますので、教員として、まずは学生が困っている状況を受けとめてください。その上で両立するためのアドバイスをしてください。必要に応じて、就職支援室に相談してください。ブラック企業については、定義があいまいで、噂レベルの把握でしかありません。今のところ就職支援室では明確な情報を持っておりません。

Q: 就職状況を把握するために、学生に状況を聞くことが求められていますが、内定がもらえない学生に就職のことを話題にすることが憚られることもあります。就職支援室で把握しておられる学生の就職状況について、学部教員に伝わる連絡網のようなものを作ってもらえませんか。

A: 全学の就職支援室は、学生個々人の内定状況を把握していません。情報を持っているのは各学部の学務係です。学部の事務担当と教員との連絡の仕組みを構築していただければと思います。

Q: 他学部比べて人文学部の学生は就職活動に積極的でないように感じております。他学部の学生さんは比較的早くから就職活動を始めていることを耳にします。各学部の学生の就職活動の状況を大学全体で共有するような情報発信を就職支援室がしてもらえませんかでしょうか。

A: 各学部の就職委員長および事務担当者が集まる「就職担当教員連絡会」を月一回開催しています。そこで情報交換をすることはできます。ただ、各学部ともに学生の活動状況を把握しているわけではありませんので、感覚的な話しかできないのが現状です。明確な指標として、就職ナビの登録者数やエントリー数を、就職情報会社から提供していただくことは可能です。それぞれの時期に必要なセミナー等の開催を通じて、学生には情報発信していきたいと考えています。



Q: 首都圏や関西圏の私立の中には就職率 100%やそれに近い数字を広告として出しているのを見かけることがありますが、国立大学に比べてかなり高いような印象を持っています。就職率というのはどういう定義で使われているのか教えてもらえますか？

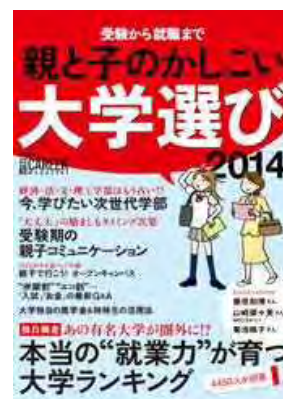
A: 世の中で就職率と言われるとき、それは学部生のものを指すのが一般的です。その前提のもとに、一般に流通している就職率には3つの指標があります。ひとつは、文部科学省学校基本調査による、卒業生のうち就職した人の割合です。進学者が多いと低くなります。国立大学はかなり低いです。もうひとつは、就職希望者に対する就職者の割合です。就職希望者をどうするかによって数値が大きく異なります。この定義はあいまいです。それだと実態が見えないということで、進学者を除いた卒業生に対する就職者の割合が発表されます。週刊誌等でランキング発表されるのはこの指標です。国立大学は、大学院への進学者が多いため、結果的に希望者が少なくなることで決まらない学生が目立つこと、公務員・教員採用試験、各種資格試験を目指す学生が就職をしないケースがあることから就職率は低くなる傾向があります。このように一つの明確な定義があるわけではないというあいまいな現実があります。

Q: 人文学部の学生が卒業時3割程度進学も就職もしないで出て行くことについて、文部科学省から問題であると指摘されたそうですが、卒業後の進路に関して未定であるという学生の扱いをどのように対応したらいいのでしょうか。

A: 日本は新卒一括採用の文化の国ですので、卒業時に次の進路が決まっていることが当然との理解かと思えます、そうなると、在学中に卒業後の進路を決めなければならず、このことを含めて大学教育であるとの理解が必要であると感じます。卒業時に進路未定にならないように、大学教育全体を通じて就業意識を高め、適切な進路選択のための活動を促していかなければなりません。学生の個性や能力は一人ひとり異なります。全体での指導だけではなく、個々の学生との“かかわり”が重要です。学部の教員はもちろんですが、事務職員の方々や外部のキャリアカウンセラー等の力を組み込みながら、かかわりを強化することが求められます。とくに、コミュニケーションがうまくいかない、キャリア意識が低い学生には、早期かつ重点的な支援が必要です。全学的にもこの点を強化していきますので、連携して取り組んでいければと考えています。

## 関連図書

- 日経キャリアマガジン特別編集  
受験から就職まで 親と子のかしこい大学選び 2014年版  
(日経 HR、2013年6月発行)  
[http://www.nikkeihr.co.jp/careerm/mook\\_2013\\_06\\_17/](http://www.nikkeihr.co.jp/careerm/mook_2013_06_17/)  
短縮 URL: <http://goo.gl/4KyW0j>



## (5) 山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法

### －学生を就職させるために－

日程：平成 25 年 09 月 18 日(水) 13:30～14:30

場所：理学部第 11 講義室

講師：平尾元彦（学生支援センター教授）

参加者：16 名

内容

本研修会では、就職活動の変遷と現在の問題点、大学における就職支援の必要性とそのあり方についての説明と質疑応答が行われた。

学生の就職活動は、バブル崩壊やリーマンショック等を発端とする経済的長期低迷に加えて、ここ十数年で飛躍的な進歩と普及を遂げた情報環境の変化からも大きな影響を受けている。特に後者については、以前は大学を介して求人情報が学生に届けられていたが、現在ではホームページやメール等を用いて企業は学生に求人情報を直接に配布するようになった。そのため、学生は所属する大学によらず求人情報を得ることが可能となり、企業は以前よりも幅広い学生に対して求人募集ができるようになった。ところが、大量の求人情報に翻弄されて自身の適性を考慮せずに『いい会社に入りたい』と考える学生と『いい学生が欲しい』と考える企業との間でのミスマッチが深刻化し、就職難と採用難の同時進行が生じている。就職が決まらない学生の増加に伴う社会的コストの増大と、有望な新規人材がみつけれない企業の疲弊が大きな社会問題となっている。

このような状況の中で、企業は有望な学生を採用するために大学に在籍する早い段階で学生の選別を始め、学生の就職活動の開始時期を早める結果となった。このような企業による採用選考活動の早期化は、大学における学生の勉学の機会を著しく妨げる大きな一因となっている。この点を是正するために、日本経済団体連合会は新たに「採用選考に関する指針」を示し、採用広報および採用選考の開始時期を遅らせる措置を講じた。しかしながら、企業に課す条件は限定的であり、またその内容を誤解して捉えている学生も少なくない。

これらの問題に危機感を募らせた文部科学省は、大学設置基準の改正を行い、大学に対して教育課程および厚生補導を通じて社会的および職業的自立を培える体制の整備を求めている。

学生支援センターでは、前述の状況を踏まえて、在学中の早い時期から学業と並行して正課内外のキャリア教育を充実させると共に、個別学生への細やかな指導にも努めている。研修会では学生支援センターが主催する正課内外の具体的な活動について説明が行われた。

就職が決まらない学生の特徴としては、そもそも就職活動をしていない学生、面接試験を苦手とす



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	50.0%
良かった	8	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%

<sup>1</sup> 本指針が適用されるのは現時点の2年生からである。採用広報は12月1日から3月1日（アナウンス等例外）に、採用選考は4月1日から8月1日に変更された。しかしながら、Webテスト・エントリーシートなど学生の時間的自由度が高い選考活動についてはこれよりも早く実施しても良いとしている。

る学生、途中であきらめてしまう学生がみられる。特に途中であきらめてしまう学生には、ゴールデンウィーク前後で就職活動に疲労困憊し、活動休止に陥る者が多くみられる。特にこのような学生に対しては、大学は重点的にケアをする必要がある。また、本学に特徴的な問題としては、知識不足（一般常識や応募先の企業の情報）・準備不足・行動不足の学生がみられること、これと関連して、就職支援室など学内資源へのアクセスが弱いことなどがあげられる。

各教員には、学生を就職させるための基本的なスタンスとして、学生をあたたく見守りながら声をかけること、特に問題を抱える学生（コミュニケーションが苦手など）に対しては学生支援センターと連携して早期に支援を検討していただきたいとの説明があった。また、今後の効果的な就職支援に繋げるために、内定状況調査に協力していただけるように依頼がなされた。

質疑応答では、「本学の就職問題で特に目立つ問題は何か」、「海外で就職したいので、卒業後は就職せずにアルバイト等の資金集めをして留学したいという学生がいる。このようなケースに対してはどのようにアドバイスすべきか」、「卒業後すぐに仕事をやめた者がいる。相談室に行かせても良いか」との質問があった。これに対して講師からは、「本学では専門分野以外の知識不足が目立つ学生が多いところに特徴がある。今後はキャリア教育等を通じて更にこの点を補う策が必要だと考えている」、「日本企業は既卒者の求職に対して非常に冷たい傾向があるため、よほど他人と比べて企業が求める優れた点がない限り、就職が非常に困難になることを学生に伝えてほしい。一方、留年については寛容な傾向がある。どうしても留学したい場合は留年を選択して、在学期間中に留学した方がベターかもしれない」「是非、就職支援室に来るように伝えていただきたい。ただ、こちらに届く求人情報は新卒者を対象とするものが主であるので、ハローワークも合わせて利用するように指導していただきたい」との回答がなされた。

研修会後のアンケートでは、「学生の就職支援は難しい」、「就活と学生支援センターの活動の現状を聞くことができた」とのコメントが寄せられた。また、今後参加したい研修会の内容については「学生支援に関する具体的な事例と対策」「就職・不登校学生について」「学生を教育する上でプラスになるような内容」「学生の就職関係、学生の生活実情」「最近新たに生じている現実的な問題について」「タブレット端末・スマートフォンの教育への活用方法と注意点」「さまざまな学生生活に関すること」「ティーチング・テクニックの向上に関すること」「学生のメンタル面のケア」、「地方・田舎の大学特有の問題に関する研修」「就職支援・留年対策」とのコメントが寄せられた。

## (6) 山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法

### ー学生を就職させるためにー

日程：平成 25 年 09 月 18 日(水)16:25～16:50

場所：農学部 2F 大会議室

講師：平尾元彦（学生支援センター教授）

参加者：20 名

内容

本研修会では、就職活動の変遷と現在の問題点、大学における就職支援の必要性とそのあり方についての説明と質疑応答が行われた。

学生の就職活動は、バブル崩壊を発端とする経済的長期低迷によって厳しい状況が続き、2008 年のリーマンショック後は新卒未就職者が急増したため、大学においても就職支援の本格的な取り組みが行われるよう



になった。また、就職活動はここ十数年で飛躍的な進歩と普及を遂げた情報環境の変化からも大きな影響を受けている。学生はネットを用いて所属する大学によらず広く求人情報を得ることが可能となった反面、大量の情報に翻弄される者も少なくない。自身の適性を考慮せずに『いい会社に入りたい』と考える学生と『いい学生が欲しい』と考える企業との間のミスマッチは深刻化し、就職難と採用難の同時進行が生じている。現在では、就職が決まらない学生の増加に伴う社会的コストの増大と、有望な新規人材をみつけられない企業の疲弊が大きな社会問題となっている。

このような状況の中で、企業は有望な学生を採用するために大学に在籍する早い段階で学生の選別を始め、学生の就職活動の開始時期を早める結果となった。このような採用選考活動の早期化は、大学における学生の勉学の機会を著しく妨げる大きな一因となっている。この点を是正するために、日本経済団体連合会は新たに「採用選考に関する指針」を示し、採用広報および採用選考の開始時期を遅らせる措置を講じた。しかしながら、企業に課された条件は限定的であり、またその内容を誤解して捉えている学生も少なくない<sup>2</sup>。

これらの問題に危機感を募らせた文部科学省は、大学設置基準の改正を行い、大学に対して教育課程および厚生補導を通じて社会的および職業的自立を培える体制の整備を求めている。

学生支援センターでは、前述の状況を踏まえて、在学中の早い時期から学業と並行して正課内外のキャリア教育を充実させると共に、個別指導にも注力している。研修会では学生支援センターが主催する正課内外の具体的な活動について説明が行われた。

就職が決まらない学生の特徴としては、そもそも就職活動をしていない学生、面接試験を苦手とする学生、途中であきらめてしまう学生がみられる。特に途中であきらめてしまう学生には、ゴールデンウィーク前後で就職活動に疲労困憊し、活動休止に陥る者が多くみられる。特にこのような学生に対しては、大学は重点的にケアをする必要がある。また、本学に特徴的な問題としては、知識不足（一般常識や応募先の企業の情報）・準備不足・行動不足の学生がみられること、これと関連して、就職支援室など学内資源へのアクセスが弱いことなどがあげられる。

各教員には、学生を就職させるための基本的なスタンスとして、学生をあたたく見守りながら声をかけること、特に問題を抱える学生（コミュニケーションが苦手など）に対しては学生支援センターと連携して早期に支援を検討していただきたいとの説明があった。また、今後の効果的な就職支援に繋げるために、内定状況調査に協力していただけるように依頼がなされた。

質疑応答では、「学生支援室に相談に行くように指示しているが、相談に行く時期によっては、混み合っていてなかなか相談できないと聞いている。相談が多い時期があるのか」、「2年後は採用選考が4か月遅くなるのか」、「現在のWebテストはいつごろから始まるのか」との質問があった。これに対しては講師から「12月、1月は相談件数が多い状態にある。可能であれば、早めに相談に来させていただきたい」、「おそらく、4か月も遅くはならないと考えている」、「現在は広報が12月であるので、これ以前に行う企業は少ないとみている」との回答があった。また、学生支援センターに対して「学部でも就職指導を行っているので、学生に対して指導教員にもよく相談するように伝えてほしい」、「3年生の11月ぐらいから就職活動が激化し、勉学が疎かになった結果、期末テストで単位を落とす学生が続出している。学業面も手を抜かないように指導してほしい」との要望があった。

研修会後のアンケートでは、「『就活は学業と並行して・・・』ということだが、「実際はどのように

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	21.1%
良かった	14	73.7%
どちらとも言えない	1	5.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	19	100.0%

<sup>2</sup> 本指針が適用されるのは現時点の2年生からである。採用広報は12月1日から3月1日（アナウンス等は例外）に、採用選考は4月1日から8月1日に変更された。しかしながら、Webテスト・エントリーシートなど学生の時間的自由度が高い選考活動についてはこれよりも早く実施しても良いとしている。



指導していいのかわからない。非常に難しいと思う。」「内定状況調査の精度を高めるには、指導教員を通じてではなく、学生に直接連絡して調査した方が良い」、「就活でたくさんのお社をまわっても良くないといった情報があるのかを聞きたかった」、「大学における就職支援の内容が理解できた」との回答があった。

今後の研修会で希望する内容については「就職活動、企業の採用状況等に関する最新情報」、「キャリア学習、インターンシップ」、「就職活動を苦手とする学生（話をするのが苦手な学生）の指導法」、「学生のメンタルケア」、「講義内容」との回答があった。

## (7) 山口大・創基 200 周年記念 共育ワークショップ 2013

### 『みんなで山大の教育（共育）について語ろう！』開催報告

日程：平成 25 年 9 月 24 日(火) 14:00～17:30

場所：吉田キャンパス・第二学生食堂「きらら」

参加者：教員 16 名、職員 19 名、学生 40 名、その他 4 名 計 79 名

概要：

14：00～14：15 開会挨拶 丸本卓哉 学長  
趣旨説明 糸長雅弘 大学教育機構・大学教育センター長

14：15～14：20 オリエンテーション  
林 透 大学教育機構・大学教育センター准教授  
河島広幸 北陸先端大・知識科学研究科 M2  
守本 瞬 金沢大学・情報部係長

14：20～15：30 グループワーク（第 1 クール）  
教員、職員、学生（TA・SA を含む）ごとのグループワーク

[15：30～15：40 休憩]

15：40～16：50 グループワーク（第 2 クール）  
教員、職員、学生（TA・SA を含む）の混合によるグループワーク

16：50～17：25 全体討議・総括  
林 透 大学教育機構・大学教育センター准教授

17：25～17：30 閉会挨拶 額額 厚 副学長・理事

内容

共育ワークショップ 2013「みんなで山大の教育（共育）について語ろう！」は、山口大学創基 200 周年記念として新たに企画された参加型ワークショップである。山口大学の教育理念の一つである共育（共にはぐくむ）の場を創出し、教員・職員・学生が共に、大学教育のあり方を考え、学び合うことの大切さを自覚することを意図したものであった。

冒頭、丸本卓哉学長より開会挨拶があり、「共育」の理念を体現化する本ワークショップの重要性について説明があった。また、糸長雅弘 大学教育機構大学教育センター長より趣旨説明があり、廣中平祐 元学長が中心にまとめられた、いわゆる「廣中レポート」（2000 年 6 月）を基点とした学生参画型 FD の全国的な動きに言及し、本ワークショップのねらいについて説明があった。

今回のワークショップでは、知識創造の技法を使ったグループワークを通して、「今、求められる人



材像」の再確認を行い、所属や立場の違いを超えた参加者同士の対話により「今、求められる人材像」を育成するためのアクションプランの設計を目指した。具体的には、教員・職員・学生の属性ごとのグループ編成による第1クール及び教員・職員・学生混合による第2クールの2段階で行われた。参加者は、自らが考える「今、求められる人材像」について紹介し、グループメンバーと対話しながら、共通点や相違点を気付き合うとともに、その必要性や具体的な方策へと議論を深めた。

後半の全体発表では、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授の進行により、グループ発表が行われ、会場は熱気に包まれた。学生が前向きに発表する姿が印象的であり、「自分の考えをしっかりと持つことができる人材」や「様々な人間関係の中で新しい価値を創造できる人材」などの意見が多かった（詳細は、別表の発表概要一覧を参照）。

最後に、瀧瀬理事・副学長より閉会挨拶があり、本学の教育・学修の方向性に新たな契機を与える機会となった。

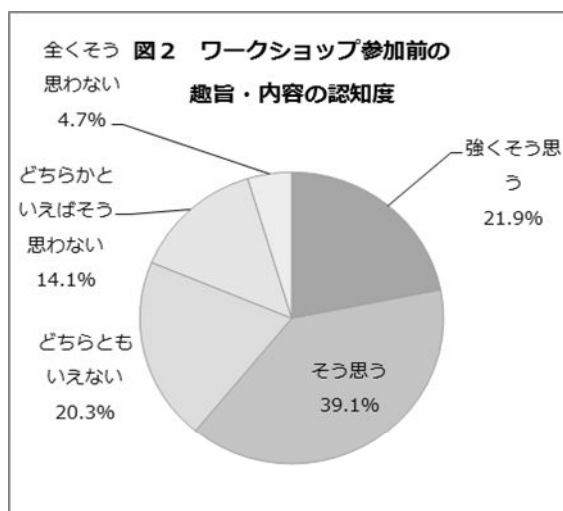
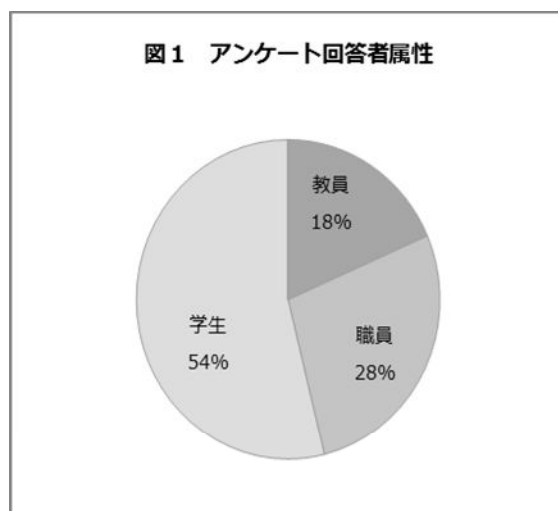


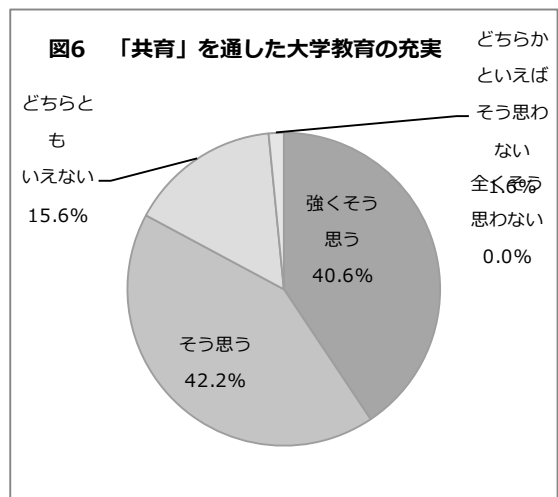
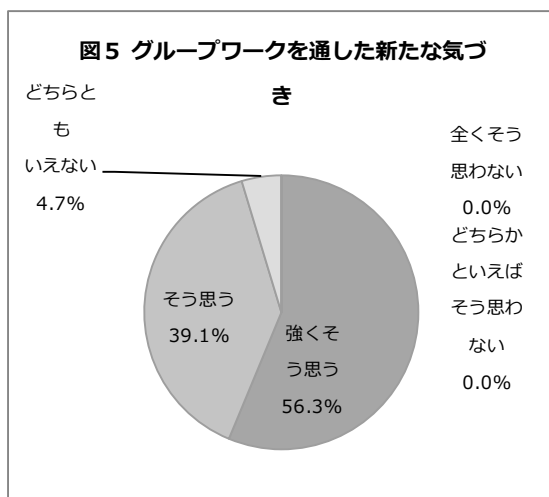
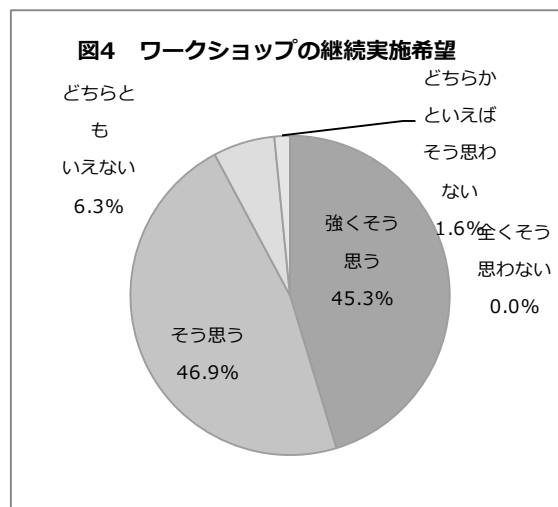
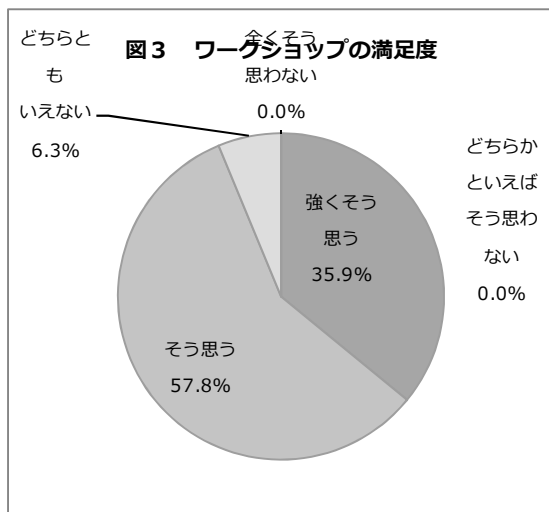
### アンケート結果：

ワークショップ参加者によるアンケートについて、65名（回収率86.6%（その他を除く））から回答を得た（図1）。今回のワークショップ自体が初めての企画実施であったため、「ワークショップの趣旨や内容についてある程度知った上で参加したか」という設問では、4割近くの参加者が十分に趣旨や内容を把握していない状況があった（図2）。しかしながら、実際に参加した上での理解度、満足度については、「強くそう思う・そう思う」が9割を超え（図3）、今後も継続していくべきであるという意見が同じく9割を超えた（図4）。

グループワークそのものに関連して、「グループワークを通して新しい気づきがあったか」という設問では、ほぼ全員の参加者が新しい気づきを感じており（図5）、ワークショップ自体のコンセプトである、「共育を通して大学教育がより良くなると思うか」とい設問でも8割以上の賛同が得られた（図6）。

以上のようなアンケート結果から、教職学協働実践としての共育ワークショップの有効性が窺える。





**まとめ：**

山口大学憲章が掲げる「発見し、はぐぐみ、形にする 知の広場」という理念について、山口大学を構成する教員・職員・学生が理解を深め、共有することが求められている。複雑化する社会情勢において、多様な組織構成員が意見や意識を交流し合いながら、課題解決する仕組み（ホールシステム・アプローチ）が大切になってきている。今まさに、山大スピリットをみんなで共有することに努め、山大の組織力の向上、引いては、山大の教育力の向上を図る必要がある。そのため、教員・職員・学生が一緒になって議論する場、協働する場の創出が必要であり、「共育ワークショップ」がその一端を担うことを考えたい。

今回のワークショップで出されたアイデアを踏まえながら、今後の山大の教育構成・方法や学修方法の充実、在学生の学修意識の把握に関する検討を進めたい。



## 共育ワークショップ2013 グループワーク（第2クール）発表概要一覧

グループ名・リーダー	テーマ、WHY（なぜ）、HOW（どのように）
A グループ「ハハカ」 リーダー：経済学部2年 古賀ゆめこ	<p>テーマ（「〇〇」できる人材としてグループでまとめたテーマ）： <u>「様々な人間関係の中で学ぶ姿勢をもち、新たな価値を創造できる人」</u></p> <p>WHY（なぜ「〇〇できる」ことが必要なのか？）： ●様々な人間関係の中でこそ、人は成長し、楽しみを見出すことができるから。</p> <p>HOW（どのようにすれば、「〇〇できる」ようになれるのか？）： ●自分に自信を持つ。 ●相手を受け入れる。 ●信頼される。 ●自己表現。 ●コミュニケーション能力をもつ。</p>
B グループ「C in B」 リーダー：理学部4年 岩崎政祝	<p>テーマ：<u>「グローバルな視点をもったコミュニケーションができる」</u></p> <p>WHY： ●外国語でコミュニケーションをとる能力はグローバル化するこれからの時代に間違いなく必要となる ●グローバルな視点から多様な価値観を持っている人々とのコミュニケーションが大切だから。 ●自分の意見を伝えること＝コミュニケーション能力</p> <p>HOW： ●外国人と英語を通して相互の文化を理解する。 ●人との交流を多く持ち、関わりを大切にする。</p>
C グループ「ヤマミィに一票を！」 リーダー：経済学部1年 奥田真也	<p>テーマ：<u>「自分で考え行動できる」</u></p> <p>WHY： ●自分の人生に責任を取るため。 ●良い人材モデルを残していくため。 ●自己発見・他者理解 ●創造力を養うため。</p> <p>HOW： ●興味を持ったことに取り組む。 ●考える「もと」となる知識を収集する。 ●自分の中で物事の真偽を議論する。 ●他人とディスカッションしていくこと。</p>
D グループ「どうしますか、リーダー」 リーダー：工学部1年 尾野慈厚	<p>テーマ：<u>「自分の考えを持ち、自信を持って行動する」</u></p> <p>WHY： ●他人から得る。</p>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分が得る。</li> <li>●自己アピール</li> <li>●リーダーシップ</li> </ul> <p>HOW:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●多くのことにチャレンジ</li> <li>●人とのつながりを大事にする。</li> <li>●自己分析をする。</li> <li>●信頼につながる。</li> </ul>
<p>E+K 混合グループ「3+2+1=100」 リーダー：理学部1年 飯富和明</p>	<p>テーマ：<u>「芯が強くて、他人を思いやり、前に進むことができる」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●マナーを打破して改革を生むため。</li> <li>●1+1=10（一つ一つの力が合わさることで、10倍の力になる）</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●現在の自分を知る。</li> <li>●グループワーク、集団行動をたくさん経験する。</li> <li>●他人の意見を批判する練習をする。</li> </ul>
<p>F グループ「チーム F」 リーダー：理学部3年 鯉谷 優</p>	<p>テーマ：<u>「多角的に物事を見ることができる」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●新たな発見につなげることができる。</li> <li>●相手を思いやることできる。</li> <li>●求められることを実行できるかの確認・修正のため。</li> <li>●メリット・デメリットを考えるため。</li> <li>●効率的な解決方法が見えてくる、真実が見えてくる。</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●物事の基本を理解する。</li> <li>●ロールプレイを行う。</li> <li>●人の意見を聞く。</li> <li>●本を読む。</li> <li>●振り返りを行い、次の行動の改善点を見つける。</li> </ul>
<p>G グループ「スナイプ」 リーダー：農学部2年 山田美里</p>	<p>テーマ：<u>「色んな引き出しを持ちつつ、柔軟に対応できる」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●想定（どんなことにも対応が可能、リスクマネジメント）</li> <li>●成長（振り返りによる成長、自己の確立）</li> <li>●協調（様々な人とコミュニケーションがとりやすくなる、平和）</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●インプット（情報収集（蓄積））</li> <li>●プロセス（学修（理解））</li> <li>●アウトプット（新しい発見）</li> </ul>

<p>Hグループ「少年H」 リーダー：工学部4年 田所良太</p>	<p>テーマ：<u>「アクティブリーダー、学び続けること」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●頼りになる。</li> <li>●誠意</li> <li>●柔軟な考え</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●インプットしたものをアウトプットしていく。アウトプットを意識して学ぶ。</li> <li>●アンテナを立てる。</li> <li>●自分で考え、自分で行動！！</li> <li>●なりたい自分を描く。</li> <li>●すぐに答えを求めない。</li> </ul>
<p>Iグループ「I（私）を持つのはEね！」 リーダー：人文学部2年 堀江梨里</p>	<p>テーマ：<u>「自分自身の考えを持つことができる」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自信をもって行動できる。</li> <li>●自分を表現できるため。</li> <li>●周りからの情報に流されない。</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●様々な分野の知識を吸収する。</li> <li>●一つのことが本当に正しいかどうかを常に考える。</li> <li>●責任感をもって物事に取り組む。</li> </ul>
<p>Jグループ「Team Active」 リーダー：経済学部2年 田邊咲良</p>	<p>テーマ：<u>「自分と違う意見を受け入れ、積極的に取り組み、人と人をつなぐことができる人材」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●視野を広げることで成長し続けることができるから。</li> <li>●人とのつながりでしか、人間関係はつくれないから。</li> <li>●新しい価値観に出会うことができるから。</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●歴史や外国のことなどを学び、それを積極的にアウトプットし合う。</li> <li>●自ら学ぼうという気持ちを持つ。</li> <li>●信頼される人になる、相手を信頼する。</li> <li>●他者の意見を尊重する。</li> </ul>
<p>Lグループ「新鮮組」 リーダー：人文学部1年 上原瑞希</p>	<p>テーマ：<u>「新しい発見をもとめて、積極的に行動できる」</u></p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●腐らない、腐らせない。楽しいから。</li> <li>●多様な世界を知ることができるから。</li> <li>●自分自身を変化させることができるから。</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●あいさつ、お礼を言う。</li> <li>●笑顔を中心掛ける。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>●心が健康であること。</li> <li>●趣味に没頭する時間をつくる。</li> </ul>
<p>Mグループ「まやみい」 リーダー：人文科学研究科2年 大草祥史</p>	<p>テーマ：「<u>わかった気にならないことができる</u>」</p> <p>WHY：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●困難に立ちむかうことができる。</li> <li>●分かったと思うと、成長が止まるのでは・・・。</li> </ul> <p>HOW：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●周囲の雰囲気にながれず、必要な批判ができる。</li> <li>●自分は分かっているのか、と自分自身を疑う。</li> <li>●少し時間を置いて、振り返ってみる。</li> </ul>

(参考) 『文教ニュース 10月7日号』掲載 (※『文教速報 10月17日号』に同様掲載)

49 第2260号 (第三種郵便物認可) 文教ニュース 平成25年10月7日 (月曜日)



参加型ワークショップで議論を深めた



開会挨拶する丸本学長

◆山口大・創基200周年記念◆共育ワークショップ2013  
「みんなで山大的教育(共育)について語ろう！」

共育ワークショップ2013「みんなで山大的教育(共育)について語ろう！」は9月24日、山口大学吉田キャンパスにて、同大学の教員・職員・学生総勢80名近くが参加して開催された。山口大創基200周年記念として開催されたこのイベントは、同大学として新たに企画された参加型ワークショップ。山口大学の教育理念の一つである共育(共にはぐくむ)の場を創出し、教員・職員・学生が共に、大学教育のあり方を考え、学び合うことの大切さを自覚することを意図したもので、丸本学長が中心にまとめられた、いわゆる「廣中レポート」(2000年6月)を基本とした学生参画型FDの全国的な動きに波及しながら、本ワークショップのねらいについて説明があった。

今回のワークショップでは、知識創造の技法を使ったグループワークを通して、「今、求められる人材像」の再確認を行い、所属や立場の違いを超えた参加者同士の対話により「今、求められる人材像」を育成するためのアクションプランの設計を目指す。具体的には、教員・職員、学生の個性ごとのグループ編成による第1タールの2段階で行った。参加者は、自ら考える「今、求められる人材像」について紹介し、グループメンバーと対話しながら、共通点や相違点を気付かせることとともに、その必要性や具体的な方策へと議論を深めた。

後半の全体発表では、林透大学教育機構大学教育センター准教授の進行によりグループ発表が行われ、会場は熱気に包まれた。学生が前向きに発表する姿が印象的であり、「自分の考えをしっかりと持つことができる人材」や「様々な人間関係の中で新しい価値を創造できる人材」などの意見が多くあった。最後に、副理事長・副学長より開会挨拶があり、ワークショップは盛況のうちに終了した。今回のイベントは、山口大学における教育・学習の方向性に新たな姿を与える機会となった。

中国・四国地区国立大学法人理学部長会議  
「第22回中国・四国地区国立大学法人理学部長会議」が9月19日、岡山市内のホテルで開催された。同会議は高松大学、岡山大学、広島大学、高知大学、愛媛大学、山口大学で構成されており、今年度は山口大学が当番校を務めた。

山口大学の田中理学部長が議長となり、「理学部における地域連携活動について」、FD(ファカルティ・ディベロップメント)について、「理学部におけるメンタルヘルスケアについて」を協議事項として、各大学の取組状況等が紹介された後、活発な意見交換が行われ、各大学における今後の取り組みにあって大変有意義なものとなった。

出所：週間文教ニュース 平成25年10月7日(月曜日)第2260号 49頁

## (8) 今、山大生は何を考え、悩み、不安を覚えているのか

### —学生相談所から見てくる山大生の実態—

日程：平成 25 年 10 月 30 日(水) 15:00～16:00

場所：人文・理学部大会議室

講師：今井 佳子（学生相談所カウンセラー）

参加者：18 名

内容

本研修会では、学生が抱える悩みや不安の実態と教員の対処方法について、具体的な事例を含めて説明が行われた。

近年、学生相談所は学生からの相談だけでなく、教員からの学生に関する相談を受けるケースも増えている。その結果、以前と比べて教員との連携も取れてきつつある。学生の相談件数については 4 月が最も多く、夏休みに減少し、9 月から再上昇する傾向がみられる。学部別では、経済学部と理学部の学生が多いが、これらの学部のオリエンテーションでカウンセラーが学生相談所の紹介を行っているためと思われる。相談に来訪する学生は些細なことで気軽に訪れる学生が多い。この傾向は他大学でも同様であり、学生相談所の垣根が低くなっているという意味で望ましいことである。なぜなら最初の相談は何気ない内容であったにもかかわらず、話を聞いてゆくにつれて相談内容が変化し、抱えている深刻な悩みを打ち明けるケースが少なくなっていくからである。したがって、相談所ではどのような相談でも構わないので、学生が気楽に来訪できることを重視している。

近年では不安を訴えて訪れる学生が多くみられるが、その要因としては以下が考えられる。

#### ・見通し困難な将来

自分の未来（就職や結婚など）が描けないことに不安を抱いている。これは現在の社会が以前の「頑張ればどうにかなる」という明るい未来への希望が感じられた時代から、この先どうなるかわからない時代に変容したことに加えて、以前よりも「就職」や「結婚」等の諸事の選択肢に溢れているため、かえって見通しが困難になっていると思われる。また、今の学生は小学校から大学まである程度の方向が定められたレールを滞りなく走って来た者が大半であるため、レールを踏み外すことにも大きな不安を抱えている。学生と雑談される際には先生ご自身の経験談を含めて話していただければ、学生の不安軽減につながると思われる。

#### ・目的の喪失

不登校の学生には、大学進学そのものが目的であったため、大学入学以降の目標を失って「やりたいことが見つからない」と訴える学生がみられる。このような学生の場合、特に就職活動に大きな不安を抱いている。不登校の学生に対しては、面接のために来校させることで登校刺激を与えて改善を図っている。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	10	55.6%
良かった	7	38.9%
どちらとも言えない	1	5.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	18	100.0%

## ・過去のいじめ被害

高校時代までに同級生や教師から受けた「いじめ」に起因する不安を抱えるケースも多くみられ、中には「いじめ」体験が妄想化している深刻な場合もみられる。

## ・人間関係の希薄化

人づきあいが苦手であることを主訴として来訪する学生がみられる。「私は普段は何でもひとりで行動している。しかし、このままでは就職できないのではないかと不安になり相談に来た」というケースがあった。この原因のひとつには、身近な人と対面的に話をする機会があったにもかかわらず、ソーシャルメディアの発達によって短い言葉で表面的なコミュニケーションしか取ってこなかったため、他人と深く交流する機会を得られなかったことが影響していると考えられる。

大学教員は、研究者であるとともに教育者であるから、学生相談所と連携して可能な範囲内で学生を支援し育てることに意識してほしい。これらの学生に対応する際には、以下の点にご留意いただきたい。

- ・保護者に連絡する必要の有無を検討する。不登校の場合は保護者への連絡が必要である。また、最近は保護者対応が非常に難しいケースがあるので留意していただきたい。
- ・学生に積極的に話しかけ、相談しやすい雰囲気を作り、できる限り話を聞く。また、学生に「眠れているか」、「食べているか」、「困っていることはないか」の3点を尋ねることによって、生活状況等の問題の把握に努める。
- ・不安を抱く学生は自己肯定感がひとときわ低い者が少なくないので、出来ていることを積極的に褒めて明示的に評価する<sup>3</sup>。また、自信がないところを厳しく言われると極端に落ち込むことがあるので、指導方法に配慮をする。
- ・学生相談所に行くことを勧める。学生相談所に行くことを非常にネガティブに捉えて躊躇する学生に対しては、相談所は何でも気楽に相談できる場所であることを説明する。
- ・教職員がソーシャルメディアを利用する際には、学生から読まれる可能性があることを常に意識し、学生に関して不用意な発言をしないように十分に注意を払っていただきたい。

また、学生の指導において良かれという気持ちからの働きかけ（厳格な指導等）が、学生からハラスメントとしてとらえられることがある。近年は教員からハラスメントを受けたと訴える学生が増えている。21世紀職業財団が作成した「キャンパスにおけるハラスメント度チェックリスト」を参考に、各自で点検していただきたいとの説明があった。

研修会後のアンケートでは、本研修会の感想として「具体例を話していただいて大変参考になりました」、「役に立つことばかりであった」、「『ここまでやる必要があるのか』と思いがちだが、その話が良かった」との回答があった。また、今後参加したい研修会については「具体事例や対応の仕方」、「学生のメンタルケア」、「教職実践演習」、「今回のような学生ケアなど」、「発達障害学生に関するもの」、「ITリテラシー」、「受験倍率を上げる方法に関するもの」、「学生の考え方、見方などがわかるとよい」との回答があった。

※アンケートの回答については原文のまま列挙した。

---

<sup>3</sup>日本青少年研究所の「高校生の心と体の健康に関する調査」によると、他国との比較において、日本の学生は自己肯定感が極端に低い状況にある。本調査結果によるとアメリカにおける自己肯定感<sup>3</sup>は57.2%であったのに対して、日本はわずか7.5%であった。



## (9) 大学教員として知っておくべき発達障害学生に対する対応と支援

日程：平成 25 年 10 月 30 日(水) 16:10～17:30

場所：工学部 D 棟 1 階 D11 教室

講師：木谷秀勝（教育学部 附属教育実践総合センター 教授、コミュニケーションサポートルーム室長）

参加者：48 名

### 内容

最初に工学部 FD 担当より、昨年 9 月 5 日に実施した工学部 FD 研修会「発達障害学生の理解と対応 ―入学から就労までを視野に入れて―」を聞けなかった教員から要望があった他、学科から今年も再度やって欲しいと要望があったため 2 年連続で木谷先生にお願いした旨が説明された。

木谷先生から最初に、本年は 6 月 1 日付けで大学全体のコミュニケーションサポートルーム(略称 CSR)を開設し、その室長として学内全体の発達障害の学生の支援のシステムの立ち上げをしている事、木谷先生の研究室の修了生である田中さんが吉田・常盤で週 1 回従事していることが紹介された。その他、本件研修会の内容は、初めての聞く方がおられるようなので、昨年度実施した研修会と同じ内容で話す事。昨年度話した 5 事例と、その後の経過の話をする事。発達障害学生について 1 回聞いてその目で見始めると、だんだんあの学生もそうじゃないかと先生方の視点も広がってくる。その状態でまたこういう話を聞くとより理解が深まるということもあるので、2 回目聞く先生方にとっても新鮮に映れば幸いである事。等々の前置きが成され、本題に入られた。



### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	11	44.0%
良かった	14	56.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	25	100.0%

### 発達障害の基本的な視点

専門書を読めばわかるので簡単に触れる。基本的には脳の機能的な障害で、現在は障害特性も非常に多様。障害のある部分もあれば、健康なパーソナリティの部分もある。その見極めが難しい部分もあるが、その原因は多因子疾患と言って、例えば自閉症関係では関連因子がかなり多数あると言われている。その中でどれだけ中核的な自閉症を発症し易い因子を沢山持っているか少ないかで考える。以前の考え方は、発達障害があるかないか。極端に言えば異常があるかないかという、0 か 1 かの考え方だった。最近の考え方は多因子疾患の考え方を取るので発達障害の部分が濃いか薄いかでとらえる。

リスクファクターが高い 80~100%をお持ちの方が中核の発達障害。50~80%くらいだと、その特徴はあって、非常に環境の悪い状態、あるいは教育の場で適切な支援がない場合、一過性で中核の症状やうつ症状が現れるが、きちんと環境の整備をすればリスクがほとんど目立たない。そういう子供たちが沢山出ている。大学の場合でも中核と合わせて我々がグレーゾーンと言っている人たちが多くおられる。それ以下のリスクファクターで 30~50%くらいの方は特性がむしろプラスとして出てくる。例えば、先生方も海外の学会行かれると思うが、日本人は学会発表なんかもそうだし、座長の依頼が来ると時間通りに行く。これはある意味時間へのこだわりや几帳面さ。研究者の中でもバイタリテイ

があると言われる先生は、我々から見ると多動。研究には夢中になるが、日常生活のことで結構片手落ちだったり、いろんな物忘れをされる方々もいらっしゃる。でも、きちんと研究やいろんな分野で成功収めている方もたくさんいらっしゃる。

それから一部のアーティストたち。例えば画家なんかで言うとゴッホは最終的には統合失調症になった。アスペルガーではないが、そういう特性を持って、それがプラスに生きる人たちもいらっしゃる。その一方でリスクファクターが低い場合は健康と言われる。

今は障害あるかないかではなく、濃いか薄い、強いか弱いかと言うことで判断するので連続体としてとらえて行く。ある程度リスクを持っていないと支援がいらぬというわけではなくて、支援をしておくことで予防的な対応に非常に成果が出るのが最近分かっている。

自閉症に関しては研究が進んでいるが、胎児の最早期の段階でこういった障害のファクターが出るのが最近分かっているし、今一番下の発達障害の場合、僕は12か月から見ている。だいたい生後10か月くらいから定型発達の乳児とは異なった行動を見られるとだいたい理解できるようになってきている。

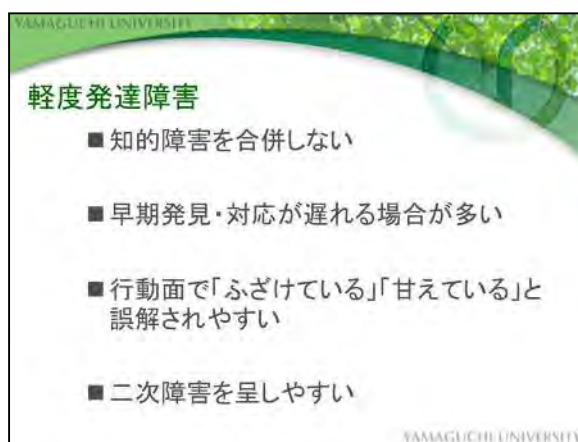
成長すると共に本来持っている脆弱性が顕在化して来て、結果的に学校に上がって学力不振や不登校、最近だといじめにあい易い。そういった社会的医療上の問題が生じてくる結果、きちんと発達障害という診断を付けて支援を付けて行くことがある。それがないと社会的医療上の問題がないので、ちょっと変わった学生、もしくはちょっと変わっているが凄く高い能力を持っているということで周りが上手くサポートしながら一生涯問題もなく適応出来ている人たちも数多くいる。

ところが中核の子供たちを見ると早期から多面的な支援が非常に必要になってくる。その場合、医学や教育・心理・福祉等が支援して一生涯の支援が必要になる。現在、今日のテーマでもあるが大学生の就労支援についてはハローワーク、障害者職業センター、場合によっては精神障害者保健福祉手帳を取るの、医学や福祉あるいは厚労省関係とのタイアップを通して支援をしている。ここの所、結婚願望も出て来ているので、僕が見ている子供たちが大人になって子供を産んだら、多分、その子供たちまで僕は見る。

それと合わせて、先生方も指導している学生さんでお気づきと思うが、ご家族が理解して頂いている場合は先生方の支援もやり易いが、大学に入って初めてそういう特性があるんじゃないかと気付いた場合には、ご家族に連絡してもそんなことはないと言われたり、人権問題だと言われて、発達障害というレッテルを貼るんですかと言われる。そのことを考えると、家族の協力、家族もどうやってサポートしていくかと言うことが非常に重要になる。むしろ今、我々が特に発達障害の支援で危惧しているのは、こちらの支援とご家族の協力の問題。

### 軽度発達障害

その中で山口大学に入ってくる発達障害学生の場合は一般に軽度と言われる。これは発達障害のレベルが軽いのではなくて、英語で言うと **High Functioning** という言葉を使うが、非常に知能が高いということで知的障害を合併しない人たち。後でIQのデータを何人かの事例で紹介するが、IQが高いために小さい時からかえって優秀な子供たちだったりする。僕が見ている子供でも、3歳で国産車の種類をすべて区別した子供も何人かいるし、オリンピックの年には世界の万国旗を覚えて行く。非常に優秀と言われていたが、社会性が乏しいという人がたくさんいる。従って、早期発見の遅れるケースが多い。先生方も学生さん指導していて分かると思うが、非常に専門知識が高い。大学まで来ると、プライド



も高い。従って、大丈夫かと聞くと大丈夫と言う。一見知的には出来るように見えるが、実際させてみると思わぬところで躓いたり、非常に不器用な学生が多いので、行動が非常にふざけて見えたり、わざとやっているんじゃないかと誤解されて、結局怒られるケースがある。先生方との関係なら、特性に気付いてもらえれば良いが、同級生同士だとかいう態度を取られるといじめの対象になる。

発達障害学生に丁寧に話を聞くと対人トラブルが多かったり、非常に人に対する恐怖心が強い場合の80~90%の場合は小学校から高校までにいじめの受けた体験がある子供たち。

この体験があるかないか、逆に言うと周囲からきちんとサポートを受けて来たり、小学校から高校にかけて信頼できる大人としての教師との出会いがあると、大学でも先生たちとの信頼関係が高く出ている。

結果として二次障害が起り易い。一番起りやすい二次障害は発達障害の学生はうつ病になる。しかも気を付けないといけないのは発達障害学生でうつの場合は、ほとんどの場合が引きこもりになる。それと合わせて、もう1つ発達障害学生のうつで先生方が非常にイライラさせられることがある。それは引きこもらないで大学に来るが、うつになると意思表示が出来ない。例えばこういう場面が先生方にも経験があると思う。例えばこれからどうしたいの？就職するの？進学するの？と言っても、さあ？と言う。どちらにするのと言っても決めきれない。これもうつ。

従って気を付けて頂きたいのは、引きこもるのもうつとして非常にシビアだが、うつは情報選択が出来なくなるので、自分でどちらか決めなさいと言うと、決めることが出来なくなる。これが何回も繰り返される時はかなりうつリスクが高い学生になる。この辺りは、先生方が一生懸命ご指導されるのに、その意図がなかなか通らない場合は苦労されることになる。そういった場合、我々の方が、そういった場合どうするかを良く知っているのでご相談頂ければと思う。

### 軽度発達障害の能力差

彼らの能力は、あとで山口大学関係の学生さんをお見せするが、かなりの差がある。例えば、工学部だとプログラミングが上手いとか、あるいは化学系の知識が非常に強い。そういった一部の得意な能力があるとそれだけで何とかなるだろうと思うが、実際は学生を見ていると非常に生活リズムが悪い。アニメおたくで真夜中までアニメやYouTubeやニコニコ動画にはまって見てしまう。しかもこの前、運悪く10月の3連休の初日にポケモンXYが出たので3連休明けに授業に出られなくなった学生が既に他学部では2人出た。



このように、1つにはまると非常に時間のリズムを崩し易い。それから不器用さが強いためにレポーターが書けない。それから、非常に時間の管理が乏しく、マイペースなので急いで来ることが出来ず、遅刻と分かっているにもかかわらずゆっくり来て怒られる。そういう風にむしろ日常生活が不器用な状態があっても一部の学問的なところは出来る。そのために非常に理解され難いのが彼らの能力。

実はこの能力のギャップはもう1つ大きい面あって、この能力のギャップが高ければ高いほど、ちょっとしたストレスがかかった状態で大きく情緒的反応が出る。従って何のリスクが高くなるかと言うと、うつリスクや、ちょっとした先生方の一言で大きくパニックになって、授業に出られなくなったり、引きこもってしまうケースがある。でも直接的には先生たちの一言がすべてではない。それまでに、あった我々から見ると本当に小さなストレス、それが大きく響いてしまうために、それが蓄積されて引きこもりやうつになるタイプ。



## 主な軽度発達障害

そういう発達障害の学生の中で出てくるのは、だいたい、高機能広汎性発達障害、特異性発達障害、行動障害の3つ。最近全部合わせて、新しい診断基準で略して ASD(Autistic Spectrum Disorder: 自閉症スペクトラム障害)と略すようになっている。

## 高機能広汎性発達障害

昔は自閉症とアスペルガーを分けていたが今は一緒になった。この特徴は、さっき工学部のある学生をちらっと見に行ったが、その方もこういう特性を持っている。基本症状は自閉症関連の診断で言うと、まず先生方との情緒的交流が難しい。どういうことかと言うと文脈の理解が非常に苦手。それから阿吽の呼吸が分からない。そこから行間が読めないということが良くある。

これは昨年度紹介した話だが、僕の仲良しの精神科医が会ったアスペルガーの青年期の方、大学生の方が、自分のこと分かったきっかけは、シャボン玉の歌。その学生は、こう理解していた。シャボン玉が飛んだ。シャボン玉だけじゃなくて屋根まで飛んだ。しかも屋根が壊れて消えた。これは竜巻の歌なのか台風の歌なのかずっと悩んでいたらしい。それは大学に入って友達とある話からこの話をしたところ、皆からお前変だよと、正確にはやっぱり変だよと言われたらしい。それで聞いたら、どうも皆はその学生が変だということは気付きながらも、やさしく見守ってくれていたが、流石にその理解はないよねと言うことで、その学生もそれから自分を調べたところどうもアスペルガーじゃないかと言うことで診断を受けたら綺麗なアスペルガーだったらしい。

もちろん先生方はそういう風に理解されている先生はいないと思うが、いたら後で相談に来てください。

シャボン玉飛んだ、屋根まで飛んだ、屋根まで飛んで壊れて消えた。これはご承知だと思うが、まど・みちおさんが実の娘さんが小さい時に亡くなられてそれをシャボン玉に託して歌った非常に情緒深い歌。それをシャボン玉飛んだ、しかも屋根まで飛んだ、しかも壊れて消えたというように、思わぬところで字句通りとらえる。しかも行間が読めない。

これは大学のゼミ、山口大学ではなくよその大学でもあったし、就職してからもあったが、上司が叱咤激励のために、お前明日から出て来なくて良いと言ったら、本当に出て来なくなった。それが、上司や先生たちの期待も込めたという感覚が読めない。だから、アスペルガーや高機能自閉症の場合は言葉のかけ方が難しい。しかも日本語はとても難しいことが多い。よく会話で、あれあれ、それぞれで通るのが駄目。参考までに発達障害全般がそうだが、彼らにとって一番分かりやすい言葉のかけ方は英語。まず主語を付ける。次に結論を持って行く。そしてその次に **Because** 理由を持って行くこと。

日本語は気を付けておかないと、理系の先生はかなり外国語にも慣れているようなので、かなり結論を先に持って来てもらえるが、文系の場合はかなり結論が最後に来るので凄く分かり辛いと言われる。そんなんで、日本で一番わかりにくい日本語を使っているのは国会。「そういうことについて、前向きに検討する可能性もあるかもしれませんが。」と、語尾を聞いても訳が分からない。そういう講義をされる方には、非常に彼らは大混乱する。

従って、今、我々も PowerPoint で示しているが、こういう風に文章ではなく箇条書きで示して頂くのが、彼らにとって非常に分かり易い。

彼らは、興味関心にこだわりがあると言うが、発達障害学生の場合、このこだわりが逆に非常に生きている。先程、化学が好きな話をしたが、僕が見たある方は高校の時に習ったベンゼン環の形が世界で一番美しい形だと直感で感じて、それから化学が大好きになって、今、山大ではないが他所の大



学の先生をしている。

発達障害学生の場合は、むしろそれがあから大学に入れた方々。従って学問的こだわりは生かしていき、気を付けないといけないのは生活上のこだわり。具体的に言い始めるときりがないので止めておくが、生活上のこだわりが、彼らが社会的に伸びて行く時に損をするところ。後は不器用なタイプが多いので気を付けておかないと、不注意だけではなく、実験系で時間がかかったり、不器用なために実験器具を丁寧に扱えないケースもある。しかも時間がなくてあわてさせると余計にミスが増えるのがこのタイプ。

### 特異性発達障害

山大の場合は少なく、私立大学の学生全体では俗に言う学習障害の人たちが非常に増えている。先生方もいろんな非常勤で私立大学や短大へ授業行かれると思うが、その時に非常に字を書くのが遅かったり、複雑な課題が同時に出来ない場合はこのタイプになる。

### 行動障害

結構、理工系でも注意欠陥/多動性障害と言って、かなり落ち着きのない、あわせて大学まで来る場合は、多動はないが結構不注意が激しいタイプの障害も出る。ただ、この場合は大学では良い適応をしていて、結構不注意でおっちょこちょいだが、性格的にも明るくて皆から慕われているので結構社会的評価は高い子供たち。しかも大学に入るとこのタイプは勉強よりも結構運動系の部活・サークルで頑張ってるまっしぐらな人たちが多。そればかりやっていて卒業出来ない学生が一部いるが、そのタイプに時々この学生がいる。

発達障害のメインはだいたい高機能広汎性発達障害になる。

### なぜ、入学から就労までの支援が必要か

先程から示しているように彼らを入学から就労まできちんと支援していかないといけないが、その根拠を示すデータを昨年と一緒のものを持って来ている。

その前に、大学教育において今発達障害学生の支援が必要なのはこういう理由からだが、今こちらの常盤キャンパスの学生相談室の相談員も来ているが、明らかに全国的に学生相談室での来談数で発達障害もしくはそれに関連したことで相談に来るケースの数が上がっている。それと共に非常に対応の困難なケースが増えている。それから間もなく大学入試センター試験が行われるが、先生方もご承知のように2年前から大学入試センター試験の特別受験の対象として発達障害の枠が入った。従って我々も今実際に見ている高校生で今年も受験生がいる。ほかの大学の受験では既に何名か大学入試センター試験の発達障害学生の特別支援枠で申請を行っている。従ってそういう配慮が認知された、しかもこれが配慮されたということは前期日程・後期日程についても同じような配慮が必要になってくるので、発達障害学生が本来あきらめていた進路の道が開ける。ところが、入った後の大学職員のソーシャルスキルや専門スタッフの不足は非常に大きな問題になっている。それから先程言った、二次障害としてのうつ、それから学力不振、そういったものに対して全学的に支援して行かないといけない。そして何よりも彼らが就職活動や、今実際に出ているのは就労後の維持の支援、これが非常に大事だということが最近分かってきた。



## 事例紹介

それと合わせてもっと重要なデータがここのところ我々の研究でも示されている。その例をお見せするが、これはある芸術系の大学に入って卒業した一人の男性のアスペルガーの事例。大学に通い、お母様が心配して、僕が非常勤で勤務している精神科のクリニックに相談に来たところ受身型と言われるおとなしいタイプのアスペルガー症候群だと分かった。大学に支援もお願いしたが、残念ながら当時その大学のこの学部で支援を上手くしてもらえなかった。その結果、在学中から孤立化して行き学習への無気力状態が出た。そして1年留年した後、就職活動は難しいだろうということで、障害者職業センターと我々が連携し精神障害者保健福祉手帳を取得して同時に職場実習をそこでお願いした。そこで精密機械の仕分けの仕事を理解されて自己評価が上がった。卒業後は就労移行を継続しているが、現在は安定した作業を維持できている。この方は毎日車で通勤している。

その過程でこの方の支援を含めて、こういう人たちに取り知能検査を取ってみた。3回取っているが大学2年生では最も自信が低下した状態で、当時から見ると軽いうつ病。4年生くらいになって就労体験もあって自身が伸びてきた知能検査のデータ。最後は就労後にも非常に作業適性が伸びてきたスコアを見せる。能力の差はかなりあることが分かる。一番自信がなかった



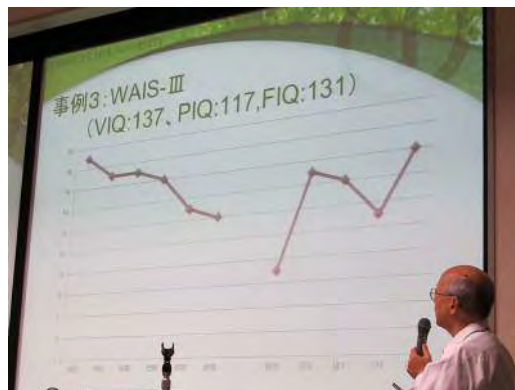
ころのIQはほぼ90台。自信が回復するにつれてIQが100くらいに伸びて、就労を維持するとIQが115くらいまで伸びた。これは実は就労したからIQが伸びたという考え方ではない。お母様とも話しあって僕も同意見だったが、芸術関係では非常にレベルの高いところで、このレベルで迅速性を失った状態では入れない。ということは、この方が大学に入った時の能力が回復した状態のIQ。2年間適切な支援を受けられなくて、しかも本人が自信を無くしてうつに入ったらどうなったかというIQが落ちた。その後、我々が急いで支援をして、卒業前には大学に直接行って卒業のテーマを少し妥協してもらって卒業させた。それでもかなり立派な作品を作っている。そして、きちんと就労を維持することで自信を回復した結果、やっと元に戻った。それは先生方もお気づきだと思うが、山口大学もそうだが、かなり高い能力を持って学生さんたちは入ってくる。それに対して適切な指導がない状態のまままで学生達に任せたままだとIQそのものが低下していく。これは実際ほかの学生さん達でも出ている。ところが、それに気付かないまま、本人たちが就職活動をする、大学に入った時の出来たイメージ、でも現実的には能力が低下した状態で就職活動をするため確実に落ちる。

我々が入学からきちんと卒業まで支援するというのはなぜかという、高い能力をどれだけ維持できてしかも適切な支援をすることによって彼らが更に伸びる可能性があるため。今、そのデータが少しずつ出始めた。そういうことを通して彼らがきちんと自分の能力に相当する就職活動もしくは就職先をきちんとケアできるようにすることが我々の責任でもある。また、それが可能になるように我々がどうやって支援するかということ、今CSRで情報を集めているところ。

山口大学関係の事例を紹介する。詳細については個人情報になるので述べないが、まず、アスペルガー症候群、理系の男性。この学生の場合生活のこだわりが非常に強い。正確に言うと早朝に起きてゲームをしてニコニコ動画をチェックして大学に来る。夜は頑張るので疲れが酷く必ず10時に寝ないと頭が回らない。従って、そういうパターンを守るために自宅から通いたいという希望があったので山口大学に話し合って進めた。一応、普通の試験を受けているが、本人の希望もあるので大学には伝えてない。オタク系のサークルも上手にこなしながら安定している。将来は大学院への進学を希望して、本人も自覚して少しずつ社会性が伸びてきているので、その了解をして現在そのための勉強に入らせている。



そのスコア、言語性(言語性 IQ: Verbal IQ, VIQ)と  
言うのが学習の意欲や関心の能力。平均が 100 なので  
137 は非常に優秀。従ってレポート等もこの子は困っ  
ていない。ただ、これが作業の俊敏さ、理系で言うと  
実験のように複雑な作業を同時に処理して行くような  
同時処理の迅速さ(動作性 IQ: Performance IQ, PIQ)、  
これが 117 でトータル(全検査 IQ: Full scale IQ, FIQ)  
が 131 になっている。先日この追跡データを取ったが、  
きちんと安定感を持って能力の低下は見られなかった。  
能力は維持している。このスコアを見れば分かるが言  
葉の力は強いが、ちょっとワーキングメモリー、同時処理系の事が少し苦手。それから同じ年齢の人  
たちの平均的能力に比べて状況判断が若干苦手なところがある。ただし全体としては非常に高いスコ  
アを維持して安定しているスコア。この辺りのスコアを少し頭に入れておいてほしい。



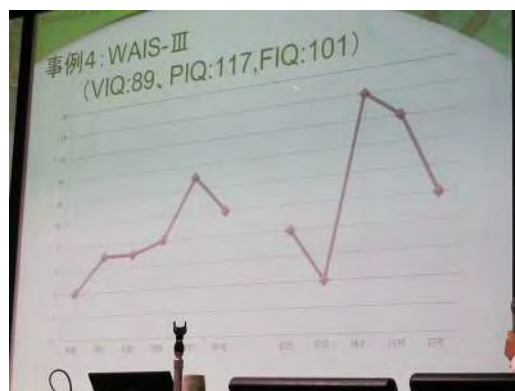
次も理系の男性だが、場面緘黙(かんもく)と言って、おうちではよく話すが特定の場面ではほとん  
ど話をしない学生さん達。ただ、僕には小声ながら喋る。この学生は小さい時にアスペルガーの診断  
を受けたが知的能力が高かったなのでその後なかった。私立の特進で育った子だが、山口大学の合格が  
決まった時点で、高校の先生と共に入学の時から支援がもらいたいということで来られたのでその後  
定期的な支援に入った。真面目な子なので、そばで見守りながら一応その学科の先生たち全員には理  
解を示して頂いている。

ただ、この学生さんは小さいころにある程度診断を受けていて、自分にそういうハンディがあるこ  
とを分かっていたので、どうなったかと言うと自分の不器用さを良く知っていたので常に学習を続け  
ていた。この子は凄く課題に時間がかかるのを分かっていたので、昼休みはアンパンを買ってきてア  
ンパンをかじりながら誰もいない野外のベンチに座ってずっとレポートや宿題をやって行った学生さ  
ん。それで必死にやりながら一生懸命みんなに付いて行っていた。それでも高い能力を出して頂いて  
いて、この度この子も大学院を希望したので、博士課程をもつ大学院を受けて無事に合格した。この  
子は在学中は JR を使って約 1 時間くらいかけて自宅から通っていたが、そこは今度は一人暮らしに  
なるので、そこの大学院との継続の発達障害の支援のシステムの移行を行っているところ。4 月から  
そちらにお願いをする。本人にもその承諾を得た。

従って、この学生も、今度改めて知能検査を取るが、多分前回より伸びていると思う。場面緘黙が  
あるので表現が非常に下手。大学 1 年生の時の IQ は言語性では平均 100 に対して 89 だった。課題  
に対する俊敏さや同時処理系については 117 で、トータル 101 ということで、年齢の能力の平均が  
10 なので動作性に関して言うとこれだけのギャップが出る。

今自信を付けているのでかなり変わってくるだろうと思うが、理系の学生さん達に共通して高い積  
み木と行列推理と言われる課題はかなり高得点でほぼ満点。算数に関してもかなり高い能力を示すこ  
とが出来る。でも、先程の学生と比べると能力のア  
ップダウンがあることがこれで分かると思う。

それから、この学生は、現在工学部で支援をうけて  
いらっしゃるアスペルガーの学生で、入学時より支援  
を開始しているが、まじめだがこだわりが強く、気持  
ちの切り替えが今後の課題となっている。先生方に  
いろいろご支援頂いて、今は寮で一人暮らしもして  
いるので、我々からするとかなり安心するが、雷が怖か  
ったり、いろいろなところでまたあるのではないかと  
思う。実は今日来る前にご家族からメールがあり、もし  
今現在心配なことを先生方がお持ちだったら是非聞い



ておいて欲しいというリクエストもあったので、あとで何かあったら教えてください。

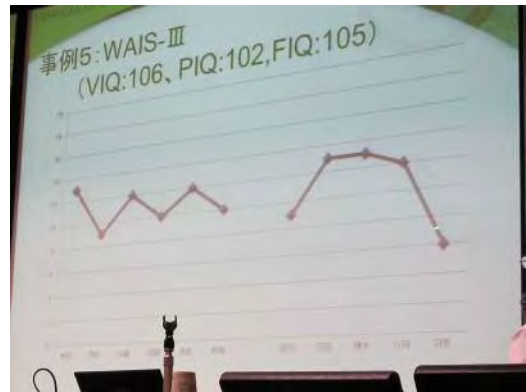
その子の能力。能力としては、そんなに高くないが割と能力全体が安定したものになっている。ただ、状況判断、あとで紹介するがノートを迅速に取る能力なので、やはりちょっとノートテイクが苦手なところがあるのは少し気付いている。実際僕の心理学の授業も受けていたので、授業の前半はノートを取っていたが、後半はばたっと倒れてノートが取れなかったので、ノートテイクはちょっと大変かなと思う。

それからこの学生も理系だが、実は3年生から4年生に上がる前に、2単位で上がれなかった。そこで先生が話を丁寧に聞いたところ、どうもコミュニケーションが下手だということでご家族に連絡したところ発達障害であることが初めてその時点で判明した。それでその学部の方から連絡頂いてお母様に来て頂いて、これまでの経過を伝え、卒業に向けて動き始めた。ところがこの学生も実はさっき言ったように2単位だけが落ちて、3回連続で単位を落とした。それで、方向を切り替えたのと同時に、これは発達障害学生の多くに見られるが、彼らの能力ダウンの一番の原因はどこにあるかと言うと、長期の休みに全く勉強していない。さっきポケモンを話したが、発達障害学生に長期の休み方を聞くと、申し訳ないが、ほとんどパソコンで何を見ているかと言うとニコニコ動画。それからゲーム。

従って、この子の場合も確認すると長期の休みはゲームしかしていないということだったので、指導の教員にお願いして夏休みとか長期の時にはTAみたいな形や大学の行事のお手伝いなどに出来るだけ引っ張り出すようにお願いした。その結果、そういう中で社会性を身に着けた。長期の休みもそういう計画があると生活リズムが崩れない。それで安定することが出来て、1留はしたが無事卒業は出来た。ただし非常に不器用さが強いので就職活動等は難しいだろうということでご家族の理解も得て、在学中に精神障害者保健福祉手帳を取得して、この3月無事卒業して、現在は地元の障害者職業センターと連携しながら現在就職活動をしているところ。

そのスコア。やはりかなり作業に対する迅速さや俊敏さや同時処理が苦手なことが分かる。かなり知的な専門性では高い学生だった。ただ、実験系が苦手。しかもノートをまとめることが出来ない。と言うことで結局レポートの提出が遅れて行った学生。

この学生も既に卒業した学生。吉田キャンパスの方だが、実はこの学生がバタバタ吉田キャンパスで行ってくれたおかげでこのシステムが作れたところがあるが、理系の学生でADHDを合併するアスペルガーの学生。入学後に学内で行動面での不適合が顕著になった。特に顕著だったのが自分が落ち着く図書館のパソコンを見たいために、図書館の中を走っていた。休み時間になるとキャンパスの中と図書館の中を一目散に走るの学生に当たったり、学生のカバンに当たったりして、危険で図書館から出入り禁止を食らった。自転車も怖くて、時間がないと凄く自転車を飛ばす。そのように、多動や不注意や衝動のコントロールが効かない場合があって、ご家族と大学とで協力して僕の方も個人的に面接を行いながら支援体制を作って行って、指導の先生の協力もあって4年間で卒業することが出来た。卒業後、現在は地元に戻っている。どうしても不注意と多動がまだ残ってしまうので、なかなか就労が難しく、今、就労移行を受けて作業所やいろんな事業所での体験を積んでいるところ。



そのスコア。見て頂くと分かるがかなりギャップの大きいスコアになる。

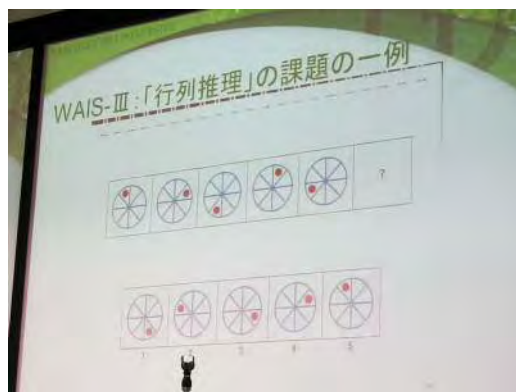
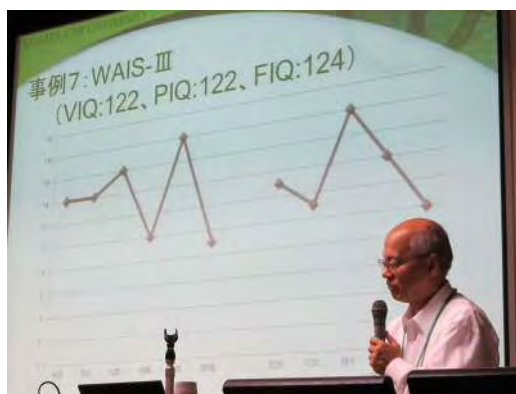
参考までに今紹介した全員のスコアを重ねてみた。するとこういう特徴が分かる。まず全員理系の学生だが、全員共通するのは基本的な知識は高い。と言うことは何かと言うとセンターを突破している学生。それから理系だけあって全員が算数が非常に高い。ある意味で言うと、ある程度まで理系のところで学力的にも維持できている。それと合わせて後で紹介するが積み木と行列推理というのが非常に高く出る。その一方で彼らに共通して苦手な特徴がこの3つ。理解は状況判断、配列も状況判断。従って、非常に状況判断が、パターンに慣れると良いが、臨機応変さに欠ける。ですから、先生方から言われた指示は言われた指示通りにする。ところがその途中でこう変えてと言うと駄目だったり、日程が変更すると不安定になる。それから符号というのはノートテイクをしたり実験の途中でメモする、あるいは実験の途中で実験の経過などをメモしたり整理したりするそうということが非常に苦手。従って、頭だけで覚えようとするので、結局忘れてしまう。そういう特徴が彼らに共通して出ることが分かる。

彼らが得意な能力の1つに積み木と言うのがあるが、これは9個のブロックを使ってこういう形を作るもの。その中でもこれは形が難しいが白と赤でこういう模様を作る物。ですからこれは工学部系とか理学部系の学生は結構得意。こういう風に何か形を作るあるいは視覚的な処理は非常に強い学生達。ただ、ゼロから何かをクリエイティブして行くのは非常に彼らは苦手。だから、これはきちんとモデルになる絵があって、積み木が9個ばらばらに並べられているので、モデルを見ながら正しく作るという作業は非常に優秀。

それからもう1つ行列推理と言うのがあったが、それはこれを見てこの?マークに当てはめるのが1~5番の何番かという問題。これは行列が1つ増えて、2つ増えて、3つ増えて、4つ増えるので、答えは5つ増えるのなので、どれだと。

これは視覚的な処理だが、実はこの辺りから難しくなる。これは視覚的処理と同時にこういう法則をきちんと見つけて行って、その法則に則って答えを導き出すので、これはかなり複雑なワーキングメモリー系を要する。でも結構山大レベルだとこの辺りは工学部系では出来ているが、かなりハイレベルな問題になる、そういう課題。

お分かりと思うが彼らはかなり視覚的な情報を与えて頂くと整理が出来て行くタイプ。ですから言語指示だけだと文脈理解が難しくなる。





## 具体的な対応(大学として考えるべきこと)

時間がないので最後のスライドにするが、改めてそういうことを通して先生方に大学4年間と言う流れの中で何を支援して頂きたいかと言うと、まず1点目は短期的な目標を通した達成感の獲得と言うこと。これ実は、我々が一番困っているのは、我々の立場上言っただけではないのかもしれないが、今の大学のシステムは、特に前期試験に関して言うと試験が7月にあって結果が分かるのが9月あるいは10月。そうすると大半の学生達にとってはその2か月のギャップが非常に大きい。だから本当はあまりしちやいけないんでしょ

うけど、彼らがきちんと4月から7月くらいまで頑張って先生方の試験を受けて、あるいはレポート書いて、すぐ、本当はやってはいけないんでしょうけど、よく出来てるよとか、あの難しいところを良くやったよと言うと、彼らは凄く自信を持って、その次の段階として夏休みを頑張ってくれる。これは春休みもしかり。

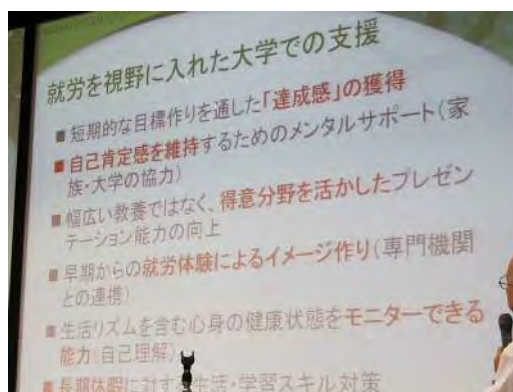
あるいは理系もそうだが、今、出来るだけいろんな資格を取るように我々も導いている。資格や検定を取るという、短期的な目標を作ることで、彼らは生活リズムを整えて行くのと、それを合格することで彼らは非常に達成感を得やすい。そういう風な学生生活のメリハリをつけるような指導を今お願いしている。

それから我々もメンタル的なサポートをしていくが、何がメンタル的なサポートで一番必要かと言うと、自己肯定感を維持していく。要するに良い意味の自信を維持するということが学習を4年間維持していくためのとても大切な基礎になる。ですから先程例に示したが、指導教員から定期的に言われて先生の手伝いや大学の手伝いをした後で、先生方から褒めて頂くことで本人が研究室での居場所を作れた。やっぱり研究室の中の居場所を作る、それから先生に認められると言った自己肯定感は非常に大事。ただこれに傷ついている場合は我々が専門的な立場で彼らのサポートをしていくことで立ち直りを早くしている。変な話だが、発達障害学生で理系の場合は、かなり共通教育の人文科学や社会科学で落ちる場合が多いので、そういうものよりは彼らの得意分野を生かして、大事なのは単にレポートでまとめるだけじゃなくて、プレゼンテーション能力を伸ばして頂きたい。結局、彼らが能力を伸ばしてもこのプレゼンテーションが大学のうちで伸びてないと就職で不利になっている。ですからそういう点の教育がこれから求められると思う。

それから早期からの就労体験によるイメージづくりと言うことで、彼らはイメージに非常に乏しいので、自分が働いているというイメージが分からない。従って今出来るだけアルバイトを勧めたり、インターンシップも今後、学内の就職支援室とタイアップしながら学内なんかでもインターンシップが組めるようにしながら、彼らが在学中から自分が働いてしかも認められたというイメージを作っていく。それが就職活動に非常にプラスになるので、そういったものをこれから積極的に取り組まないといけないと思っている。

昨年も、別の場で言ったのかもしれないが、是非工学部の先生たちが、いろんな企業から寄付金を頂いて彼らが半年くらいこういった就労のイメージ体験を出来るような、実験室や実験棟を是非作って、そこで就労のイメージを作っていきたいので、是非企業からお金を寄付して頂ければあとは我々がやるので、是非お金集めをお願いしたい。

それから生活リズムを含む自分の健康状態のモニター。非常に自分が疲れていたり、寝不足等、自分をモニターする能力が低い。そして今既に何名か取り組んでいるが自分から学習しない学生に対しては、長期休暇に生活面や学習スキルの対策を練っている。今年の夏も2人程、これは他大学の学生だが、最近流行の毎日常声人語を書き写す、これを僕の宿題に題に出した。そういう風にやはり就労を意図したトータルの支援を我々は組まないといけない。こういう事やることによって、さっき示し



たような IQ の低下を防いで、彼らが本当に先生方に 4 年間育てて頂いたその能力を持って社会に貢献できる人間に育てて行っている。彼らは障害を抱えているが、でも同時に彼らはいろんな可能性を秘めている学生でもあるので、今むしろ我々が支援させて頂きたいのは、彼らがまだ表現できていない可能性を如何に先生方にご理解頂いて、彼らとその能力を更に花開いて、本当に社会の中で貢献できる人間として育てて行くか、それを今意図する形で CSR の方もいろいろ支援に動いているので、今後も先生方のご協力を得ながらこういった学生達に我々が出来る支援、それから何よりもその支援を通して彼らが本当に生き生きとした形で社会に貢献できる人間に育てて行く支援、そういったものにまた取り組んでいきたいと思うので、今日の話がそういったことに少しでもご参考になれば幸いです。

## 質疑

Q: 1 点教えていただきたい。早期発見と対応は分かったが、早期発見は何をきっかけに、こういうのを見れば早期という風に考えれば良いのか、そのヒントを頂けると、いろんな学生見えていますので、分かり易いの教えて頂けると。

A: 大学生レベルで言うと、とても単純なところで言うと、入学後の 4 月 5 月で言うと割と服装のパターンがワンパターンな学生が何名かいる。それから、割と自分がこだわったパターンを取るの、先生方もお気づきと思うが、割と自分が一回気に入ったらその椅子にこだわってしまう学生がよくいる。しかも同じ椅子なんだけどいつも同じ服装とかとなるとちょっと気をつけて見ておいた方が良いと思う。あと、割と季節感のない服装をしている学生。良く昔小学校で 1 年中半袖を来ていた子は、ほとんどが ADHD。元気な子ではない。結局感覚の鈍感さ。学生でも時々いる。外国から来られた方は一部除くが、そういう意味では服装に割と気を向けていると割とその辺りが分かるかなと思う。

それともう 1 点は何かと言うと、今日こうやって見ていると先生方誰もごそごそしないが、明らかに授業の前半と後半で、前半あれだけ頑張っていたが、後半になると本当にガス欠でガクンとなる学生が時々いる。先生方も授業されていると分かると思うが、ちょっと ADHD 系が入ったりすると、ノートを静かに取れなくてゴソゴソ、ゴソゴソ取っている。教科書をバタンと落したり、消しゴムを落したり、前から見ても、非常に此方が落ち着かなくてイライラしてくる。しかもそれを繰り返す、そういう学生は ADHD がらみの時が多い。

その他で言うと、早期発見、早期対応で言うと非常に真の悪いタイミングでの質問を繰り返す学生。先生達が忙しい時にのそと来て先生方の雰囲気を見ずに 1 つ 1 つ上手くまとめられなくて質問してくる学生がいるが、そういう場合には真面目なんだけど不器用なアスペルガーが多い。

それから単位取得で言うと、先ほども言いましたが、同じ科目を同じ失敗を繰り返して落とす学生。これも割とそういうリスクで見られた方が良い。

その辺りが割と発達障害学生の早期の段階で見極めるのに役に立つかなと思う。ご参考になれば幸いです。

Q: テストの話だが、これだいたい 1 つするのにどれくらいの時間がかかるか？

A: 今実際、僕が忙しくて取れないので田中に取りってもらっているがだいたい 2 時間以内。田中は僕と同じくらい慣れているので、これより項目が少し多いが、だいたい 1 時間半～2 時間以内で取ることが出来る。ただし、長く引きこもっていたり、うつ状態が酷いと、さっき言ったように質問に対して言葉が表現できないので、その場合は若干長くなるかもしれない。その場合は途中休憩をはさんでも、だいたい 2 時間ちょっとくらいで納めるようにしている。なお、検査に関しては、最低でもご本人の了解をきちんと得て、ある意味 IQ は、とても大きな個人情報になってしまうので、出来るだけ今は保護者の了解も頂くようにしている。ただし吉田キャンパスでは既にあるが、本人は希望するが親は反対で、でも本人は親に黙ってでも取って欲しいと、自分のこれからを考えたいという場合は取っているケースはあるので、少なくとも本人のプラスになる道具として取らせて頂いている。

Q: CSR の方から発達障害の学生を支援するためのピアカウンセラーの募集が来ている。おそらく



先生も関与されていると思う。今の答えにも通じるが、学生本人が自分が発達障害だと認めていて親も認めている場合は、こういうピアカウンセラーや TA のサポートは非常につけやすい。ですからこの制度は非常に有効かなと思うが、今工学部はいろんな意見があって、本人が認めてない場合、保護者が認めてない場合、こういう場合はどうしたら良いのだろうと。ですから、こういうピアカウンセラーと言う制度も重要だが、発達障害かどうかということを中心に診断・判断する制度と言うか係を創設することが非常に重要ではないかという意見が挙がっているがこの制度を先生はどのようにお考えでしょうか？

A: その点に関しては、発達障害か否かと言うことは、これは極端に言うと人権問題に関わることなので我々は慎重にしないといけない。僕の場合、精神科の臨床もするので、その辺りでは非常に微妙な問題であるのも承知しているが、ただ、大事なことは我々の立場としては、発達障害であるかというよりは、本人が何らかの形で困っていて、しかもその結果として先生方も支援に困る。こういった時にやはりその学生さん達もそうだが、先生方が困っている場合はその実験なり演習なり全体が動かなくなるので、ある意味では 1 対 1 のサポートと言うよりは先生方に補助する形で貢献できればと思っている。従って中核的には対象になる学生さんたちの了解を得ないといけない、あるいは保護者の了解も得ないといけないことはあるかもしれない。スタートとしてはそういったケースからスタートすることになると思うが、最終的には我々としてはそういうニーズが少しでもあれば、さっき言ったように、その授業あるいはその演習や実験全体がスムーズに行くような形でのサポートまで可能なら行ってみたいと思う。その場合でも先生がおっしゃったみたいな診断等の問題や、そういった診断等をきちんと受けるなりすることは、正直言って、これは今全国的に問題になっていて、それは今後議論があると思うが、その辺りはまずは申し訳ないが今年度スタートしたばかりでは出来ないで、少しずつ事例を積みながら解決させて頂きたいと思う。最初言ったように、出来るだけ本人だけではなくて、周囲の先生にもプラスになる形では作りたいと思っている。

Q: 発達障害の学生と言うことで、今、教務係の方でも今 2 年生の学生さん 1 人に対して窓口サポート等を行っていて、前期で言うとその人専用の時間割を作って私の方で対応した。その学生は今特に問題ないと考えているが今後進級して行って、工学部では 3 年から 4 年に進級する時に留年が発生することがある。3 年生後期とかで成績が思わしくなくてこのままでは留年してしまう危険性が出て来た時にはどのようにして行けばよいかと言う不安がある。

A: 基本的には、特に進級がらみで言うと、実は山口大学の場合は、こういうサポートが少しずつ行なわれているので、実はまだそのリスクは低い。僕はさっき言ったように精神科臨床もやっているの、いろんな大学の現状も知っている。ほとんど留年が決まるのは、結果が分かってからになっている。先程指摘頂いた学生もそうだが、だいたい試験の直前だともう遅い。今ちょうど僕が見ている他の大学の学生さん達は全部出席状況をチェックし始めたが、だいたい 5 クール目から 7 クール目くらいの真ん中くらいで全部必要ならば出席状況とか本人の授業に対する意見等を早目に確認する事でかなりリスクは下がっている。今ご指摘があった学生もその辺りは既に動いている。あとはそうやって早目早目に対応させて頂いている。あと後期は先生方あまりお気付きにならないかもしれないが、かなり体調が悪くて事前に勉強できなかったケース、それからもう 1 つは、あまりこれを言うと先生方が心配するかもしれないが、我々が見ている学生さん達は、結構冬季うつと言って冬の季節に軽いうつに入る学生が多い。それが実は一番きつのが一番寒い時期なので、だいたいセンター試験前後。ですから基本的には後期試験の辺りなので、その予防に対して我々は今分かっている範囲内ではサポートしている。先程の学生さんについてもそれはサポートしている。そういう意味では既に早目に情報は得ているので、この先何かご心配がある場合は、さっき言ったように、確実に各学期の中間の段階でいろんな調査を我々も協力させて頂いて、その段階で早目早目に動けばだいたいリスクは防げると思うので、それに対応させて頂く。

Q: 最後のスライドで、幅広い教養ではなくて得意分野を生かしたという話があったが、共通教育が新しい共通教育になって、教養科目が全部必修科目になって、工学部で大量の学生が単位を落とし

ている。前期でたくさん落とされてしまったというのがあって、さぼっている学生、文章が苦手な学生とか、いろいろ問題は飛ぶと思うが、更にこの発達障害の学生にとっては大きな負担になると感じた。先生は如何お考えでしょうか？

A: 工学部の方が今のシステムに変わってたくさん落としかどうかについてはコメントできないが、少なくとも発達障害の学生さん達にとってはデメリットもあるが、実は7回で終わるので割と凝縮されている。彼らは結構後半疲れてくるので、苦手な子もいるが、結構取り易い学生もいる。我々から見ると、来年度からは出来れば実施したいが、入学時点からどの教科を取るかというオリエンテーションを含めて、発達障害学生に対してはケアして行かないといけないと思っている。その辺りは、まだ具体的に今の1年生からは情報を得てないので何とも言えない状況。

Q: 先天的な脳の機能障害と言うことなので、先天的と言うこと、いろいろ支援・対応については良く分かったが、治療と言うか、簡単に言うと治るということはないのか？強い個性を持った人間で一生涯そういう障害を持っていると思わないといけないのか？

A: 先週末、岐阜県の小児科医会に呼ばれて講演したスコア。現在、他所の大学のアスペルガーのスコアで、10年間に渡って追跡調査したデータ。今年度の夏休みに取ったデータ。子供用と大人用の検査で違うのでプロフィール違うが、見てもらうと分かるがプロフィール全体の流れはこの6年間でほとんど一緒。それを考えると、先生に先程おっしゃって頂いたが、障害特性そのものは大人になっても消えない。良く自閉症が治るとかいうが、あれは科学的根拠がない。むしろ一回発達障害の診断が付けば、その障害特性は残る。ただし、この大学生は見てわかると思うが、かなりスコアが揺れ動いている。参考までにいうと平成17年の時は派手ないじめを受けていた時期。それが中学校1年になって支援できちんと落ち着いたスコア。3年生になってほしい能力が安定して、高校に入って、大学に入って一人暮らしになって、この子は立命館大学の映像学部に入ったが、たくさんの人とコミュニケーションを取りながら言語性が伸びている。このスコアの背景には長期間に渡って彼らがどんな風に伸びて行ったかの調査結果もある。障害特性は変わらないが、小さい時から支援を受けていたり、青年期から適切な支援を受けることで人との信頼関係を回復してコミュニケーション能力が非常に伸びる。その点ではこの子もそうだが、先生方が大学から始めて発達障害と分かって支援頂いても、先生方との信頼関係を作っていく中、彼らが社会に出て非常にコミュニケーション能力は伸びるが、残念ながら同時処理系等の複雑な課題を処理する能力はなかなか伸びていない。そんなんでは、実は支援が遅ければ遅いほど就職の職業選択が限られている。そこだけは事実。ですから、ベースになる障害は治らない。でも支援によって人とのコミュニケーションが伸びるのは確かなので、その辺りご理解頂ければと思う。



Q: 個人的な興味だが、発達障害に分類されない学生に対して、このプログラムを適用した場合、スーパー学生が出来るんじゃないかなと考えるが、能力が安定して伸びるということは普通の学生に対しても効果のあることじゃないかなと考えたが、それは普通だと効果はないのでしょうか？

A: スーパー学生という言葉よりは、正直言うとさっき言った支援のスタイルは本来学生が当然自分で考えて自分でするスタイル。従って、何も言わなくても大学院とか更にステップアップしたり、それから先生方もそうだが、ここまできちんとご専門として、いろんな形で社会貢献されてる方々は、こういったことを自然に出来る方々になると思う。そんなんでは今先生からご指摘があったように先程書いていた支援は、実は発達障害の学生だけじゃなくて、今、一般の学生達にも求められている、大学としての生活指導・修学指導の方向性でもあることは事実だし、それから広く小学校から高校に渡って今特別支援教育があるが、あれは発達障害の児童生徒への特別な配慮ではなくて、今すべての

児童生徒への配慮と言っているのですが、それに繋がるかなと思う。確かにスーパー学生が育てば全員がやってくれると思うが、なかなかそこは行かないが、ただ本当に全ての学生さん達にとって必要な中身であることは事実。

Q: もう1つ、4回生にならないと、学生と教員が1対1の対応というのがなかなかない。4回生に上がってきて、初めてそういう学生がいるということが明らかになることが多いと思うが、1回生～3回生の間のサポートのシステムは既にあるのか？

A: それに関しては、今年度6月からスタートして、既に大学の上層部には話しているが、今年度はまずは情報収集として、こうやって工学部も熱心に動いてもらっているが、各学部からいろんなニーズ、それから現状を、今年度は僕と田中の2人で情報を集めながらそのニーズを集約した形で、来年度以降、実際どういう風な形で学生達が困難点持っているのかということについてのシステムを作っていく、それが来年度の課題になっているので、来年度以降更もう少し更に具体的なプログラムなり、今先生からの重要なご指摘と思うが、スタート時点からどういう風な形で彼らを見て行くのが一番良いのか、それは検討させて頂くことになると思う。

Q: 山口大学として、だいたいどのくらいの比率の方がいるか、そういう調査は実際にされているか？あるところで私の知り合いが聞いたが2~3%はいるんじゃないかと聞いたことがあるが？

A: 全国の統計では2.7%くらいいるのは確か。その場合、発達障害をどう認定するかということにもよる。僕、ずいぶん前に短大に勤務していたが、今、その短大の先生たちと話していると分かるのは、今短大はほとんどが学習障害だと言われている。それから専門学校もしかり。ですから、国公立は一見少ないように見える。ただ、我々の感覚だと2~3%、もしくはそれ以上いるんじゃないかと思う。と言うのも先程言ったように、中核の学生だけじゃなく、支援がなかったり、もともとどうつのリスクも合併しているケースもあるので、大学に入って慣れない環境とかいろんなプレッシャーでうつと合わせて、その人が潜在的に持っていた発達障害の特性が出るというケースがある。でも、それが落ち着いてくると消える。ですから一過性の出た状態を持って発達障害と確定して行けばそれも発達障害に入るので、それまで入れると約2倍くらいの発症率になると思う。とりあえずはゼロではないし、極端に低くもないが極端に高くもない。でも確実に2~3%はいるだろうということはだいたい推論される場所。

Q: 大学院の共通教育で180名くらいの学生に講義しているが、その中でも一律にレポートとか課題を出してもらった際に、非常に時間がかかったり、アンケートを出したときに個人差によって結構出てくる。そう言ったことが3%もいれば数人はいるのかなど。実際にそういう場面に直面したことがあるが、一律にそういった形を取った場合に単位認定なんかの場合にどういった考慮をしたらよいかと言う問題に直面している。アドバイスを頂ければ。

A: まずそういったご心配があれば、その学生を担当している先生もしくは学務の方で、まず他の科目の状況もきちんとご確認頂きたいと思う。先程から言っているように、発達障害の学生であるリスクが高いのか、それとも単にその科目に興味がなかったり分からないのかというのは、他の科目とのバランスになるので、その点はまず先生方が調べられて、その上で他の科目についてもご心配の場合は、教科担当の先生ではなくて、各学部学科の不調学生の指導の方になるので、そちらの方に速やかにご連絡頂ければと思う。まず、そこからスタートになると思う。

## アンケート回答結果

### 感想等

- ・ 発達障害のことが良く分かった。時間が短いと思った。もう少し事例について詳しく知りたかった。
- ・ 事例があり、学生のイメージを持ちやすくお聞きすることが聞きました。CSRの具体例なことをお聞きしたく思いました。
- ・ 分かりやすい例として「国会議会」を挙げられましたが「分かり難い典型的な例」と言われた方

が分かりやすい。(注: 本報告書では修正済み)

- ・ レーザーポインタをグルグル回さないほうが良い。
- ・ 体育会系学生の中に留年してあっけらかんとしている学生の理由の1つが行動障害であるとの説明が興味深い。
- ・ 大学において入学時の能力が低下したために障害が顕著化してしまうということを踏まえて、大学で学生の知的好奇心を刺激する努力を継続していく必要がある。
- ・ 能力ダウンの特徴は長期休暇に全く勉強しない。これは今時の学生は、ほぼ全員の学生に言える。
- ・ 結局障害を持った学生の多くが就業が困難であることを踏まえると何のために大学を卒業させたのかと言う疑問を持たざるを得ない(それまでの支援や労力と別の学生の教育に活用できる)。
- ・ 実験を通して就労体験を得させるとはどういうことか? お金が必要と言われたがそれほどお金を掛けなくてもそういうものは提供できるはず。但し実験と就労体験は似て非なる物と感じています。
- ・ 学生に対する支援が重要であることが、よく理解できました。
- ・ 具体的事例が多く非常にわかりやすい。
- ・ 事例についてさらに紹介頂けると助かります。1年に2回実施して頂いても良いと思います。
- ・ 日頃うすうす気にしていることが明らかになってよかったです。
- ・ 具体的事例も含め認識の浅はかさが分かった。”今後”の対処の仕方が…
- ・ アスペルガー、スペクトル症候群など最近情報やマスコミで取り上げられ、また学科にも学生がいたので対応など学べたらと思い参加。

#### どのような研修会に参加したいか

- ・ 教育(授業)に関する評価
- ・ 学生のモチベーション教育の成功例
- ・ 仕事の関係で「学生の相談への対処の仕方」
- ・ 学生相談等、問題学生の動向・傾向について
- ・ 具体的な事例への対応
- ・ 学習障害や発達障害学生への対応(今日のようなもの)
- ・ 学生の指導に関する内容
- ・ 行動障害の学生への接し方(特に講義中、不適切な対応など)
- ・ 授業方法等の改善に関する研修があれば受講したいです。
- ・ 大学生生活上必要と考えられる情報
- ・ 外部評価について
- ・ 設置されたセンター(情報メディア、その他)の活動状況と我々の支援について
- ・ 発達・学習障害の学生に対する対応の仕方、事例(数多くの)



## (10) 山口大学 FD ワークショップ『学士課程教育における学修成果測定について学ぶ ～ルーブリック開発を目指して～』

日程：平成 26 年 3 月 5 日(水) 13:30～17:00

場所：吉田キャンパス・大学会館 2 階会議室

参加者：教員 27 名、職員 7 名 計 34 名（第一部のみ参加者を含む）

概要：

13：30～13：50 開会挨拶 瀬瀬 厚 理事・副学長

趣旨説明 糸長 雅弘 大学教育機構 大学教育センター長

13：50～14：30《第一部 基調講演》

「学修成果の評価の方法 ～ルーブリックと評価課題の開発を通して～」

京都大学高等教育研究開発推進センター 松下 佳代 教授

[休憩]

14：40～16：55《第二部 グループワークセッション》

『山口と世界』におけるルーブリック開発に向けて」

林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授

(1) 『山口と世界』授業担当者による授業設計説明及び振り返り

(2) 『山口と世界』におけるコモンルーブリックを試作

(3) 全体共有及び松下先生からの指導助言、質疑応答

16：55～17：00 閉会の挨拶 糸長 雅弘 大学教育機構 大学教育センター長

内容

中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（2012年8月）では、教育プログラム共通の考え方や尺度（「アセスメント・ポリシー」）に則って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるという改革サイクルが回る構造を定着させることが必要とされ、その具体的な測定方法を

明確化にすることが求められている。そこで、本学では、平成 25 年度新設科目『山口と世界』を対象としたコモンルーブリックの開発に向けて、大学教育学会・課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携による取組に着手した。

この FD ワークショップでは、大学教育学会・課題研究グループにおいてルーブリック開発実践を指揮している京都大学高等教育研究開発推進センター 松下佳代教授をお招きし、本学におけるアセスメント・ポリシーの構築やルーブリック開発の具体に関連する基調講演をいただくとともに、参加者によるグループワークを通して、授業科目『山口と世界』のコモンルーブリックの試作に取り組むこととした。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	13	54.2%
良かった	10	41.7%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.2%
合計	24	100.0%



冒頭、額頭、額頭理事・副学長より開会挨拶があった後、糸長雅弘 大学教育機構大学教育センター長より、平成 25 年度から始まった新しい共通教育のコンセプトと新設科目『山口と世界』のおけるルーブリック開発の意義について趣旨説明があった。

第一部では、松下佳代教授から、「学修成果の評価の方法 ～ルーブリックと評価課題の開発を通して～」と題して基調講演があり、まず、学習評価の類型について、「学生の知識や技術などの表出を通じて、学習成果を直接的に評価する直接評価」と「学生の学習行動や学習についての自己認識を通じて、学習成果を間接的に評価する間接評価」に区分して提示された。その後、直接評価のうち、パフォーマンス評価を取り上げながら、観察不可能なコンピテンスに関し、パフォーマンスを通じて評価する概念や特徴について言及があった。そして、パフォーマンスの質を段階的・多面的に評価するための評価基準表がルーブリックであり、ルーブリックのタイプ、階層（メタルーブリックとそのローカライズ）などについて、アメリカの AAC&U 開発の VALUE ルーブリックや日本での実践事例等を交えながら、詳細な説明があった。



第二部では、「『山口と世界』におけるルーブリック開発に向けて」と題して、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授のファシリテーションにより、グループワークセッションが行われた。適宜、松下佳代教授からのポイント解説やアドバイスを受けながら、グループワーク参加者全員でコモンルーブリックの作成を試みた。1 グループ 5 名のメンバー構成で、各グループに配された『山口と世界』授業担当者 2 名から授業設計や振り返りについて説明があった後、『山口と世界』における共通の評価基準をまとめ上げながら、レベルの設定・記述に取り組んだ。最後に、各グループの代表から試作版コモンルーブリックについて発表があった。総括として、松下先生からコメントがあり、グループごとに評価基準の設定に差異があって興味深く、「課題への気づき」、「かたちにする、プロダクト」「チームワーク」といった項目に特徴を感じたとのことであった。

#### まとめ：

本学における全学 FD イベントとして、このようなワークショップの機会は、これまで少なかったように感じる。今回、新しく企画した FD ワークショップでは、ルーブリックという新しい評価方法の開発のほかに、同一授業の担当教員間でそれぞれの授業設計のあり方を相互省察する機会提供の狙いがあった。参加者アンケートを見る限り、ほとんどの参加者がこのようなワークショップ形式の FD イベントに新しい気づきと充実感を得る結果となった。来年度以降も、このような相互研修型 FD の機会提供が必要と考えている。

『山口と世界』のコモンルーブリックについては、今回試作された成果物を貴重な財産として、大学教育学会・課題研究グループと連携しながら、具体案を作成し、学内関係者とともに詰めていく予定である。





### 3. 教育改善研修会

#### (1) 医学部医学科、医学系研究科

日程：平成 25 年 7 月 10 日(水) 13:00～13:30

場所：医学部第一会議室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

川崎 勝（大学教育センター教授）

参加者：26 名

内容

「教育改善 FD 研修会開催にあたっての事前調査票」において医学科から回答があった事項に基づき、糸長センター長がコメントを行う形で今回の FD は実施された。医学科からの事前回答の主要部分は以下の通りである。



1. これまで、新しい共通教育の授業を提供していく上で、どのような問題や課題があったかを具体的に記述して下さい。

・ 医学科・保健学科の共通教育の担当は「社会と医療」1 単位で、20 クラスを担当している。学生にとって選択が可能なように、後期に多くのクラスを開講し、前期は少なくなっている。

医療関係に興味のない学生への講義において、動機づけが課題であるとの指摘があった。

医学科としては、全体としては順調に行われていると考えているが、クラス数は後期が多いので、今後、課題が出る可能性もある。

2. 1 の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのかを具体的に記述して下さい。

今後の課題としては、学生の選択を増やす工夫が必要と考える。授業への動機づけの意味でも、なるべくクラス選択を行えるようにしてもらいたい。

医学科にとっては、新しい共通教育の問題と言うより、例年、吉田入学での物理・語学等における留年の問題がある。

物理を必修としているが、生物受験の学生で高校の物理を受講していない学生がおり、大学教養レベルについていけるかという問題が以前から心配されている。クラス指定なのだから、場合によっては、医学のための物理学として、前期後期を行ってもらいたいのも考慮してもらいたい。

英語以外に第 2 外国語を必修としているが、その成績を注視していきたい。

一般科目については、放送大学の運用が課題であるが、留年と仮進級の問題になるので、今後も検討していきたい。

医学科の担当する新しい共通教育科目は、全体として上手くいっているため特に問題なく現状確認は進んだ。医学科学生の固有事情に基づく諸問題に関しては、今後、医学科と大学教育センターで解決に向け引き続き協議していくことで合意した。

## (2) 工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)

日程：平成 25 年 09 月 04 日(水)14:00～14:30

場所：工学部 D 棟 1 階 D11 教室

講師：糸長 雅弘 (大学教育センター長)

参加者：31 名

内容

本研修会では、本年 4 月から導入された新しい共通教育の実施に伴って明らかになってきたさまざまな教育課題について共有理解を深めるとともに、その課題解決に向けて協議を行った。

本研修会の開催に当たり、「1. これまで、新しい共通教育の授業を提供していく上で、どのような問題や課題があったか」、「2. 1 の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのか」の 2 点について事前調査を行ったところ、工学部の懸念は 1 年生の再履修の問題であった。これについて、再履修クラスの時間割を組むことが難しい現状が説明され、解決策として後期終了時点で再履修者向けに集中講義を開講する提案を翌週 9 月 8 日開催予定の作業部会で行う予定であると伝えられた他、あらゆる手段を講じる必要があること、場合によっては遠隔講義の利用の可能性があること、その場合遠隔側の教室には TA の配置を考えていること等も伝えられた。また、再履修者については、共通教育における各学部の不可と欠格の人数データから、欠格者が工学部に多いことが示され、とにかく出席するよう指導して頂きたいとの要請も行われた。

「環境と人間」を担当された先生から、「自主学習させたところ概ね好評を得た」と報告があった事について、「学外の共通教育関係の会議に出ると旧帝大系の先生ですら学生が学び方を知らないと言っているので、他の授業科目でも能動的な学びに向かわせるようにやってもらいたいと考えている。」とのコメントがあり、別の担当された先生から出された、「何を教えても良いように感じた」という感想については、「学習の目的に沿っていれば内容は担当の先生に任される。」とコメントされた。

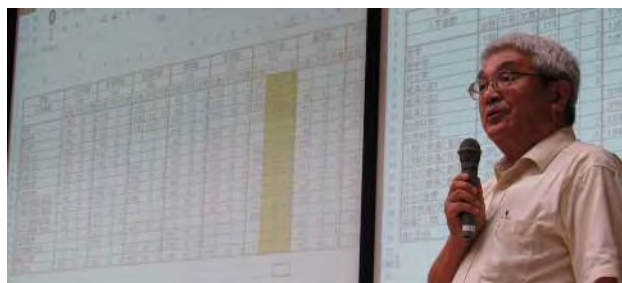
質疑では、「集中講義はありがたい。強くお願いしたい。」「新しい共通教育はトップダウンでスタートされたため、どういう講義を提供すべきか議論がなかった。どういうスタイルですべきか研修をしてもらいたい。」等の意見が挙げられた。これに対しては、「ボトムアップのところはなかったのが実情であるが、中教審の答申でも、何を教えるかより、どう教えるかが重要になってきている。先日行ったアクティブラーニングに関する全学 FD 講演会でも、教える内容を相当絞り込んで、学ぶ習慣が付いてない学生に習慣づけることが大切であることが重要なように感じられた。「環境と人間」でもどう学ばせて専門教育に繋げるかと言うところに重点を移して頂きたい。セミナーも行わせて頂きたい。」等の回答が行われた。

出勤率の平準化の問題について、移行教員の負担分がなくなっているのではないかと指摘もあった。これについては、「移行教員のポストを守っている学部もあればそうでない学部もあると思うが、蒸し返しても建設的な議論ができるか分からない。何らかのインセンティブで対応するしかないので、今年度中には合意を得る必要がある。」とのコメントが返された。

### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.8%
良かった	13	61.9%
どちらとも言えない	4	19.0%
あまり良くなかった	1	4.8%
良くなかった	0	0.0%
無回答	2	9.5%
合計	21	100.0%



「理系基礎科目の担当で1学科にしわ寄せが来ている。解決のために大教センターから新たに非常勤講師を付けてもらう余地はあるか?」という質問もあり、「必要な要求は出すつもりだが、執行部の判断次第である。」との回答が行われた。



「共通教育の時間割は1コマ目が少なすぎる。あれでは1年生に10時半に登校しろと言っているようなものだ。それをしておいて学生に勉強しないというのはおかしい。寝坊しろと言っているようなものだ。」と言う意見も挙がり、「時間割は学部との話し合いで決めており、専門と絡めると必ずしも1コマ目がスカスカということはないと思う。共通教育の立場から言うと、従来通り2~4コマ目で組むことはやっているかもしれないが、現在は1、5コマ目にも授業を当てないと時間割が組めない状況になっている。なるべく共通教育で1コマ目の授業が増えるように努力する。」との回答が行われた。

「科学技術と社会」「環境と人間」の成績分布についてグラフが示され、「工学部はそれほどでもないが学部によっては極端なケースもあるかもしれないので、成績のばらつきが出た場合は学部独自のFD等を行い成績の平準化についても配慮して頂きたいと考えている。」とコメントされた。

共通教育科目の再履修問題について、「試験期間もあるので、集中講義を受けられない学生もいるのではないかと。従来20単位選択だったが、現在は必修で余裕がない。再履修を遠隔でやっても、各学科でいるんなところに専門が入っているので必修だと難しい。」との懸念も挙がった。これに対しては「それについては理解している。再履修クラスを学科ごとに組むのは難しい。2年次にすべて解消できなかった場合は次年度以降も行うので、取れてない科目を受けてもらうしかない。必修になっているのであらゆる手でやるしかないと考えている。」との回答が行われた。

最後に、工学部FD担当より「工学部が一番気にしているのは再履修の問題である。先程のデータでも30~50名の学生が落としており、そのままの数で来られても困るのでお願いしたい。」と要請があり、「その点については十分に配慮したい。」と回答して締めくくられた。





### (3) 医学部保健学科・医学系研究科

日程：平成25年9月18日（水）15:00～15:30  
場所：医学部保健学科第2研究棟 HD1 講義室  
講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）  
川崎 勝（大学教育センター教授）  
参加者：約35名  
内容

今回のFD研修会は、主として糸長センター長が「教育改善FD研修会開催にあたっての事前調査票」において保健学科から回答があった事項（特に問題点や課題）を紹介し、それに対してコメントを行う形で実施された。保健学科からの事前回答とコメントの主要部分は以下の通りである。

1. これまで、新しい共通教育の授業を提供していく上で、どのような問題や課題があったかを具体的に記述して下さい。

- ・ オムニバスでの授業評価のあり方（過重負担ではないか）←（コメント）学部運営の仕方次第である。
- ・ 今後共通教育が拡充されると専門への影響が生じるのではないか←（コメント）当面は拡充の予定は無い。
- ・ 「生物学」の受講者数に対して教員数が少なすぎる←（コメント）理系基礎科目に関しては理学部とのバランスが重要であり、今後、改善できるように協議していく。

引き続き、事前調査票の2番目の項目「1の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのかを具体的に記述して下さい」の回答内容に基づき、新しい共通教育体制における保健学科の教員の様々な工夫が紹介され、糸長センター長から、受講者に合わせた授業改善への一層の工夫が要請された。

上記の事前調査に基づく質疑応答の後、1年次前期で不可の学生の現状報告と対応策について質疑応答が行われた。特に、2年次以降の履修上の問題がある宇部地区の学生への対応策として、1) 放送大学の活用と 2) 後期終了後の再履修クラスの設置が検討されている旨が説明され、今後さらに検討を進めることとなった。

また、保健学科の教員が担当している「社会と医療」に関して、クラスごとの成績分布のバラツキが少ないことが紹介され、今後も、このように評価基準の統一化を推進して欲しいことが要請された。

最後に、保健学科教員の専門の授業（特に実習）と共通教育が重なることの問題点が指摘されたが、開設部局である、医学部内で設置時期を改めて検討してもらい、時間割の作成について共通教育係と相談してもらうこととなった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0
良かった	24	77.4
どちらとも言えない	4	12.9
あまり良くなかった	2	6.5
良くなかった	1	3.2
無回答	0	0.0
合計	31	100.0

#### (4) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日程：平成 25 年 9 月 18 日（水）17:10～18：00

場所：教育学部 21 番教室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者：約 55 名

内容

「教育改善 FD 研修会開催にあたっての事前調査票」において教育学部から回答があった事項に基づき、糸長センター長がコメントを行う形で実施された。主要な回答は以下の通りである。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	9.1%
良かった	21	38.2%
どちらとも言えない	21	38.2%
あまり良くなかった	2	3.6%
良くなかった	4	7.3%
無回答	2	3.6%
合計	55	100.0%

##### 1. これまで、新しい共通教育の授

業を提供していく上で、どのような問題や課題があったかを具体的に記述して下さい。

以下の意見が、複数の教員からあった。また、学生からも、よい評価は聞いていないとの意見があった。

・クラス割当てによる今年の共通教育の学生は、昨年までの自由選択による学生に比べて、学習意欲が大幅に低下していることは疑えない（必修授業にもかかわらず、受講を放棄する学生も少なからず見られる）。教育において、学生の意欲、関心はもっとも重要なポイントであり、それを低下させるような体制は、たとえ外にどのような利点があるにしても、致命的な欠陥であると言わざるを得ない。

・第3希望までの授業のどこにも入れずに、強制的にそれ以外の科目に割り振られるケースが見られる。これまでの共通教育と変わって、授業が必修化され、上記のように、希望しない授業にまわされる学生もかなり存在するようである。これが成功と言えるのか、失敗なのかの判断を検証する必要がある。

・今回の新しい共通教育制度は、学生をクラス編制し、クォーター制にすることが特徴であるが、学生から選択の自由を奪い、自主性が育つ機会を剥奪し、授業期間も半減し、教育の質と量が半分以下になった（8回では、まとまりのある授業が構成しにくい）といった問題がある。

（糸長センター長からのコメント）

新しい共通教育では、「何を教えるかではなく、何ができるようになるか」、受動的な学びから能動的な学びに転換、教え過ぎずに考えさせる機会を与えることが重要なポイントであるとの説明があった。



##### 2. 1の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのかを具体的に記述して下さい。

・授業評価にとどまらず、学生に共通教育のシステムに関する問題点や評価を問うアンケート調査を実施する必要があると思われる。

- ・自由選択科目について再考することや抽選対象クラスの学生数を必ずしも一律同数とはせず、もう少し柔軟に対応する（希望の多い授業は、受講数を多めにするなど）ことなど、クラス指定の授業科目、クラス選択の授業科目の在り方や抽選方法について、再度検討する必要があると思われる。
- ・授業科目によっては、セメスター制の授業も1年生対象に開講を考える。  
(糸長センター長からのコメント)

新しい共通教育に関するアンケート調査については具体的に検討してみたい。また、科目選択や抽選のあり方についても再検討する余地はあると考えている。

セメスター制の授業を取り入れることについては、時間割編成の点で非常に難しいと考えている。昨年度、事務担当とも詳細のシミュレーションを行った経緯がある。

この後、新しい共通教育全般について、参加者との質疑応答を行った。主な意見等は以下の通りである。

Q1 大学教育機構サイドとして、新しい共通教育について何らかの問題点を感じているか。

A1 クラス配属希望に添えなかった学生が相当数いたことを把握しており、後期の授業開始時に、学生の意思確認を行うようお願いしている。一方において、共通教育科目を一律化したことで、学生の受講態度が真面目になったというコメントも聞いている。年度半ばであり、1年間を通して状況を把握していきたいと考えている。

Q2 新しい共通教育について、受講学生からの意見等を聞くことが大事ではないか。

A2 年度末に向けて検討を進めたい。また、授業担当教員へのアンケート調査も必要であると考えている。

比較対象がない中で、学生にアンケート調査を行うことはナンセンスではないかという意見もあったが、その点も含めて検討を行いたい。

Q3 教員免許取得希望者に限定された「スポーツ運動実習」の履修について、単位を取得できなかった学生の扱いはどうなるのか。

A3 従前の通りであり、再履修等の特段の対処は行わない。

Q4 教員の授業担当曜日の割り当てが限定されており、もう少し柔軟にならないのか。

また、学生の時間割にも偏りが生じており、学生自身が自分で時間割を決められる柔軟性を持たせることはできないのか。

A4 共通教育の時間割編成においては、全学部における調整を要するため、個別の要望に沿うことは難しい面がある。一案としては、集中講義での開講という処置もあろう。

ただし、先生方で要望がある場合には、提案していただければ対応を適宜検討する余地はある。また、学生の時間割に偏りが生じていることも認識しており、今後の課題としたい。

Q5 能動的な学びへの転換とクォーター制の導入との連動性についてお聞きしたい。

A5 直接的な連動性があるわけではないが、根本的な課題として、奇数単位科目と偶数単位科目の混在の解消ということがあった。

クォーター制にすることで十分な学習ができないのではないかという意見もあるが、しっかりとした授業設計をすれば、授業時間外学習も増えているケースもある。

Q6 新しい共通教育では受動的な学びから能動的な学びに転換し、自ら考えさせることが重要なポイントと説明されたが、セメスター制からクォーター制に移行し、学生から科目選択の自由を奪



うことが、なぜ能動的な学びに転換し、自ら考えることになるのか、そのつながりが見えてこない。

A6 新しい共通教育への移行とそのこととは関係ない。

Q7 新しい共通教育を昨年までの共通教育に戻すことを希望する。

A7 現在の一年生が在学している間は動かさない。

Q8 クォーター制になって、セメスター制の時より、学生理解が成熟しないと感じる。

A8 授業の仕方次第で、そうでない例も聞いている。

Q9 科目抽選に洩れた学生は、科目履修そのもののモチベーションを減退させる要因になりかねないと思うが、何かよい方策はないのか。

A9 学部で提供する科目内容をある程度統一したものとする考え方があるが、分野に応じて対応が難しいことも理解している。現状において、今の枠組の中で対処するしかないと考えている。



Q10 アクティブ・ラーニングを推奨していく上で、現在の教室環境に、移動式机などを取り入れて、改善していく必要があるのではないか。

A10 教室環境の改善の必要性について認識している。本年10月から図書館のラーニングコモンズが開設されるが、それ以外の教室環境についても改善に向けて適宜要求していきたい。ただし、現状では、既存の教室環境の中で、可能な範囲でアクティブ・ラーニングの要素を取り入れてほしいという認識である。

## (5) 理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）

日程：平成25年10月09日(水) 15:00～15:45

場所：人文・理学部管理棟 4F 大会議室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者：46名

内容

本研修会では、本年4月から導入された新しい共通教育の実施に伴って明らかになってきたさまざまな教育課題について共有理解を深めるとともに、その課題解決に向けて協議を行った。

事前調査の回答に対するコメント

まず、新しい共通教育の運営への支援についてお礼を述べられた後、事前調査の回答に対して次の

### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	10.0%
良かった	10	25.0%
どちらとも言えない	15	37.5%
あまり良くなかった	7	17.5%
良くなかった	3	7.5%
無回答	1	2.5%
合計	40	100.0%

ようなコメントが行われた。

事前調査では、「1. これまで、新しい共通教育の授業を提供していく上で、どのような問題や課題があったか」、「2. 1の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのか」の2点について回答を得ている。

1. について、自然科学1と2について3つの意見が寄せられていた。1つ目は「受講人数が多過ぎる」という意見。自然科学1と2はそれぞれ16クラス、理学部で開講している。新しい共通教育は元々100名

くらいの受講者で20クラスを想定して計画されていて、多いところでは「文化の継承と創造1」のように24クラス、少ないところでは「食と生命」のように14クラスくらいになっている。「社会と医療」のように20クラス提供しているところや、「環境と人間」のように工学部が2年次向けに開講しているため9クラスと特別に少ないところもあるが理系の学部が提供する中で16クラスは比較的多い。2,000人近い学生に16クラス提供すると、1クラスの平均の受講者数は多くならざるを得ない。これに関しては多過ぎると指摘されるとその通りだが、可能であればクラス数を増やすなどの措置を取ってもらえると良い。

2つ目は「内容が文系・理系の全学部へ渡って、同じカリキュラムであるので、無理がある。」「文系には難しすぎる面もあり、理系には優しすぎる面もある。」「文系の学生の中には、受講の意欲がなく、受講態度に現れる者もいる。」「この授業の内容や形態を考え直す必要があるのではないか。」等の本質的な問題点が指摘されていた。これについては、クラス指定となっているので、到達目標で少し難易度の差を付けることにより対応して頂きたい。これまでやってきた教育改善FD研修会でも学習意欲については指摘されているが、中教審でも何を教えるかより何が出来ようになるかが大学の教育に求められているし、広中レポートにあるように教員中心から学生中心の授業への転換が必要であると言われている。これについてはお願いするしかないが、意欲のない学生の意欲を掻き立てる授業をやって頂きたい。

3つ目は「休講しにくい」と言う指摘がされていた。これはほとんどがクォーターの科目になっており、振替もクォーターでやる必要があり、非常にタイトなスケジュールになっており補講もほとんど不可能な状況となっているが、これは昨年度の段階で事前に予想出来ていた。絶対に休講してはいけないということは考えていないので、前年度の作業部会の中でもお願いしていたのは、後からでも構わないので単位制度が実質化出来るように、授業をやった時と同じ程度の学習時間が確保できるように課題等を課す形で対応して頂けるように考えている。

私は知の広場を担当しているが、理学部の学生のほとんどは後期受講で、前期は生物化学科の学生が受けていた。欠格は1回までだが、2~3回する学生もいた。出来るだけ再履修にたくないという思いもあり、都度その学生を呼び出して課題を別途課す事で出席に変える対応はやってきた。後期についても同じような対応をする予定。

単位制度は学習時間45時間で1単位、90時間で2単位が建前。授業外の学習時が多いアメリカでもそうなのではないが、出来るだけ学習時間が確保できるように適切な課題を課すことで対応して頂けるようお願いしたい。

2番目として、1の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのか記述してもらった。

1つ目の「すべての学部の学生が受講しなくても良い形にする。」というのは、この教育改善FD研修会でも、いくつかの学部からも同じような指摘を受けたが無理としか申し上げようがない。なぜ無理かと言うと24年度以前の入学者向に対する共通教育が平行して走っている。2つのシステムが走っている状況で更に対応すると3つ目のシステムが走ってしまうため時間割編成上無理と思っている。今の共通教育のシステムを変えるとすると、24年度以前の入学者が事実上いなくなるまで、最低でも4年間くらい走らせないとなかなか変更するのは難しいと考えている。文系・理系はクラス指定を上



手く活用する事で可能と考えている。

以上、新しい共通教育に対するご意見に対する私からの考え方を述べさせてもらった。その他と言うことで情報リテラシー演習に関して理学部から、何度か意見が出ていて、今の情報リテラシー演習が、Word、Excel 中心のもので、ある程度出来る学生と出来ない学生がいる。今回の意見では出来る学生については何らかのプレースメンステストに相当するものを作って認定してしまうやり方もあるのではないかという意見が出ている。また、今回は出ていないがリテラシー演習の内容そのものを変えてしまっただけと言う意見も出ている。理学部で問題に感じておられるのであれば、プレースメンステストだと誰が問題作成するのかとか誰が認定するのかという問題も生じるので、例えば従来型のリテラシー演習のクラスともう少し情報科学寄りで少し演習も入ったクラスに分ける。演習が入らないと困るのは皆さんご存知だと思うが、教員免許の関係で情報機器の操作という 2 単位が必修になっていて、いわゆる機器の操作に相当する内容が入ってないとクリアできなくなる可能性がある。例えば情報科学的内容にしてそこに少し手を動かす内容入っているクラス作っても良いのかなと思う。それと従来型の高校時代 Word、Excel やったことになっているけど、実はやってなかったという人向けのクラスと言う考え方もしても良いのかなと思う気がする。ただそういうクラス編成が出来るかどうかは別の話かもしれない。



#### 質疑

Q: 去年まで共通教育担当していて今年は都合で担当しなくなったが、今回新しいやり方に変わってから学生からの評価は良くなったのか？

A: 今のところやっていないが、年度末に教員と学生にアンケートをしようと考えている。ただ、学生は比較対象がないので、やってもどれだけ意味があるのかという意見はある。

Q: 比較対象がないということはあり得なくて、授業評価のやり方は変えていない。例えば総合評価とか、要は学生から良い授業だったか悪い授業だったかは出るので、不満があるようなら問題があるし、そういうデータは必要ではないか？

A: それは比較もできるし、取るつもりはある。今のところ授業評価は前期しか終わってなくて、前期終了時点でやろうという計画はないが、最終的にはやろうと思っている。個人的には授業外学習時間のところがどう変化したかが興味のあるところ。個人的に聞いた話なので根拠はないが、何人かの先生からは 8 回しか授業がないので課題も前よりは出すようになって、それに対する学生の反応、課題の提出状況等も従来よりは良くなっているという意見も聞こえてくる。それは先生によって違いがあると思うので、どこまで全体的な意見になっているのか分からないので、授業外学習時間データで見るのが良いと思っている。

私の方から、前期やってみて問題点として感じたのは、クラス選択の抽選をして、間違っただけを受講するパターンがあった。これがなかなか把握できず、間違っただけで受け続けた学生がいた。6 月終わりくらいになって分かって、途中で君の受講するクラスはこっちだと指導したが、担当の先生で対応が違っている。担当の先生には、間違っただけで担当した先生が合格としたなら、本来受けるクラスだった先生には出来るだけその評価を認めて欲しいとお願いしているが、担当の先生の考え方でまだ保留中という例もある。出来るだけ学生に不利益にならないよう対応をお願いしたい。

それからもう 1 つあるのは、朝日先生から作業部会で指摘を受けているが、学生証、出席確認システムでは本当に出席しているか分からないこと。それは認証の世界では当たり前で、多要素で認証するしかないとなるが、実は私も後期に入って山口と世界を担当しているが、本来欠席している学生の学生証がざした学生が 2 人いた。ただし私は 2 要素で出席を確認するようにしているので、1 人 1 人最

後にコメントシートを渡して出させると実際に出席してないことが分かった。コメントシートは本来コメントを書いてもらうためのものだが、出席確認にも使ってもらえる。学生の不正行為が気になる場合は、そういうやり方も採用して頂ければと思う。

Q: 学科を代表して質問すると、物理情報科学科では従来言われていたカリキュラムを楔形にせよというのをようやく守って、専門のカリキュラムを組み直して楔形にした。ところがこの度の共通教育が急に決まって、すべて1年生で受けることを原則にしろと急にそう来た。それに対してなんで事前に学部でそういう相談がなかったかと非常にみんな不満に思っている。何かご存知であれば教えてください。そういう過去の指導、それはもうやめて1年次に取らせるとか、そういう議論はどこで行われたのか、文科省の指導であればいつ指導されたのかとか、その辺りの情報を教えていただけるとありがたい。

A: 経緯は私も分からないというのが実情。いろんな噂というか、どういう形で決まったというのは後から聞いたところはあるが、ご存じのように西田副学長の主導の下で始まって吉田一誠前機構長の下で実際に作業が進められて行った。私も当時主事と言う立場で議論には加わっていたが、最終的な決定の場面では加わってなかった。これは作業部会に加わっていた多くの先生は皆同じだったと思う。かなり一部の人たちで決められたのかなと言う印象を持っているが、これはあくまで印象で、良く分からないというのが実情。

じゃなぜ初年次にやるのかと言うと1つは共通教育30単位でCAP制を取っているところでも52単位と言うところと、もう少し多いところがある。あと工学部のように事実上無制限のところもあるが、多くは52単位かなと。30単位でそれ以外のところは22単位余裕があるのでそれほど無理はないだろうと言う考えで、しかも1単位ものもかなりあり、自然科学は2単位物でも出来るが、1単位ものでしか出来ないものもあって、そこにクォーターとセメスターを混在させると時間割編成上難しいという問題が出て来て、共通教育係りの方ですべて1単位であれば時間割編成出来そうだとした。1単位物が一般教養に相当数あるので、そうすると8回でやるような内容はある意味初年次教育と位置付けるのが自然かなと言う考えもあって、初年次教育として位置付けて行こうという形にしたが、各学部の楔形でどれとどれが降りてきているのかというのが把握していないところもあって、無理だと言うところが結果的に出て来た。それが難しいという意見が出ていたのが理学部と工学部で、工学部は一部2年生で学部に移った後対応するという対応になったが、物理情報はどうしても難しいと言うことで、初年次教育という位置付けなので本当は1年生でやれば良いが物理的に無理だとなったらそれは対応するしかない。あまり回答になってなくて核心的な部分は答えられてないが。

Q: 是非しかるべきところでお伝え頂ければと思うが、制度のことは理解できる。ただ教育カリキュラムは本来内容で考えて行くもの。その時に、哲学なんかは1年の最初でやらせるよりは例えば専門教育をした途中でやった方が効果的じゃないかとかそういう議論を現場ではやりながらカリキュラムを作っている。現に物理情報ではそういう議論の上でやっている。それがことごとく1年間やって崩されて、いろんな教員が何人も膨大な時間を関わって考えたのが、制度の問題だけで崩されるのは皆さん多分納得いかない部分が非常にあって、代表して申し上げますが、そういうやり方は非常に良くないんじゃないかと。もし制度上、いろいろあるのであれば事前に1年前くらいに言って頂いたらその準備は学部でもできると思うが、半年くらいでしたよね？それはやはりやり方として変じゃないかと言う意見が現場にある。それは私だけじゃないと思う。それだけはお伝えしておこうと思う。

A: 私も卑怯なようですが、全く同感です。それは先生の言われる通りです。

Q: 教務委員長しているので個人的にはいろんな意見を耳にしているが、そういうのをまとめていくつかお聞きしようと思う。問題になっているのが文系と理系すべてにわたって同じカリキュラムにするという、最初そういう要求だったと思う。先程理学部から出た意見に対してのご返答として到達目標で難易度に差を付けたら良いのではないかという解決法を教えていただいたが、授業内容としては変えるのはまずいのか？同じ内容で中身を変えるのか？

A: 到達目標と言うかあるいは深さかもしれない。学習の目的という形で自然科学はいろんな〇〇



に触れてのような形で、そこが満たされていれば私は別に学部毎、文系と理系で少し内容が違うというのは全然問題ないと思う。

Q: そうするとそれは担当学部にまかせて頂いて、担当する対象学部によって内容を極端に変えても良いのか、問題はないのか?

A: そういう意味では教育学部は典型。既に担当の先生で全然違う内容を、同じ文化の継承と創造 1、2 とか、人間の発達と育成 1、2 と言っているでも全く違う内容をやっている。

Q: そうするとその時に問題になってくるのが成績評価だが、その時にはどういう公平性を担保にするように工夫されているのか?

A: 理学の場合は 1 と 2 は非常に評価がそろっている。それに対して担当の先生の得意の分野に引き込んでやっている人文学部や教育学部はかなりばらつきがある。どうそろえるかは難しいところ。大学によっては相対評価を強制的するところもあるらしい。秀優良可の割合がどれだけと。多分皆さん出来たらそうしたくないというのがあると思う。大学教育センターとしての考え方も示さないといけないと思うが、学部から学問分野によって違うと言われると突っ込めないところがあって、じゃあ相対評価にしてくれますかと言えばそれも嫌だという話になるので難しいところがある。ただ文系と理系でそれぞれ基準をそろえるということくらいは出来ないことはないと思う。分布がだいたい等しくなるようにと言う対応。理学部はかなり授業内容を標準化しようとされようとしているので可能と思う。人文、教育のように同じ哲学や人間と発達や育成でも全然違う内容をやるということになると、評価をそろえるのは相対評価にでもしないと無理かなと思う。

Q: 担当して感じたことを 1 つ話したい。一応みんなにだいたい基準的なものを教えようというのが理学部の中のコンセンサスであったので、出来るだけ統一したシラバスで話をしているが、私が文系で持ったのは経済学部で、経済学部は文系なので大変だろうなどは思っていたが、工学部、理学部、農学部とは全然違う、想像を超える違いがあった。そう思った時に 220 人受けていたが、凄く熱心で良い子もいるが、全然授業受ける気持ちのない人もいて、態度も悪くて、小テストをやっても成績もものすごく悪い。本来はそういう学生に一定の恥ずかしくない知識を授けてやらないといけないと思っているが凄くジレンマだった。そういうのはどうすれば良いか?

A: ヒントになるか分からないが、工学部で教育改善 FD 研修会して環境と人間を担当されている先生が同じようなことを感じられたらしい。やはり経済学部の学生だったが、環境に関連する技術的な話をしようとする、途端にいかにも興味ないわという顔をする。その先生は教えるのをやめたらしい。技術的なことを教えるのをやめて調べさせるようにして、調べさせるだけだと、したかどうか分からないので、次の時間に討論させるようにしたらしい。そうすると割に乗ってくるようになったらしい。

Q: 担当教員はそういう工夫まで考えないといけない?

A: 何を教えるかより何が出来るようになるかが求められているということは、大学の教員にはある程度求められているということなのかなと思う。

私も山口と世界を Q3、Q4 連続で担当するが、教える事はしない。ただし単に調べてグループ討論させるだけでは面白くないので、一番大事なことは教えない。例えばちょっとした論理的思考とかテクニカルなことは教えるが、一番山口と世界で本当に学んで欲しいことは教えない。実験的で本当に上手く行くかは分からないが個人的にはそうしている。

Q: そうすると評価は成果物などか?

A: 成果物を作らせる形でやろうとしている。あとは授業中の態度とか、どれくらい活動に加わっているとか、そういう点で評価しようとは考えている。ただ、一般化出来ない。自分の知識を伝えないといけないという部分もあるだろうし、そこをどう兼ね合いを付けるかは難しいところと思っている。

Q: 私も自然科学を担当しているが、そういう方式を 190 名もいる学生に出来るかというのが正直な話。

A: 環境と人間ではそれは出来た。

Q: もう 1 点は、落とす、単位を履修できなかった子に対してどうするんですかと聞いたら、そんなこと分からない、考えてられないと事務が言った。来年度どうするかとかそういう話。そこらへん、私たちが非常にやる気のない子を落として良いのか、落とした方がその子のためなのか。落とさないように努力したが、来年度以降のこと分からないと言われたので。

A: 今のところ前期終わった結果で言えば基本的に再履修クラス開く必要はない。後期の結果がまだ分からないので何とも言えないが、教学委員会でも議論させてもらったが放送大学の科目を受ければ認定する仕組みで十分対応できる。幸いなことに理学部は前期終わった時点では再履修クラスを工学部、医学部向けのもの考える必要はない。再履修をどうやるかは今議論していて、方法としてそれしかないかなと考えているのは各一般教養クラス 20 クラス提供を基準に考えているが 21 クラス提供を次に考えてもらいたい。どういうことかと言うと今の一般教養科目の半分半分くらいを前期末と後期末に再履修クラスとして集中講義でやる。集中講義のクラスを含めて 21 クラスくらいを標準に考えれば良い。工学部の先生は宇部で再履修クラスを開いてくれと言うが、それは時間割編成上ほとんど無理。もちろん吉田地区の先生はあまり行きたくないというのものもある。そこで今考えているのは後期の授業終了後、宇部地区の学生のみを対象とする集中講義で開く再履修クラスを半分程度考えている。自然科学は多分入らないと思っているがそういうのを考えている。また、来年度に入って前期の授業終了後、残りの半分くらいを集中講義でやる。工学部と医学部の学生はその時にこちらに来てそれを集中講義の形で受講する形で対応しようと考えている。ただ、そのやり方に対して工学部辺りが最終的に賛同してくれるかどうかは分からないが、事実上それしか方法はないだろうと考えている。

Q: これから 1 年間共通教育の検証に入られると思う。ずっと長い間共通教育をどうするかと言う議論をしてきたように思うが、何のための共通教育改革であったかと言うことを明確にさせていただいて、それに対してどうであったかと言うことをきちんと評価して頂ければと思う。これだけ苦労しても我々の目指したところが達成できていれば、それは我々としても問題を言うところではないと思う。ただ、そこをはっきりして頂かないと、そもそも何のための改革であったか明確に評価して事後点検して頂ければと思う。

A: それに関して、私自身そういう理念でもって改革に加わったわけではないが、検証した結果高大接続と言うか、ある高等教育の研究者の間の一部で言っているのは、実は初年次に行うのはリメディアルじゃなくてリハビリ教育だと。それはどういうことかと言うと高校までというのは完全に受動的な学習なんですね。大学では主体的な学び、特に解のない問題にどう向き合っていくかが非常に求められるが、そういう訓練は高校までに全くされていない。それが初年次教育で少しでも出来ればと。そのためには授業のやり方を相当改革していくことが必要だが、それがある程度出来ればこの新しい共通教育に変えた意味が出てくるのかなと、そうなることを期待しているがこれは検証してみないと分からない。

## アンケート回答結果

### 感想等

- ・ 共通教育の課題が良く理解できました。
- ・ 自然科学の授業内容をどのように改善すべきか良くわかった。
- ・ 共通教育改革の意図が理解できた。
- ・ オフレコの本音は参考になった。
- ・ 役に立たなかった。
- ・ 共通教育の意味が分からない。全体的に共通教育がだんだん悪くなり、大学は大変な時代になった！！
- ・ 資料を提示してほしい。
- ・ 結局、何もわからなかった。
- ・ 勉強になりました。



- ・ 何の研修なのか、良く分からなかった。H25 から走り始めた新しい共通教育制度の問題に対する言い訳か、言い逃れの会のようにであった。
- ・ どのような背景・理由でどのような目的でどのようなカリキュラムを組んだかという説明がなく、実施報告ばかりだったので、担当外の教員には全く意味が分からなかった。
- ・ 研修会の目的があいまいである。

#### どのような研修会に参加したいか

- ・ 学生指導上の具体的な成功例が知れるもの。
- ・ 学生のケアなど。
- ・ 学生の興味を持てる講義の方法。
- ・ E ラーニングの利用法。
- ・ 実例を多く紹介してください。
- ・ 教職実践演習。
- ・ 具体的な例や対策。
- ・ 教育の質保障に関わる他大学等の学外の取組例とその成果に関わるテーマ。
- ・ 教育改善に関する内容。
- ・ 成績が悪い、または不登校(ぎみ)の学生へのサポート。
- ・ 身障者がいる場合の授業のやり方。
- ・ 不登校の学生に対する対策。
- ・ 多様化した学生の対応。
- ・ 就職支援。
- ・ 教育内容と学生の目的意識の Gap。
- ・ 発達障害の学生の対応について。

## (6) 農学部・農学研究科・医学系研究科（農学系）

日程：平成 25 年 10 月 17 日(木) 14:30～15:00

場所：農学部 2 階大会議室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者：15 名

内容

**内容**

本研修会では、本年度から始まった新しい共通教育の問題点や課題について大学教育センターと意見交換が行われた。はじめに糸長センター長から、本年度前期における全学部 1 年生の成績の概要が示され、同一科目におけるクラスや担当教員の違いによる成績のばらつきがみられること、それは社会・人文系の授業で大きい傾向にあることが説明された。また、クォータ 2 におけるクラス選択では、クラス受講の抽選から外れた学生が不満を抱えており、受講意欲の低下が懸念されるとの説明があった。

質疑応答では、「同じテストでも、学生の所属等によって成績にばらつきがあるのは自然なこと



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	6	40.0%
どちらとも言えない	9	60.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

はないのか。特に再履修クラスにおいて、他のクラスと比べて出来が悪いにもかかわらず、成績の分布を他のクラスと揃えようとするのは問題ではないか」、「そもそも教養科目において、学生の所属によって講義内容や評価を変えること自体が不都合ではないのか」、「1年生の早期の段階において学部によって勉学に対する学生の意識に大きな違いを感じる。学生の意識が高い学部では、入学時の指導において何か特別な指導をしているのか」、「授業を欠席する学生がおり、単位を出せない場合も少なくない。欠席した学生には担当教員として何らかの配慮が必要か」、「特に理系学部においては、それぞれの科目において絶対に到達すべきレベルがある。これらのレベルを満たせずにドロップアウトするのは学生の自己責任である」等の質問や意見があった。これに対して大学教育センター長からは、「成績評価については、他大学の中には相対評価のみを行うとする大学もあるが、クラス指定によって学部等によって授業の到達目標を調整するのもひとつの方法である」と考える。今後も継続的に検討したい」、「入学時点から学生の意識には学部によって大きな差があると思う。入学時のオリエンテーション等における指導の違いによって学生の意識に差が出るとは考えにくい」、「授業を欠席する学生に対しては、基本的には『欠席』と取り扱っていただきたい。学生のケアという側面から欠席をどのように取り扱うかについては今後検討してゆきたい」、「授業の到達目標の設定では『学生に何を教えるか』より『何ができるようになるか』を検討していただきたい」との回答があった。

研修会後のアンケートでは「反省、改善点がみられない」、「新しい『共通教育』には参加していない」、「これまでの経験でこの種の研修会で真に有意義だったと思われたものはほとんどなかった」との回答があった。今後参加したい研修会の内容としては、「学生のメンタルケア」、「キャリア教育」、「共通教育」、「学生対応」、「様々な問題に対して具体的な対策がわかるような研修」との回答があった。

※アンケートの回答については原文のまま列挙した。

## (7) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日程：平成25年10月23日（水）13:30～14:20

場所：経済学部第1会議室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者：54名

内容

「教育改善FD研修会開催にあたっての事前調査票」において経済学部から回答があった事項に基づき、糸長センター長がコメントを行う形で実施された。主要な回答は以下の通りである。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	6	28.6%
どちらとも言えない	10	47.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	3	14.3%
無回答	2	9.5%
合計	21	100.0%

1. これまで、新しい共通教育の授業を提供していく上で、どのような問題や課題があったかを具体的に記述して下さい。

(1) 「新しい共通教育」の実施は予算削減の前提で行われたため、学部専門基礎科目として初修外国語を実施するにあたり、学生の学習ニーズではなく、非常勤講師の予算をいかに少なく本部に要求するかという観点からしか検討されず、①ゼロからスタートする初修外国語のクラス収容人数が既習の英語クラスより多くなり、教育効果が著しく低下した、②同様にこれまであった独・仏語が開設できなくなり、学生の選択肢が狭まった。10年ほど以前の初修外国語単位数（半期1単位から半期2単位へ）の変更により、事実上、学習時間と単位が半減した。その際、減少分をクラスの少人数化（30名）で対応し、細かい指導を行うことが認められたが、今回の改編ではまっ

たくこの事が考慮されなかった。中国、台湾、韓国などの学術交流協定大学との交流事業に必要な語学教育が一部の学部でしか提供されなくなった。これらの国と地域との学生の交流・留学で英語が万能ではなく、相手国の言語の学習は交流事業を推進する上で不可欠であろう。本学国際交流部門が実施する「海外短期語学研修」の先行きが懸念される。

【糸長センター長からのコメント】

新しい共通教育の導入により、初修外国語の授業科目が欠落したことは認識しており、アジア圏を中心とした国際交流の関連からも、一定の授業科目の確保を考えていきたい。具体的には、現在、高年次向けに開講している初修外国語の授業科目を初年次を含めて継続的に提供できるように検討していきたい。

(2) 試験を除くと、前期前半は7回、前期後半は6回しか授業ができない。この回数の授業でどの程度までできるかわからないまま始まった。これまでの全15回ぐらいの授業だとちょうど調子のでてくるタイミングで終わってしまったという印象。ただし、この点はクォーター制に教員自身が慣れることで解決されると思う。1単位のために高額な教科書を買わせるのは気がひける。さらに、この授業回数だと1冊をカバーできるはずがなく、クォーター制用の教科書が市場にないため不便を感じる。内容的には、クォーター制の回数では満足なレベルまで到達しづらいと感じる。その点は共通教育ということで、専門科目ほどのレベルを期待されないならそれでよい。受講生が前期前半は理学部、前期後半は理学部と獣医学部ということで、私の共通教育の授業内容だと文系の学生より理系の学生の方がよく理解しているという印象を持った。また、受講学生の学科がどのような学科なのかを事前にHPなどで調べておくことが重要だと感じた。



【糸長センター長からのコメント】

新しい共通教育では、「何を教えるかではなく、何ができるようになるか」、受動的学修から能動的学修に転換、教え過ぎずに考えさせる機会を与えることが重要なポイントであるとの説明があった。また、受講者の所属学部などを考慮して、クラスごとに到達目標を適度に調整しながら授業を行う工夫が必要であろう。

(3) これまでと同じで、オンライン教育を数百人に提供することでは、TAという人材が代わる援助者では、TAが卒業するたびに再教育が必要になり、大変です。やや高度な技能が必要になる作業では、継続的に採用できなければ、教員の負担が減りません。

【糸長センター長からのコメント】

具体的な対応策を持ち合わせているわけではないが、時間をかけながら、TA等の教育補助者を育成する方策を検討していく必要があると認識している。

2. 1の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのかを具体的に記述して下さい。

- 時間割の決定にあたり、半期上限26単位に留意してほしいこと
- 中国語の開講数増(=非常勤増)に理解をいただきたいこと



- 26年度以降の高年次生向け開講（とくに宇部地区）をどうするのか、早めに方針を示して、教えて欲しいこと
- 非常勤増によるクラスの人数の適正化
- 共通教育の自由選択単位の初修外国語科目の開講
- 語学の専任教員は、交流事業を促進させるような授業科目を担当し、基礎学習部分はコストがよりかからない非常勤で対応する。

【糸長センター長からのコメント】

授業科目の開講時期に偏りがあることは認識しているが、時間割の編成において十分に対応することは難しい面がある。

中国語やハングル語のニーズがあることは理解しており、大学教育機構の中国語担当教員などによる対応に加え、必要に応じ、非常勤講師の雇用を要求していきたい。

宇部地区学生対象の再履修クラスを今年度後期終了後に、集中講義形式で行うこととしている。また、次年度の前期終了後にも、全学部対象に、一定の集中講義を提供したいと考えている。

初修外国語科目の開講については、今後、十分に考慮に入りたい。

非常勤講師の増員によるクラス人数の適正化については、財政上の問題もあり、必ず実現できるとは言えないが、必要に応じて調整することとなる。

この後、糸長センター長より、今年度前期における学生の成績分布や単位取得状況について説明があった。科目別の成績分布のバラツキや学部別の単位取得状況の差異などについて具体的な説明があった。

最後に、新しい共通教育全般について、参加者との質疑応答を行った。主な意見等は以下の通りである。



Q1 共通教育においてクォーター制を新しく導入したが、今後、学部等に広めていく見通しなどがあるのか。

A1 他大学においても、週2回によるクォーター制導入を検討する動きがある。学生の留学などにおいて都合がよい面があるが、全学一律に導入するという事は難しく、学部改組などを契機に検討・導入する方向性が好ましいと考えている。

Q2 新しい共通教育を導入したことによるメリットはあるのか。15週2単位を8週1単位としたことで、試験実施などを含めて教職員の負担が増えているように感じるが、いかがか。

A2 授業担当教員へのアンケート調査や学生へのアンケート調査を通して、新しい共通教育の効果を検証したいと考えている。

8週1単位とすることで、定期試験を行わずに、きめ細かく課題提出をさせるケースが増えている。課題提出率の増加が、学生の授業外学習時間の増加に繋がることを期待している。

また、高大接続の観点から、高校までの受動的学修から能動的学修へと繋がることにも期待している。

## (8) 共同獣医学部・連合獣医学研究科

日程：平成 25 年 11 月 13 日（水）14:30～15:00

場所：農学部大会議室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者：23 名

内容

「教育改善 FD 研修会開催にあたっての事前調査票」において共同獣医学部から回答があった事項に対して、糸長センター長からコメントを行う形で実施された。主要な質問とそれに対する回答は以下の通りである。

### 1. 自学部生を担当する機会が少なくなった。

【糸長センター長からのコメント】

今回の共通教育のカリキュラム改革上、ご指摘の件はどうしようもない部分である。クラス選択を利用するしかないが、現在、新カリキュラムと旧カリキュラムが同時に運用されている状況では時間割編成上、難しい状況にある。旧カリキュラムがなくなれば、改善したカリキュラムを導入することは可能である。

### 2. クラスサイズが大きくなり、学生の主体的な学びを促進させるアクティブ・ラーニングの手法が実施しにくくなった。

【糸長センター長からのコメント】

工学部から提供されている共通教育の授業の内、他学部生が主に受講している授業では、担当者が工夫して、調べ学習やピア学習などを導入して教育成果を上げている事例が報告されている。確かに受講生が多く、さらに他学部生を教える機会が増えてきているが、従来の「教え込む」教育（知識注入型教育）から、新しい共通教育では、「何を教えるかではなく、何ができるようになるか」、受動的学修から能動的学修に転換し、教え過ぎずに考えさせる機会を与えることが重要なポイントである。また、受講者の所属学部などを考慮して、クラスごとに到達目標を適度に調整しながら授業を行う工夫が必要であろう。

この後、糸長センター長より、今年度前期（クォータ 1・2）終了時点における新しい共通教育を巡る課題が明らかにされた。一つ目は、クォータ 2 からクラス指定を行ったが、指定されたクラスを間違い、そのまま最後まで受講していた学生がいたこと。その学生の当該科目の単位は認定しなかったことが報告された。二つ目は受講生の履修上の不正が一部目立ってきたことが報告された。例えば、出席登録を他人に任せたり、他人のレポートをほとんど真似たり、組織的にレポートを作成したりする不正が発生している。三つ目は新しい教育ニーズに対応する必要があること。具体的には、現在、課外授業として開講している「TOEIC

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	17.4%
良かった	7	30.4%
どちらとも言えない	7	30.4%
あまり良くなかった	3	13.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	2	8.7%
合計	23	100.0%



スコアアップ大作戦」を来年度から単位化すること。知財関係の科目や初習外国語などの科目を共通教育の外枠で開講し、大学教育センターが責任部局として運営していくなどの説明があった。

## (9) 人文学部、人文科学研究科、東アジア研究科（人文系）

日程：平成 25 年 11 月 20 日（水） 14:30～15:00

場所：人文・理学部大会議室

講師：糸長雅弘（大学教育センター長）

小川 勤（大学教育センター副センター長）

参加者：46 名

内容

教育改善 FD 研修会開催にあたって、会場で直接、人文学部からの質問に回答する質疑応答形式で研修が行われた。主要な質疑内容は以下の通りである。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.2%
良かった	6	25.0%
どちらとも言えない	9	37.5%
あまり良くなかった	3	12.5%
良くなかった	5	20.8%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

### 1. クォータ（8回）の授業では十分教育内容を教えられない。

【糸長センター長からの回答】

今回の共通教育のカリキュラム改革では、クォータで授業を行う際には基本的には何を教えるのではなく、何ができるようになったのかを中心に授業設計をしてほしいと各学部の先生方のお願している。現在の学生は中学・高校以来受動的な学びに慣れていて、自分自身が能動的に学ぶ姿勢が十分身につけていない。新しい共通教育では、「山口と世界」のような科目で能動的な学習を促す授業を推進している。



### 2. 人文学部でも現在新しいカリキュラムを導入しようとしているが、その中でPBL型の授業を取り入れるような方向で検討しているが、「山口と世界」ではどのような教育を行い、学生はどのような活動を行っているのか？

【糸長センター長・小川大学教育センター教授からの回答・コメント】

山口県が取り組んでいる「やまぐち未来プロジェクト」などの内容を紹介し、これから山口では将来どのようなプロジェクトに取り組んでいったらよいのかを学生たちに考えさせ、考えた結果をポストイットに記入させ、さらにその結果をグルーピングして、最終的には提案するという教育内容で授業を展開している。協議した内容については、プレゼンを行い、さらに提案文書を作成させている。

小川教授からは、自らが所属する「学部学科の歴史を調査する」、「高校教育の問題点と解決策を考える」、「大学の学ぶ意義を考える」などのテーマについて個人およびグループで考え、その考察結果を発表させる。成績評価はグループ 60%、個人 40%の割合で評価を行っている実態が明らかにされた。

この回答に対して人文学部からは、「山口と世界」の授業では学生たちに能動的な学習を行わせることが重要であることがよく理解できたという意見があった。



### 3. 今の共通教育システムは共通性を重視するがために、逆に学生の自主的な履修選択の自由をシステム的に阻害しているのではないか？

【糸長センター長からの回答】

このような意見はどの学部からも指摘を受けるが、今までの学生の科目選択が自分の将来像やキャリアを意識して科目履修していたのかどうかは疑問である。従来の共通教育のカリキュラムでも必修科目の部分は、クラス指定で実施させている。また、一般教養部分はカフェテリア（自由選択）方式という形で行われてきた。しかし、果たして旧来の履修方法を行った結果、どのような教育効果があったのかを統計データをあまりないため挙証することは難しい状況である。今回のカリキュラム改革の背景に確かに大学経営の効率性を求めていることは否定できない。しかし、すでに定食メニュー方式の共通教育カリキュラムが導入されているので今後は中身をどのように改善するのかを我々は考えざるを得ない。この回答に関しては、人文学部からは基礎ゼミで従来の新入生たちに意見を聞くと、自分で授業を選択できることに感動する学生たちも多くいたという事実を理解して欲しいという意見があった。



### 4. 共通教育から初習外国語が外れ、クォータ中心の授業が行われているが、果たして他大学でこのようなやり方で成功したところはあるのか？ 限りなく専門学校的な大学になってしまったのではないか？ また、クォータでは事務が煩雑になり、休講しにくくなるのではないか？

【糸長センター長からの回答・コメント】

初年次教育の授業では学力を伸ばすということよりも、何をできるようになったのかという観点から授業設計を実施して欲しい。初習外国語に関しては、アジア世界重視の日本の立場からは確かに中国語やハングルなどのアジア系の言語学習を共通教育から外したことは問題があると感じている。そこで、現在、新しい共通教育の作業部会の中では「教養発展系列」という分野を新しい共通教育の外枠で新たに設置したいと考えている。この系列分野の中で、初習外国語やアドバンスな英語教育を実施する方向で検討が進んでいる。

クォータ制を導入した大学ではうまく機能していない他大学の事例をよく聞いている。しかし、山口大学では共通教育の一般教養系列に奇数単位と偶数単位を提供する学部が混在しているため時間割編成上、クォータにせざるを得なかったという事情があることを理解して欲しい。休講に関しては、クォータだからといって、休講してはいけないとは考えていない。しかし、休講した分は事前にレポート課題などを用意して、次回の授業で提出させるなどの方法を取って、単位の実質化を図って欲しい。実際、新しい共通教育が導入されるようになって、従来の共通教育よりレポート課題の提出の機会が増え、自習時間が増えてきているという授業評価データの結果があり、今後はこの点も大学教育センターで分析して実態を把握し、カリキュラム改善に活かしていきたい。

最後に、岩部前大学教育センター長（人文学部教授）より、今回の共通教育カリキュラムの改善の趣旨とメリットなどについて発言があった。

研修会後のアンケート（自由記述）からは、「共通教育への理解が深まった」という意見の一方、「授業改善のヒントなども聞けてよかったが、批判的な質問や意見が今後、どのようにカリキュラム改善に活かされるのかが聞けなかった」、「異なる立場、背景、理想を持った者同士の対話の場としては、不十分感はあるがよいよりはよいし、継続的な対話や意見交換が必要と感じた」という今後の共通教育の改善を巡る意見交換をさらに期待する意見があった。

## 第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

### 1. FD活動を実施した授業科目別部会

#### (1) 情報処理部会（部会長：大学教育センター 小川 勤）

平成25年度は、部会としては、平成24年度のように活発にFD活動は行われなかった。この原因としては、「情報セキュリティ・モラル」の教材改訂、特に、知的財産教育を拡大・充実させるために、シラバスの見直しや統一教材の研究開発作業が一段落したためである。

授業外学習時間の確保に関しては、提供された授業外学習時間の実態を見ると、昨年度とあまり変化していない。情報教育関係は30分未満が多く、かなり少ないことは変化していない。情報スキルの向上や知識理解の定着を図るためには課題を毎回出すような授業形態にする必要があり、今後部会でさらに検討する必要がある。

適正な成績評価に関しては、成績分布共有システムを活用して授業の達成度を各自が検証することに関しては、平成25年度もあまり進展しなかった。平成26年度には情報セキュリティ・モラルを中心に部会全体で取り組みたいと考えている

試験の監督体制については、情報処理部会では授業中に課題を提出されるケースが多く、定期試験を実施している担当者は少ないものと考えられる。

#### (2) 英語部会（部会長：人文学部 岩部 浩三）

授業外学習時間の確保は、英語部会として長年意識的に取り組んできた課題であり、学生授業評価のデータから見ても、授業1回あたり平均2時間程度と考えられ、3時間以上の学生も20%から30%を超えており、十分な成果を上げてきている。その根幹にはオンライン学習システムの活用があるが、部会活動の概要でも述べたように、その継続性やシステム上の問題が浮上しており、それを解決することが急務となっている。

#### (3) 物理学部会（部会長：理工学研究科（理学） 笠野 裕修）

- ① 「物理寺子屋」（学生に対する物理学の学習相談室）の開設
  - ・数年来続けている学習相談室を前期・後期とも開設。
  - 本年度は4年生が相談員となり、授業内容や演習問題について学生の質問に対応。
- ② 後期開講の「物理学実験B」（医学部医学科対象）において、例年はQ3とQ4で合同でガイダンスを実施していたが、化学部会と相談の上、Q3とQ4を分けて個別にガイダンスを実施した。また、ガイダンス時に模擬レポートの作成練習（工学部生対象の「物理学実験B」では既に実施中）を取り入れ、実際的なレポートの書き方について指導を行った。
- ③ 学生授業評価結果の整理と分析
  - ・物理学分科会の授業科目について、平成24年度の学生授業評価の整理。
- ④ 学生の授業外学習時間の確保
  - ・物理学実験では9割以上の学生が2時間以上の授業外学習（実験レポート）。（前年度に比べると微増していた）
  - ・講義科目の物理学I・IIの授業外学習時間を増やす対策は今後の検討課題。（前年度より微増しているが、2時間以上学習している学生は4割程度）

#### **(4) 化学部会 (部会長：理工学研究科 (理学) 山崎 鈴子)**

10月24日5～8時限の化学実験A(受講生：理学部生物・化学科)、化学実験B(医学部医学科)、10月25日5～8時限の化学実験B(工学部社会建設工学科、電気電子工学科、医学部保健学科)の授業公開(ピアレビュー)を実施した。事前に、各学部世話人を通じて、部会員全員に参加を呼び掛けた。見学に来られた教員には、問題点・改善すべき点などに関する意見を求め、また受講生にもアンケートをとった。それらの結果をもとに、化学実験における改善すべき点を明らかにした。

前後期はじめの実験オリエンテーションにおいて、不適切な服装で実験することの危険性などを含めた安全教育を行い、「保護眼鏡はH25年度4月から実験時に着用することを義務づけており、化学実験室の各自の机に備えられているが、生協等で購入することもできる。なお、2年以降の専門課程においても実験で保護眼鏡を必要とする学科もあり、その場合には、1年時から自分用の保護眼鏡を購入しておくのも望ましい」旨、指導を行った。

なお、学生アンケートには、実験レポート作成のための参考書の充実への要望のほか、他の曜日の受講学生と同じ器具を使うことによる器具の汚れについての不満などがあり、異なる曜日の担当教員間で連携し、器具洗浄に関する徹底した指導が必要であることが分かった。また、誰がTA学生なのか分からない、という指摘があったので、今後は腕章などをつけてもらうことにした。

#### **(5) 地球科学部会 (部会長：理工学研究科 (理学) 今岡 照喜)**

共通教育科目「地球科学」を実施する地球科学の新任教員に対して、安全マニュアルを説明した。

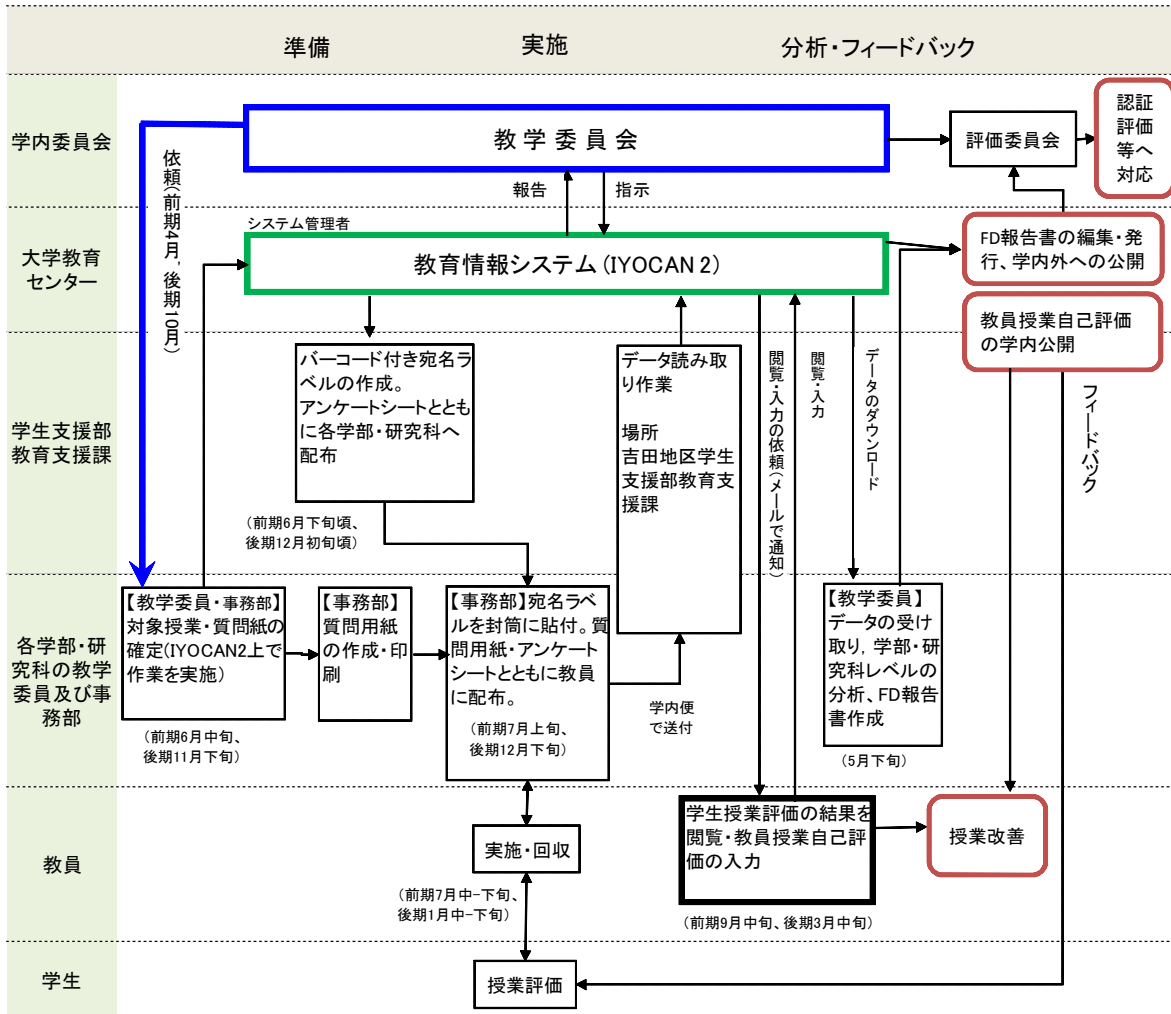
分科会メンバーの多くが理学部に属しているので、部会としての独自FDは行わず、理学部での地球科学関連講義のピアレビューへの参加を勧めた。本年は、地球圏システム科学科専門科目、野外実習の講義を対象に、11月にピアレビューを実施した。

# 第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

## 第1節 実施方法・実施状況

### (1) 実施方法

#### 1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of Your Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

● 医学部医学科 医学教育総合電子システム

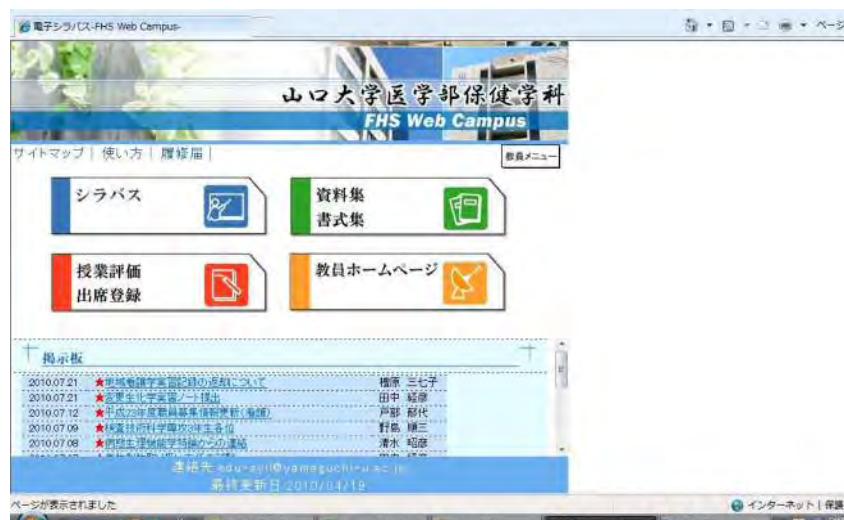




### 3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

#### ● 医学部保健学科 授業支援システム



## (2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

### （３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

#### 全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

### （４）実施対象授業

#### 1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

#### 学生による授業評価実施要項（H17ー）

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が 5 名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

## 2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

### ●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

### ●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会 (平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

## 大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている (平成 17 年度第 10 回 FD 委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

## (5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

## (6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

### ●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot shows a web browser window titled "山口大学授業評価システム IYOCAN2". The page displays a list of course evaluations with the following details:

- 1002329001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**  
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4～5の指数を得るためには、毎回時間以上かかるような宿題を課さなければならぬと思います。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「90分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「90分～50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**  
「新聞を読む習慣」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**  
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急遽代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**  
ディスカッションが特定の学生に偏る。予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

At the bottom of the page, a message says "ページが表示されました" (Page displayed).



## 第2節 授業評価の結果について(全学)

### (1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2013年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2014年10月15日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2007年度以降の経年変化)として掲載した。

2013年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は115,335人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは医学部医学科(98.8%)であり、続いて高かったのは医学部保健学科(97.5%)、理学部(93.2%)であった。全体的にみて昨年度より減少傾向となった。

### (2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率が最も高かったのは医学部保健学科(97.5%)であり、続いて医学部医学科(92.0%)が高かった。全体的にみて昨年度より減少傾向となった。

2013年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2014年10月15日 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価(2005年度)	学生授業評価(2006年度)	学生授業評価(2007年度)	学生授業評価(2008年度)	学生授業評価(2009年度)	学生授業評価(2010年度)	学生授業評価(2011年度)	学生授業評価(2012年度)	学生授業評価(2013年度)	対象授業
I Y O C A N 2	共通教育	89.1%	84.2%	94.4%	93.6%	90.2%	89.5%	91.5%	91.8%	90.8%	全て
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	83.4%	81.0%	87.9%	89.3%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	84.4%	87.0%	87.3%	82.1%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	88.0%	82.2%	86.4%	83.3%	卒業論文演習、演習I・IIを除く
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	98.2%	97.6%	96.6%	93.2%	特別研究、集中講義、一部の演習等を除く
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	87.6%	85.7%	89.7%	85.2%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く
	農学部(生物系)	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%	91.1%	94.7%	95.9%	93.0%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く
	87.2%								88.6%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く	
	農学部(獣医系)										
共同獣医学部									100.0%	92.0%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	97.5%	98.8%	98.8%	授業評価の必要なものに限定
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	85.0%	91.5%	97.5%	

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率(2007年度)	教員授業自己評価入力率(2008年度)	教員授業自己評価入力率(2009年度)	教員授業自己評価入力率(2010年度)	教員授業自己評価入力率(2011年度)	教員授業自己評価入力率(2012年度)	教員授業自己評価入力率(2013年度)	対象授業
I Y O C A N 2	39.1%	43.6%	34.4%	36.5%	40.1%	47.0%	32.1%	全て
	49.7%	68.8%	48.5%	50.9%	56.1%	51.1%	37.6%	学生授業評価と同じ
	34.1%	47.0%	52.1%	54.2%	48.7%	54.5%	43.6%	学生授業評価と同じ
	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	32.4%	26.8%	19.3%	学生授業評価と同じ
	57.3%	64.9%	67.5%	62.0%	72.4%	61.8%	42.1%	学生授業評価と同じ
	35.1%	36.7%	21.3%	34.3%	38.5%	25.2%	21.2%	学生授業評価と同じ
	50.6%	66.2%	54.8%	65.3%	79.1%	78.1%	54.7%	学生授業評価と同じ
					78.9%	69.2%	37.1%	学生授業評価と同じ
						100.0%	60.0%	学生授業評価と同じ
独自	-	-	83.3%	100.0%	81.6%	100.0%	92.0%	全て
独自	-	-	-	-	40.0%	76.0%	97.5%	-

<大学院>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価(2005年度)	学生授業評価(2006年度)	学生授業評価(2007年度)	学生授業評価(2008年度)	学生授業評価(2009年度)	学生授業評価(2010年度)	学生授業評価(2011年度)	学生授業評価(2012年度)	学生授業評価(2013年度)	対象授業
I Y O C A N 2	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	84.7%	69.2%	81.6%	81.6%	学外特別演習、特別講義、演習、集中等を除く
	技術経営研究科	-	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	74.2%	全て
	医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	51.4%	64.4%	54.7%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	-	-	-	88.5%	73.1%	76.2%	71.5%	69.6%	64.7%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	-	-	-	54.3%	48.7%	39.1%	47.4%	32.9%	42.9%	演習、セミナーを除く
独自	人文科学研究科	-	-	-	24.1%	35.3%	36.8%	60.0%	53.3%	50.0%	前期の授業主眼に對する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。後期は実施しない。
独自	農学研究科	-	-	-	28.6%	54.6%	41.2%	36.4%	37.5%	32.0%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率(2007年度)	教員授業自己評価入力率(2008年度)	教員授業自己評価入力率(2009年度)	教員授業自己評価入力率(2010年度)	教員授業自己評価入力率(2011年度)	教員授業自己評価入力率(2012年度)	教員授業自己評価入力率(2013年度)	対象授業
I Y O C A N 2	36.9%	33.1%	25.3%	29.3%	39.7%	35.1%	27.9%	全て(ただし2011年度より学生授業評価と同じ)
	56.3%	29.4%	15.2%	67.6%	53.1%	40.0%	77.4%	"
	53.5%	28.8%	26.4%	31.5%	33.6%	30.0%	28.4%	"
	22.4%	38.0%	39.3%	31.8%	48.3%	52.7%	39.0%	"
	36.5%	58.1%	49.2%	47.8%	38.5%	35.4%	19.5%	"
	27.3%	38.0%	22.7%	48.5%	46.1%	41.1%	35.7%	"
	48.8%	70.8%	42.2%	46.5%	52.4%	90.9%	47.1%	"

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている。

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数									
	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2009)	28,988			2,147	9,512				40,647
共通教育(2010)	27,715			2,328	9,309			238	39,590
共通教育(2011)	27,295			2,544	8,899			52	38,790
共通教育(2012)	28,685			2,004	9,047				39,736
共通教育(2013)	44,296			2,263	6,883				53,442
人文(2009)	4,852	564	1,212						6,628
人文(2010)	4,301	657	1,132						6,090
人文(2011)	4,287	679	1,104						6,070
人文(2012)	5,084	727	1,293						7,104
人文(2013)	5,105	603	1,136				906		7,750
教育学部(2009)	7,404		859	599			2,726		11,588
教育学部(2010)	7,118		710	562			2,744	694	11,828
教育学部(2011)	8,064		791	675			2,788	86	12,404
教育学部(2012)	7,303		774	653			2,962	560	12,252
教育学部(2013)	7,313		759	623			2,872	113	11,680
経済(2009)	9,316								9,316
経済(2010)	10,100								10,100
経済(2011)	8,328								8,328
経済(2012)	8,530								8,530
経済(2013)	8,791								8,791
理(2009)	4,457		389	383					5,229
理(2010)	4,753		311	440					5,504
理(2011)	4,700		289	467					5,456
理(2012)	4,656		321	488				234	5,699
理(2013)	4,797		275	453				476	6,001
工(2009)	14,667		1,643	1,981					18,291
工(2010)	15,083		1,596	2,063					18,742
工(2011)	14,558		1,673	2,167					18,398
工(2012)	14,477		1,793	2,073					18,343
工(2013)	14,706		1,639	2,096				7	18,448
農(2009)	3,198		204	757					4,159
農(2010)	3,711		98	852					4,661
農(2011)	4,006			1,016					5,022
農(2012)	3,769			767					4,536
農(2013)	3,617			933					4,550
共同獣医(2012)	62						62		
共同獣医(2013)	479			140					619
大学院・理工(2009)	2,273		119	11					2,403
大学院・理工(2010)	3,372		163	9					3,544
大学院・理工(2011)	2,859		184	3					3,046
大学院・理工(2012)	2,859						2,859		
大学院・理工(2013)	2,672						2,672		
大学院・技術経営(2009)								356	356
大学院・技術経営(2010)								325	325
大学院・技術経営(2011)								329	329
大学院・技術経営(2012)								333	333
大学院・技術経営(2013)								325	325
大学院・医学系(2009)	350		24						374
大学院・医学系(2010)	277		89						366
大学院・医学系(2011)	199		123					18	340
大学院・医学系(2012)						332	332		
大学院・医学系(2013)						311	311		
大学院・教育学(2009)	247		104	26			128		505
大学院・教育学(2010)	137		110	4			183	8	442
大学院・教育学(2011)	132		78	1			146		357
大学院・教育学(2012)	167		83	3			155		408
大学院・教育学(2013)	220		105	2			152		479
大学院・経済学(2009)	146		4						150
大学院・経済学(2010)						138	138		
大学院・経済学(2011)						123	123		
大学院・経済学(2012)						122	122		
大学院・経済学(2013)						164	164		
合計(2009)	72,882	564	4,307	5,867	9,512		2,726		95,858
合計(2010)	75,797	657	4,098	6,282	9,309		2,872	1,288	100,303
合計(2011)	75,024	679	4,219	6,882	8,899		2,971	609	99,283
合計(2012)	75,694	727	4,566	5,989	9,047		3,108	1,264	100,395
合計(2013)	91,713	603	3,892	6,371	6,883		3,933	1,383	115,335

### (3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

#### (1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

**Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。**

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

全体平均をみると、学部段階では2013年度の平均値データは2012年度の平均値をほぼすべての学部で上回っており、全体的な授業外学習時間は着実に伸びているとことが確認された。理学部及び工学部で比較的高い数値を示しているほか、カリキュラム改革を行った共通教育においても上昇が見られた。

なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

#### (2) 共通質問項目2「学習目標達成」

**Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？**

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が現状維持又は上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしないうのでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影

響を及ぼしているとするれば喜ばしいことである。

### (3) 共通質問項目3「理解」

**Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？**

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に続き、4.0を超えた。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

### (4) 共通質問項目4「満足」

**Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？**

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。学部段階では、すべての学部で高い数値を示している。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

### (5) 共通質問項目5「出席」

**Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？**（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

- |                 |                   |                  |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80~90%（12~13回） | 3. 60~80%（9~11回） |
| 4. 40~60%（6~8回） | 5. 40%未満（6回未満）    |                  |

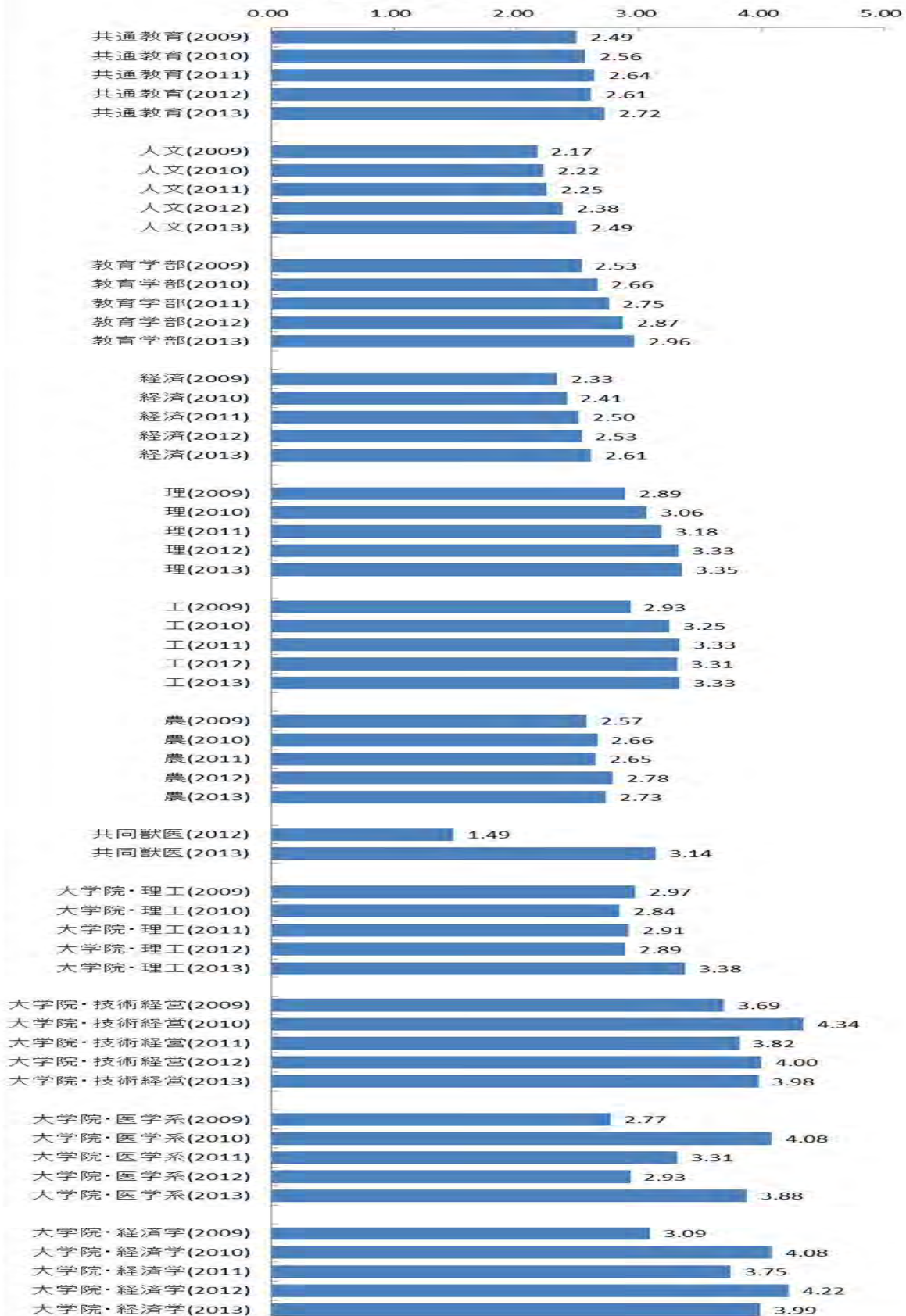
共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5前後の高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。



< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2009)	2.29			3.07	2.97				2.49
共通教育(2010)	2.34			3.44	3.01			2.10	2.56
共通教育(2011)	2.45			3.38	3.01			1.46	2.64
共通教育(2012)	2.44			2.97	3.06				2.61
共通教育(2013)	2.47			3.67	4.02				2.72
人文(2009)	1.80	3.26	3.13						2.17
人文(2010)	1.88	3.11	2.98						2.22
人文(2011)	1.92	2.86	3.16						2.25
人文(2012)	2.12	3.09	3.02						2.38
人文(2013)	2.14	3.20	3.26				2.99		2.49
教育学部(2009)	2.32		3.25	3.31			2.68		2.53
教育学部(2010)	2.44		3.49	3.46			2.93	2.22	2.66
教育学部(2011)	2.57		3.15	3.44			3.02	2.34	2.75
教育学部(2012)	2.70		3.35	3.63			3.06	2.53	2.87
教育学部(2013)	2.76		3.33	3.66			3.20	3.48	2.96
経済(2009)	2.33						2.33		
経済(2010)	2.41						2.41		
経済(2011)	2.50						2.50		
経済(2012)	2.53						2.53		
経済(2013)	2.61						2.61		
理(2009)	2.79		3.17	3.84					2.89
理(2010)	2.97		3.59	3.78					3.06
理(2011)	3.09		3.53	3.88					3.18
理(2012)	3.22		3.67	4.09				3.42	3.33
理(2013)	3.26		3.91	4.04				3.29	3.35
工(2009)	2.76		3.31	3.91					2.93
工(2010)	3.11		3.56	4.04					3.25
工(2011)	3.20		3.57	4.67					3.33
工(2012)	3.17		3.61	4.67					3.31
工(2013)	3.22		3.56	4.67				4.67	3.33
農(2009)	2.44		3.31	2.92					2.57
農(2010)	2.58		2.74	3.02					2.66
農(2011)	2.54			3.07					2.65
農(2012)	2.70			3.20					2.78
農(2013)	2.70			2.82					2.73
共同獣医(2012)	1.49						1.49		
共同獣医(2013)	3.10			3.27					3.14
大学院・理工(2009)	2.95		3.39	2.45					2.97
大学院・理工(2010)	2.80		3.57	2.78					2.84
大学院・理工(2011)	2.84		3.98	4.00					2.91
大学院・理工(2012)	2.89						2.89		
大学院・理工(2013)	3.38						3.38		
大学院・技術経営(2009)								3.69	3.69
大学院・技術経営(2010)								4.34	4.34
大学院・技術経営(2011)								3.82	3.82
大学院・技術経営(2012)								4.00	4.00
大学院・技術経営(2013)								3.98	3.98
大学院・医学系(2009)	2.67		4.13						2.77
大学院・医学系(2010)	4.12		3.70						4.08
大学院・医学系(2011)	3.37		3.16					3.78	3.31
大学院・医学系(2012)						2.93	2.93		
大学院・医学系(2013)						3.88	3.88		
大学院・経済学(2009)	3.09						3.09		
大学院・経済学(2010)						4.08	4.08		
大学院・経済学(2011)						3.75	3.75		
大学院・経済学(2012)						4.22	4.22		
大学院・経済学(2013)						3.99	3.99		

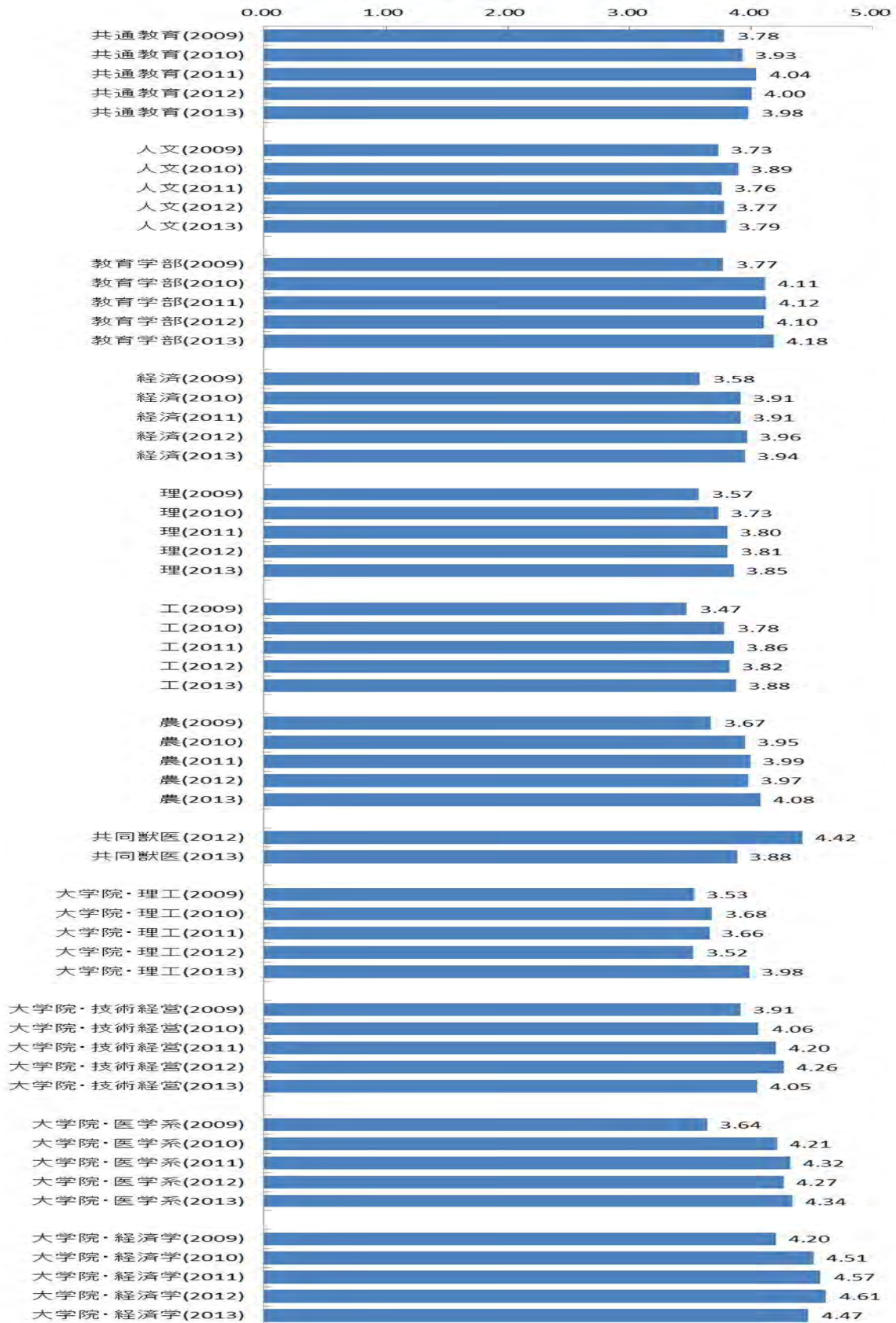
## 授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2009)	3.73			4.13	3.87				3.78
共通教育(2010)	3.88			4.25	4.02			4.20	3.93
共通教育(2011)	3.98			4.52	4.10			3.37	4.04
共通教育(2012)	3.97			4.40	4.02				4.00
共通教育(2013)	3.98			3.89	4.03				3.98
人文(2009)	3.66	3.91	3.93						3.73
人文(2010)	3.82	4.00	4.08						3.89
人文(2011)	3.66	3.89	4.07						3.76
人文(2012)	3.70	3.96	3.97						3.77
人文(2013)	3.72	3.89	4.02				3.84		3.79
教育学部(2009)	3.70		3.97	4.05			3.82		3.77
教育学部(2010)	4.04		4.28	4.17			4.16	4.33	4.11
教育学部(2011)	4.07		4.29	4.31			4.17	4.29	4.12
教育学部(2012)	4.06		4.12	4.28			4.15	4.27	4.10
教育学部(2013)	4.15		4.22	4.37			4.19	4.32	4.18
経済(2009)	3.58						3.58		
経済(2010)	3.91						3.91		
経済(2011)	3.91						3.91		
経済(2012)	3.96						3.96		
経済(2013)	3.94						3.94		
理(2009)	3.53		3.71	3.95					3.57
理(2010)	3.70		3.99	3.97					3.73
理(2011)	3.78		3.91	3.98					3.80
理(2012)	3.76		3.96	4.05				3.93	3.81
理(2013)	3.82		4.10	4.17				3.73	3.85
工(2009)	3.44		3.60	3.62					3.47
工(2010)	3.76		3.84	3.94					3.78
工(2011)	3.83		3.91	3.99					3.86
工(2012)	3.78		3.92	4.00					3.82
工(2013)	3.85		3.93	4.03				3.86	3.88
農(2009)	3.63		3.90	3.80					3.67
農(2010)	3.91		3.92	4.15					3.95
農(2011)	3.95			4.17					3.99
農(2012)	3.99			3.90					3.97
農(2013)	4.08			4.07					4.08
共同獣医(2012)	4.42						4.42		
共同獣医(2013)	3.81			4.12					3.88
大学院・理工(2009)	3.52		3.78	3.36					3.53
大学院・理工(2010)	3.68		3.65	4.00					3.68
大学院・理工(2011)	3.66		3.63	4.33					3.66
大学院・理工(2012)	3.52						3.52		
大学院・理工(2013)	3.98						3.98		
大学院・技術経営(2009)								3.91	3.91
大学院・技術経営(2010)								4.06	4.06
大学院・技術経営(2011)								4.20	4.20
大学院・技術経営(2012)								4.26	4.26
大学院・技術経営(2013)								4.05	4.05
大学院・医学系(2009)	3.62		3.96						3.64
大学院・医学系(2010)	4.26		4.13						4.21
大学院・医学系(2011)	4.31		4.36					4.17	4.32
大学院・医学系(2012)						4.27	4.27		
大学院・医学系(2013)						4.34	4.34		
大学院・経済学(2009)	4.20						4.20		
大学院・経済学(2010)						4.51	4.51		
大学院・経済学(2011)						4.57	4.57		
大学院・経済学(2012)						4.61	4.61		
大学院・経済学(2013)						4.47	4.47		

## 学習目標達成(全体平均) — 経年変化 —

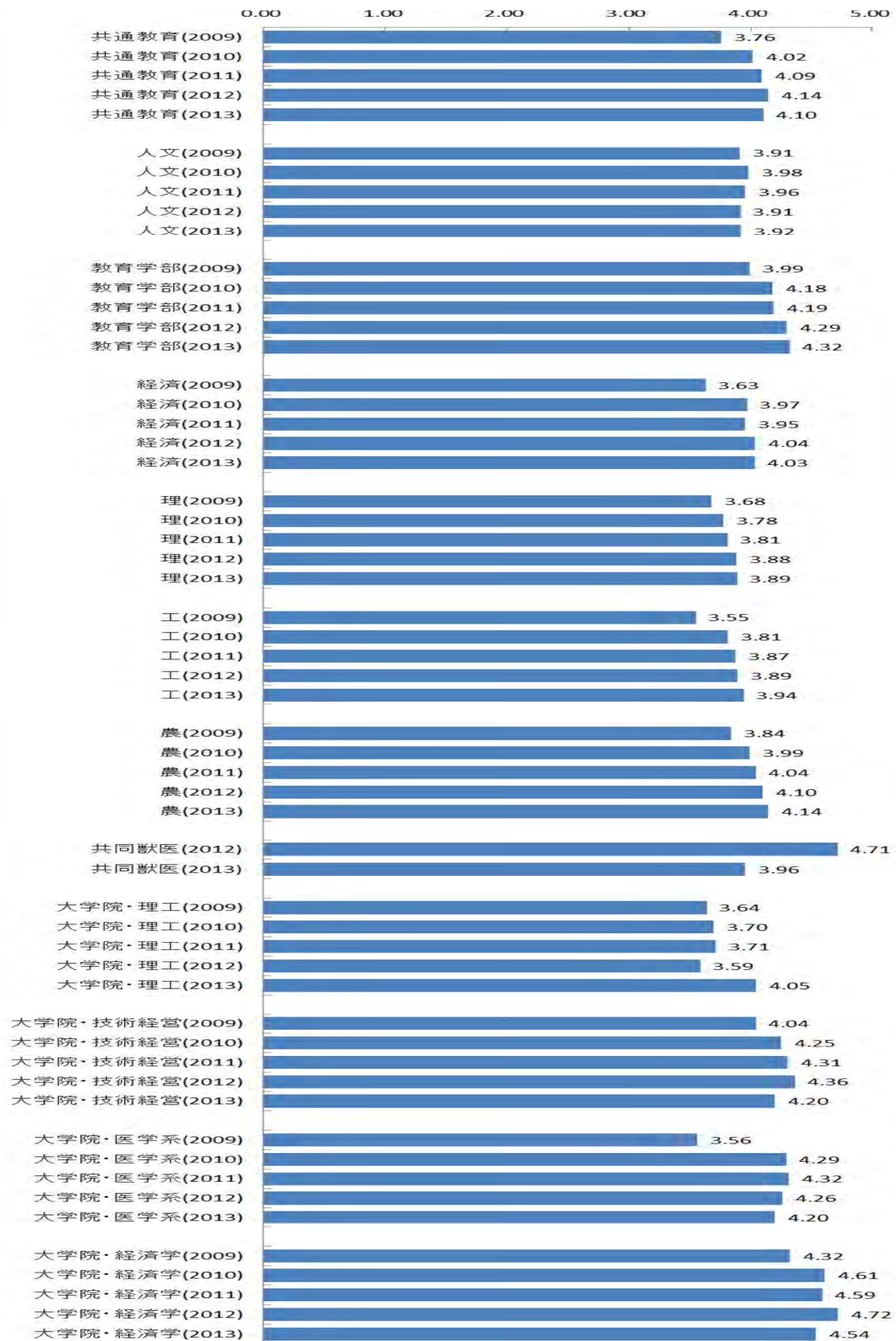


< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2009)	3.89			2.14	4.12				3.76
共通教育(2010)	3.95			4.32	4.16			4.35	4.02
共通教育(2011)	4.03			4.36	4.23			3.25	4.09
共通教育(2012)	4.08			4.56	4.24				4.14
共通教育(2013)	4.07			4.47	4.20				4.10
人文(2009)	3.84	4.07	4.14						3.91
人文(2010)	3.90	4.11	4.21						3.98
人文(2011)	3.85	4.81	3.85						3.96
人文(2012)	3.84	4.08	4.11						3.91
人文(2013)	3.89	4.05	4.17				3.71		3.92
教育学部(2009)	3.94		4.21	4.26			4.01		3.99
教育学部(2010)	4.12		4.40	4.25			4.21	4.39	4.18
教育学部(2011)	4.14		4.36	4.40			4.22	4.39	4.19
教育学部(2012)	4.25		4.39	4.41			4.30	4.54	4.29
教育学部(2013)	4.30		4.42	4.54			4.29	4.37	4.32
経済(2009)	3.63						3.63		
経済(2010)	3.97						3.97		
経済(2011)	3.95						3.95		
経済(2012)	4.04						4.04		
経済(2013)	4.03						4.03		
理(2009)	3.63		3.89	4.05					3.68
理(2010)	3.74		4.09	4.08					3.78
理(2011)	3.76		4.08	4.08					3.81
理(2012)	3.84		4.02	4.16				4.05	3.88
理(2013)	3.85		4.15	4.24				3.82	3.89
工(2009)	3.51		3.72	3.71					3.55
工(2010)	3.78		3.88	3.95					3.81
工(2011)	3.85		3.93	4.01					3.87
工(2012)	3.86		3.99	4.06					3.89
工(2013)	3.92		4.00	4.08				4.14	3.94
農(2009)	3.76		4.47	4.01					3.84
農(2010)	3.94		4.11	4.19					3.99
農(2011)	3.99			4.24					4.04
農(2012)	4.08			4.19					4.10
農(2013)	4.14			4.16					4.14
共同獣医(2012)	4.71						4.71		
共同獣医(2013)	3.87			4.25					3.96
大学院・理工(2009)	3.63		3.87	3.27					3.64
大学院・理工(2010)	3.70		3.65	3.56					3.70
大学院・理工(2011)	3.72		3.64	4.67					3.71
大学院・理工(2012)	3.59						3.59		
大学院・理工(2013)	4.05						4.05		
大学院・技術経営(2009)								4.04	4.04
大学院・技術経営(2010)								4.25	4.25
大学院・技術経営(2011)								4.31	4.31
大学院・技術経営(2012)								4.36	4.36
大学院・技術経営(2013)								4.20	4.20
大学院・医学系(2009)	3.75		2.17						3.56
大学院・医学系(2010)	4.37		4.15						4.29
大学院・医学系(2011)	4.30		4.35					4.22	4.32
大学院・医学系(2012)						4.26	4.26		
大学院・医学系(2013)						4.20	4.20		
大学院・経済学(2009)	4.32						4.32		
大学院・経済学(2010)						4.61	4.61		
大学院・経済学(2011)						4.59	4.59		
大学院・経済学(2012)						4.72	4.72		
大学院・経済学(2013)						4.54	4.54		



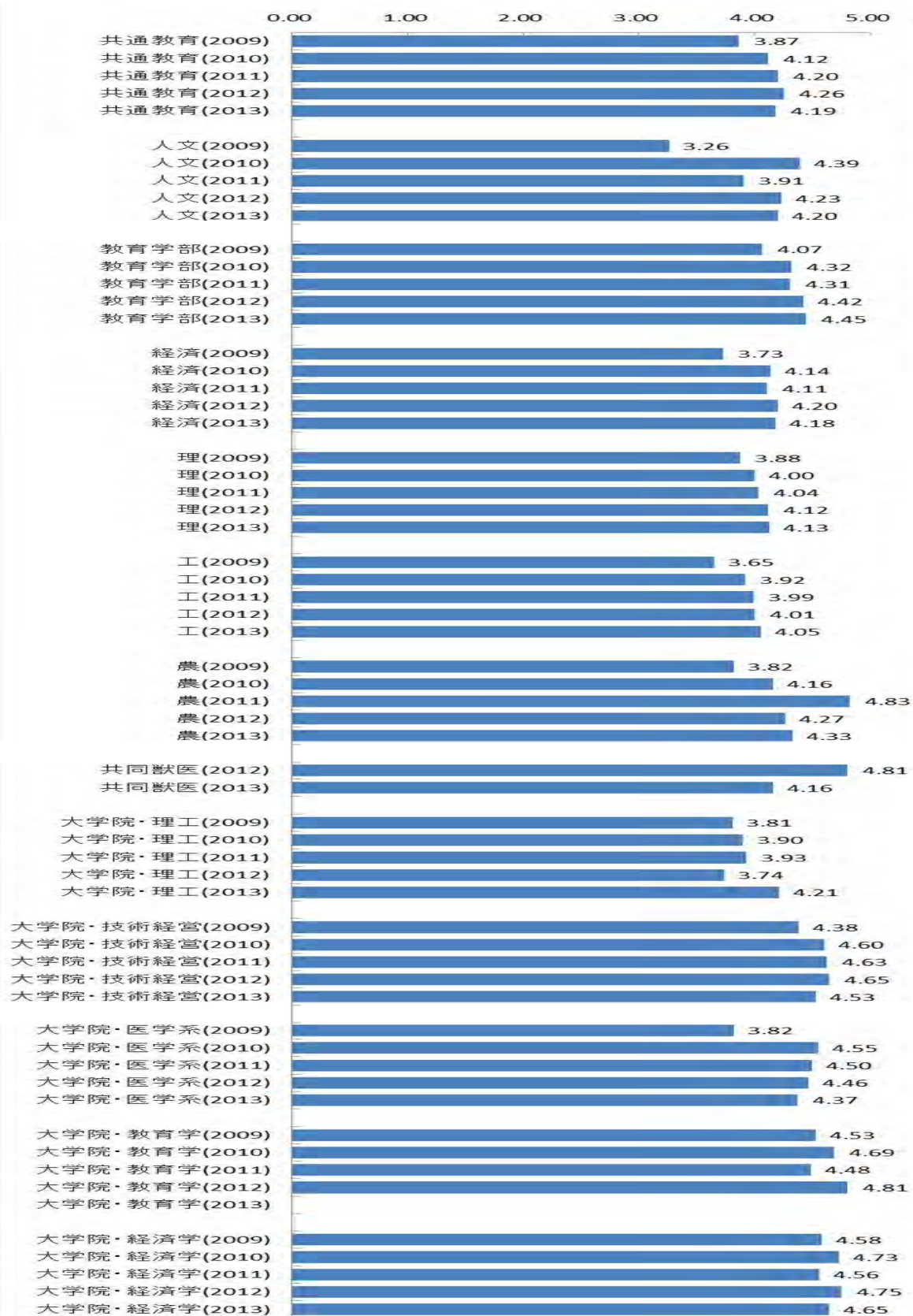
## 理解(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2009)	3.97			1.87	4.18				3.87
共通教育(2010)	4.05			4.32	4.28			4.49	4.12
共通教育(2011)	4.14			4.42	4.34			3.40	4.20
共通教育(2012)	4.20			4.64	4.36				4.26
共通教育(2013)	4.15			4.57	4.27				4.19
人文(2009)	4.05	2.23	2.16						3.26
人文(2010)	4.31	4.54	4.60						4.39
人文(2011)	4.03	4.32	3.20						3.91
人文(2012)	4.21	3.90	4.49						4.23
人文(2013)	4.25	4.52	4.56				3.24		4.20
教育学部(2009)	4.02		4.38	4.34			4.06		4.07
教育学部(2010)	4.26		4.62	4.35			4.35	4.52	4.32
教育学部(2011)	4.27		4.47	4.43			4.35	4.60	4.31
教育学部(2012)	4.37		4.55	4.54			4.44	4.70	4.42
教育学部(2013)	4.43		4.60	4.65			4.42	4.60	4.45
経済(2009)	3.73						3.73		
経済(2010)	4.14						4.14		
経済(2011)	4.11						4.11		
経済(2012)	4.20						4.20		
経済(2013)	4.18						4.18		
理(2009)	3.84		3.94	4.23					3.88
理(2010)	3.97		4.14	4.30					4.00
理(2011)	4.02		4.17	4.16					4.04
理(2012)	4.09		4.18	4.36				4.21	4.12
理(2013)	4.11		4.24	4.44				3.95	4.13
工(2009)	3.61		3.84	3.79					3.65
工(2010)	3.89		3.99	4.05					3.92
工(2011)	3.97		4.06	4.13					3.99
工(2012)	3.98		4.11	4.14					4.01
工(2013)	4.04		4.09	4.15				4.57	4.05
農(2009)	3.73		4.39	4.07					3.82
農(2010)	4.11		4.32	4.40					4.16
農(2011)	4.80			4.97					4.83
農(2012)	4.25			4.33					4.27
農(2013)	4.32			4.36					4.33
共同獣医(2012)	4.81						4.81		
共同獣医(2013)	4.06			4.50					4.16
大学院・理工(2009)	3.80		4.20	3.45					3.81
大学院・理工(2010)	3.91		3.79	3.56					3.90
大学院・理工(2011)	3.94		3.85	5.00					3.93
大学院・理工(2012)	3.74						3.74		
大学院・理工(2013)	4.21						4.21		
大学院・技術経営(2009)								4.38	4.38
大学院・技術経営(2010)								4.60	4.60
大学院・技術経営(2011)								4.63	4.63
大学院・技術経営(2012)								4.65	4.65
大学院・技術経営(2013)								4.53	4.53
大学院・医学系(2009)	4.05		2.08						3.82
大学院・医学系(2010)	4.60		4.46						4.55
大学院・医学系(2011)	4.52		4.43					4.72	4.50
大学院・医学系(2012)						4.46	4.46		
大学院・医学系(2013)						4.37	4.37		
大学院・教育学(2009)	4.46		4.79	4.31			4.50		4.53
大学院・教育学(2010)	4.76		4.76	4.75			4.58	4.88	4.69
大学院・教育学(2011)	4.55		4.37	5.00			4.48		4.48
大学院・教育学(2012)	4.76		4.93	5.00			4.79		4.81
大学院・教育学(2013)									
大学院・経済学(2009)	4.58						4.58		
大学院・経済学(2010)						4.73	4.73		
大学院・経済学(2011)						4.56	4.56		
大学院・経済学(2012)						4.75	4.75		
大学院・経済学(2013)						4.65	4.65		

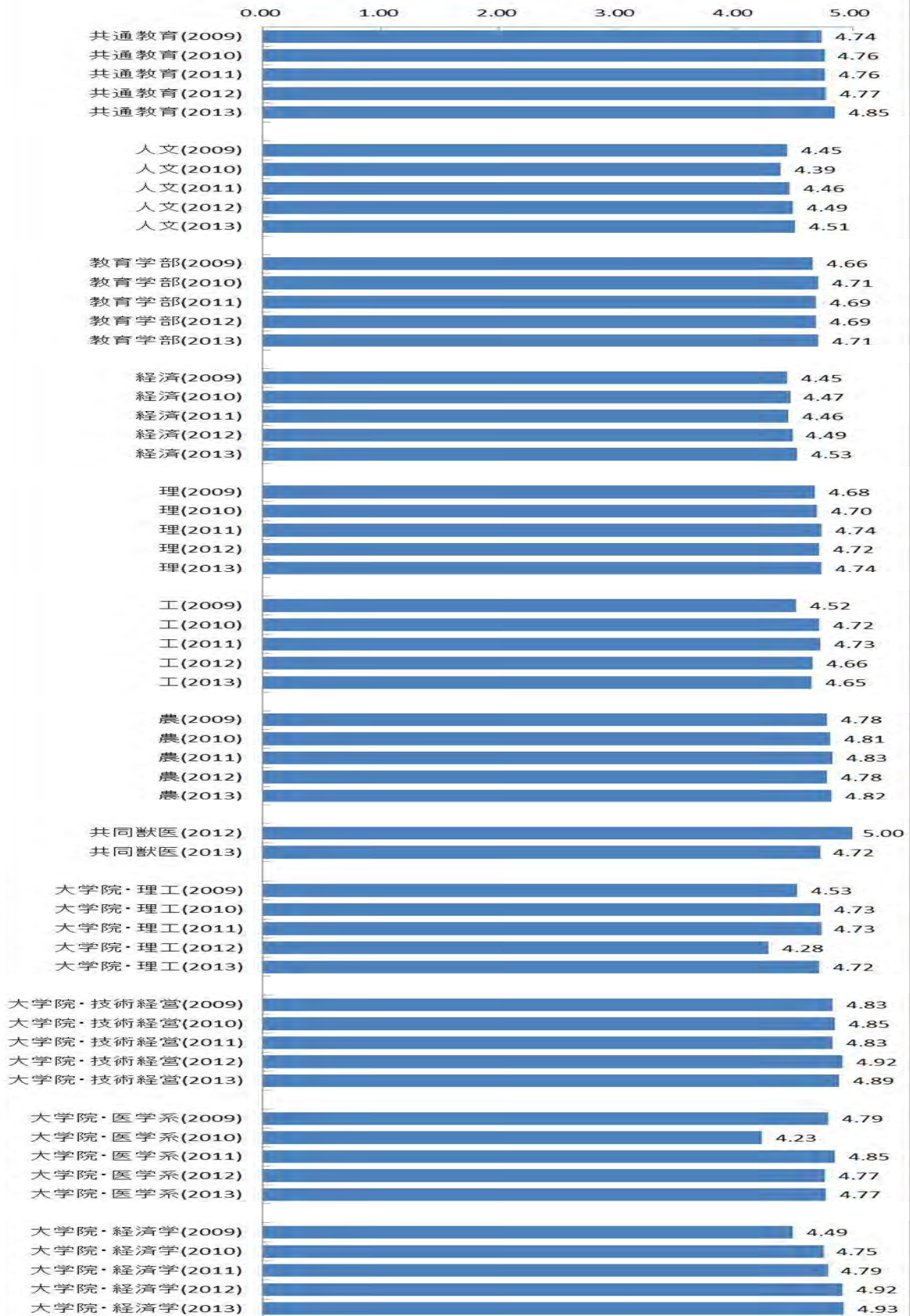
## 満足(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2009)	4.73			4.81	4.74				4.74
共通教育(2010)	4.75			4.82	4.77			4.68	4.76
共通教育(2011)	4.76			4.83	4.77			4.94	4.76
共通教育(2012)	4.77			4.81	4.78				4.77
共通教育(2013)	4.85			4.85	4.81				4.85
人文(2009)	4.47	4.42	4.38						4.45
人文(2010)	4.41	4.38	4.32						4.39
人文(2011)	4.50	4.43	4.34						4.46
人文(2012)	4.50	4.53	4.43						4.49
人文(2013)	4.49	4.51	4.41				4.79		4.51
教育学部(2009)	4.64		4.61	4.76			4.71		4.66
教育学部(2010)	4.69		4.67	4.73			4.74	4.75	4.71
教育学部(2011)	4.68		4.69	4.77			4.72	4.67	4.69
教育学部(2012)	4.67		4.61	4.82			4.70	4.78	4.69
教育学部(2013)	4.71		4.61	4.83			4.70	4.79	4.71
経済(2009)	4.45						4.45		
経済(2010)	4.47						4.47		
経済(2011)	4.46						4.46		
経済(2012)	4.49						4.49		
経済(2013)	4.53						4.53		
理(2009)	4.65		4.78	4.91					4.68
理(2010)	4.68		4.81	4.87					4.70
理(2011)	4.71		4.86	4.92					4.74
理(2012)	4.69		4.87	4.91				4.71	4.72
理(2013)	4.72		4.80	4.91				4.70	4.74
工(2009)	4.49		4.66	4.61					4.52
工(2010)	4.70		4.77	4.84					4.72
工(2011)	4.71		4.76	4.84					4.73
工(2012)	4.65		4.67	4.79					4.66
工(2013)	4.63		4.67	4.79				4.57	4.65
農(2009)	4.74		4.90	4.95					4.78
農(2010)	4.77		4.84	4.97					4.81
農(2011)	4.80			4.97					4.83
農(2012)	4.74			4.97					4.78
農(2013)	4.78			4.98					4.82
共同獣医(2012)	5.00						5.00		
共同獣医(2013)	4.65			4.96					4.72
大学院・理工(2009)	4.52		4.70	4.55					4.53
大学院・理工(2010)	4.73		4.72	5.00					4.73
大学院・理工(2011)	4.72		4.84	4.67					4.73
大学院・理工(2012)	4.28						4.28		
大学院・理工(2013)	4.72						4.72		
大学院・技術経営(2009)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2010)								4.85	4.85
大学院・技術経営(2011)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2012)								4.92	4.92
大学院・技術経営(2013)								4.89	4.89
大学院・医学系(2009)	4.79		4.83						4.79
大学院・医学系(2010)	4.17		4.78						4.23
大学院・医学系(2011)	4.84		4.85					4.95	4.85
大学院・医学系(2012)						4.77	4.77		
大学院・医学系(2013)						4.77	4.77		
大学院・経済学(2009)	4.49							4.49	
大学院・経済学(2010)						4.75	4.75		
大学院・経済学(2011)						4.79	4.79		
大学院・経済学(2012)						4.92	4.92		
大学院・経済学(2013)						4.93	4.93		

## 出席(全体平均) — 経年変化 —





## 第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2013年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は90.8%、教員授業自己評価実施率は32.1%であった。昨年度より共に微減であった。なお、回答数は合計53,442人であり、内訳は講義44,296人、実験・実習2,263人、語学6,883人であった。

2013年度より、共通教育が大幅なカリキュラム改正が行われたため、今年度について、新しい共通教育の科目系列・分野に応じて評価結果を再整理することとした。このため、2013年度を基点に新たな経年変化を見ていくこととするため、今年度については単年度の評価結果の概要を示すこととする。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC準備用、実験実習用の4種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

### （1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「教養コア」「一般教養（人文教養）」「一般教養（社会教養）」「一般教養（自然教養）」「一般教養（学際的教養）」「専門基礎」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高いのは「理系基礎」が3.25、次に高かったのは、2013年度新しく開講したアクティブ・ラーニング科目「山口と世界」が3.05である。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての分野で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。ほぼすべての分野で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

Q5のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてとQ6の板書や

OHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについては Q4 と同様の計算方法で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択肢があるが、平均値の計算には含めていない。ほぼすべての分野で平均が 4.0 を超えており、良好である。

Q7 の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては、すべての分野で平均が 4.0 前後であり、良好である。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

Q8 のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を 5,4,3,2,1 とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で 3.5 を上回っており良好である。また、昨年度に続き、すべての分野で上昇している。

Q9 のこの授業の内容を理解できたかという質問についてはすべての科目で 3.5 を上回っており良好であった。

最後に Q10 のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのは基礎セミナー(4.45)であり、次に高かったのは人間の発達と育成(4.37)、山口と世界 (4.36) と続く状況であった。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
教養コア	基礎セミナー(2013)	講義	4.88	3.04	4.46	4.39	4.33	4.35	4.34	4.15	4.35	4.45
教養コア	情報処理(2013)	講義	4.94	2.49	4.15	4.19	4.13	4.41	4.14	4.02	4.15	4.20
教養コア	運動健康科学(2013)	講義	4.87	2.38	4.38	4.37	4.35	4.25	4.21	4.03	4.15	4.22
教養コア	山口と世界(2013)	講義	4.91	3.05	4.43	4.32	4.22	4.24	4.34	4.24	4.35	4.36
教養コア	キャリア教育(2013)	講義	4.91	2.27	4.20	4.13	4.21	4.33	4.11	4.01	4.16	4.09
一般教養(人文教養)	哲学(2013)	講義	4.82	2.04	4.20	4.20	4.06	4.02	4.04	3.87	3.88	4.11
一般教養(人文教養)	歴史学(2013)	講義	4.87	1.96	3.94	4.12	4.14	4.04	3.88	3.77	3.77	3.86
一般教養(人文教養)	社会学(2013)	講義	4.90	2.61	4.06	4.19	4.04	4.16	3.98	3.92	3.97	4.06
一般教養(社会教養)	経済と法(2013)	講義	4.87	2.29	4.19	4.28	4.23	4.19	4.12	3.92	4.04	4.15
一般教養(自然教養)	自然科学(2013)	講義	4.88	2.21	4.03	4.02	4.11	4.11	3.83	3.84	3.87	3.93
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2013)	講義	4.89	2.23	4.42	4.43	4.31	4.38	4.25	4.08	4.24	4.37
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2013)	講義	4.87	2.22	4.27	4.27	4.19	4.17	4.13	3.96	4.12	4.18
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2013)	講義	4.88	2.00	4.23	4.26	4.29	4.39	4.00	4.01	4.17	4.24
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2013)	講義	4.90	2.72	4.09	4.11	4.11	4.30	4.31	3.89	3.93	3.99
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2013)	講義	4.91	2.58	4.06	4.06	4.13	4.28	3.86	3.87	3.94	3.98
一般教養(学際的教養)	食と生命(2013)	講義	4.86	2.47	4.35	4.33	4.27	4.40	4.04	4.06	4.23	4.28
専門基礎	理系基礎(2013)	講義	4.85	3.25	3.65	3.84	3.81	3.62	3.90	3.81	3.75	3.81

## (2) 語学教育科目の結果について

以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「日本語」の2つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。

Q1の出席はすべて4.5前後を維持しており良好である。Q2の授業外学習は英語分野が日本語分野より高い数値となっている。Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2013)	語学	4.76	3.51	4.43	4.38	3.96	4.32	4.39	4.14	4.27	4.35
専門基礎	日本語(2013)	語学	4.42	3.28	4.70	4.69	4.57	4.75	4.70	4.51	4.61	4.64

## (3) 外国語科目 (TOEIC 準備) の結果について

以下は外国語科目 (TOEIC 準備) の平均値を示したものである。TOEIC 準備は1年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。以下のような結果となっている。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2013)	語学(TOEIC準備)	4.96	3.25	4.30	4.10	4.30	4.01	3.99	3.74	4.05	4.03

## (4) 演習・実験・実習系科目の結果について

以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは、「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については4.50と非常に高い。Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
専門基礎	理系基礎(実験)(2013)	演習・実験実習	4.94	4.50	4.40	4.44	4.51	4.48	4.49	4.57	4.47	4.40	4.51

附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

平成25年度共通教育カリキュラム科目編成表（初年次生用）

系列	分野	授業科目
教養コア	基礎セミナー	基礎セミナー
	情報処理	情報リテラシー演習
		情報セキュリティ・モラル
	運動健康科学	運動健康科学
	山口と世界	山口と世界
	キャリア教育	知の広場
キャリア教育		
英語	英語	TOEIC準備
		Basic English
		English Speaking
		TOEIC認定400
		英語リーディング
		英語ライティング
		英語特別演習
		Comprehensive English
		TOEIC認定500 (TOEFL450)
		TOEIC認定600 (TOEFL500)
一般教養 (人文教養)	哲学	哲学
	歴史学	歴史学
	社会学	社会学
一般教養 (社会教養)	経済と法	経済と法1
		経済と法2
		経済と法3
一般教養 (自然教養)	自然科学	自然科学1
		自然科学2
一般教養 (学際的教養)	人間の発達と育成	人間の発達と育成1
		人間の発達と育成2
	文化の継承と創造	文化の継承と創造1
		文化の継承と創造2
	社会と医療	社会と医療
	科学技術と社会	科学技術と社会
	環境と人間	環境と人間
食と生命	食と生命	

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

系列	分野	授業科目
専門基礎	理系基礎	数学Ⅰ
		数学Ⅱ
		物理学Ⅰ
		物理学Ⅱ
		化学Ⅰ
		化学Ⅱ
		生物学Ⅰ
		生物学Ⅱ
		地球科学Ⅰ
		地球科学Ⅱ
		物理学実験A
		物理学実験B
		化学実験A
		化学実験B
		生物学実験
		地球科学実験
	学部専門基礎	ドイツ語入門1
		ドイツ語入門2
		フランス語入門1
		フランス語入門2
		中国語入門1
		中国語入門2
		中国語初級1 A
		中国語初級1 B
		中国語初級2 A
		中国語初級2 B
		ハングル入門1
		ハングル入門2
		ハングル初級1 A
		ハングル初級1 B
ハングル初級2 A		
ハングル初級2 B		



<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

系列	分野	授業科目
	学部専門基礎	医学のための統計学
		数学概論
		統計学
		医学のための物理学入門
		医学英語 1 a
		医学英語 1 b
		医学英語 2
		医療英語
		基礎医療英会話
		医療心理学
		医療環境論 1
		医療環境論 2
		体育・スポーツ実習
		日本語
	日本語 I B	
	日本語 II A	
	日本語 II B	
	日本語 III A	
	日本語 III B	
	日本語 IV A	
	日本語 IV B	
日本語 V A		
日本語 V B		
教職基礎	教職基礎	日本国憲法
		スポーツ運動実習

## <参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙（４種類）

### 共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

#### 【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	<b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	<b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

**【授業科目名】** 授業科目名を記入して下さい。

**【担当教員名】** 担当教員名を記入して下さい。

**【学 年】** 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

**【学生 区分】** 1. 一般学生 2. 留学生

**【学 部】** 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

**【質問Ⅰ】**

1	<b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b> （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	<b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	<b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	<b>テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】** この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

**【授業科目名】** 授業科目名を記入して下さい。

**【担当教員名】** 担当教員名を記入して下さい。

**【学 年】** 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

**【学生 区分】** 1. 一般学生 2. 留学生

**【学 部】** 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

**【質問Ⅰ】**

1	<p><b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b>（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p><b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p><b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p><b>この授業を通して、TOEICテストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p><b>授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
6	<p><b>配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p><b>学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p><b>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p><b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p><b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください



## 共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生      2. 2年生      3. 3年生      4. 4年生      5. 5年生      6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生      2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部      2. 教育学部      3. 経済学部      4. 理学部      5. 医学部      6. 工学部  
7. 農学部

### 【質 問 Ⅰ】

1	<p><b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b>（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上）    2. 80～90%（12～13回）    3. 60～80%（9～11回）    4. 40～60%（6～8回）    5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p><b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上    2. 2時間程度    3. 1時間程度    4. 30分～50分程度    5. 30分未満</p>
3	<p><b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
4	<p><b>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
5	<p><b>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない    6. この授業は該当しない</p>
6	<p><b>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
7	<p><b>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない    6. この授業は該当しない</p>
8	<p><b>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
9	<p><b>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない    6. 答えられない</p>

10	<p><b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p><b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12~ 30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 第2部 学部・研究科のFD活動

## 第4章 人文学部のFD活動

### 第1節 授業公開

#### 1. 授業公開（ピアレビュー）

##### （1）ピアレビューウイーク

###### 1) 概要

平成25年度の授業公開は、昨年度に引き続き、平成28年度開始予定の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資すべく、人文学部新コースカリキュラム等策定委員会と連携して企画した。趣旨は、昨年度に引き続き、分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として、通常の授業を互いに広く参観しあうことである。昨年度は期間が1週間であったが、短すぎて参観しにくいとの教員の意見に応じて、今年度は2週間に延長して実施した。

具体的には、12月の第1週と第2週の2週間に設定し、4日（水）から13日（金）（3日（火）は入試、4日（水）は月曜振替日であったため、変則的ではあるが、水曜日より開始した。）をピアレビューウイークとし、下記の要領で授業公開を実施した。

- 1：ピアレビューウイーク期間中、人文学部所属教員は、原則として1つ以上の授業を2週にわたって公開する。ただし、学生への教育上の配慮から、1週目と2週目で授業科目を変えること、1週間のみを公開すること、時間指定（例えば10:20-10:50の30分間）をすることを認める。
- 2：ピアレビューウイーク期間中、自身の所属するコース（平成28年度以降の新コース）あるいは他分野の授業を1つ以上参観する。
- 3：授業を参観した教員は、事後、「ピアレビュー参加シート（【図表1】に示す書式で事前に授業担当者に配布する）」に必要事項を記入し、人文学部学務係に提出する。
- 4：人文学部FD部員は提出されたピアレビュー参加シートにより、授業参観者の所属コースや氏名等をチェックしたのち、コース毎にとりまとめて新コースの代表委員（新コースカリキュラム等策定委員会委員）にシートを渡す。
- 5：新コースの代表委員は、ピアレビュー参加シートの記述内容により、必要に応じてコース（新コース）会議等で意見交換の機会を設けたあと、シートを授業担当者に返却する。

公開の対象とした授業は【図表2】のとおりである。ピアレビューウイーク期間中、昨年度より7名多い人文学部教員46名（東アジア研究科教員2名を含む）による47科目（昨年度は39科目）の70コマを公開し、昨年度より大幅に増えた。

###### 2) ピアレビュー結果

ピアレビュー参加結果は【図表3】のとおりである。授業に参加した教員数は延べ40名で、昨年度より9名減り、要望に応じて期間を延長し、公開授業が増えたにもかかわらず、結果に反映されな

ったことは残念であった。今年度は昨年度に続いて実施されたことで、やや新鮮味に欠けたこと、ピアレビュー対象の授業が同じ時間に重なり、時間割の都合上、聞きに行きたくても実際には不可能であったことなどが、参加者が減った理由として考えられる。

また1人で複数の授業を参観した教員が7名いる一方で、全体の約37%を占める17名の教員がいずれの公開授業も参観しないという結果に終わった。この数字は昨年度とほぼ同じであり、ピアレビューに参加する教員と参加しない教員に二分されているのではないかと推測される。授業公開や教育改善に対して教員間に大きな意識差が存することをどう改善していくか、ピアレビューウイークの実施時期なども勘案しながら、今後検討する必要がある。

次にコース別の結果は【図表4】に示すとおりである。昨年度に比べて文学・言語学コース所属予定の教員の参加率がかなり低くなった。昨年度多かったことの反動とも考えられる。しかし、文学・言語学コースの参加者は一人で複数の授業を参観している例が多い。一方、哲学・社会学・歴史学コース所属予定教員の参加率はほぼ同じであったが、これらのコースの特徴として、複数の授業を参観した教員が1人もいなかったことである。ピアレビューは義務として定着しているようであるけれども、意欲的に複数の授業を見に行く所までは進んでいない。

気になる点として、異なるコースの授業に参加した教員(延べ数)が今年度はわずか4人に激減し、全体の10%にすぎなかった。一通り分野内の授業参観が終われば、次は分野を超えて参加する教員の数をどうやって増やすかが課題と言える。分野が異なる教員にもどのような授業なのか判るように、事前にもう少し情報提供すべきかも知れない。

【図表1】ピアレビュー参加シート

ピアレビュー参加シート	
	提出先：人文学部学務係
提出者氏名 [	]
見学した授業科目名 [	]
授業見学の日時 [平成 25 年 12 月	日 ( ) 時限]
授業担当者 [	先生]
見学授業に対する感想・意見 *新コース構築のヒントとなるようなご意見も歓迎致します	



【図表 2】平成 25 年度人文学部ピアレビューウィーク開講授業一覧

	1・2 限	3・4 限	5・6 限	7・8 限	9・10 限
12/4(月振替)			[言]英語学演習(文法と意味) [歴]古文書古記録 III		[言]歴史言語学特殊講義 [言]中国語学講読 [文]日本文学特殊講義 [哲]美学・美術史演習
12/5(木)	[歴]日本史史料講読	[文]中国文学講読 [哲]宗教学講読	[歴]考古学実習 [文]英米文学特殊講義	[歴]考古学実習 [言]現代英米語概説 II [文]日本文学演習 [社]現代民俗論	[文]文学概論 [文]日本文学講読 [哲]美学・美術史演習 [社]コミュニティ論
12/6(金)		[言]日本語学 II [言]中国語学概説 II [言]ヨーロッパ言語概説(ドイツ) IV [文]ヨーロッパ文学入門(フランス) [歴]西洋史概論 IV [歴]考古学概論 IV	[歴]日本史特殊講義	[言]言語類型論演習	
12/9(月)			[言]英語学演習(文法と意味) [文]ドイツ文学特殊講義 [歴]古文書古記録 III [歴]東洋史概論 IV		[言]歴史言語学特殊講義 [哲]美学・美術史演習
12/10(火)	[社]コミュニケーション論	[言]英語学演習 [社]生活文化論	[言]フランス語学特殊講義 [言]日本語学特殊講義	[歴]日本史特殊講義	[言]ドイツ語学特殊講義 [言]言語情報学演習 [哲]西洋哲学演習・西洋倫理学演習(共同授業) [歴]古文書・古記録 I [社]社会心理学演習
12/11(水)		[文]情報資源組織演習 [文]フランス文学特殊講義 [社]質的調査データ解析法			
12/12(木)	[歴]日本史史料講読	[哲]宗教学講読	[哲]日本思想史演習(共同授業) [文]英米文学特殊講義	[言]現代英米語概説 II [文]ドイツ文学演習 [社]現代民俗論	[文]文学概論 [文]日本文学講読 [哲]美学・美術史演習 [社]コミュニティ論
12/13(金)		[言]日本語学 II [言]中国語学概説 II [言]ヨーロッパ言語概説(ドイツ) IV [文]ヨーロッパ文学入門(フランス) [歴]西洋史概論 IV [歴]考古学概論 IV	[文]中国文学特殊講義 [歴]日本史特殊講義 [文]日本文学史 [歴]東洋史史料講読	[言]言語類型論演習	

注：授業科目名冒頭の略号は、当該授業科目が、平成 28 年度以降の新体制において属する見込みの新コースを示す。  
すなわち、[哲] = 哲学コース [歴] = 歴史学コース [社] = 社会学コース [文] = 文学コース [言] = 言語学コース  
の 5 コースである。

【図表 3】平成 24 年度人文学部ピアレビューウィーク参加結果

参観者	参観者所属コース	参観した授業科目名	参観日	時限	授業者所属コース
1	哲学	中国思想史講読	12/4	910	哲学
2	哲学	美学美術史演習	12/12	910	哲学
3	哲学	美学美術史演習	12/9	910	哲学
4	哲学	美学美術史演習	12/5	78	哲学
5	哲学	美学美術史演習	12/12	78	哲学
6	哲学	日本思想史演習	12/12	56	哲学
7	社会学	社会心理学演習	12/10	34	社会学
8	社会学	コミュニティ論	12/12	910	社会学
9	社会学	日本文学史	12/13	56	文学
10	社会学	コミュニティ論	12/12	910	社会学
11	社会学	コミュニティ論	12/12	910	社会学
12	歴史学	古文書古記録Ⅲ	12/9	56	歴史学
13	歴史学	考古学概論	12/6	34	歴史学
14	歴史学	日本史特殊講義	12/6	56	歴史学
15	歴史学	日本史特殊講義	12/6	56	歴史学
16	文学	文学概論	12/12	910	文学
17	文学	日本文学史Ⅵ	12/13	56	文学
18	文学	文学概論	12/12	910	文学
		日本文学特殊講義	12/4	910	文学
19	文学	中国文学講読	12/5	34	文学
		ヨーロッパ文学入門(フランス)	12/13	34	文学
20	文学	日本文学講読	12/12	910	文学
	文学	中国文学講読	12/5	34	文学
21	文学	古文書古記録Ⅲ	12/4	56	歴史学
		日本文学特殊講義	12/4	910	文学
22	文学	英米文学特殊講義	12/5	56	文学
23	言語学	中国語学講読	12/4	910	言語学
		歴史言語学特殊講義	12/4	910	言語学
		英語学演習(文法と意味)	12/4	56	言語学
24	言語学	言語情報学演習	12/10	910	言語学
		現代英米語概説Ⅱ	12/5	78	言語学
		英語学演習(文法と意味)	12/10	34	言語学
25	言語学	英米文学特殊講義	12/12	56	文学
26	言語学	日本語学Ⅱ	12/6	34	言語学
		日本語学特殊講義	12/10	56	言語学

27	言語学	日本語学特殊講義	12/10	56	言語学
		現代英米語概説Ⅱ	12/5	78	言語学
		中国文学講読	12/5	34	文学
		中国語学講読	12/4	910	言語学
28	言語学	フランス語学特殊講義	12/10	56	言語学

【図表 4】平成 24 年度人文学部ピアレビューウイーク参加結果 コース別内訳

参観者所属コース	授業参観者延べ人数	授業参観者実人数
哲学	6名	6名
社会学	5名	5名
歴史学	4名	4名
文学	10名	8名
言語学	14名	6名

## 第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

### 1. 大学教育機構との共催による研修会

#### (1) 教育改善 F D 研修会

日程 平成 25 年 11 月 20 日 (水) [吉田地区] 14:30~15:00

場所 人文・理学部大会議室

講師 糸長 雅弘 (大学教育センター長)、小川 勤 (大学教育センター副センター長)

参加者 46 名 (アンケート回収 24 名)

内容

教育改善 F D 研修会開催にあたって、会場で直接、人文学部からの質問に回答する質疑応答形式で研修が行われた。主要な質疑内容は以下の通りである。

#### 1. クォーター (8 回) の授業では十分教育内容を教えられない。

【糸長センター長からの回答】

今回の共通教育のカリキュラム改革では、クォーターで授業を行う際には基本的には何を教えるのではなく、何ができるようになったのかを中心に授業設計をしてほしいと各学部の先生方をお願いしている。現在の学生は中学・高校以来受動的な学びに慣れていて、自分自身が能動的に学ぶ姿勢が十分身についていない。新しい共通教育では、「山口と世界」のような科目で能動的な学習を促す授業を推進している。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.2%
良かった	6	25.0%
どちらとも言えない	9	37.5%
あまり良くなかった	3	12.5%
良くなかった	5	20.8%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

2. 人文学部でも現在新しいカリキュラムを導入しようとしているが、その中でPBL型の授業を取り入れるような方向で検討しているが、「山口と世界」ではどのような教育を行い、学生はどのような活動を行っているのか？

【糸長センター長・小川大学教育センター教授からの回答・コメント】

山口県が取り組んでいる「やまぐち未来プロジェクト」などの内容を紹介し、これから山口では将来どのようなプロジェクトに取り組んでいったらよいのかを学生たちに考えさせ、考えた結果をポストイットに記入させ、さらにその結果をグルーピングして、最終的には提案するという教育内容で授業を展開している。協議した内容については、プレゼンを行い、さらに提案文書を作成させている。



小川教授からは、自らが所属する「学部学科の歴史を調査する」、「高校教育の問題点と解決策を考える」、「大学の学ぶ意義を考える」などのテーマについて個人およびグループで考え、その考察結果を発表させる。成績評価はグループ60%、個人40%の割合で評価を行っている実態が明らかにされた。

この回答に対して人文学部からは、「山口と世界」の授業では学生たちに能動的な学習を行わせることが重要であることがよく理解できたという意見があった。

3. 今の共通教育システムは共通性を重視するがために、逆に学生の自主的な履修選択の自由をシステムの的に阻害しているのではないのか？

【糸長センター長からの回答】

このような意見はどの学部からも指摘を受けるが、今までの学生の科目選択が自分の将来像やキャリアを意識して科目履修していたのかどうかは疑問である。従来の共通教育のカリキュラムでも必修科目の部分は、クラス指定で実施させている。また、一般教養部分はカフェテリア（自由選択）方式という形で行われてきた。しかし、果たして旧来の履修方法を行った結果、どのような教育効果があったのかを統計データをあまりないため挙証することは難しい状況である。今回のカリキュラム改革の背景に確かに大学経営の効率性を求めていることは否定できない。しかし、すでに定食メニュー方式の共通教育カリキュラムが導入させているので今後は中身をどのように改善するのかを我々は考えざるを得ない。この回答に関しては、人文学部からは、基礎セミナーで従来の新入生たちに意見を聞くと、自分で授業を選択できることに感動する学生たちも多くいたという事実を理解して欲しいという意見があった。



4. 共通教育から初習外国語が外れ、クォーター中心の授業が行われているが、果たして他大学でこのようなやり方で成功したところはあるのか？ 限りなく専門学校的な大学になってしまったのではないのか？ また、クォーターでは事務が煩雑になり、休講しにくくなるのではないのか？

【糸長センター長からの回答・コメント】

初年次教育の授業では学力を伸ばすということよりも、何をできるようになったのかという観点から授業設計を実施して欲しい。初習外国語に関しては、アジア世界重視の日本の立場からは確かに中

国語やハングルなどのアジア系の言語学習を共通教育から外したことは問題があると感じている。そこで、現在、新しい共通教育の作業部会では「教養発展系列」という分野を新しい共通教育の外枠で新たに設置したいと考えている。この系列分野の中で、初習外国語やアドバンス・レベルの英語教育を実施する方向で検討が進んでいる。

クォーター制を導入した大学ではうまく機能していない他大学の事例をよく聞いている。しかし、山口大学では共通教育の一般教養系列に奇数単位と偶数単位を提供する学部が混在しているため時間割編成上、クォーターにせざるを得なかったという事情があることを理解して欲しい。休講に関しては、クォーターだからといって、まったく休講してはいけないとは考えていない。しかし、休講した分は事前にレポート課題などを用意して、次回の授業で提出させるなどの方法を取って、単位の実質化を図って欲しい。実際、新しい共通教育が導入されるようになって、従来の共通教育よりレポート課題の提出の機会が増え、自習時間が増えてきているという授業評価データの結果があり、今後はこの点も大学教育センターで分析して実態を把握し、カリキュラム改善に活かしていきたい。

最後に、岩部前大学教育センター長（人文学部教授）より、今回の共通教育カリキュラムの改善の趣旨とメリットなどについて発言があった。

研修会後のアンケート（自由記述）からは、「共通教育への理解が深まった」という意見の一方、「授業改善のヒントなども聞けてよかったが、批判的な質問や意見が今後、どのようにカリキュラム改善に活かされるのかが聞けなかった」、「異なる立場、背景、理想を持った者同士の対話の場としては、不十分感はあるが、ないよりはよいし、継続的な対話や意見交換が必要と感じた」という今後の共通教育の改善を巡る意見交換をさらに期待する意見があった。

## 2. 人文学部FD部会主催による研修会

### (1) 「山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法－学生を就職

#### させるために－」

日程 平成 25 年 09 月 18 日(水)

[吉田地区] 10:00～11:00

場所 人文・理学部大会議室

講師 平尾 元彦（学生支援センター教授）

参加者 24 名(アンケート回収 21 名)

講演内容

学生を就職させるためにと言うテーマで、卒業してどうなっていくかまで見守るという立場で聞いてもらいたいと希望を述べられ、山口大学で学んで良かったと 10 年後に感じられるように、就職支援をどのように考えて実行していけば良いのかという観点で話が始められた。就職活動と就職支援の変遷、現在ホットなテーマ、昨今特徴的に表れた点、今時の就職、現在、何が起きていること、就職に関して山口大学における現在の問題、学生支援センターとして行っている就職支援について、分かり易く説明された後、人文学部教員に向けて、まだまだ学生の就職活動は厳しいので、指導学生に対して温かく見守って欲しい旨、述べられ

#### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	15	71.4%
良かった	6	28.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%





た。その後質疑応答を行ったが、時間が殆ど取れなかった。折角の機会なので、その後人文学部 FD 部会で就職に関して学生支援室と連携するためにも教員が知っておくべき質問集を作成することを決め、学部教員に依頼して質問集を取りまとめ講師にお送りしたところ、後日詳細な回答をいただき、全教員でその情報を共有することができた。



## (2) 「PBL について～「山口と世界」担当教員による事例紹介～」

日程 平成 26 年 2 月 5 日(水)  
[吉田地区] 15:30～16:00

場所 人文・理学部大会議室

紹介者 John. D. Phillips (人文学部教員)、和田学 (人文学部教員)

参加者 38 名

25 年度共通教育「山口と世界」を担当された教員のうち、John. D. Phillips 先生と和田学先生に授業内容の紹介をしていただいた。30 分という短い時間であったけれども、両方とも大変興味深い授業内容で、今後人文学部が新コースカリキュラムの中で、どうやって PBL 型の授業を取り入れていくかについて、大いに参考になった。PBL 型の授業は評価が難しく、その点について今後検討していく必要があるであろう。

1. グループ学習によって、世界の多様な文字を手分けして調べ、全員がいずれの文字によっても自分の名前と「yamaguchi」と書けるようになった。(Phillips 教員)

2. 山口と距離の近い韓国を取り上げ、どんな韓国旅行が可能かをグループで調べさせて発表させた。(和田教員)

## 第 3 節 教育改善に関する活動

### 1. 基礎セミナー部会の開催

日時：平成 25 年 11 月 27 日 (水) 16:30～17:30

場所：第 2 小会議室

メンバー：乾 (FD 部会座長)、池田 (FD)、岩部 (教務部長)、柏木・宮原 (教務委員)、田中・高橋

(学生委員)、石田・橋本・森野・尾崎・横田・阿部 (平成 26 年度基礎セミナー担当者、横田・阿部は当日欠席のため、後日担当の池田より説明)

### 1) 経緯と趣旨

1 年次前期の全人文学部生を対象として開講する基礎セミナー 1 は、4 年間の学士課程教育の端緒として学生にとってはきわめて重要な授業でありながら、専門とは異なる内容の授業を展開しなければならないことから、教員にとっては少なからぬ負担となってきた。また、当該授業は、当初、日本語論述力の養成を主たる目標として開設されたものであったが、平成 19 年度以降、情報処理担当教員も授業担当に加わった結果、情報処理技術の基礎修得を授業内容に含めることも行われるようになった。さらに、近年は志望コースアンケートやポートフォリオの記入も基礎セミナー 1 内で実施することが求められるようになるなど、授業の目標・内容が拡散の傾向を強めるなか、担当者間でおおよそのすり合わせをはかる程度の統一は試みられてきたものの、授業内容・評価基準とも授業担当者の裁量に委ねられているのが実情であり、授業アンケートにおいて授業内容・評価基準の不統一に対する学生の不満の声は大きかった。そこで授業概要・授業目標・授業計画のすり合わせ及び合同授業の開催を昨年度より実施している。

### 2) 授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせ

昨年度に拡大教授会で了承された授業概要・一般目標・到達目標を今年度も継承した。

【図表 5】人文学部基礎セミナー 授業概要・一般目標・到達目標

授業概要	人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生生活に馴染み、大学を勉学の場として活用していけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。
一般目標	1：学生が、自らの大学生生活の目的について、明確な意識をもつことができる。 2：学生が、大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。 3：学生が、図書館やインターネットの利用方法に習熟し、自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。 4：学生が、日本語論述にかかわる基礎的知識・技術を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。
到達目標	知識・理解の観点：学生が、自らの人生の展望をもち、その中での大学生生活の位置づけを理解している。 思考・判断の観点：学生が、自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。 関心・意欲の観点：学生が、人文学全般に広く関心をもつとともに、とくに自身の資質に適い、自らが深く関心をもてる分野に気づいている。 態度の観点：学生が、大学生生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。 技能・表現の観点：学生が、大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

上記目標に沿って、26 年度基礎セミナー担当者にシラバス作成について、統一を図るようお願いした。

### 3) 合同授業

25 年度と同じように実施することを確認した。

(1) 留学案内 平成 26 年 6 月 13 日(金)実施予定。「人文学部生のための留学案内」(国際交流部会

と連携)

(2) ポートフォリオとキャリア教育 平成 26 年 7 月 18 日(金)実施予定。(学生委員・学生支援センター平尾先生と連携)

## 2. 授業アンケート (オムニバス授業)

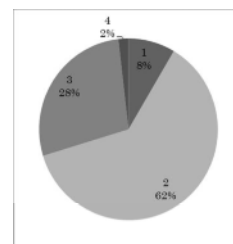
### 1) 経緯と趣旨

本年度よりスタートした新しい共通教育及び平成 28 年度開始予定の人文学部の学科・コース改編に関係して、人文学部では 1 年生対象に分野 (哲学・歴史学・社会学・文学・言語学) の入門講義が始まった。人文社会学科・言語文化学科合同の約 200 人の大規模授業で、クォーター制で毎回授業担当教員が変わるオムニバス形式の授業である。そこで FD 部会では、この新しい試みの授業に関して、適性に授業が行われているか、どのような問題点があるかについて、次年度以降の授業改善に繋げる目的で、教員および 1 年生にアンケートを実施した。教員アンケートは記述式で、1 年生はマークシート式および記述式で行った。教員アンケート結果では、初年度ということもあり、どう教えるべきか戸惑いがあるものの、軌道に乗せるため各人各様に工夫する様子が窺えた。

以下は、学生アンケート結果である。コースや担当者により若干難しかった回があったようであり、このデータを学部教員が共有することで、次年度以降の授業改善に繋げたい。

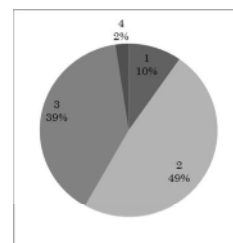
#### [1]. 全体を通して、5つの分野の授業内容が理解できましたか？

1. ほとんどの分野がよく理解できた。
2. だいたいの分野は理解できた。
3. 一部の分野は理解できた。
4. ほとんどの分野が理解できなかった。



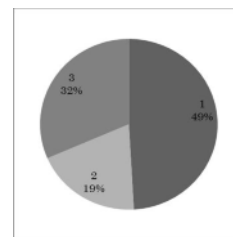
#### [2]. 授業を受けて5つの分野に興味を持ってましたか？

1. 5分野全部に興味を持つことができた。
2. ほとんどの分野に興味を持つことができた。
3. 元々自分が関心のある分野のみ興味を持つことができた。
4. すべての分野に興味を持ってなかった。



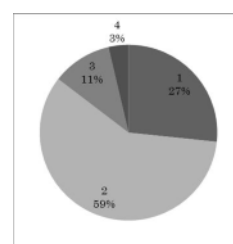
#### [3]. 5つの分野がすべて前期に開設されたことはどうでしたか？

1. このままの方式がよい。
2. できたら半分は後期に開設した方がよい。
3. 全分野を受けたくないの、選択にして欲しい。



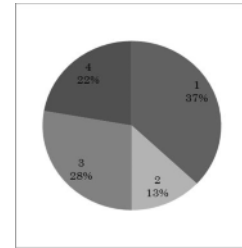
#### [4]. 毎回先生が替わるオムニバス形式の授業はどうでしたか？

1. オムニバス方式の授業が大変よかった。
2. オムニバス方式の授業がおおむねよかった。
3. オムニバス方式の授業はあまりよくなかった。
4. オムニバス方式の授業は全くよくなかった。



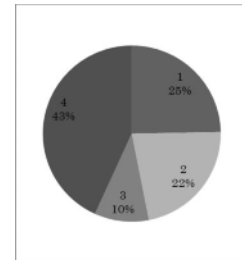
[5]. 成績の付け方についてどういう方式がよいですか？

1. 毎回授業の終わりにテストをする方式がよい。
2. 最後の回にテストをまとめてした方がよい。
3. 最後にレポートがよい。
4. わからない。



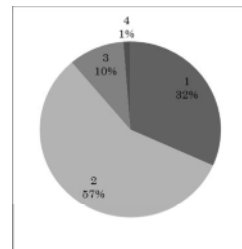
[6]. 200人規模の大人数授業についてどうでしたか？

1. 200人の大人数授業でよかった。
2. 100人規模の中人数授業の方がよかった。
3. 40人以内の少人数授業の方がよかった。
4. 人数に関してはあまり気にならなかった。



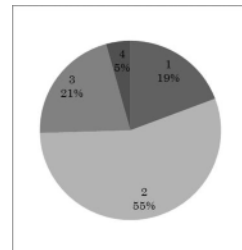
[7]. 分野の入門の授業として難易度は適切でしたか？

1. どの授業も適切であった。
2. おおむね適切な授業であったが、なかには難しい授業もあった。
3. 適切な授業もあったが、難しい授業が多かった。
4. どの授業も難しかった。



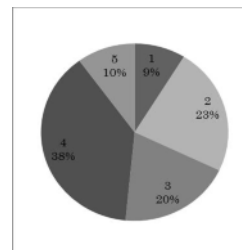
[8]. 進みたい分野を選ぶのに役に立ちましたか？

1. 大いに役に立った。
2. おおむね役に立った。
3. あまり役に立たなかった。
4. 全く役に立たなかった。



[9]. 5つの分野のうち、どの分野の授業が全体としてまとまりが良かったですか？

1. 哲学
2. 歴史学
3. 社会学
4. 文学
5. 言語学



(自由記述式回答)

- ・色々な分野に触れることができ、楽しかったです。
- ・オムニバス形式の授業は、いろいろな面から話を聞けてよかった。
- ・オムニバスで人文の様々な分野を知ることができたのは良かったです。
- ・コース選択を考える材料になったし、色々な分野にふれることができてよかったと思う。
- ・取りたい授業を選択出来た方がよいと思います。
- ・2年で行われるコース分けにも役立つので良い授業だったと思います。
- ・他のコースの分野も学べたからよかった。

- ・それぞれの授業が全体的に何をしているのかが知れて良かったです。進路を考えるきっかけになったと思います。
- ・個人的にもっと人文学部専門の授業を開講してほしかった。共通であまり興味のない分野ばかりを学ぶのはしんどい。
- ・全く興味が無い授業で、全く役に立つことがないものを受けなければならないので、とても残念だった。
- ・哲学と言語学が非常に難しかった。
- ・クォーター制は短いので、全ての分野の表面的な内容は理解できるが、深くは理解できないと思った。
- ・言語学の授業は専門的な話が多く難しかった。
- ・オムニバス形式は、毎回新鮮な心持ちで受講でき、良いと思った。
- ・オムニバス方式を活かしている授業とそうでない授業があった。
- ・私は言語文化学科の学生ですが、人文社会科学の分野である授業を受けて興味が広がりました。よい機会を設けてもらったと感じています。
- ・いつも分かりやすいです。
- ・オムニバス形式だと、やむを得ない事情で休んだときに、講義を受けることができず、テストやレポートで苦労する。
- ・言語学と歴史学はあまりおもしろくなかった。
- ・クォーター1, 3の時の試験期間は部活があるので少しきつい時があります。
- ・クォーターによるオムニバス授業は、きっかけとなる点では良いと思う。
- ・オムニバス方式だといろんな分野の話を知ることができるので面白いが、90分だけというのは短い気がした。
- ・文学の授業での日本文学の古典の授業は本当に楽しかったです。
- ・先生が毎回変わるの、色々な内容が学べて良いが、分かりにくいこともあった。
- ・人文社会科学の学生も、文学や言語学等の分野が学べるのは嬉しかった。
- ・オムニバス形式の様々な分野にふれることができ良かったが、やや慌ただしく物足りない部分もあった。

### 3. オムニバス授業テキスト作成

#### 1) 趣旨と経緯

前述した2のオムニバス授業は、毎回授業担当者が変わるオムニバス形式で行われる、約200人の大規模授業である。出席確認には出席システムを使うとしても、プリントの配布だけで多くの時間が費やされ、肝心の授業時間が少なくなることが一つの課題である。そこで、今回各先生が授業で配布する資料を入学時にまとめて冊子体にして配布する方式を導入してみることにした。あくまで試行段階なので、全教員に義務化するようなものではなく、趣旨を説明し、主に26年度授業担当される教員に授業資料を提出いただいた。趣旨は以下のとおりである。

1. 200人対象のオムニバス授業の授業資料をFD部会で取りまとめてコピー製本することで、先生方のコピー及び配布の手間を省く。
2. 冊子体にすることで、人文学部にどのような授業（あるいは研究）をする先生がいるのか、一年生に全体を把握させるのに役立つ。
3. 先生地震も他分野の先生の授業資料を見ることができるので、一定のピアレビュー的効果が期待できる。





【図表 8】平成 25 年度教員授業自己評価 全体平均

	24 年度	25 年度
学習目標の達成	4.26	4.39
理解度	4.22	4.15
満足度	4.06	4.00

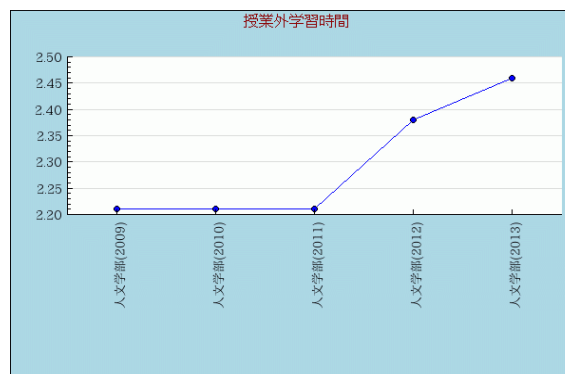
【図表 7】と【図表 8】を比較すると、学習目標の達成・理解度について、学生の感想より教員の自己評価が若干高く、逆に満足度は若干低くなっている。このあたりの誤差をどの程度少なくできるかが今後の課題である。

## (2) 経年変化

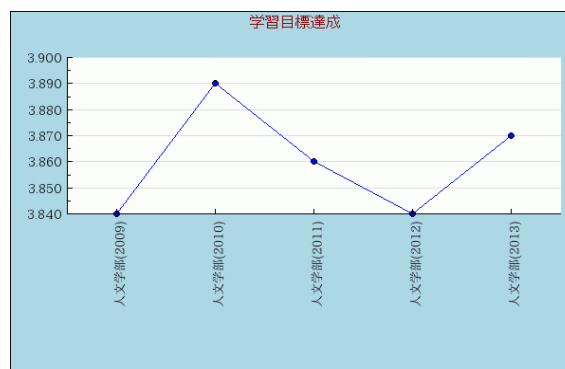
### 1) 学生授業評価

授業外学習時間・学習目標の達成・理解度・満足度・出席率について、平成 21 年度（2009）から 25 年度（2013）にかかると 5 年間の経年変化を【図表 9】から【図表 13】に示す。

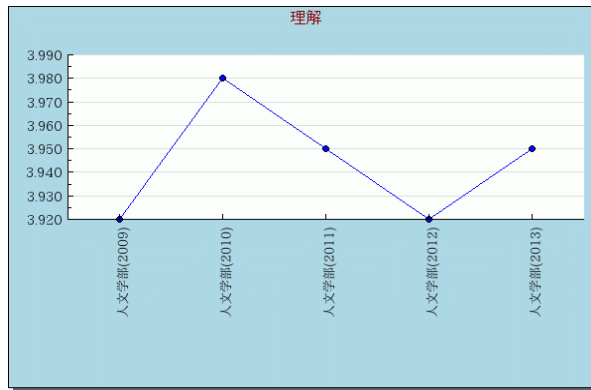
【図表 9】授業外学習時間 経年変化



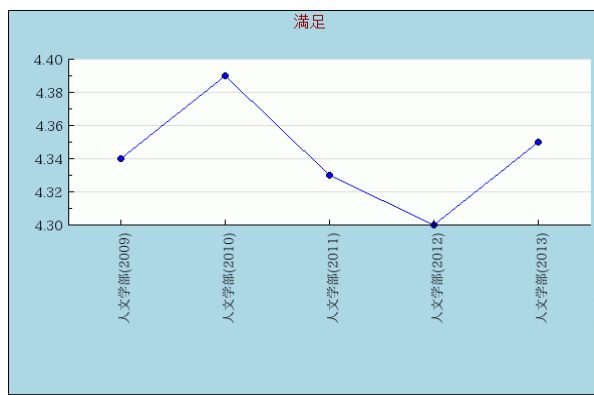
【図表 10】学習目標の達成 経年変化



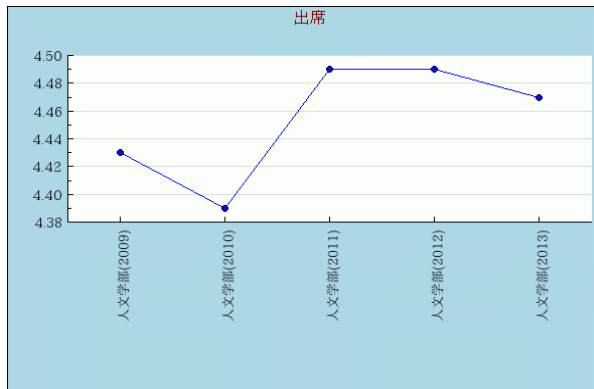
【図表 11】理解度 経年変化



【図表 12】満足度 経年変化



【図表 13】出席率 経年変化

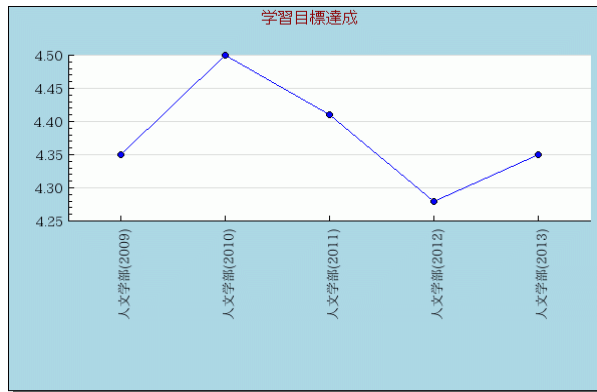


グラフの目盛りが昨年度と違い細かくなっているのですが、一見すると大きく変動したように思われるが、数値を見る限り誤差の範囲内の推移と思われる。授業外学習時間・学習目標の達成・理解度・満足度・出席率ともほぼ横ばいで推移しており、有意差は認められない。

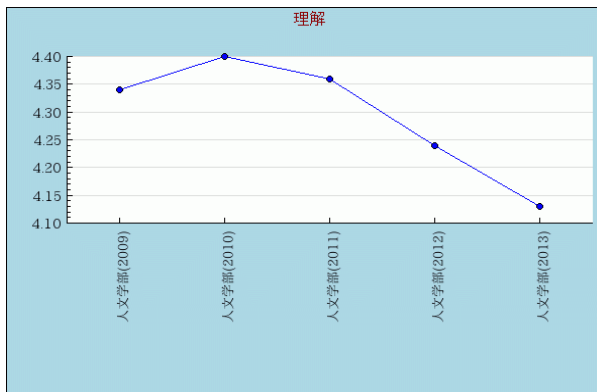
## 2) 教員授業自己評価

学習目標の達成・理解度・満足度について、平成 21 年度（2009）から 25 年度（2013）にかかる経年変化を【図表 14】から【図表 16】に示す。

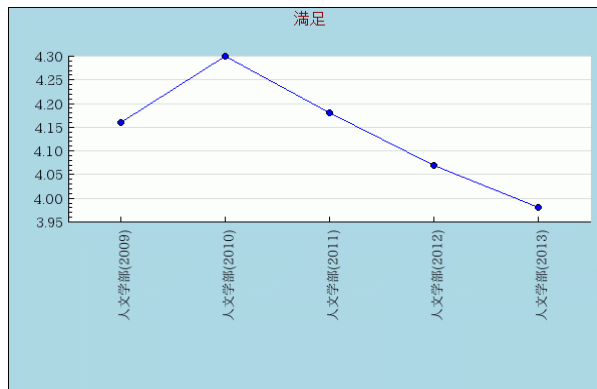
【図表 14】 学習目標の達成 経年変化



【図表 15】 理解度 経年変化



【図表 16】 満足度 経年変化



3 項目とも若干変動はあるものの、これも誤差の範囲内にとどまるものであり、有意差は認められない。

### (3) 今後の課題

授業外学習時間の向上が今後の課題である。人文学部でも、共通教育同様、新コースカリキュラムにおいて、PBL の活用が議論されている。そのような授業を導入することは一定の効果が期待できるが、しかし人文学部授業全体から見れば、それらは僅かな数にとどまり、全体として受動的学習スタイルが大きく変化することは考えにくい。このような課題は、学部単位で改革するのは難しく、大学

として授業外活動の単位化など、新たな活路を見いだすことが必要であろう。

教員授業自己評価の入力率向上については、このままの方式では飛躍的に改善されるとは考えにくい。一斉メール通知や会議時の周知徹底だけでは、入力率の飛躍的な向上は難しいであろう。少し考え方を変えてみる必要もある。経年変化の結果を見ればここ数年有意差が見られていない。つまり現在の学習目標の達成・理解度・満足度・出席率という項目では、時間を割いて入力してもフィードバックされる部分が少ない。教員一人一人にとってもっと有用な調査、つまり教育改善にすぐさま反映できる項目であれば、自ずと入力率も向上するのではないであろうか。

## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
人文学部	オムニバス授業テキスト作成	印刷費	85,995	授業資料を冊子体にする事で、入学時に人文学部教員の授業及び 研究内容を紹介することが可能となる一方、他の教員の授業資料を 見ること、ピアレビュー効果がある。
<b>計</b>			<b>85,995</b>	

## 第6節 来年度の課題

### (1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

第4節(3)を参照のこと。

### (2) カリキュラム構築及び検証のための積極的なFD活動

人文学部では平成28年度からの新コース体制に向けた準備や議論が進められているところである。これまで以上に充実した教育を実現するため、個々の授業技術の開発ではなく、組織としてカリキュラムの適正運用の検証、教材開発、学生及び教員アンケートの実施、新しい授業のための研修会の開催、ピアレビューの実施などを、今後とも積極的に行うことが重要である。

### (3) FD部会の活動について

人文学部教学部長としてFD部会のすべての活動に参加した。25年度は新しい共通教育の最初の年であり、それに連動して学部教育も変わったこともあり、FD部会の活動も多様で活発なものになった。本報告は座長の乾准教授によってまとめられているが、FD部会員(池田講師、藤永准教授、和田教授)全員が分担することで業務を遂行することができた。新しいオムニバス授業は、学科を超えて1年生約200名を対象にするということもあり、若干の不安も抱きながらのスタートとなったが、さっそく授業アンケートによって確認がなされ、その目的が受講生にも十分に理解され評価されていることがわかった。また、26年度に向けてテキスト(資料集)も完成した。PBLのFDが、外部から特別な講師を招くのではなく、学部の普通の教員が講師を務める形で実施されたことも強く印象に残っている。いずれも28年度に予定されている一学科制につながる活動であり、PDCAサイクルの典型例と考えて



いる。新しい試みをいくつも手がけたことから、時にはご批判をいただいたり、失敗もあったと思われるが、その都度関係の先生方と協議することで、適切な方向に転換できたと考えている。Trial and error（試行錯誤）は文字通りの意味で評価されるべきであり、FD という業務の性質上、それは不可避のことである。それも踏まえて、私は25年度の人文学部FD活動を高く評価している。このような経緯から、例年より会議の回数、時間ともに多かったという反省もなされた。26年度も同じメンバーでFD部会は構成されており、業務の質を向上させながらも会議の量を減らすことは可能であろう。【本項目のみ教学部長（岩部浩三）執筆】

## 第5章 教育学部のFD活動

### 第1節 授業公開

平成25年度の授業公開では、講義形式の授業のほかに実技を取り入れた授業などを公開していた。公開された授業は次の通りである。

#### (1) 教育心理学教室 公開授業

担当教員 沖林洋平准教授

授業科目名 教育心理学

日時 5月14日(火) 5.6時限

場所 教育11番教室

授業内容 現代日本の教育問題を教育心理学の立場から考え、教師としての資質を向上させる。

#### (2) 音楽教室 公開授業

担当教員 高橋雅子准教授

授業科目名 教科教育法音楽

日時 6月25日(火) 5.6時限

場所 演奏講義室

授業内容 学生による模擬授業を通して、音楽の授業についての理解と実践力を深める。

#### (3) 数理情報教室 公開授業

担当教員 石原海講師

授業科目名 幾何学Ⅱ

日時 11月22日(金) 1.2時限

場所 教育43番教室

授業内容 数学における位相空間の考え方を理解して、抽象度の高い議論の運用能力を育てる。

#### (4) 美術教室 公開授業

担当教員 中野良寿准教授

授業科目名 絵画Ⅰ

日時 1月27日(月) 3.4時限

場所 絵画実習室

授業内容 モデルを使った油彩の授業を通して、多様な絵画技術を理解し、習得する。

1年間の内、前期2教室、後期2教室の計4教室で授業公開を行うようになって、今年で三年目を迎えた。昨年度の指摘を踏まえて、今年度は授業公開の予定を学部全体にメールで配信するとともに、公開授業のシラバスを全教員にプリントで配布するなど、参観者が事前に授業に対して予備知識を得るようにした。しかし、全体としては参加者が多かったとは言えず、参観者をいかに増やすかが今後の課題であると言える。

なお、参考のため、表1にこれまで教育学部で実施した授業公開を示す。

表1 教育学部でこれまで実施した授業公開

年度	期	教室	担当教員名	授業科目名
平成16年度	後期	技術教育	岡村 先生	製図
平成17年度	前期	幼児教育	荘司 先生	保育内容環境
	後期	家政教育	友定 先生	児童学
平成23年度	前期	国語教育	村上 先生	国文学講読 III
		スポーツ健康科学	丹 先生	健康運動処方論
	後期	社会科教育	南浦 先生	教科教育法社会
		表現情報処理	葛 先生	グラフ・ネットワーク論
平成24年度	前期	数学教育	泉池 先生	確率・統計学
		国際文化	ミホバ 先生	地理学 I
	後期	理科教育	栗田 先生	理科実験指導法 I
		人間教育学	佐々木 先生	人間教育学研究法 II
平成25年度	前期	教育心理学	沖林 先生	教育心理学
		音楽教育	高橋 先生	教科教育法音楽
	後期	数理情報	石原 先生	幾何学 II
		美術教育	中野 先生	絵画 I

## 第2節 学部主催FD研修会

### 平成25年度教育改善FD研修会（教育学部）

日程 平成25年9月18日（水）[吉田地区] 17:10～18:00

場所 教育学部 21 番教室

講師 糸長 雅弘(大学教育センター長)

参加者 55名(アンケート回収 55名)

内容

「教育改善FD研修会開催にあたっての事前調査票」において教育学部から回答があった事項に基づき、糸長センター長がコメントを行う形で実施された。主要な回答は以下の通りである。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	9.1%
良かった	21	38.2%
どちらとも言えない	21	38.2%
あまり良くなかった	2	3.6%
良くなかった	4	7.3%
無回答	2	3.6%
合計	55	100.0%

1. これまで、新しい共通教育の授業を提供していく上で、どのような問題や課題があったかを具体的に記述して下さい。

以下の意見が、複数の教員からあった。また、学生からも、よい評価は聞いていないとの意見があった。

・クラス割当てによる今年の共通教育の学生は、昨年までの自由選択による学生に比べて、学習意欲が大幅に低下していることは疑えない（必修授業にもかかわらず、受講を放棄する学生も少なからず見られる）。教育において、学生の意欲、関心はもっとも重要なポイントであり、それを低下させるような体制は、たとえ外にどのような利点があるにしても、致命的な欠陥であると言わざるを得ない。

・第3希望までの授業のどこにも入れずに、強制的にそれ以外の科目に割り振られるケースが見られる。これまでの共通教育と変わって、授業が必修化され、上記のように、希望しない授業にまわされる学生もかなり存在するようである。これが成功と言えるのか、失敗なのかの判断を検証する必要がある。

・今回の新しい共通教育制度は、学生をクラス編制し、クォーター制にすることが特徴であるが、学生から選択の自由を奪い、自主性が育つ機会を剥奪し、授業期間も半減し、教育の質と量が半分以下になった（8回では、まとまりのある授業が構成しにくい）といった問題がある。

（糸長センター長からのコメント）

新しい共通教育では、「何を教えるかではなく、何ができるようになるか」、受動的な学びから能動的な学びに転換、教え過ぎずに考えさせる機会を与えることが重要なポイントであるとの説明があった。

## 2. 1の課題の解決に当って、どのような対応を考えているのかを具体的に記述して下さい。

・授業評価にとどまらず、学生に共通教育のシステムに関する問題点や評価を問うアンケート調査を実施する必要があると思われる。

・自由選択科目について再考することや抽選対象クラスの学生数を必ずしも一律同数とはせず、もう少し柔軟に対応する（希望の多い授業は、受講数を多めにするなど）ことなど、クラス指定の授業科目、クラス選択の授業科目の在り方や抽選方法について、再度検討する必要があると思われる。

・授業科目によっては、セメスター制の授業も1年生対象に開講を考える。



（糸長センター長からのコメント）

新しい共通教育に関するアンケート調査については具体的に検討してみたい。また、科目選択や抽選のあり方についても再検討する余地はあると考えている。

セメスター制の授業を取り入れることについては、時間割編成の点で非常に難しいと考えている。昨年度、事務担当とも詳細のシミュレーションを行った経緯がある。

この後、新しい共通教育全般について、参加者との質疑応答を行った。主な意見等は以下の通りである。

Q1 大学教育機構サイドとして、新しい共通教育について何らかの問題点を感じているか。

A1 クラス配属希望に添えなかった学生が相当数いたことを把握しており、後期の授業開始時に、学生の意思確認を行うようお願いしている。一方において、共通教育科目を一律化したことで、学生の受講態度が真面目になったというコメントも聞いている。  
年度半ばであり、1年間を通して状況を把握していきたいと考えている。

Q2 新しい共通教育について、受講学生からの意見等を聞くことが大事ではないか。

A2 年度末に向けて検討を進めたい。また、授業担当教員へのアンケート調査も必要であると考えている。  
比較対象がない中で、学生にアンケート調査を行うことはナンセンスではないかという意見もあったが、その点も含めて検討を行いたい。

Q3 教員免許取得希望者に限定された「スポーツ運動実習」の履修について、単位を取得できなかった学生の扱いはどうなるのか。

A3 従前の通りであり、再履修等の特段の対処は行わない。

Q4 教員の授業担当曜日の割り当てが限定されており、もう少し柔軟にならないのか。

また、学生の時間割にも偏りが生じており、学生自身が自分で時間割を決められる柔軟性を持たせることはできないのか。

A4 共通教育の時間割編成においては、全学部における調整を要するため、個別の要望に沿うことは難しい面がある。一案としては、集中講義での開講という処置もあろう。

ただし、先生方で要望がある場合には、提案していただければ対応を適宜検討する余地はある。

また、学生の時間割に偏りが生じていることも認識しており、今後の課題としたい。

Q5 能動的な学びへの転換とクォーター制の導入との連動性についてお聞きしたい。

A5 直接的な連動性があるわけではないが、根本的な課題として、奇数単位科目と偶数単位科目の混在の解消ということがあった。

クォーター制にすることで十分な学習ができないのではないかという意見もあるが、

しっかりとした授業設計をすれば、授業時間外学習も増えているケースもある。

Q6 新しい共通教育では受動的な学びから能動的な学びに転換し、自ら考えさせることが重要なポイントと説明されたが、 Semester制からクォーター制に移行し、学生から科目選択の自由を奪うことが、なぜ能動的な学びに転換し、自ら考えることになるのか、そのつながりが見えてこない。

A6 新しい共通教育への移行とそのこととは関係ない。

Q7 新しい共通教育を昨年までの共通教育に戻すことを希望する。

A7 現在の一年生が在学している間は動かせない。

Q8 クォーター制になって、Semester制の時より、学生理解が成熟しないと感じる。

A8 授業の仕方次第で、そうでない例も聞いている。



Q9 科目抽選に洩れた学生は、科目履修そのもののモチベーションを減退させる要因になりかねないと思うが、何かよい方策はないのか。

A9 学部で提供する科目内容をある程度統一的なものとする考え方があがるが、分野に応じて対応が難しいことも理解している。現状において、今の枠組の中で対処するしかないと考えている。

Q10 アクティブ・ラーニングを推奨していく上で、現在の教室環境に、移動式机などを取り入れて、改善していく必要があるのではないか。

A10 教室環境の改善の必要性について認識している。本年10月から図書館のラーニングコモンズが開設されるが、それ以外の教室環境についても改善に向けて適宜要求していきたい。ただし、現状では、既存の教室環境の中で、可能な範囲でアクティブ・ラーニングの要素を取り入れていってほしいという認識である。



## 第3節 教育改善に関する活動

平成 25 年度教育学部の教育改善に関する活動は、アクティブ・ラーニングの実際に触れるため、学部の阿濱茂樹先生に講師をお願いして、実際に模範授業を見せていただき、授業終了後、参加者からの質疑に対して応答を頂きつつ、相互の意見交換を行った。

日時、場所等は次の通りである。

日時：12月4日（水）2.3 コマ  
講師：阿濱茂樹准教授（技術教育教室）  
授業名：技術科教育法  
場所：教育学部 43 番教室  
内容：工夫し、創造する授業づくり

（授業の流れ）

- ①知的財産の創造についての説明。これからの日本においては、知識依存産業の充実が急務であることを強調（具体的な例、比喻を上げた説明でわかりやすかった。また学生に質問を投げかけ、答えさせるなど学生に興味を抱かせる工夫が見られた）。
- ②1人ずつに厚紙のカードが配られ、机の上にはハサミと筆記用具のみ。課題は、カード一枚のみを使ってペンを垂直に立てること。
- ③作業ののち、自分の作品の工夫をPRする（PRの観点を記入するワークシートを配布）。
- ④二枚目のカードを配布。課題は、15 cm×15 cmの紙でできるだけ高いタワーを作る。
- ⑤作業ののち、自分の作品の工夫、他人の作品の工夫について整理し、PRする。

（授業後に出された意見）

- ・アクティブ・ラーニングとは活動しながら学ぶということであり、技術科という教科の特を生かした授業であったと思う。
- ・導入で身近なものを取り上げ、「知的財産」という概念を分かりやすく説明していたのが良かった。
- ・他の人の作品を見るという段階が設定されているのは有効である。「創造≠独創」ということが実感されたであろう。
- ・実践の後の振り返りでは、自分の考えを言語化するということが大切。
- ・「導入」→「活動」→「振り返り」、と言う順序の授業で、「活動」が授業の中核であるにしても、それらの移行が大変スムーズで、あった。むしろ、「導入」と「振り返り」がアクティブラーニングを成立させるカギかもしれないと感じた。
- ・学生の作業が中心の授業なので、どうしても作業に目が行きがちになるが、やはりそういう授業でも学生とのコミュニケーションを促進する教師の話術は非常に重要であると感じた。
- ・授業の最初の知的財産の説明から実際のモノづくりに映る、そのつなぎ方がスムーズで、非常に上手だった。やはりそういうところに教師の熟練が現れると思う。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成26年4月にIYOCAN2システムで確認した学生授業評価、教員授業自己評価の結果を示し、考察する。

まず実施率については、表3及び表4のように、平成25年度学生授業評価の実施率が82.1パーセント、教員授業自己評価の実施率は36.9パーセントであった。最近の傾向としては、学生授業評価も教員授業自己評価も実施率は上昇傾向にあり、昨年は学生授業評価の実施率が87.3パーセント、教員授業自己評価の実施率は54.5パーセントであったのに対し、平成25年はいずれも大きく落ち込んでいる。その原因はにわかに特定できないが、より呼びかけを強化するなどして実施率を回復することは、次年度に向けての課題であろう。

表3 2009年度～2013年度 学生授業評価アンケート実施状況

部局名(コード)			全数(A)			開設科目(B)		
			CABOS登録科目数	実施数		科目数	実施数	実施率
教育学部(071) 2009年度			771	590		771	590	76.5
教育学部(071) 2010年度			773	595		773	595	77
教育学部(071) 2011年度			758	609		758	609	80.3
教育学部(071) 2012年度			765	608		765	608	79.5
教育学部(071) 2013年度			779	576		779	576	73.9
対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			B&C		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
747	590	79	722	589	81.6	747	590	79
742	595	80.2	729	595	81.6	742	595	80.2
703	609	86.6	719	609	84.7	703	609	86.6
699	608	87	718	607	84.5	699	608	87
703	576	81.9	726	576	79.3	703	576	81.9
B&D			C&D			B&C&D		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
722	589	81.6	700	589	84.1	700	589	84.1
729	595	81.6	705	595	84.4	705	595	84.4
719	609	84.7	700	609	87	700	609	87
718	607	84.5	695	607	87.3	695	607	87.3
726	576	79.3	702	576	82.1	702	576	82.1
実施率最大								
						84.1		
						84.4		
						87		
						87.3		
						82.1		

表4 2009年度～2013年度 教員授業評価アンケート実施状況

部局名(コード)		全数(A)			開設科目(B)			
		CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率		
教育学部(071) 2009年度		771	371	771	371	48.1		
教育学部(071) 2010年度		773	387	773	387	50.1		
教育学部(071)2011年度		758	341	758	341	45		
教育学部(071)2012年度		765	380	765	380	49.7		
教育学部(071)2013年度		779	259	779	259	33.2		
対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			B&C		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
749	370	49.4	722	360	49.9	749	370	49.4
742	387	52.2	729	382	52.4	742	387	52.2
703	341	48.5	719	341	47.4	703	341	48.5
699	380	54.4	718	379	52.8	699	380	54.4
703	259	36.8	726	259	35.7	703	259	36.8
B&D			C&D			B&C&D		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
722	360	49.9	700	359	51.3	700	359	51.3
729	382	52.4	705	382	54.2	705	382	54.2
719	341	47.4	700	341	48.7	700	341	48.7
718	379	52.8	695	379	54.5	695	379	54.5
726	259	35.7	702	259	36.9	702	259	36.9
<b>実施率最大</b>								
		51.3						
		54.2						
		48.7						
		54.5						
		36.9						

次に表5「アンケート結果の経年変化」の結果について考察する。ここでは、Q1「学生出席」、Q2「授業外学習時間」、Q8「学習目標達成」、Q9「学生理解」、Q10「学生満足」の五項目を取り上げたが、これらはいずれも非常に良好な結果を示している。Q1「学生出席」では、その合計値(4.72)が過去最高であった平成22年度の値(4.71)を抜いて、5年間で最高の値を示した。また、Q2「授業外学習時間」、Q8「学習目標達成」、Q9「学生理解」、Q10「学生満足」の四つの項目では、それぞれの合計値が、いずれも過去最高であった前年(平成24年)度の値を抜いて5年間で最高の値となった。中でも、Q8「学習目標達成」、Q9「学生理解」、Q10「学生満足」の三つの項目においては、実験・実習科目における数値上昇が著しい。そのことは、他科目の数値がほぼ横ばい傾向を示している(一部ではやや低下)中で、合計の数値を押し上げるのに非常に有効に働いているといえる。いずれにせよ、ここ5年間で学生授業評価の結果は確実に上昇傾向にあることから、教員の授業への工夫と熱意が授業の質を維持、改善していると考えてよいであろう。今後もこの傾向を継続し、さらに授業の質を向上させていきたいものである。

表5 アンケート結果の経年変化（太字の数字は過去5年間で最大値であることを示す。）

Q1 学生出席（あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください）

	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計
教育学部(2009)	4.66	4.6	<b>4.79</b>	<b>4.74</b>	4.59	4.68
教育学部(2010)	4.7	4.66	4.74	<b>4.74</b>	4.75	4.71
教育学部(2011)	4.68	<b>4.68</b>	4.72	4.72	4.59	4.69
教育学部(2012)	4.67	4.6	4.78	4.69	4.78	4.68
教育学部(2013)	<b>4.73</b>	4.63	<b>4.79</b>	4.68	<b>4.8</b>	<b>4.72</b>

Q2 授業外学習時間（あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？）

	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計
教育学部(2009)	2.3	3.26	3.27	2.66	1.97	2.47
教育学部(2010)	2.49	<b>3.51</b>	3.53	2.88	2.23	2.69
教育学部(2011)	2.48	3.17	3.28	2.96	2.21	2.65
教育学部(2012)	2.62	3.42	<b>3.76</b>	3.06	2.61	2.82
教育学部(2013)	<b>2.67</b>	3.28	3.68	<b>3.15</b>	<b>3.17</b>	<b>2.87</b>

Q8 学習目標達成（あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？）

	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計
教育学部(2009)	3.87	4.08	4.23	3.94	3.87	3.91
教育学部(2010)	4.06	4.26	4.13	4.15	4.33	4.11
教育学部(2011)	4.03	4.25	4.26	4.14	4.21	4.08
教育学部(2012)	4.14	4.28	4.28	4.23	<b>4.43</b>	4.18
教育学部(2013)	<b>4.18</b>	<b>4.29</b>	<b>4.4</b>	<b>4.27</b>	4.31	<b>4.22</b>

Q9 学生理解（あなたは、この授業の内容を理解できましたか？）

	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計
教育学部(2009)	3.98	4.23	4.33	4.04	4.05	4.02
教育学部(2010)	4.14	4.38	4.23	4.21	4.39	4.19
教育学部(2011)	4.12	<b>4.39</b>	4.38	4.2	4.3	4.17
教育学部(2012)	4.22	4.36	4.35	4.27	<b>4.52</b>	4.25
教育学部(2013)	<b>4.26</b>	4.36	<b>4.53</b>	<b>4.3</b>	4.27	<b>4.29</b>

Q10 学生満足（この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？）

	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計
教育学部(2009)	4.1	4.46	4.48	4.16	4.11	4.15
教育学部(2010)	4.28	4.6	4.34	4.35	4.52	4.33
教育学部(2011)	4.24	<b>4.61</b>	4.47	4.3	4.42	4.29
教育学部(2012)	4.34	4.52	4.48	4.4	<b>4.67</b>	4.38
教育学部(2013)	<b>4.38</b>	4.56	<b>4.65</b>	<b>4.42</b>	4.45	<b>4.41</b>

参考として、教育学部学生授業評価質問用紙所載の質問10項目を以下に掲載する。表5の評価値は、各回答選択肢における回答文後のカッコ内に示された整数(5)～(1)が評価値を表し、アンケート回答の評価値を平均したものが、表5中の評価値となる。

質問1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）

回答選択肢 1. 90%以上（14回以上）(5) 2. 80～90%（12回～13回）(4) (4) 3. 60～80%（9～11回）(3) 4. 40～60%（6～8回）(2) 5. 40%未満（6回未満）(1)

質問2 あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答選択肢 1. 3時間程度または以上(5) 2. 2時間程度(4) 3. 1時間程度(3) 4. 30分～50分程度(2) 5. 30分未満(1)

質問3 教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)

質問4 専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)

質問5 テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. この授業は該当しない

質問6 板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. この授業は該当しない

質問7 学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)

質問8 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. 答えられない

質問9 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)

質問10 この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

回答選択肢 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)



## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度教育学部FDにおいては経費を使わなかった。

## 第6節 来年度の課題

授業公開においては、最近三年間の前期後期それぞれ2件ずつ（養成系、非養成系各1件）合計4件ずつ実施しており、全22教室のうち15教室が実施したことになる。教育学部改組によってローテーションをどうするかを新たに考える必要があるが、教員の授業への意識を向上させるために、何らかの形で授業公開を続けていく必要がある。

学生授業評価実施率、教員授業自己評価入力率のいずれにおいても、平成25年度には落込みがあった。そのいずれに対しても教員の意識向上にむけてPR活動を強化するなど、組織的な取り組みを重ねていく必要がある。

## 第6章 経済学部でのFD活動

### 第1節 授業公開

本年度は経済学部・経済学研究科合同の若手教員対象のゼミ活動改善FD研修活動に注力し、これをもって授業公開に代えた。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成25年10月23日(水)、13時30分より14時20分にわたり、大学教育機構との共催により、新しい共通教育が半年間行われた経験から、その改善をテーマとした教育改善FD研修会が実施され、機構側からの説明の後、質疑応答が行われた。本研修会は経済学部の定例教授会の直前に行われ、ほとんどの教員が研修会に参加した。

### 第3節 教育改善に関する活動

2013年度はゼミ教育の改善、それも特に若手教員のそれ、に向けた、中堅の二教員による積極的な取組が行われた。

#### 1 第一回 ゼミ教育改善研修活動 (実施者：藤田健)

##### (1) テーマ・目的

第1回ゼミ運営FD：キックオフ・ミーティング

##### (2) 日時

2013年5月22日(水) 12:50～14:20

##### (3) 場所

経済学部第1会議室

##### (4) 参加者

12人

##### (5) FD活動の内容

このたびのFD活動は、はじめての会合ということもあり、ゼミ運営FDがどのように進められる

のか、FDの中心的テーマは何かをお伝えすることにした。そして、ゼミ運営FDの話題提供として、FD主催者の一人である藤田健のゼミ運営について、「藤田健ゼミの活動内容のご紹介」というテーマで説明させて頂いた。

藤田健ゼミは、2年間（2年次・3年次）で2回、理論と実践をつなぐ実践的教育プロジェクトを行っている。実践的教育プロジェクトは、地域観光マーケティング演習の主催と大学間製品開発プロジェクト（Student Innovation College：通称Sカレ）への参加である。これらのプロジェクトを通して、製品開発論とマーケティング理論を実践し、理論を体得することを目指す。その過程で、ゼミ運営に「マネジメント」を導入し、学習を効率的に進めている。話題提供では、藤田ゼミの運営において実施している「マネジメント」の方法をご披露した。

おおむね40分間の話題提供のあと、残された50分間で活発な質疑応答が行われた。例えば、マネジメントはどの段階で導入するのか、言うことを聞かない学生はどのように扱うのかなどの質問が出された。

## （6）開催者の感想

本FD活動は、おもに経済学部若手教員を対象に実施している。それにもかかわらず、中堅クラスの教員やベテラン教員にもご参加いただき、活発な質疑応答だけでなく、ベテラン教員からのノウハウ公開も行われた。おかげで、講師を務めさせて頂いた小生も、多くを学ぶことが出来た。

もちろん、若手教員のみなさんも、ゼミ運営について、強い関心をもっておられることがよくわかった。50分にわたる質疑応答の中で、「どのようにすればよいのか」「本当のところ、どうなんだ」「具体的にはどうなっているのか」という若手教員の疑問が、次々と出てきたからだ。

これまで、ゼミの運営について意見交換をする場は公式的にはなかった。今回のFDを試行してみたことによって、教育問題については多くの教員が関心を持っていることが理解できた。今年度はしっかり実施したい。

## （7）参加者の感想

はじめて開催したFDであったこともあり、感想を書いて頂く用紙を用意していなかった。次回以降に用意してFDに臨みたい。

（文責：実施担当者・藤田健）

## 2 第二回 ゼミ教育改善研修活動 実施者（藤田 健）

### （1）テーマ・目的

第2回ゼミ運営FD

羽根拓也氏ワークショップ「学生の能動性の喚起～ゼミのマネジメント～」

### （2）日時

2013年6月12日（水）10:20～11:50

### （3）場所

経済学部 B102 教室

#### (4) 参加者

8人

#### (5) FD 活動の内容

このたびのゼミ運営 FD は、アクティブ・ラーニング代表の羽根拓也氏と、同社コンサルタントの得能絵里子氏をお招きして、「学生の能動性の喚起～ゼミのマネジメント～」のワークショップを実施した。FD 活動の参加者は、羽根氏にファシリテートされながら、どうしたら能動的に学習できるようになってくれるかについてディスカッションをした。

羽根先生から教えていただいたことは、以下の通りである。学生に学習を「自分のこと」と認識させるなら、自己選択の機会を用意して選ばせ、選んでやっていることの進捗の手応えを与えると良い。そうすることで、学習者は学習性達成感を高め、満足度を高め、継続的な学習を実施してくれる。ゼミ教員は、こうした仕掛けをゼミ内に用意しなければならない。そのために、私たち教員は何をすればよいのかを議論し、お互いのノウハウについて語り合った。

#### (6) 開催者の感想

羽根氏のワークショップはたいへん刺激的で、学ぶことも多い機会であった。とりわけ、私たち教員が学生に「勉強させる」のではなく、「勉強したくなる仕掛け」を用意し、その仕掛けを維持発展させなくてはならないこと。教員は、何を教えるのか、どのように教えるのかを考えるだけでなく、どのような仕掛けを作れば、学生に勉強し続けたいと思わせるかを考えなくてはならないこと。この2点を強く意識できるようになった。

第2回ゼミ運営 FD の開催時間が、通常授業と重なっていたこともあり若干参加者は少なかった。しかし、参加した教員たちは、非常に熱心にディスカッションを行い、多くを学んだように思われる。外部講師をお招きした研修も、たいへん有益であることがわかった。

#### (7) 参加者の感想

アンケートはアクティブ・ラーニング社へ手渡したため、現物は残っていない。回収時に目を通した限りでは、参加者の多くはワークショップの内容に感銘を受けていたようである。

(文責：実施担当者・藤田健)

ワークショップを進める羽根氏



### 3 第三回 ゼミ教育改善研修活動 実施者 藤田 健

#### (1) テーマ・目的

第3回ゼミ運営FD

「地域観光マーケティング演習@美祢市」成果報告会

(第1回・第2回ゼミ運営FDの「マネジメント」成果の見学)

#### (2) 日時

2013年7月18日(木) 14:30~16:00

#### (3) 場所

経済学部 C201 教室

#### (4) 参加者

8人(齋藤、野村、兵藤、古賀、岡田、諏訪、城下、山本)

#### (5) FD活動の内容

このたびの第3回ゼミ運営FDは、第1回・第2回のゼミ運営FDで学んだ「ゼミ運営へのマネジメントの導入」が、実際にどのように行われ、どのような成果を出しているのかを確認して頂く目的で実施した。そのため、ゼミ運営FD参加者は、FD実施者(藤田)がおこなうゼミ運営成果の報告会(地域観光マーケティング演習@美祢市 成果報告会)に参加し、その報告を聞いて、成果を確認した。

#### (6) 開催者の感想

地域観光マーケティング@美祢市は、2013年5月に美祢市との間で話が持ち上がり、6月中旬から7月中旬にかけて実施したもので、大変急ごしらえのプロジェクトであった。4月からマーケティングを勉強し始めたばかりの2年生のゼミ生であったが、大急ぎで美祢市を調査して分析し、なんとかアイデアをまとめ、プレゼンテーションを実施できた。

今回のFDは、ゼミの学生に対して能動的学習を促す「プロジェクト・ベース・ラーニング」を実施し、マネジメントが機能するとどのような成果を生み出せるかをご披露するために、急遽開催したものであった。短期間のプロジェクトではあったが、学生達の自発的な活動により、一定の成果を出すことができた(後日、山口新聞に藤田ゼミの記事が掲載された)。その成果を教員の皆様に見て頂けたことはたいへん有り難いことであった。

#### (7) 参加者の感想

参加者へのアンケートを一部抜粋して紹介する。

・外部に向けて成果報告をすることが重要なことだと改めて実感できました。学生にとっては自分の目標となり、反省の機会となります。(准教授、男性)

- ・時間が限られる中、報告会の開催までスケジュールを組まれ、指導されていることに勉強をさせて頂きました。(准教授、男性)
- ・今回学生のアウトプットを見られたことで、学生の持つポテンシャルを推測することが出来た。ゼミ運営という面では、学生が今回のアウトプットに到達するまでの過程(取り組み方、直面する問題、その克服方法など)を知ることができれば、より良かったと思う。(講師、男性)
- ・短期間でよく構成されたプレゼンを完成させていたことに感心しました。(准教授、男性)
- ・特定の地域のツアーを考えると、学生も意欲的に取り組めたのかなと思った。学術性はあまり感じなかったが、2年生の段階ではそれでいいのかもしれない。(講師、男性)
- ・実践的で素晴らしいFDだと思います(教授、男性)

プレゼンをする藤田ゼミ学生



FD参加者と学生



(文責：実施担当者・藤田健)

## 4 第四回 ゼミ教育改善研修活動 実施者 藤田 健

### (1) テーマ・目的

第4回ゼミ運営FD

「ゼミ募集にむけた教育計画」

### (2) 日時

2013年10月2日(水) 13:00~14:20

### (3) 場所

経済学部第1会議室

### (4) 参加者

10人(岡田、諏訪、山本、多賀谷、塚田、古賀、湊川、櫻庭、服部、兵藤)

### (5) FD活動の内容



このたびの第4回ゼミ運営FDは、①「プロジェクト・ベース・ラーニング」(PBL)の教育プログラムをいかに構築するか、②教員が提供する教育プロジェクトにあわせた学生をどのように募集するか、の2点について講演した。前者の教育プログラムの構築については、教育の目標設定、成長プロセスのフェーズの理解、フェーズ毎のコンピテンシー開発といったプログラム開発に係わる要点を説明した。後者のゼミ募集については、経済学部でのゼミ募集プロセスにあわせてどのような対策が必要となるかを事細かに説明した。最後に、経済学部の教育・研究活性化経費の申請方法についても紹介した。

## (6) 開催者の感想

今回はPBLの教育プログラムを構築するためのステップを説明させてもらった。しかし、抽象的な説明をしたことが災いし、参加者の興味をかき立てるような説明にはならなかった。この点について参加者からも改善の余地があるとのこと指摘を頂いたので、今一度、説明の方法を考えてなおしてみたい。

ゼミ募集における教員の役割について説明したところ、PBLの節とはうってかわって、参加者の興味をかき立てられたようだ。とりわけ学生は教員のことを全く知らず、学問に興味を持っていない現状を指摘し、そのなかで教員がどういう教育プログラムを提供するかを明示し、教員が自らゼミ募集に顔を出して的確な情報提供に励むことの必要性について訴えかけた。ゼミ募集のプロセスが各教員に知られていなかったのも、適切な方法を周知徹底することができ、さっそく実践して下さった先生もいらっしやった。今後は、このように効果的な情報提供ができるよう、講演内容を見直していきたい。

## (7) 参加者の感想

参加者へのアンケートを一部抜粋して紹介する。

- ・前半に関しては、やや抽象的であったとの印象を受けました。後半は共感することが多く、参考になりました(准教授、男性)
- ・3年間の各年度におけるゼミの取り組みの違いなどがあれば聞きたかったです。(講師、男性)
- ・皆で学びあう、というのはとても良い。(教授、男性)
- ・マーケティング以外の分野や、他の社会科学のゼミを実施する場合の応用方法についてもご教示頂きたい。(講師、女性)
- ・ゼミ生に教育ではなく、コーチをするという考え方は非常に参考になりました。ゼミ生を採用した後ではもう手遅れで、採用段階で良い学生をとらないといけないというのは、目を開かされた思いです。(准教授、女性)
- ・第三者評価は重要だと思います。熱心な取り組みでありがたいです。(教授、男性)
- ・私のゼミでも討論大会に参加しますが、準備のプロセスの話が参考になりました。(講師、男性)



研修風景

## 5 第五回 ゼミ教育改善研修活動 実施者 藤田 健

### (1) テーマ・目的

第5回ゼミ運営FD

羽根拓也氏ワークショップ「学生の能動性の喚起～ゼミのマネジメント～」

### (2) 日時

2013年11月8日(金) 12:50～14:20

### (3) 場所

経済学部 B102 教室

### (4) 参加者

7人(塚田、櫻庭、多賀谷、淵川、齋藤、新屋敷、藤田)

### (5) FD 活動の内容

このたびの第5回ゼミ運営FDは、第3回のワークショップのつづき羽根拓也氏と得能絵里子氏をお招きし、ワークショップを行った。中心的なテーマは、前回に引き続き「学生の能動性の喚起～ゼミのマネジメント～」を深めることにある。とりわけ、アクティブ・ラーニングの導入を進めるにあたって発生する課題への対応と、その結果生まれる新たな可能性や学生の成長について、学ぶことができた。

### (6) 開催者の感想

この度のワークショップでは、前回の6月のワークショップの内容に上乘せする形で、①有機的な授業をどうつくるか、②そのために「静かなゼミ(授業)空間」をいかにつくるか(On/Offのコントロール)、③「教えあう」という学習方法(Learning in Teaching: Lite)の導入、④Liteを使って「能動性」を高める方法、⑤授業中での「有機的な対話」の方法とプロセス(質問→回答→編集→講義)という5つの技術を学んだ。いずれも教員がすぐさま実践可能で、実際に試して経験を積めば、より効果的なゼミ運営が可能になると実感した。こういうワークショップは、経済学部教員にとって有効だったのではないだろうか。

### (7) 参加者の感想

参加者のアンケートは羽根先生に手渡してしまったので、手元に残っていない。回収時に文面を確認したところ、多くの教員が感銘を受けていたことはわかったので、効果的なFDだったのではないかと考える。

## ワークショップの様子



## 6 第六回 ゼミ教育改善研修活動 実施者 藤田 健・古賀 大介

### 6. 1 藤田報告

#### (1) テーマ・目的

「出口」(卒業後)を意識したゼミナール教育はどうあるべきか

#### (2) 日時

2014年1月08日(水) 13:10~16:40

#### (3) 場所

経済学部 B101 教室

#### (4) 参加者

18人

#### (5) プログラム

- ① FD委員会委員長(塚田教員)によるFD開催の趣旨説明
- ② 藤田健教員・古賀教員のゼミナール教育の取組み事例紹介
- ③ 報告に対する質疑応答ならびにディスカッション

#### (6) 今回のFD研修の趣旨

「経済学部からどのような人材を輩出すべきか」を念頭に置きながら、新たなゼミナール運営のあり方を考えるFD研修を実施した。山口大学経済学部では、従来から少人数・ゼミナール教育がその特色として謳われてきた。しかし、いかなる教育を行っていくべきかについては教員の間でこれまでほとんど検討されたことがなかった。それ以前に、ゼミナール教育内容が一義的に教員の裁量に任されていることもあり、お互いのゼミナールにおいてどのような教育を行っているのか、教員間で情報を共有することすら少なかった。

また昨今では、それぞれの大学がいかなる人材を養成するのかを明確化にすることが求められてい

る(大学ミッションの再定義)。ゼミナールという少人数教育方法を活かし、今後いかなる人材を養成していくべきか、ということも検討していかなければならない時期に来ている。以上のような課題・状況を踏まえつつ、経済学部として今回タイトルに掲げるFD研修を実施することにした。

## (7) 卒業後のキャリア(「出口」)を意識したゼミナール教育の事例紹介

現在、経済学部では各教員の裁量に基づき、様々な特徴ある教育が行われているが、前述したように、それぞれの教員が体系的にどのように教育を行っているのかをお互いに公開することはほぼ皆無であった。

そこでこの度、学生の卒業後のキャリアを意識した体型的なゼミナール教育を行っている、2つのゼミナール(藤田健教員・古賀大介教員)がそれぞれ50~60分の時間をとり事例紹介を行った。それぞれのゼミナールの概要については、当日配布されたレジュメ資料(添付資料1.2→後述6.2参照)を参照してもらいたい。両ゼミは、ローカル(地方の優良企業・官公庁:藤田ゼミ)・グローバル(対外志向の大手企業:古賀ゼミ)に有用な人材を多数送り込むための教育プログラムをそれぞれオリジナルに生み出し、実践に取り組んでいる。

藤田ゼミでは、地方経済・企業・官公庁においてマーケティング理論・マネジメント理論を習得した人材が著しく不足していることを念頭に、そうした理論をマスターした即戦力的ビジネスパーソンの供給を目指している。主な教育の柱は、一生涯にわたって活用できる理論を体得すべく、研究書・テキストでの学習→その実践としての商品開発(各種コンペへのゼミナール単位での参加)を3年間にわたって実施することにある。各種コンペでは数多くの賞を受け取るなど、優秀な人材を多数輩出するに至っている。

古賀ゼミでは、現在、日本のリーディング企業がグローバル人材を求めていることに対応すべく、グローバル人材教育で優れているイギリスの伝統的な教育制度・日本の医学部医局制度をヒントに独自の教育プログラムを生み出し、歴史・経済をベースとする教養と品格をもつ人材、かつ海外で活躍することを希望するバイタリティ溢れる人材養成を行っている。この結果、卒業生のほぼ全員が日本のリーディング企業(上場企業)に就職している。

FD研修会では、それぞれのゼミのコンセプト・ゼミ募集の方法から、具体的な教育カリキュラム内容、成果等が幅広く紹介された。また、両ゼミの共通点・相違点などの紹介もあり、議論の素材となる論点整理もあわせて提起された(添付資料3→後述6.2参照)。

## (8) 質疑応答

各事例紹介が終わった後、休息をはさんで、中田学部長を司会者として、質疑応答を行った。まずは、当日行われた主要な議論を紹介したい。(敬称略)

塚田: 社会人基礎力はどのような力が身につくか。研究に生かされた内容とはなにか。

藤田: 社会人基礎力は全体的に高めることができる。特に知識を集め、考え、発表し、他人の意見を聞いてまた考える。そういう活動を個人でもチームでもできるようになる。(注:経済産業省によると、社会人基礎力は「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力だと言われている。)

陳: 教室はどうしているのか? ゼミ指導に週当たりどれだけの時間をかけているのか? パワハラ・トラブルへの対応はどうしているのか? 学生評価の基準・尺度はどういうものなのか?

藤田: (教室について) 教室は一週間単位で学生に予約させている。長時間あいている教室はないので、空き教室を見つけて、転々と移動しながらサブゼミをしている。ゼミ専用で長時間使える「プロジェクト演習室」のような部屋が複数あればよい。

藤田: (ゼミ指導の時間) ゼミ指導の時間は正確に測ったことはないが、ネット(Facebook)でやりとり

をすることを含めれば、プロジェクト期間中は、毎日のように学生と接している。最終プレゼンが近づくと、毎日、長時間にわたって学生と顔をつきあわせることもある。通常のゼミは14時30分に始まって、20時から21時ぐらいまではやっていることが多い。

古賀：2年生時には金曜日の夕方16:30～21:00か22:00まで行っている。また2年生前期には教員・新ゼミ生間の距離を近づけるため、近所のファミリーレストランに班（チューター）単位で出かけ夜食を取る。3年生時には、0時を回ることも珍しくなくなる。

藤田：（パワハラの問題）パワハラ・トラブルへの対応は、学生と信頼関係を築くことにつける。学生に対して強く言うときは、自分の言いたいことだけを言うのではなく、なぜダメなのか、どうすれば良いのかと、時間をかけてじっくりと理解してもらうようにする。そうすることで、無用なハラスメントをひきおこさないように心がけている。

古賀：厳格な指導には危うさがあることを自覚している。教員と学生とのマッチングには、ゼミ募集・ゼミ生選抜段階において細心の注意を払っている。例えばゼミのコンセプトと教育内容等の周知など。また、教員からの注意・指導を受け入れるための信頼関係作りにも、1～2年生段階から多くの時間を裂いているが、これらの努力にも関わらず、ゼミとあわず、ゼミを辞める学生が各期1～2人出ている。その場合、誠心誠意1対1で長時間に語り何度も話し合うことを心がけている。

古賀：（学生評価の基準） 報告内容を全員がいかに正確に理解しているかを、プレゼン・レジュメの分かりやすさ、質疑応答などで総合的に判定している。判定項目については、事前に学生に開示し、A～F判定で行っている。数回のゼミ発表を通じて、どのレベルの発表が合格水準にあるのかが、ゼミ生自身で理解できるようになる。

齋藤：アルバイトはしているのか。

藤田：学生はアルバイトをしている。ただし、プロジェクトで忙しいときは、バイト先のシフトを個別に調整しているようだ。

中田：学生と教員間をつなぐ仕組みはどこからヒントを得たのか？ ほかの授業との重なりは大丈夫か？ クラブ活動への影響はあるのか？

藤田：（クラブ活動のみ回答）クラブ活動への影響は少なからずある。ゼミを優先するかクラブを優先するかは相談してきめる。たとえクラブを優先しても、チームでサポートしあうので、1、2度抜けた分は穴埋めできる。

古賀：チューター制度は、医学部の医局制度（医局長・オーベン・ネーベン制度・班制度）からヒントを得たものである。古賀ゼミでは、ゼミ募集の段階で、体育会系部活動を応援する、体育会系部活所属者を優遇することを謳っているため、ゼミ生の半分は体育会系の部活動生である。

小林先生：二学年をまとめた指導をしているのか？ やっているとすれば、どのようにされているのか。

山本：二学年をまとめた指導が常識では？ ゼミ募集に先生が来ていないのは問題だ。

藤田：二学年連続指導は試みているところである。経済学部のカリキュラムで、ゼミの時間に必修科目が重なっていることもあり、ゼミ生全員は参加できない。しかし、他の学年のゼミに参加できる学生がいれば、輪読やプレゼンの際に参加させるようにしている。そうすると、ディスカッションのレベルが向上したり、先輩のノウハウや考え方が後輩に移転したりする効果が生まれている。

古賀：経済学部の時間割は現在、ゼミを2コマ連続できるように割り振られている。このため一部の教員は2学年合同でゼミを行っているところもある。こうした時間割を活用して、独自のカリキュラムを組んでみるのもいいと思う。また、カリキュラムによっては積み上げ型、レベル別に行う場合もあるので、学年別に行う現行のシステムにも利点がある。

藤田：（ゼミ募集に先生が参加する）ゼミ募集に先生がいくと、学生が安心して先生を選んでくれるよ

うになる。ゼミ募集は学生にとってリスクの高い選択なので、教員からできる限りの情報を提供し、ゼミの内容を理解してもらってから志望してもらえると良いだろう。

古賀：山本勝也教員の指摘どおり、ゼミ募集をかける教員は最低一度ごく短時間でいいので顔見せを行うべきだと思う。短時間でも顔見せを行うことで、学生たちはさまざまな印象を受け取るはずである。また、ゼミ募集でのシラバスの発信のあり方、ゼミ募集説明会・ゼミ公開には改善の余地が大いにあると思う。ゼミに関する情報が少ない学生は、先輩からの噂に基づきゼミを選択することが多くあると聞く。また、学生が主体のゼミ説明会・公開ゼミで「うちのゼミ楽勝」などの宣伝を数多く受け、ゼミの内容をほとんどまともに得られない状況にある。こうした状況をかえるべく、学生任せにせず、教員自らがより積極的にゼミの情報を発信すべきである。

中村：IT(主にSNS)活用はしているのか。国際化したくない親御さんの意向への対応は？

藤田：(ITのみ回答) SNSは大いに利用している。SNSがなければ学生とは直接顔を合わすことになり、貴重な昼間の時間が奪われる(あるいは、夜中にファミレスへ行ってゼミをすることになる)。SNSを使うと教員の空いている時間に学生対応をすることができる。SNSがなくては、プロジェクト型のゼミはやりにくかったと思う。

古賀：SNSは以前、積極的に活用していたが、藤田先生とは逆に最近ではあまり活用しなくなった。最近では学生・教員間の各種連絡手段として用いているにとどめている。後者の質問に対しては、就職指導を行う早い段階で親御さんの意向を徹底して学生から聞くようにしている。このため親御さんとの意向とのギャップは少ない。

野村：ゼミの適正規模(人数)、開講時期・頻度、事前説明とコンセンサスの形成、費用をどう説明し、納得させるか。

藤田：(ゼミの適正規模・人数について)ゼミ生の人数は10名、あるいは10名弱がちょうど指導しやすい。

古賀：過去15~16人採用したときは教育に苦労した。できれば8人ぐらいが適正だ。

藤田：(開講時期・頻度)たしかにゼミを毎年開講する、あるいは1年おきに開講するといった案も考えられる。しかし、現状の2年開講し1年休むという開講パターンで、なんとか指導を続けることができるので、このままで良いと思う。

古賀：毎年開講は正直きつい。人数を減らしても、初期投資にあたる教育量は一定なので、開講を免除してもらえる年があるのはありがたい。逆に毎年開講してくださる先生がいらっしゃるのので現行の制度が維持されていることを考えると、質問者の野村先生をはじめ、毎年開講して下さっている先生方には頭が下がる。

藤田：(費用について)ゼミの活動で旅費などがかかることは、ゼミ募集の段階から知らせている。演習振り分け用シラバスに何度も記載し、ゼミ説明会・茶話会・面接などでも意思を確認している。どうしても資金が足りないときは家族・親族に借りるという人が多い。いずれにしても、事前に情報を提供し、了承を得ていれば、学生も覚悟をもってゼミに入ってきて、必要な資金を集めてくれている。

多賀谷事務長：事務職員をFD研修に呼んでほしい。

藤田：事務職員の皆様にも経済学部教育について理解を深めて頂きたいので、ぜひ参加して頂けると有り難い。次回からアナウンスをするようにしたい。

河村：学部全体としてどうあるべきか。資質の高い学生を特定のゼミに集めた後、それ以外の学生の指導はどうするのか？(藤田ゼミ報告では)中間層のゼミ生に対応するアイデアが出なかった。

藤田：(それ以外の学生への指導について)まずゼミ募集段階で、多くの教員からどのような教育プログラムを提供するかを示してもらおうことで、学生は自分にあったゼミを選びやすくなる。教員の提供



する教育と学生の求める教育のギャップを小さくすることができれば、希望しないゼミに配属されて不適合を起こす学生を少なくすることができるのではないかと。現時点ではまず、教員と学生のマッチングをうまくやるのが重要である。そのうえで、中間層の学生に対する教育プログラムのあり方を考えることは有益であると考え。経済学部学生としてゼミで最低限どのような能力をつけてもらいたいのかを考え、中間層向けの教育プログラムを考案するような検討チームを作ってもよいかもしれない。

古賀：かつて元学部長の瀧口先生から、一部のやる気のある教員が理想論を掲げてゼミ教育をやるだけでは意味はないといわれたことを改めて思い出す。事実その通りであり、一部の教員だけが頑張っても山大経済の地盤沈下は食い止められない。また、ある地元銀行の頭取の発言からも窺えるように、山大経済は地元企業からも見放されつつある。こうした状況に山口大学経済学部の教員は強い危機感を抱き、共有し、数多くの教員が一丸となって、短期間に目に見える成果を大きく出さねばならないと思う。

教育の成果があがるのであれば、方法については、各教員の専門性に基づくオリジナルなものであってよいと思う。大学教育には、画一的な上からの教育、教育実態経験を伴わない机上の空論的な教育システム・カリキュラムは望ましくない。しかし、その中身については、税金で成り立つ国立大学である以上、少なくとも最も身近な納税者である、学生や保護者には積極的に発信して聞くべきだと思う。

教育の中身についての議論を始める前に、各教員が、どのようなゼミナール教育を通じて、どのような人材を育てたいのかを発信することが、ゼミナール教育改革の第一歩となると思う。積極的な発信によって、教育に対する自覚と責任が教員の間に芽生え、学生たちも自分の将来を見据えてどの教員を選べばよいかわかるようになる。これにより、情報の非対称性による問題、例えば、噂を頼りに一部の「人気教員」に学生が殺到し、それに落ちた学生が、情報を何ももたないゼミ(教員の顔すら知らない)に仕方なく入り、やる気なく3年間を過ごすということも減るはずである。

## (9) この他の議論を踏まえての経済学部のFDとしての改善提案

事例報告の質疑応答のほか、今回の経済学部のFD研修会として、現状のゼミナール教育・運営に関する改善についての提起(提案書に関しては添付資料4を参照)が、2名報告者ならびに中田学部長からあった。また、それに関する検討もあわせて行われ、以下の改善点を取りまとめ、次年度の教務委員会に提案することとなった。

### ①教員が積極的にゼミナール教育に関する情報発信を行う

現状の最大の問題は、教員が学生に発信する情報が極めて少なく、また、発信しても情報が多くの学生に届いていないことにある。この問題が、噂でゼミを選ぶ状況を作り出し、人気ゼミに落ちた学生がやる気のない状態で、情報のないゼミに入る。こうした状況を改善するために、

1. ゼミ募集を行う教員は、できうる限り学部全体の説明会に出ていくこと
2. ゼミ募集を行う教員は、学生にゼミ募集を任せるのではなく、個別にゼミ説明会を開き自らの言葉でゼミ内容を紹介すること(もしくはゼミ見学会でシラバスを配布すること)
3. ゼミ募集を行う教員はシラバスにできうる限りの教育に関する情報を記載すること
4. ゼミ・シラバスは、ゼミ全体説明会において紙媒体で少なくとも配布すること
5. ゼミ・シラバスを学生の目により多く触れられるように発信方法を工夫すること

### ② ①の一貫としてゼミ・シラバスの書式を一部変更することを提案する

1. 専門分野のキーワードを書く欄を設ける
2. どのような人材を育てるのかを表示する(将来どのような方面を希望する人向け)
3. 就職先を紹介する
4. マトリックスを入れて、教育内容(卒論、社会人基礎力の目標)とそこに到達するプロセスを

書き込む

③ 討論大会以外でのゼミナール間の交流を活発にする

1. 成果発表を積極的に公開し、ゼミ単位で他のゼミナールの報告会に積極的に参加する
2. 就職活動時に合同の面接練習会・情報交換会を行う

(10) 参加者 計 18 名

教員) 中田、塚田、植村、柏木、河村、成富、馬田、木部、陳 (建)、中村、  
柳田、齋藤、山本、服部、小林、藤田(健)、古賀 17名

事務) 多賀谷 1名

FDの様子



藤田ゼミ学生 (田中啓二君) のプレゼン



## 6. 2 古賀報告 (実施担当者：古賀大介)

### (1) 「出口(卒業後)」を意識したゼミナール教育の一事例—古賀ゼミ

1. 開始前の前提として (古賀の国立大学教員としての個人的な信条です)

大学の教員 → 学問の自由と教育の自由 ⇔ 義務でもある  
これにはゼミナール教育運営の自由も含まれる

↓

大学の教育 → 教員の自由裁量に基づく  
多様なポリシーと個性ある教育の集合体 であるべき  
上からのマニュアル・システムティックな画一主義はなじまない

↓

但し、教育をやらない(しない)自由はない  
教育は義務であり、責務である

国立大学は税金で成り立つ

もっとも身近な国民である学生に、教育を通じて還元せねばならない  
納税者であり、授業料を納め、  
子弟を大学に送る保護者の期待に応える必要がある

↓

多くの親御さんは 単に学問をさせたいという思いよりも  
 高卒で働きに出すよりも  
 大卒の方が就職に有利  
 =生涯賃金が多くなると期待

特に経済学部はそうではないのか?  
 そうした期待に応えるべく  
 ゼミナール教育では、少なくとも教育の入り口において、  
 「出口 (卒業後)」を念頭に、どのような教育を行うのかを  
 学生に提示するのが最低限の責務ではないか?

**FD ポイント その1 : ゼミの目標を掲げる**

**古賀の目標**

1. 「国際的に活躍するビジネスマンを養成する  
 名門山口高等商業学校の復活」  
 (臆面もなく、毎年のゼミ紹介『経済学部入門』に書いています)
2. 「ゼミナール生全員を優良・大手・名門企業(上場企業)へ!  
 また、将来その幹部となる人材を育てる」

**現在までの成果**

- ・優良・大手・有名企業への就職率 ほぼ **100% (90%以上)**
  - \*創設 2006年 まだ8年弱 1期生~4期生 計約50名ですが・・・  
 比較) 平均的な山口大学経済学部のゼミの進路 (11名)
- |                  |             |        |      |
|------------------|-------------|--------|------|
| <b>上場企業・優良企業</b> | <b>2~3名</b> | 公務員    | 1~2名 |
| 中小企業・その他         | 4~5名        | 留年・ニート | 2~3名 |
- 古賀ゼミ
- |                  |              |        |      |
|------------------|--------------|--------|------|
| <b>上場企業・優良企業</b> | <b>9~10名</b> | 公務員その他 | 0~1名 |
|------------------|--------------|--------|------|
- 内定先につきましては、既にお渡しした資料の通りです。

\*「平均的ゼミ」の根拠となるテーパー

1. 2007-2010年度 進路先から  
 上場企業・有名企業を採取 年により 約80-120名  
 公務員約40-50名
2. 同期間 留年生・進路先未定 約80-100名

**出発点**

・山口大学経済学部への赴任：  
 2年目から講義を担当 ⇒ 目標もなく漫然と遊んで過ごし  
 中小企業社員・ニートになる学生たち！

↓

大変もったいない！  
 潜在的に力は十分にある学生たち  
 (退学勧告を受ける学生の中にもいる)

↓

この学生たちに 自分の将来の価値を気づかせる  
 自分の力を発揮させるチャンスを！

目の前にいる学生を「バカだ」と嘆き、教育を諦めるのは簡単  
そうではなく ↓

目の前にいる1人1人の学生に、

1. 「チャンスある目標」(優良企業への就職)を提示
2. 訓練の機会を与える

(教員である私は、愛情を持って真剣に訓練を行う)

\*我々は誤解してはならない。

- ・彼らの多くは、「世界を知らない」だけ!

(ここでの世界は国際ではありません。企業社会と経済格差)

- ・彼らの多くは、その「世界に入る」方法を知らないだけ!

↓

「世界」の存在を教え、目標を提示し、

それを目指したいと思う「素直で、やる気ある」学生に、訓練を!

(これが古賀の出発点です)

#### 大学のゼミナールでキャリア教育を交えることの是非

- ・先生方によっては・・

「我々は研究学徒。学生の個々の将来への干渉は、我々の役目ではない。」

「我々はキャリア指導に関して、素人。責任を考えると立ち入るべきでない。」

↓

- ・私の考え

1. 山口大学経済学部 そもそも「国際的に活躍するビジネスマン養成学校」  
日本を支える、国際的に活躍するビジネスマンの養成こそ本来の目的

↓

ゼミナールでキャリア教育を行うことは、本学において問題はない!

2. キャリア指導に関して、専門指導員よりも、  
経済学部の教員は多くの利点をもっている

- ①業界企業研究(志望動機を書く上で必須)

確かな経済学・経営学の知識の上 → 深みある分析ができるはず!

(先生の方がプロ!)

- ②エントリーシート=科研の申請書と同じ!

学生に **ES** 指導(最後は見本を書く) → **ES** で落ちる学生は少数

自分のことをわかりやすく PR ということではコツは変わらない!

(**ES** も科研同様 これからやること、これまでやった意義を、  
読み手を意識しながら、わかりやすく書くという作業)

- ③ゼミナールを通して長時間学生と接する → 性格をよく知る

**ES** を書く下準備として、

自己分析(長所・短所を知り、売りとなるポイント)を探る

↓

これは、長時間、その学生と接している先生の方が、

専門指導員よりも、的確にできるはず

経済学部教員は自信をもって、

学生のキャリア指導に向き合っている!

FD ポイント その2：どんな人材を育てるのか？ゼミ教育の主な柱を立てる

古賀は、どんな人材を育てたいのか？

究極の理想：今でも世界的なリーダーを輩出する

アメリカ・イギリス名門寄宿学校・大学

で鍛えられた、「グローバル人材」に対抗できる人材を！

(実際、国際ビジネスの現場では彼らと競うことになる)

教育の柱：

1. 人格教育（品格を育てる）

(プレゼン能力・仲間意識・信頼される行動)

2. 「外」に向かつて

バイタリティ溢れる行動力育成

(ゼミで、集団でコンペに参加などはしない。各人の個性に合わせて、「学生ら

しい活動」に取り組むよう指導)

3. 国際経済・経営に関する

「歴史をベースとする」基礎知識・教養教育

本ゼミは、あくまで品格・教養・バイタリティある

グローバルに活躍しうるビジネスマン基礎力養成！

以下、改めてご紹介いたしますが、特別な取組みはなく、

普通のゼミの取組みに若干の工夫を加え、徹底しているのみ

単に就職活動のテクニックを教えるのではない

・近年 「就活家」と呼ばれる人たち

就職活動の「塾」「ハウツー本」 = 就職テクニックを教える

↓

ES の指導も、業界企業研究も、古賀ゼミでは行うが、

そうしたテクニックよりも、

その前段階である 人格・教養・バイタリティの育成を優先

\*就職がゴールではない！（就活テクニック訓練の弊害）

就職後、与えられた環境で、いかに活躍できるかが重要！

課題 - 急速に加速化する日本企業のグローバル化への対応

- ・1~2 期生まで 国際化をそれほど意識せず ⇒ 単に優良・大手企業を目指す
- ・2007 年頃から日本企業の国際化 ⇒ 3 期生～ 指導方針の転換(付け加え)
- ・1~2 期生まで 学生の内向き志向 ⇒ 3 期生～ 国際化意識 外向き志向へ  
(海外に出る指導)

・長短留学・途上国への渡航多数

しかし・・・ 基礎学力が低いため、語学力に難あり

↓

洋書が読めない・ゼミのプレゼンの英語化は程遠い

↓

これをいかにカバーしていくかが課題！

\*ゼミでは単に語学(資格)の勉強をやるべきではない (OB 達の一致した意見)

⇒では、どうすべきか？

まずは、現在における古賀ゼミナールの取組みをご紹介したいと存じます。

FD ポイント その3：目標にあわせた3年間のカリキュラムを決める

古賀ゼミナールの教育ー卒業までの4年間

FD ポイント その4：厳格な教育を行う場合のコツ

人間関係は「利益」と「関係性」が重要となります！  
ゼミで頑張ることの意味（「利益」）を提示し、  
「厳しい」指導を学生が受け入れる「関係性」の構築からはじめます。

1年目 基本的なルールを身に付け、目標とする先輩たちに学ぶ

FD ポイント その5：ゼミ募集を行う際には分かりやすいキャッチフレーズを

- ・1年生向けゼミ募集でのスローガン  
「一億円のプレミアをつけるゼミ」  
→ 中小企業と大企業との生涯賃金格差＋  
将来その幹部となることで得られる報酬額合計
- \*上場企業の意味も分からない、具体的な企業名も分からない学生たちに、  
大企業に行くことを勧める、分かりやすいスローガン  
ゼミで頑張る → その結果得られるメリット を提起

FD ポイント その6：説明会では「雰囲気」よりもゼミ教育を語る

FD ポイント その7：説明会は学生まかせにしない。教員が自ら語る

- ・説明会（古賀の思い・教育内容を伝える）  
募集の際重視する点： 「本気で大企業に行きたいと思う やる気」  
「そのために、素直に言うことを聞く心」  
↓
- ・選考会（原則 個人面接＋集団面接）  
\*能力や成績では決めない。上記2点を重視。  
時々、「初めから優秀な学生を集めて、教育しているだけ」との意見を頂戴するが、  
そうではない！  
「1年生のころはパチンコ・マージャンが趣味。ベッドの上で天井を見てすごしていた」  
「古賀ゼミに入らなければ、今頃、ニートだった」  
という上場企業勤務のOBは少なくない！

FD ポイント その8：最初、学生の間関係構築には教員自ら積極的に関与  
(ゼミの中での派閥・ひきこもりを作らない)

FD ポイント その9：最初が肝心。厳格なルールを提起し、守らせる

入ゼミ決定後（1年生12月～）

1. 初顔合わせ ゼミ基本ルールの徹底
2. 上級生 → 下級生へのルール指導（月に2回のペースで個別に）

- \* 上級生2名＋下級生2名の計4名で会う
- \* 指導 ＋ 「遊び～相談」まで何でも話せる関係性を作る



- \* ゼミ訓練で大人となった上級生をみて

下級生が敬意を抱く(身近な目標とする)

- ・上級生 →(報告)→ 委員長(取りまとめ) →(報告) →教員
  - ・報告に基づき、性格を見極め「チューター」(ゼミ内の相棒)を決める
3. ゼミ内のリーダーである次期「委員長」を育成
- \* 教員と学生の間立つ中間管理職(教員寄り 信頼できる腹臣?)
  - \* 信頼でき、忠誠心あふれる人材を抜擢
  - \* リーダー経験のないものから選ぶ (リーダーとしての勉強)
  - \* 過去の委員長がつくったマニュアルを基に委員長経験者が教育

教育を効果的に行うために：

「チューター制度」と「委員長育成」がカギ！

### 1年生(12月-3月)のまとめ

1. 基本的なゼミルールを、先輩達から教わる
2. 先輩たちを身近な目標とし、相談できる体制を作る
3. 適正を見極めながら「チューター」と「委員長」を決める
4. 「委員長」の訓練を行う

### 2年目 大学生生活の実績作り開始 と 過酷な班発表

#### 1. チューター制度開始：一生の付き合いとなる仲間ができる

- ・チューター制度とは？
  - ①性格の異なる同期ゼミ生2人1組を指定(教員の許可なく変更不可)
  - ②これに他学年(上級生)のチューターがつく
  - ③月2回(月前半と後半1回づつ)2時間以上会う  
指定テーマにも続く訓練(面接の練習・就職活動の話)+雑談・相談など
  - ④各チューター長 → チューター会長(委員長)に報告
  - ⑤チューター会長 各ゼミ・チューターの様子を聞き、  
問題点を教員に毎月報告・相談(参考資料 )→次回以降、改善指導
- ・チューター制度の意義
  - ① 長期にわたり性格の違うものと接する(対人関係の幅が広がる)
  - ② 相談できる仲間や先輩ができる(人間関係が深まる)
  - ③ ゼミ中の指導を徹底できる(指導内容を実践できる)
  - ④ ゼミ生の悩み・問題をいち早く把握し、  
個性に合わせた指導がきでる！

### FDポイント その10：教員はお友達であってはならない。

#### 2.教員とゼミ生の関係-厳格な指導を行う前に

- ・厳格で怖い先生 →「お友達ではない。怖い先生」  
「この人の前ではごまかしが効かない」  
「この人の前では、ちゃんとしなければ」  
(これは一期生のゼミ委員長からの提言：「先生は威厳を持って指導を！」)

その一方で

- ・指導を受け入れる体制作り
  1. 最初に愛情を持って指導している。教育上必要な範囲で本気で叱ると表明。
  2. 距離を近づける。プライベートな話を交えた、教員とゼミ生と個別の食事

3. 相談は、相手の気が済むまで無制限に受ける(初期は叱らない。聞き手に)。
  4. ゼミ生が、心から「なるほど」と思うようなアドバイスをを行う→信頼獲得
- \*但し、人格者として振舞わない！ → 理想の上司とはならない！ むしろ逆  
(ゼミのために → 社会に出るといろんな上司に当たる。柔軟性を養うため)

**FDポイント その11：前もって発表の順番を決めない。**

### 3. 過酷な班発表ーアカデミック訓練の基礎

4期生の教材： 前期 『アフリカレポート』（岩波新書）  
後期 「日経新聞」テスト

2011年度のゼミ： 16：30ー22：00 （食事30分をはさんで平均 5時間）

\*ゼミの日のバイト・部活の練習その他は、大会を除き一切認めない

#### 前期教育目標

1. 正確に文章構成・内容を把握し、それを伝達する力を養う！  
(正確で、みやすいレジュメ作り)
2. レジュメをほとんど見ずに、内容を効果的にプレゼンする力を養う！  
(短い時間に、聞いてもらうには?)
3. テキスト『アフリカレポート』の内容把握  
途上国進出の困難性を理解
  1. 現地政府の腐敗とその原因（単に現地人のせいではない）
  2. 中国のアフリカ進出（中国とのとの資源・市場獲得競争）
  3. アフリカ人と働く（習慣を理解し現地の人をいかに教育するのか）

→ **将来、海外（途上国）で実際に働く場合に待ち受けることを学習**

\*報告失敗の罰則： 一定基準（古賀の裁量でその場で判断）以下の場合

↓

1回目やり直し 2回目6000字レポート レポート提出なし→退ゼミ

\*ゼミ生は必死に準備してきます → 報告前日、徹夜は珍しくない

(全班準備をして、当日、原則全班報告)

\*準備作業(班作業) → 長時間顔を突き合わせて準備・しかも必死に  
この結果・・・

ゼミ生同士「戦友」としての「絆」が生まれます！

#### 後期教育目標と工夫

1. ビジネスマン必読の「日経新聞」を読む習慣をつける
2. 班単位での成績コンペを行う。最下位には罰則。
3. 国際面～企業面を重視。
4. ニュースを読む上での必要な経済学的基礎知識の解説（量的緩和の効果など）
5. ニュースの歴史的普遍性の解説（100年前と現在のグローバル経済の類似性等）

**FDポイント その12：学生時代の実績作りの相談に積極的に乗る。**

#### 4. 学生時代をどう過ごすのか？ー実績作り指導

・企業が求めるグローバル人材 → 具体的評価実績 **1. 体育会系** **2. 国際系**

↓

ゼミ生全員いずれかの実績ができるよう指導

\*資格・・・TOEIC 以外は、多くの企業で評価対象になっていない

むしろ、いかに学生らしく過ごしているかを重視？

\*指導・・・1.体育会系(一部文化系部活も) か 2.国際系のいずれかを軸に実績  
+

近年、足きり目安となっている「SPI」と「TOEIC」を優先的に  
\*評価の対象となりにくい

資格・アルバイト・遊び系サークル・イベント→ゼミでも評価しない

#### アチーブメントプラン (2年前期) 作成

- ・就職活動までに達成すべき目標をあげる (参考資料 )  
→逆算して、いつまでに、どうしなければならないのかを  
具体的に示させる (年・月・週・日単位)  
↓
- ・プランを発表させて、徹底的に精査 → 実効性・意義を確認  
(到達そのものも大事だが考えさせることが第一)
- \*2年生の段階：アドバイスをもらっても、自分で考えるには限界  
試行錯誤をしながら、失敗させる  
人によっては3年生になってようやく実行プランが固まる
- ・アチーブメントプランを基に→就職模擬面接  
2年生の「実績アピール」「自己分析」を  
教員と内定が決まったゼミ生が聞き、助言  
↓  
自分の直すべき弱点・伸ばすべき長所を自覚  
それにあった実績を考える

#### FDポイント その13：就職模擬面談では多少誤ったコメントでもいい。

(学生は沢山の意見に触れて自分で判断できるようになる)

#### 3年生 実績を作り、志望業界を固め、就職活動準備へ

#### 1. 3年生でのアカデミック内容 - 業界企業研究を見据えて

1~4期生の教材：前期 『アメリカ経営史』(有斐閣)  
後期 格付け機関(S&P)のレポート類  
ゼミの時間： 16：30-1：30 (食事休憩を除く平均8時間)

#### 教育目標・特徴

1. 人を惹きつけるようなプレゼンを目指す
2. 前期『アメリカ経営史』  
アメリカの世界的企業 (GE~マクドナルドまでの)  
経営戦略・組織論を中心に学ぶ (集中と選択など)  
↓  
一般の山大生：身近な商品(日用品・食品など B to C)に眼が行きがち  
古賀ゼミ生：「川上産業」(資源~自動車など B to B)に眼が行く
3. 後期 格付け機関の評価  
ライバル企業同士の特徴(強み・弱み)・業界の特徴が学べる

\*志望業界についての指導

どのような企業を勧めるのか：

1. 「長期にわたって業態を変えつつ生き残ってきた企業」
2. 「(仕事がきつくても)正当に評価し、大切にしてくれる企業」

### 3. 「海外戦略を明確に打ち出している企業」

勧めない企業：

今、業績がいい企業(急激に伸びたベンチャー)、株価が低い企業(100円未満)、離職率が高い・低賃金企業、働きやすい企業(経営が甘い場合あり)、過度なワンマン(オーナー企業)などあくまで国際的に活躍できる、BtoB志向の人材を目指して教育していますが、本人の希望や適正に合わせ、柔軟に対応しています

**FDポイント その14：2年生以降の実績作りは学生の手でやらせる。**

#### **2.実績作りー海外活動を必須に**

4期生 体育会部活生 4名

(バレー部キャプテン・空手部主将・弓道部員・硬式野球部員)

非体育会系 5名

(アメリカ1年留学・ESSスピーチ長・自主活動ルームアドバイザー  
クリケット(世界的スポーツを通じた国際交流)サークル設立・  
九州自転車1周ほか)

グローバル経済史を専攻していて、

実際に海外に出ていないのでは説得力は低い

4期生 **全員を海外に!** (現在1名のみ、未達成)

バン格拉デッシュ・マイクロクレジット実地調査、タイ少数民族村1ヶ月滞在アメリカ1年留学、フィジー1ヶ月間語学研修、東欧3カ国空手交流試合、インドにおける日系企業訪問(ブリジストン)、イギリスクリケット視察、中国・韓国大学交流4回

タイ・ベトナム進出日系企業50社にアポ→大林組・いすゞ自動車・日立物流  
(うち2社から内定をもらう)

過去には アフリカ・タンザニア山村ボランティア(1ヶ月)、

ロンドン・ニューヨーク500人アンケートなどを実施した学生も

単なる先進国への旅行では意味はない!

限られた予算で、意味のある活動をするように →助言・指導

(特にリスク面での指導を徹底する)

海外で積極的に活動できる人材であることを

実績をもってアピールする!

(実際に途上国に出かけた学生のほぼ全員が、

海外での生活に自信を持ったのと、海外へ興味を示す!)

**FDポイント その15：教員は就職活動に積極的に関与する。**

#### **3. 就職活動指導サブゼミー就職活動に向けての訓練**

- ・長期休暇中・学期末に 連続する2~3日間、カリキュラムを決めて指導
- ・A組 B組 選抜 (プレゼン →潜在能力・アピール力を評価順位付け)
- ・就職指導委員

(内定をとったばかりのゼミ4年生の中で、特に優れたものを選抜)

3期生：松本 (広島銀行ほか多数内定：山大管弦楽団指揮者)

中内 (コクヨほか多数内定：アイスホッケー部員 (国体選手補欠))

豊嶋 (ヤマハ発動機ほか多数内定：タンザニアボランティア)

石亀 (ファーストリテーリングほか多数内定：海外500人アンケート)

↓

B組みのカリキュラムは、就職指導委員が独自に決める

・指導内容

1. ESの書き方 (例：商品としての自分をいかにアピールするか)
2. 面接の練習 (例：自分が想定していない質問をどのように返すか  
圧迫面接疑似体験 ほか)
3. 業界企業研究 (例：希望企業の選び方など)
4. グループディスカッション (例：ESでのキャラクターと一致させる)

・就職活動直前には・・・

いくら指導しても、どんなに優秀でも、多くの学生は、  
最初のうちは、よいESが書けません！

最初にESを書いてこさせる ⇒ これを古賀が書き直し(見本を)提示

↓  
手本を基に、具体的に、どう書けばいいかを学ぶ

↓  
手本を参考にしながら、自分の言葉で、  
企業ごとにESを書き直す

(ESは、企業ごとに全部書き直させています。なぜなら企業によって、  
求める人材像＝アピールするポイントは違うからです。)

4年生就職活動が終わりではないー卒論指導を厳格に

FDポイント その16：就職活動期限を設ける。

1.就職活動期－見守り・必要に応じてサポート

- ・就職活動中 ⇒ 最長6月末 まで (場合によっては7月まで)  
ゼミを休む許可 (就職活動に専念)

\*これまでのところ全員7月末までに内定を入手(上場企業)

但し、無条件ではない 以下の義務を課す

1. 毎月末 就職活動状況を報告 (何社エントリー・何次面接何社)
2. 内定掲示板へのレス (SNS Mixiにあるゼミの就職コミュニティに  
上場企業内定者の名前を掲載。それに祝言)
3. 内定をとり就職活動を終えたら、速やかに卒論準備へ  
(状況は細かくチェックされているのでごまかしは効かない)

就職活動状況報告を見ながら ⇒ 必要に応じて、

電話もしくは面談を行いアドバイス  
(状況を聞き、一緒に戦略を練る)

- ・就職活動中のゼミ生の相互扶助 ⇒ 東京・大阪でアパートで共同生活  
共同生活の効果

1. 山口⇄関東・関西 交通費・宿泊費を大幅に節約
2. 就職活動における情報交換・悩み相談  
(チューター制・班制度のおかげでお互いのことを知り尽くしている。  
孤独にならず、時にケンカもしながら、お互い切磋琢磨する)
3. 生涯の親友に！

ゼミ生同期同士・教員・OBが全面的にサポート⇒ 自力で内定を取る！

- ・就職活動終了後 ⇒ 1ヶ月以内に、就職活動ファイルの提出(参考資料)  
(提出ESの写し、各企業の当落状況、面接での質問、

後輩へのアドバイス、お勧め・進めない企業名・理由等)

**2. 厳格な卒論指導—君たちは就職活動生ではない。大学生だ。**

大手・有名・優良企業内定 ⇒多くの学生が浮かれる

ゼミによっては卒論に真面目に取り組まない

**FD ポイント その 17：卒論指導と評価は厳格にする—内定と卒業は別就職活動を終えたゼミ生に対する指導**

1. 全員の内定が決まるまで、一切の浮かれた言動の禁止！  
最後の1人が決まるまで、全員で応援
2. 内定先を「うちの会社」と呼ぶことを厳禁！  
3月31日まで山口大学経済学部古賀ゼミ生である
3. 卒論評価は、班発表同様、厳格に行う！  
例え内定先がいくら立派でも、基準以下の卒論は不合格とし、本気で留年させる！  
(場合によっては、実家の顧問弁護士を通じて裁判で争う)

\*古賀ゼミの卒論：

- ① テーマ＝ 原則 **内定先の業界企業研究** (それに関連したテーマ)  
人によっては、興味に合わせたテーマ(但し、歴史・経済史系)
- ② 字数 = **30000字以上** (経済学部の基準は20000字)
- ③ 事前審査 =12月末に草稿提出 年明けに修正後、提出  
(クリスマス・正月は教員・ゼミ生ともになし)

\*今年は事前審査ではなく、不合格者には1月15日以降書き直し再提出

↓

不合格の場合、2月の採点時期までに再提出 それでも不合格の場合、留年

**厳格な卒論審査を終えて ⇒ 晴れて卒業！**

**後輩への指導—就職活動を見据えたアドバイス**

就職活動終了から卒業直前まで ⇒ 後輩への指導

(チューター・就職サブゼミ)

卒業式当日 卒業後、年賀状だけは出すように指示

**FD ポイント その 18：同窓会を組織し、定期的に同窓会を開く**

**3. 卒業後 OB として—盛況な同窓会**

ともに苦勞した仲間だから、卒業しても固い結束・友情

同じ苦勞をしている後輩への温かい支援

同窓会を、2012年の11月を含め3度実施。どの回も高い出席率

卒業時期を問わず、OB/OG たち

→ 就職活動時、見知らぬ後輩の世話を親身にしてくれる

(同窓会で顔見知り程度でも)

OB 達の活躍例

1. 1年目 同期数百人の中でプレゼン1位  
ヤマハ発動機 国際戦略室へ抜擢(北欧担当)
2. 1年目 同期数百人の中で全国売り上げ1位 (大和ハウス工業)  
このほか、1年目で大手旅行社企画部、大手流通業社人事部など  
入るまでがゴールではなく、入ってからの活躍多数

.....



・昨年(2012年)、ゼミナール教育フォーラムでのOB提言

1. ゼミでは語学教育をやるべきではない  
(語学教育は、学部がそれをサポートする仕組みをつくるべき)
2. 国際的に活躍する人物(OB)を紹介し、ロールモデルを提起する

↓

2013年三井物産 中部エネルギー室長(ザンビア駐留経験あり)をお招き

2014年三井物産 LNG 投資(ロンドン)社長を訪ねるツアー企画(1年生向)

・フォーラムに鳳陽会幹部を招いての意見交換・その後の交流を踏まえて

- 1.現在の学生気質を紹介(実際に見てもらおう) → OBの認識の変化
- 2.学生の実情にあった就職サポートを希望 (鳳陽会側から)
- 3.きちんと教育された学生には全力でサポート(応援団を組織してくれた例)

↓

就職活動において ゼミと鳳陽会が 連携してもよいのでは？

**ゼミナールでのキャリア教育を通じた山大経済ブランドの復活**

(教員) 今、現在いる学生、一人ひとりに働きかける、  
そして大切に育てる

↓

(学生) 自分のため、自分の将来のために頑張る！

↓

卒業後、社会的に活躍する

↓

(学校) 卒業生への評価＝学校への評価に繋がる

↓

優秀な人材が集まる＝名門山口大学経済学部復活

(日本) 卒業生たちがグローバルに活躍。

日本経済を支える力に！

↓

これこそが、本学の存立理由 だと確信します。

ゼミ教育で最も重要なのは・・・

画一的な机上の空論的なシステムを導入するよりも、

教員一人ひとりが、一人ひとりの学生にどのように向き合い、

実体験に基づき自分流の教育システムを作り上げることだ

と感じる次第です。

ただ最近、教員自らの意思に基づいて、

ゼミ運営の情報を共有し、お互いの長所を取り入れ、

なにがしかのミニマムな共通認識・目標があってもいいのでは

ないかと思う次第であります。

ご清聴ありがとうございました。

## (2) 藤田・古賀の共通点と相違点

**藤田・古賀ゼミの共通点**

**ゼミ教育の背景において**

1. どういう学生を育てたいのかはっきりしている  
(「出口(卒業後の進路目標)」が明確)
2. 教員が学生に向かうスタンス  
厳しきにおいて一貫性を持たせる ただし、手間をかけて信頼作りも
3. ゼミ募集の段階から学生に方針・メリット・ルールを伝える  
(一体感=共通目標を作る)

#### 教育の中身について

1. 「出口」にあわせて何を教えるのかをはっきり決めている
2. 3年間一貫のカリキュラムの体系化  
\* 思いつきや行き当たりばったりでない  
\* 資格試験には対応しない
3. チーム・リーダーシップ・マネジメント(非アカデミック要素)も重視  
\* 横の関係の組織化(同学年) タテの繋がり(OB/目上)の活用  
\* 教員による積極的な関与(学生の自主性に任せない)  
\* 濃密な時間を過ごさせる仕掛け  
\* 評価は厳しく(いたずらに褒め過ぎない)  
\* 学生を学外(地域社会・海外)に目を向けさせるように工夫
4. 専門知識を生かす教育内容=ゼミの個性に繋がる  
\* 人をひきつける(インパクトある)プレゼン  
\* 他人に分かってもらえるような説明  
\* サブゼミの活用(時間無制限:通常のゼミでも)  
\* 学問の基本を軽視しない(本を正しく読む・理解する・まとめる技術)
5. 就職活動支援を積極的に行う  
(ES対策・SPI対策・就職模擬面接・GD練習など)

#### 藤田先生と古賀の相違点

1. 「出口」の違い 国際志向の大手企業(古賀)  
地元企業~職人まで(藤田先生) → 運用次第で大手にも
2. 実践的ビジネスパーソン育成重視(藤田先生)か  
教養(世界・歴史)・人格育成重視(古賀)
3. ゼミ単位での外部コンペ参加(藤田先生)かゼミ生個人での活動か(古賀)  
\* 個人の成長 OR チームでの成長
4. 体育会系(とくに男子 男女比 8対2) → 古賀  
非体育会系(とくに女子 男女比 2対8) → 藤田先生
5. ゼミを一言で表すならば(古賀の分は学生たちの評価)  
藤田ゼミ 「べたべたの日本企業」  
古賀ゼミ 「軍隊」(実際に今年、幹部自衛官候補も出た)

#### ゼミナール運営での悩み

1. 教育に多くの時間をとられ、研究成果を出せていない  
(2人とも、3~4回連続、科学研究費補助金を受けているが・・・)
2. 辞めるゼミ生の対応(マッチングをいかに図るのかで悩み)  
→ 採用基準の明確化
3. きついという噂への対応
4. 地元対応(誤解が多い:藤田先生)
5. 経済的負担(企業人への謝礼・飲み会の付き合いなど)



## 第6節 来年度の課題

来年度のFD活動の対象としては以下の課題が考えられる。

- 1、教員授業自己評価の入力率向上に向けた組織的な取組みの強化。
- 2、今年度のゼミ運営改善のための活動が非常に有益であったと考えられるので、次は授業運営の改善に向けた研修が考えられる。その場合、中堅以上の教員から赴任後間もない若手教員への経験の伝達が一つの焦点となろう。
- 3、ゼミ、授業、両方の改善のために、両者をビデオに撮り、教員に見てもらうことが有益であろう。これはたとえばすでにアメリカの大学で行われていることであるが、その効果は確かめられている。ただそのためにはある程度の人と資金が必要であるので、その問題の解決が必要となろう。

以上。

# 第7章 理学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### 1. 数理科学科のピア・レビュー

#### (1) 実施科目「数理科学基礎セミナー」

##### 1) 概要

①日時：平成26年1月15日（水）3・4時限

②対象学生：数理科学科2年生（約55名）

③授業概要：本授業では、90分間の試験と、試験問題に関するプレゼンテーションを交互に繰り返すという形で授業を行っている。試験問題は一年次・二年次前期に学習した微積分・線形代数の内容について問題を出す。プレゼンテーションは、学生を10人程度の少人数のグループに分け、前回の授業で受けた試験の問題についてのプレゼンテーションを行う。各グループの担当教員は学生のプレゼンテーションに対し、理解の浅い点や曖昧な点を指摘し、学生の数学に対する理解を深めると共に、プレゼンテーションの方法についても指導を行う。

④授業担当教員：廣澤 史彦、村井 聡、大関 一秀、倉富 要輔

レビュアー：宮澤 康行、幡谷 泰史、郷間 知巳、増本 誠

##### 2) レビュー結果

何れのグループでもレビューシートの評価欄には「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

(優れた点)

・問題に応じて、学生の説明方法を変更する工夫がなされていた。特に、低学年では難易度の高い説明しながらの板書を取り入れ指導していた点は高く評価できる。

・学生のプリント問題の解答状況を確認した上で発表者の指名を行うなど理解力に応じた指導がなされていた。

・時間配分は適切で90分間滞ることなく授業が進められた。

・特に微積分の問題が、昨年までに比べ、技巧をこらす必要がある問題に変更されており、1年半微積分を学習した受講生に時期的に適切な問題であると思う。

・学生の理解が不十分だと思われる発表解答に、補足説明を付け加え、彼らの論理的欠陥に気づくよう指導していた。

・学生にざっくばらんな雑談に誘い、親しみ易さを醸成していた。

・板書された解答に対し、論理的な解答の書き方を指導していた。これは少人数教育でしかできないきめ細かい教育である。理解している学生のそっけない発表解答に対し、良く噛み砕いて「何を考えて到達したか、その見えない部分」を理解していない学生に補足していた。これもきめ細かい配慮だと思う。

・全体として微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解習得し、問題解決力を養うという本科

目の趣旨に沿う授業がされていた。

- ・学生の不確かな点を明確化し、またそのような箇所を補うように親切・丁寧に説明がなされており、学生の理解を助ける工夫がされていた。

- ・教員の声が大きく、明瞭で聞き取りやすい。うらやましい限りである。

- ・教員はセミナー室の最後部に座り、発表者とのやり取りがすべての学生にも聞こえるように配慮されていた。

- ・授業中、しばしば学生に質問がないか問いかけていた。残念ながら、その問いかけに答える学生はいなかったが、授業開始前と終了後に異なる学生が教員に質問をしていた。教員と受講生との間に良好な関係が保たれている様子が窺われ、授業がよい雰囲気で行われている一因に思われた。

- ・学生が積極的に解答し授業が円滑におこなわれている。

- ・演習問題の具体例から一般的な場合の解説に話を導き、学生の理解を深めるように配慮されている。

- ・多くの学生にとって考え方の難しい問題をわかりやすく解説している。

- ・学生に質問することにより、問題のポイントとなる箇所を強調し学生の理解度を高めるようにしている。

- ・学生の曖昧さのある解答にたいして適切な解説により、解答として曖昧であることと数学としての適切な表記を説明している。

(改善点)

- ・1 題ほど学生が解答できず、教員が解説することになった。解説自体は適切であり、学生への指導としては十分その役割を果たしているが、理解できているかどうか確認の意味を込めて、レポート提出を果たすとさらに効果的であるように思う。

- ・問 2 の 1 次変換は定義域をきちんと明示したほうが学生も取り組み易かったのではないだろうか？

## 2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

### (1) 実施科目「力学 I」(後期)

#### 1) 概要

①日時：平成 26 年 1 月 24 日 (金) 16:10-17:40

②対象学生： 1 年生

③授業概要：いろいろな物体に働く力と運動を解析することを通じて、現代物理学の基礎となった力学が体系づけられた。この授業では、高校や共通教育で習った物理の力学に関する内容をベクトルの微積分を使って定式化し、具体的問題に適用することで理解を深める。さらに、一般化した座標を使って記述する解析力学の形式があることを知る。

この授業は理解度別クラス編成(通常クラスとアドバンスクラス)で実施している。

授業の到達目標：

- ・物理学の基礎である古典力学(ニュートン力学)を学ぶ。ベクトルの微分方程式で運動方程式を記述し、これを積分することで運動を解く。

- ・運動量、角運動量、仕事とエネルギーなどの概念および保存則を理解する。

- ・一般化した座標と速度で問題を記述する解析力学の方法を知る。

- ・物理学等のトピックに関する説明文において、結論や主張とそれを導く前提や理由を見分けること



- ④授業担当教員：朝日 孝尚（アドバンストクラス担当），増山 博行（通常クラス担当：非常勤）  
レビュアー：野崎 浩二，坂井 伸之，芦田 正巳
- ⑤レビューの方法：授業に出席の後，授業改善点等のレビューをメールにて提出してもらった。

## 2) レビュー結果

### ①アドバンストクラス

通常の講義形式の授業であった。板書とは別に学生にはプリントが配布され，学生が板書をノートに写すことに意識を捕われぬように工夫されていた。プリントの内容はていねいで学生が理解しやすいように工夫がされていた。板書と話がうまくシンクロしており，話も平易な言葉が使われていたので，学生には理解しやすい授業であった。他の教員からは，「自分の担当している講義との内容的なつながりを確認できたので活用したい。」という意見もあり，FDとしての効果が大きいピアレビューであった。もう少し，学生への問いかけや学生の反応を見るなどして，理解度を確認してもよいかとも思われた。

### ②通常クラス

授業の開始時に前回の復習の時間を取り丁寧に説明している点がよかった。学生に向けた話し方，板書のしかたは他の教員にとってとても参考になった。さらに，演示教材を巧みに利用し，学生が少しでも理解できるように工夫がなされていた。授業で扱った事象と自然災害を結びつけることによって学生の興味関心を引き，学生の理解度を高める工夫もされていた。授業内容の一部は1年生には少し難しいかもしれないというレビュアーの意見もあった。

## (2) 実施科目「計算機モデル論演習Ⅱ」(後期)

### 1) 概要

- ①日時：平成25年11月19日(火)
- ②対象学生：3年生
- ③授業概要：1. ロボット制御の基本的な演習を行う。2. 数理計画問題に関するプログラミングを行う。

授業の到達目標：

- ・最適化問題を解くための手法に，様々な方法があることを理解する。また，それらの特徴を理解する。
- ・実践的な問題に対して，定式化の方法を考える。また，それを解くためのアルゴリズムを考える。
- ・パラメータを変えることで，解の求まりやすさが変わる。様々な工夫をして，より良い解を求めようとすることを求める。
- ・プログラムが分かりやすく書け，適切に説明することができる。

### ④授業担当教員：西井 淳

レビュアー：山本隆，松野浩嗣，末竹 規哲，吉川 学

- ⑤レビューの方法：授業に出席の後，授業改善点等について議論し，またメールなどで指摘する。

## 2) レビュー結果

### ① 授業内容

ロボットレースを行う。既定のコースを既定の時間内でどれだけ周回できるかを目標にしている。コース途中で様々な障害が設定されており，それらを上手く回避しつつ周回する。ロボットとはいってもミニカーに各種のセンサが付属した形態で，センサからの情報を得て自律的に走行するようにプロ

グラミングすることになる。プログラミングの出来、不出来が結果を大きく左右する。下図参照。



(a) 授業の様子



(b) 使用したロボット

## ② 授業の進め方

- ・1人3分程度の持ち時間で各自プログラムをチェックする。
- ・チェックは2回実施される。練習走行しながらチェックし、プログラムを改良する。
- ・本番走行ではコースを2周する。50秒間、走行させる。途中でのリタイヤもある。
- ・クリアしたところが教員とTAによってチェックされ、獲得点となるなど、目に見える評価が得られる。
- ・本番走行も2回、チャンスが与えられているのがよい。
- ・学生が生き生きしていて、アクティブな授業であった。
- ・坐学だけではつかめないモノの動きを実感できる数少ない授業なので、意義深いですし、継続していくべきものと思います。

## ③ その他、改善点

- ・かなり、時間的にタイトではなかったか。作業に追われていないか。次の待機学生とぶつかるようなケースがあった。
- ・プログラムを作る際、トライアンドエラーで行き当たりバッタリにやってる学生が多そうだったので、もっと戦略的に「エレガントな方法」を体験させるように仕向けるやり方もあるかもしれない。

### 3. 生物・化学科のピア・レビュー

#### 3. 1. 生物学コースのピア・レビュー

##### (1) 実施科目「生物学演習 III」

###### 1) 概要

①日時：平成26年1月9日（木）3・4時限

②対象学生：生物・化学科、生物学コース3年生（13名）

③授業の概要：生物学演習 III は3クラスあり、同日に別々の教室で開講している。各クラスは12～13名の少人数のためにきめ細かな指導ができ、毎年の学生授業評価での学生の満足度は高い。藤島が担当のクラスでは、各受講者に英文の原著論文1報を指定し、1ヶ月以上の準備期間を与えて、パワーポイントスライドを作成させ、内容を約30分で紹介させる。その後、発表した学生が座長を行って、質疑応答を約10分行い、最後に、担当教員が発表者のプレゼンテーションの改善点を細かく指摘する。これによって、パワーポイントスライドの作成法、口頭発表の方法、座長のやり方、質問の出し方と質問への回答の方法を経験させる。1回の演習時間で、2名の学生が発表を行う。この授業の最初の4週は、担当教員が、発表を実演してみせて、発表、司会、質疑応答の重要なポイントを指導する。また、関連情報の収集方法とパワーポイントスライド上での引用方法、英語の専門用語の標準的和訳、パワーポイントスライドの効果的な作成方法を教える。難解な質問が出たときの対応方法についても例をあげて指導する。

1月9日の演習では、2名の学生が細胞内共生に関する原著論文（10ページ以上）を紹介した。演習の到達目標：

論文に書かれた研究の目的、背景、実験方法、実験結果、今後の残された問題点を理解する。専門用語と論文の構成、書き方のルールを理解する。口頭発表のための効果的なパワーポイントスライドの作成方法を経験する。フロアから質問を多数出させるために必要な座長のやり方を学ぶ。フロアを理解させる話し方を学ぶ。議論が活発になるような質問の出し方を学ぶ。

④授業担当教員：藤島 政博

レビュアー：宮川 勇、原田 由美子（生物・化学科 生物科学分野）

⑤レビューの方法：90分の演習全体を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点を文書で指摘していただいた。

###### 2) レビュー結果

レビュアーによる授業に対する意見として、以下のものがあった。

・生物学分野のカリキュラムでは、2年生前期の生物学演習入門のように生物学の英文教科書を読む力をつける演習から、より高度なプレゼンテーション能力を高める演習まで、段階的に行われている。本授業は後者の演習に相当しており、研究者として必要なプレゼンテーション、司会、質疑応答の方法を学ぶ優れた方法であると考えられる。とりわけ、発表終了後に担当教員から、適切な改善点が指摘されており、このことは研究者としてだけでなく、生物学を離れて社会で活躍するあらゆる場面におけるプレゼンテーションに役立つものと思われる。

・プレゼンテーションで同じスライドを何回も使わない工夫をすること、スライド中の誤字、文章の間違いを事前に訂正する事、それぞれスライドにおいて実験の目的を示す事、どこが大事なのかを分かり易く示す事などの指摘が指導教員からあり、これらの指摘は非常に適切であった。

・発表終了後に、聞いている学生からの質問がいくつか出て質疑応答が行われた。積極的に質問する学生もいたが、この日の演習では、いつもより全体的に質問数がやや少なかったようだ。もう少し学生からの積極的な質問を期待したい。

・パワーポイントスライドの作り方には個人の好みがあり、一概に善し悪しを言う事はできないが、可能であればスライドの背景の色と文字の配色、配置についても担当教員からのコメント、アドバイスがあると良いと思った。

・少人数の授業で学生自身が発表や質問を行うことで、授業へ積極的な参加が促進されていた。

・座長を発表者とは別の学生に担当させるようにすると、（座長が質問を考えるため）質疑応答がさらに活発になるかもしれない。

これらのレビュアーによるコメントを参考にして、この演習の改善に取り組みたい。

## 3. 2. 化学コースのピア・レビュー

### (1) 実施科目：量子化学及び演習Ⅱ

#### 1) 概要

①日時：平成25年7月4日（木）7・8時限

④ 対象学生：生物・化学科 化学コース3年生（45名）

③授業概要：「量子化学及び演習Ⅰ」を基礎とし、分子に対するシュレーディンガーの波動方程式の適用例を紹介する。水素分子イオンに対して分子軌道法を適用し、エネルギーと波動関数を求める過程を示す。原子価結合法と分子軌道法の二つの方法で水素分子の解を求める。2原子分子や多原子分子の分子軌道の取扱いを紹介する。多原子分子について、結合の極性、電子密度、結合次数等を説明する。パイ電子系の分子に対してヒュッケル近似を適用し、さらに高度な近似計算法である半経験的分子軌道法と非経験的分子軌道法についても触れる。分子軌道計算プログラム Gaussian 03W を用いて実際に分子軌道やエネルギーを求める方法を説明する。

到達目標：水素分子イオンと水素分子に対してシュレーディンガーの波動方程式を適用し、原子価結合法と分子軌道法により解を得る。二原子分子や多原子分子の結合について理解する。ヒュッケル近似でパイ電子系の波動関数とエネルギーを求める。分子軌道計算プログラムを用いて二原子分子の平衡構造や軌道エネルギーを求め、分子軌道を可視化する。

当日の授業内容：エクセルを用いて、ヒュッケル近似による共役系分子の軌道エネルギーと対応する分子軌道を求める。

⑤ 担当教員：谷 誠

レビュアー：石黒勝也・川俣純・綱島亮・村藤俊宏

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答

#### 2) レビュー結果

##### 1. 授業内容に対する意見

- ・基本的なことを学ばせる良い内容である。
- ・エクセルのソルバーにより行列式を解く方法は新鮮で、役に立つ演習内容と思います。

##### 2. 授業の進め方

- ・わかりやすくよい。適宜個人指導がありよい。

- ・学生が内容を理解しないままに演習が作業になっている場合も多そうです。
  - ・ソフトウェアの操作方法を理解できていない学生がいたようです。
3. 改善を要する点
- ・理解度を踏まえた上での演習になるよう、内容を軽くする必要があるかも知れません。

## (2) 実施科目：分析化学実験

### 1) 概要

①日時：平成 26 年 1 月 22 日 (火) 5・6・7・8 時限

②対象学生：生物・化学科 化学コース 2 年生 (44 名)

③授業概要：化学を学んでいく上で必要となる分析化学に関して基礎的な実験操作を身につける。そのため、原則として一人で実験を行い、操作や器具の取り扱いについての一定の技術を身につけるべく反復して練習する。また、分析化学の講義で学んだ事柄に対して実験を通して理解を深めることである。講義で学んだ平衡論を原理として、まず、すべての定量の基礎となる古典的分析法を習得するために、実験の簡単な共存物質の少ない場合の主成分を分析する。次に、共存物質が存在する場合の主成分定量のための簡便な分析法を学ぶ。更には微量含まれる目的成分を多量の共存成分から分離し、機器分析法により定量する実験も行う。実験と並行して簡単な統計の演習も行っていくので、得られた実験値のもつ分布や精度を理解し、結果の信頼度を認識することが可能となる。

授業の到達目標：分析化学を学んでいく上で必要となる基礎的な実験操作を習得する。分析実験に関する操作や器具の取り扱いについての一定の技術を習得する。分析により得られた数値を適切に処理し、望ましい表現に変換する。統計的処理法の基礎を理解する。

当日の授業内容（実験題目）：

- ・エチルバイオレット吸光光度法による陰イオン界面活性剤の定量
- ・ICP 発光分光分析法による水道水中の金属イオンの一斉分析
- ・イオン選択性電極法による飲料水中のフッ化物イオンの定量
- ・クロロ錯体の生成を利用したニッケル (II) とコバルト(II)の分離
- ・高速液体クロマトグラフィーによるカフェインの定量

④授業担当教員：安達健太・村上良子

レビュアー：川俣純、鈴木康孝、谷誠治、綱島亮、藤井寛之

⑤レビューの方法：授業を参観し、意見・改善点の指摘などについて、用紙にて回答した。

### 2) レビュー結果

#### 1. 授業内容に対する意見

・最先端の内容も程よく取り入れられているが、学生も内容をよく理解しており、良く考えられている実験になっていると感じた。

- ・実験テーマが豊富であり、さまざまな化学物質の定量ができるのが良い。
- ・学生が生き生きしており、良く考えられた実験だと感じた。

#### 2. 授業の進め方

・実験の中で水を濃縮しているが、その方法は要検討か。

・TAの存在感があまりない。

・学生も意味をしっかりと理解して実験を進めているようで、自分が担当する学生実験でも参考にしたい。

- ・実験室がきれいで見習いたい。
- ・みんなが何らかの実験を行っていて、手が止まっていないのが良い。

### 3. 改善を要する点

- ・保護メガネの着用率が低い（複数）。
- ・実験台上に使わない器具もあり、整理が必要と思う。
- ・古い木製の椅子や机は順次置き換えた方がよい。

## (3) 実施科目：化学英語及び演習 I

### 1) 概要

①日時：平成 26 年 1 月 27 日（月）3・4 時限

②対象学生：生物・化学科 化学コース 2 年生（53 名）

③授業概要：有機化学の代表的な教科書（英語版）として定評のある「March's Advanced Organic Chemistry」の Localized Chemical Bonding に関する章を学生が和訳し、これに対する担当教員からの質問に学生が答えることで、化学結合の理解度を深めていく。和訳は輪読形式で行う。和訳のみならず、化学的な内容もきちんと理解できているか、担当教員が確認する。まず、シュレーディンガーの波動方程式と原子軌道からはじめ、原子価結合法と分子軌道法、混成軌道について概説する。続いて、光電子分光法による窒素分子やメタン分子の解析例を、軌道の概念を用いて説明する。さらに、電気陰性度や双極子モーメント、誘起効果についても紹介し、最後に分子構造に関して、結合角と結合距離、結合エネルギーの観点から触れる。

当日の授業内容：前半は、短期滞在中のラハマン准教授（ダッカ大学）が、バングラデシュでの生活についてパワーポイントを使って英語でプレゼンテーションを行い、学生が英語で質問した。後半は、化学結合の英文を読み、アルカン分子の中でも炭素数が 5 のペンタン、イソペンタン、ネオペンタンを例に挙げ、炭素-炭素結合の結合エネルギーがこれら 3 つの異性体間で異なる理由を解説した。

④授業担当教員：村藤俊宏

レビュアー：谷誠治・村上良子・藤井寛之

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙にて回答した。

### 2) レビュー結果

以下のようなコメントが寄せられた。今回のレビューの結果は、来年度に活かしていきたい。

- ・静かな環境が保たれている。
- ・ただ英文を読んで訳すだけでなく、きちんと化学的な解釈や説明がなされている。
- ・学生の発言について、日本語訳はあらかじめ用意してきているので、普通に話しているが、英文を読む時は棒読みになっている。発音やアクセントにも注意すると良い。
- ・マイクはないが、教員の声は後部座席までよく聞き取れた。
- ・学生に訳させていたが、きちんと予習していることが伺えた。思ったよりきちんと訳している。
- ・発表する学生の声が、後部座席では聴き取りにくかった。
- ・教室はもう少し狭い方がよいかも。特に、聞く事が大切な授業なので、講義室に対する要望を出してはどうか。
- ・指名された学生が、どこを訳すのか分かっていない場面があった。
- ・発音はどのように指導しているか。
- ・外国人研究者に英語で話を聞かせることは、とても良かったと思う。話も具体的で写真もあり、学生も聞き易かったと思う。英語で質問できる学生もいて、授業の成果が出ていると思った。
- ・前の学生が前向きに話しているのは、ほとんど聞こえなかった。講義室の改善を。
- ・突然の指名にもかかわらず、学生は英語で答えることができていた。きちんと準備しているの



びっくりした。予習させる授業は効果的だと思った。

## 4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

### (1) 実施科目「野外実習」

#### 1) 概要

①日時：平成 25 年 11 月 27 日（水）、13:00～15:20（グループ毎の野外実習まとめ発表会）

②対象学生：地球圏システム科学科 3 年生（24 名）（地域環境科学コース必修科目）

③授業の概要・到達目標

<概要>前期 1 週間および後期 1 週間の実地野外調査ならびに調査後の室内作業を行い、地質調査の方法、地層や岩石の観察法、データの解析法、地質図の作成、調査成果の発表、論文の書き方、等について基本的な能力を養う。特定地域を 5 名程度の班に分けて分担し、共同作業を通じてグループ調査のやり方や協調性を身につける。本年度の実習地は、山口県萩市須佐町周辺である。

<一般目標>講義や実験で学んだ知識や技術を実際に野外で適用し地質や地質構造などをグループに分かれて明らかとする。これらの作業を通じて、学習教育目標 E,F,G,H の「調査計画の立案、調査、成果の取りまとめ、プレゼンテーション、論文作成までを計画的に進め、まとめる能力」「与えられた時間や条件の下で合理的に作業を実施し、問題解決を図ろうとする能力」「調査成果の発表やコミュニケーション能力」などを修得する。

<到達目標：知識・理解の観点> 調査地域の地質・地質構造について理解し、説明できる。室内での地形図や空中写真判読結果と野外での露頭での観察結果とを関連付ける事ができる。

④授業担当教員：宮田・永島

レビュアー：田中・金折・今岡・脇田・大和田・志村・澤井・阿部・坂口・川村

⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート(無記名)とレビュアーによるコメント、授業研究会の開催

#### 2) レビュー結果

①学生の発表技術に関して（声の大きさ、話の速度、プレゼンテーション一般）

- ・概ねよいが、一部原稿の棒読みの班（学生）もあった。発表練習の徹底が必要だろう。
- ・発表の順序に工夫が必要。地質図作成の過程が見えるような発表がのぞましい。
- ・びっしりと文字が書き込まれていたスライドは見づらかった。工夫が必要。
- ・地質図、断面図及び柱状図の表現法をもっと工夫すべき。論文や報告書を読んで、描き方を学んでほしい。
- ・指し棒の使い方がよくない。見せたい箇所を指し棒で示す技術が必要。
- ・話し方について、声の大きさやスピードに気をつける必要のある学生もいた。
- ・文献から図やデータ引用する際は、必ず引用先を書くこと。

②発表会の運営・構成に関して（会場設定に関する準備等）

- ・会場が狭い。
- ・特に問題ない。

③ 野外実習の目標に対する達成度や理解度に関して

- ・各班とも目標の設定基準が不明であった。
- ・学術用語（火成岩類や地層名等）の使用について、誤った使い方をする班が多かった。
- ・特に問題ない。

・班内で役割分担があったのではないかと全員が目標を達成しているとはいえないのでは？

④発表した学生のまとめ方や聴講していた学生の参加度に関して（学生の質問など）

・学生からの質問がなかった。

・院生からの質問も多くはなかった。

・地質技術としてのまとめ方を徹底して指導する必要がある。

・全体としてきれいにまとめていた。スライドの使い方にも工夫が見られた。

⑤野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

・ヘルメット使用の徹底や連絡網の確立など、改善すべき点がある。

・安全第一の徹底。行動の限界を知ることが重要。

### 3) 授業研究会

日時：2013年11月27日 午後5時00分～5時50分

出席：田中、今岡、宮田、脇田、阿部、志村、坂口、川村、永嶋、大和田

#### ①研究会概要

担当者が野外実習の指導方針や実際の調査や室内作業の様子全般を説明した後、学生へのアンケート結果や授業観察の観点（1）～（5）に基づいて意見交換がなされた。

観点（3）：授業（野外実習：進級論文）の学習教育目標到達度

・学生アンケートでは50-70%が9名、70-90%が7名であるが、確実に力が付いている。

・学生により到達度のばらつきがあり、班内役割分担が若干気になる。

・目的とそのためプロセスの意義への理解が必要で、学生への周知を徹底させる。

・進級論文地域全体のまとめ、班境界地域での協力および隣接地域との地質の整合性について共同作業を実施する必要がある。

観点（5）：安全教育の紹介・問題点

・ガイダンスとTA活用、事前に地元警察署へ手紙を出して周知をはかる。

・調査時にヘルメットと腕章を着用する。

・野外実習エリア内の危険箇所を洗い出し、危険箇所を調査範囲外とし、事故を防ぐ。

その他問題点や気付き：

・脱落者への対応や班メンバーへの影響

・班分けに関する問題点

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 大学教育センター・理学部共催FD研修会

#### （1）理学部教育改善FD研修会

主催：大学教育センター・理学部共催

日時：平成25年10月9日（水）15：00～15：45

場所： 人文・理学部大会議室  
 講師： 糸長 雅弘 (大学教育センター長)  
 参加者：理学部教員46名 (アンケート提出者40名)

#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	4	10.0%
良かった	10	25.0%
どちらとも言えない	15	37.5%
あまり良くなかった	7	17.5%
良くなかった	3	7.5%
無回答	1	2.5%
合計	40	100.0%



内容： 本年4月から導入された新しい共通教育についての理学部の意見と、それに対する大学教育センターの回答があり、相互の意見交換が行われた。

#### 理学部の教員からの意見と回答

理学部では、研修会に先立ち、新しい共通教育についての理学部の教員からの意見を事前に大学教育センターに送っている。理学部からの意見としては、次の3点がある。

(1) 受講人数が多過ぎる。自然科学1と2はそれぞれ16クラスを理学部で開講している。2,000人近い学生に16クラスでは、1クラスの平均の受講者数は多くならざるを得ない。

(2) 授業の内容や形態を考え直す必要があるのではないかと。内容が文系・理系の全学部に渡って、同じカリキュラムであるので、無理がある。そのため、文系の学生の中には、受講の意欲がなく、受講態度に現れる者もいる。すべての学部の学生が受講しなくても良いのではないかと。

(3) 休講しにくいので対処が必要である。ほとんどがクォーターの科目になっており、振替もクォーターでやる必要があり、非常にタイトなスケジュールになっており補講もほとんど不可能な状況となっている。

さらに、既存の共通教育科目についての意見であるが、「情報リテラシー演習」は、内容が Word、Excel の基本的な使い方であり、これをすべての学生が受講することになっているが、できる学生にとっては、つまらない授業となっている。最初に、プレースメンステストのような何らかの試験を行って、それに合格した者は認定することにより、実際に受講しなくても良いのではないかとという意見が理学部から出ている。

研修会では、まず、この意見に対する回答が話された。

(1) については、現状では1クラスの平均の受講者数は多くならざるを得ないので、対処をお願いしたいという回答であった。

(2) については、文系・理系はクラス指定をうまく活用する事で可能であると考えているという回答であった。クラス指定となっているので、到達目標で少し難易度の差を付けることにより対応してほしいということであり、さらに、できれば意欲のない学生の意欲をかき立てる授業をやってほしいという要望があった。また「すべての学部の学生が受講しなくても良い形にする」というのは、現状では不可能であるという回答であった。現在は、24年度以前の入学者向に対する共通教育が平行して走っている状況であり、さらに変更を行うと3つ目のシステムが走ってしまうため、時間割編成上不可能である。今の共通教育のシステムを変えるとすると、24年度以前の入学者が事実上いなくなるまで、最低でも4年間くらい走らせないとなかなか変更するのは難しいということである。

(3) については、休講にしたときは授業をやった場合と同じ程度の学習時間が確保できるような課題を課すような形態で対応しても良いと考えているという回答があった。

「情報リテラシー演習」の件については、クラス分けで対処する、例えば、従来型のリテラシー演習のクラスと、もう少し詳しい内容の演習も入ったクラスに分けるということなどで対応することも考えているが、実際にそのようなクラス編成が可能であるかどうかは議論する必要があるという回答があった。

研修会では、新しい共通教育について、様々な観点から活発な質疑応答や意見交換が行われた。

## (2) 講師派遣型アラカルト研修会「山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法ー学生を就職させるためにー」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成25年9月18日(水) 13:30～  
14:30

場所： 理学部第11講義室

講師： 平尾元彦(学生支援センター 教授)

参加者：理学部教員16名



内容： 本研修会では、就職活動の変遷と現在の問題点、大学における就職支援の必要性とそのあり方についての説明が行われた。学生の就職活動は、バブル崩壊やリーマンショック等を発端とする経済的長期低迷に加えて、ここ十数年で飛躍的な進歩と普及を遂げた情報環境の変化からも大きな影響を受けている。特に後者については、学生は所属する大学によらず求人情報を得ることが可能となり、企業は以前よりも幅広い学生に対して求人募集ができるようになった。大学教員が、就職活動を行っている学生にどのような支援や協力をしていけば良いのかということについて述べられた。

質疑応答では、「海外で就職したいので、卒業後は就職せずに留学したいという学生に対してはどのようにアドバイスすべきか」や「卒業後すぐに仕事をやめた者に対して、どのようにアドバイスすべきか」などの具体的な事例についての質問があり、回答がなされた。

質疑応答では、「海外で就職したいので、卒業後は就職せずに留学したいという学生に対してはどのようにアドバイスすべきか」や「卒業後すぐに仕事をやめた者に対して、どのようにアドバイスすべきか」などの具体的な事例についての質問があり、回答がなされた。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	50.0%
良かった	8	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%

### (3) 講師派遣型アラカルト研修会「今、山大生は何を考え、悩み、不安を覚えているのかー学生相談所から見てくる山大生の実態ー」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成25年10月30日（水）15:00～16:00

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 今井 佳子（山口大学学生相談所 カウンセラー）

参加者：理学部教員18名

内容： 本研修会では、学生が抱える悩みや不安の実態と教員の対処方法について、具体的な事例を含めて説明が行われた。近年、学生相談所は学生からの相談だけでなく、教員からの学生に関する相談を受けるケースも増えている。大学教員が学生に対応する際の注意点が以下のように説明された。

- ・保護者に連絡する必要があるの有無を検討する。不登校の場合は保護者への連絡が必要である。
- ・学生に積極的に話しかけ、相談しやすい雰囲気を作り、できる限り話を聞く。また、学生に「眠れているか」、「食べているか」、「困っていることはないか」の3点を尋ねることによって、生活状況等の問題の把握に努める。
- ・不安を抱く学生は自己肯定感がひとときわ低い者が少なくないので、出来ていることを積極的に褒めて明示的に評価する。また、自信がないところを厳しく言われると極端に落ち込むことがあるので、指導方法に配慮をする。
- ・学生相談所に行くことを勧める。学生相談所に行くことを非常にネガティブに捉えて躊躇する学生に対しては、相談所は何でも気楽に相談できる場所であることを説明する。
- ・教職員がソーシャルメディアを利用する際には、学生から読まれる可能性があることを常に意識し、学生に関して不用意な発言をしないように十分に注意する。
- ・学生の指導において良かれという気持ちからの働きかけ（厳格な指導等）が、学生からハラスメントとしてとらえられることがあるので注意する。

そのほか、活発な質疑応答が行われた。

## 2. 理学部開催 FD 研修会

### (1) 高大連携FD研修会「新教育課程での高校生の学力保障を見据えたカリキュラム編成と教育現場での実態について」

主催： 理学部

日時： 平成25年8月22日（木）10:30～11:30

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 周藤 保充（益田高校 教諭）、毛利 裕子（益田高校 教諭）

参加者：理学部教員18名

内容： 本研修会では、平成24年4月より導入された新学習指導要領の理科についての解説が行われた。まずは、新課程移行スケジュールと高校新課程の理科のポイントについて説明が与えられた。内容について大幅に変わっているわけではないが、今回の理科の新課程移行においての変化の特徴は

「多様化」であり、高校生の学力保証のためには、理科の単位数を増やす高校が多いという教育現場の実態が述べられた。理系の理科は、専門科目の演習不足が懸念されるなど、高校での今後の理系の生徒に対する指導への影響があるようで、定着度の低下、学力格差の拡大、演習不足、3教科の完成時期の遅滞など、新課程により高校が直面する課題について述べられた。最後に、具体的なことがらについての質疑応答が行われた。

## (2) 理学部FD研修会「e-learning」

主催： 理学部

日時： 平成25年8月29日(木) 13:00～14:00

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 西井 淳(山口大学 理工学研究科)

参加者：理学部教員 20名

内容： 本研修会では、e-learning に関して概要から具体的な方法までの解説が行われた。Khan Academy や Coursera.org などのe-learning 教材を活用した大規模なオンラインコース(MOOC, Massive Open Online Course)についての動向の紹介の後、e-learning の導入のメリットが述べられた。学生が事前にオンライン講座で基本を学んでおけば、「教室では教授と学生とが高度な内容のやり取りをする」ことが可能になり、「家で講義を、学校で宿題を」の標語で表されるような逆転授業の教育形態が実現される。理学部でも Moodle を用いた e-learning の導入を進めているが、物理・情報科学科での具体的事例として「e-learning による誘導問題・計算ドリル」、「ビデオ講義の授業受講前の聴講」、「e-learning システムを活用した学生によるレポートの相互採点」などの紹介があった。さらに、授業に e-learning を導入するときのビデオ講義の作り方や講義資料の作成などの具体的な解説があり、ビデオ講義については、言い間違いや書き間違いを気にせず作成した方が良いという実践的なアドバイスもあった。講演の終了後も、e-learning についての活発な質疑応答が行われた。

## 第3節 教育改善に関する活動

### 1. 「サイエンス実習」、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」における学士力育成の取り組み

理学部では平成20年度から、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成のため、数理科学科以外では「サイエンス実習 I、II」(各1単位)を、数理科学科では「数理科学企画研究」(2単位)と「数理科学トピック」(2単位)を実施している。さらに、理工学研究科(理系専攻)では「サイエンス特別実習 I、II」(各1単位)を実施している。

履修学生は、科学理解増進活動事業(例えば、山口大学理学部サイエンスワールド)に向け、自らが企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、一般市民に対してプレゼンテーションを行う。それらを通して上記の能力を身に付けさせることが「サイエンス実習 I、II」、「数理科学企画研究」および「数理科学トピック」の目的である。毎年、20名から30名の学部生、大学



院生が履修しており、教員からは明らかな教育効果が見られると評価されている。ここでは、その取り組みの一例として、「数理科学企画研究」について報告する。

### 理学部 数理科学科の実習例

2013年10月20日に「理学部サイエンスワールド2013」が行われ、数理科学科からは、

「いつぬるの？今でしょ！！～四色定理～」

「Challenge! ～15パズルとサイコロ～」

の2つのブースを出展した。前者は、「どんな地図でも四色で塗り分けられる」という「四色定理」について学んでもらうことを目的としている。用意された塗り絵用の地図に楽しみながら色を塗ってもらうことにより「四色問題」について学び、1977年（後年、不完全な部分が補完された）AppelとHakenによって「コンピューターを用いて証明された」という歴史的にも様々な逸話のある「四色定理」について体験してもらう企画である。後者は、「対称性」をテーマとして、「幾何学の多面体」と「代数学の置換群」との関係を実験してもらうことを目的としている。出展にあたっては、担当教員の指導のもと、「数理科学企画研究」の履修学生が毎週集まって企画、構想を練り、テーマの選定から始まり、具体的にはどのような形で表現すればわかりやすく伝えることができるか、内容を体験してもらうためにはどのような体験資料や体験物を用意すれば効果的か、などすべて学生自らが創意工夫をして準備を行うものである。実際の「サイエンスワールド2013」の当日には、来場者である小学生以下の子供たちから大人まで大変満足してもらうという成果がえられた。学士力を総合的に育成するという観点から、この取り組みは、非常に有意義なものとなったと考えられる。



## 2. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。平成23年度には、学長裁量経費を申請し、低年次教育改革を実施した。それ以降、平成25年度も引き続き、改革のための取り組みを行った。以下に、理学部全体および各学科におけるそれぞれの取り組みの一部を報告する。

### （1）e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

#### 1) 理学部におけるe-ラーニング導入・利用支援体制

理学部では理学教育企画センターが中心となり、平成21年度から教員がe-ラーニングを専門教育の授業に積極的に導入・活用する支援の取り組みを行ってきた。今年度も理学部長裁量経費を申請し、教員のe-ラーニング導入・活用を促進するための支援員（技術補佐員）を1名配置して、Moodle利用時の技術的な支援体制を整備するとともに、大学院生を中心とした教材入力補助体制も構築した。

## 2) 数理科学科における e-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の科目で e-ラーニングを活用した。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科 1 年生（約 55 名）

活用方法：この授業では自習時間の増加を狙って e-ラーニングの活用を昨年度より開始している。内容は高校レベルの数学の復習ができる内容の宿題を一定回数課すという形である。成績の 10 パーセントを e-ラーニングのテストの成績で評価しており、ほぼ全て学生が e-ラーニングを活用した。アンケートでは、50 パーセント以上の学生が e-ラーニングを使うことにより数学の勉強時間が増えたと回答しており、一定の効果が確認された。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科 2 年生（約 55 名）

活用方法：昨年度は自習用の課題として e-ラーニング教材を利用したが、今年度は e-ラーニングへの取り組みを成績評価に入れ、本格的な活用を開始した。内容は微積分・線形代数の復習となる内容の問題を 2 週間に 1 回解答させるというものである。アンケートでは 80 パーセント以上の学生が一回の課題に対し一時間以上問題に取り組み、また、60 パーセント以上の学生が e-ラーニングによる学習が有効であったと答えており、学生の学習時間確保という面でかなりの効果があったことが確認された。学生から模範解答の整備に対する要望が多く寄せられており、今後はそれらの要望に対応していくことが望まれる。

## 3) 物理・情報科学科における e-ラーニングの活用事例

物理・情報科学科では数学関連科目を中心とする以下の科目で e-learning システムを活用している。

- 「物理と情報のための基礎数学 I」
- 「物理と情報のための基礎数学 II」
- 「物理と情報のための応用数学 II」
- 「ロジカルシンキング II」
- 「計算モデル論 II」
- 「計算モデル論演習 II」
- 「数値解析」(今年度新規作成)
- 「情報リテラシー演習」(今年度新規作成)
- 「プログラミング演習 II」(今年度新規作成)

今年度は、これらの科目の e-learning 教材の改訂およびコンテンツの追加を行い、宿題や自習のための小テスト配信、講義資料配布、出席管理、レポートの相互採点等により活用した。特に、「物理と情報のための基礎数学 I、II」では講義時間の時間不足を補うため、e-learning システム上にビデオ講義 25 本を用意し、これを見ることを理解度確認のための小テストとともに宿題とした。有効性の確認のために「物理と情報のための基礎数学 II」においてアンケート調査を行ったところ、「ビデオ講義は勉強の役に立ったと思いますか」との問いに対して受講生の 87%が 5 段階で 4 以上(そう思う、もしくは、ややそう思う)と答えた。アクセスログを見ても特に試験直前にはビデオを見直す学生は多いようであり、理解が不足な箇所の復習にビデオ講義が有効であることが伺える。また、「e-learning 教材は理解度の確認や勉強のきっかけにするために役立ったと思いますか」との問いに対しては 80%が 5 段階で 4 以上(そう思う、もしくは、ややそう思う)と答えており、e-learning 教材について学生は肯定的に受けとめていることが伺える。

#### 4) 生物・化学科学科における e-ラーニングの積極活用事例

生物・化学科では、1年生の必修科目と理学部共通科目において e-ラーニングを活用した。化学の授業における e-ラーニングでは、Moodle システムの化学構造式描画用 JAVA アプレットを使用するが、新入生への推奨ノート PC が Windows 8 となったため、このアプレットに由来するトラブルが多発したが、メディア基盤センター教員の協力により概ね解決することができた。

e-ラーニングでは、それぞれの問題の正解や誤った解答に詳しい説明を加えることが困難であり、解説が欲しいという要望が多く寄せられた。そこで、今年度は授業外の時間に補講の形で e-ラーニングに関する解説を行う機会をもうけ、また、受験状況を授業でも紹介したところ、昨年度と比べて受験件数がほぼ倍増し、多くの学生が正解を導くために繰り返し受験したことがうかがわれる結果となった。

##### ①授業科目名： 化学概論

対象学生：生物・化学科1年生（必修科目）、物理情報科学科及び地球圏システム科学科2年生（理学部共通科目）

授業担当教員：山崎鈴子・石黒勝也

e-ラーニング：4回（各10～20題）

	24年度	25年度
受講者数	121	150
受験件数		
演習1	186	324
演習2	177	320
演習3	149	250
演習4	127	252

##### ②授業科目名： 有機化学 I

対象学生：生物・化学科1年生（必修科目）

授業担当教員：石黒勝也

e-ラーニング：6回（各10～15題）

	24年度	25年度
受講者数	85	89
受験件数		
第1・2章演習	137	226
命名法演習（1）	157	261
第3章演習	117	263
命名法演習（2）	106	192
第4章演習	106	232
第5章演習	104	174

## （2）補習授業の実施

生物・化学科では、1年生の必修科目における補習授業を行った。

前期

化学コース3年生「有機化学IV」

○特別補習・再々試験

8月29日(木) 9:00~18:00 理学部第11講義室

8月30日(金) 9:00~18:00 理学部第11講義室

受講生：10名

1年次からの有機化学の締めくくりとして、有機化学IVの成績不良者を対象に、有機化学の基礎からIVの内容にいたる課題を与え、2日間をかけて演習を行った後、有機化学IVの再々試験を実施した。

後期

生物・化学科1年生「有機化学I」

○期末テストプレ補習

1月29日(水) 17:50~19:20 理学部第15講義室

受講生：63名

期末テスト学習用の課題(昨年度の期末テスト問題)について解説を行った後、e-Learningで質問が寄せられた問題について解説した。

○期末テスト演習・再試験

2月7日(金) 理学部第14講義室

16:10~17:40 期末テスト問題に関する演習

17:50~19:20 再試験

受講生：25名

期末テスト不合格者を対象に、期末テストの問題を改めて解くレポート課題を提出させ、それについての演習を行い、解説した後、再試験を行った。

### (3) 学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成23年度に4つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成24年度には、1年生、2年生の5つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。平成25年度も引き続き学力別クラス編成を実施し、学生の学力に応じた授業を行っている。

#### ○「物理と情報のための基礎数学I、II、III」

・これらの授業科目は、物理学と情報科学の両方の基礎となる内容を学習させるため、将来、物理学コースおよび情報科学コースのどちらに進む学生に対しても同じ内容の学習をさせる必要がある。したがって、講義は1クラスで行った。

・学習意欲はあるが、理解度不足の学生に対しては、時間をかけて学習させる対策と個々の学生への指導時間の確保が必要である。演習は発展クラスと入門クラスに分け、入門クラスの演習時間は2コマに、発展クラスは演習1コマ+自宅学習とした。



## ○「力学Ⅰ」と「電磁気学Ⅰ」

・この2つの授業科目については、将来、物理学を本格的に学習する学生と情報科学コースに進む学生でその到達度は異なってもよい。したがって、講義、演習ともに学力別クラス編成で実施した。

発展クラス	講義	演習
入門クラス	講義	演習

学力クラスを設けることで、学力に応じた説明をしやすくなる点で教員にとって講義をしやすくなった。また、基礎数学における学生アンケートでは、「クラス分けをすることは良いと思いますか」との問いに対して受講生の約8割が5段階で4以上(そう思う、もしくは、ややそう思う)と答えているように、学生も、その学力に問わずクラス分けには賛成している。

実際に、学力向上の効果を検証することは、コントロール実験ができないため困難であるが、クラス分け編成導入後、単位取得率は上がっているなので、おそらくは効果があったと判断している。

## (4) その他の取り組み

### 学生参加型授業の更なる実現をめざした物理・情報科学科の新しい取り組み

物理・情報科学科では、平成24年に授業科目「ロジカルシンキングⅠ、Ⅱ」を新設した。この授業は単なる講義ではなく、2回に一度は1教員で約10人の学生グループを担当する学生参加型演習を行い、個々の学生の学力に応じてきめ細かく指導している。

### 地球圏システム科学科の教育改善に関する活動

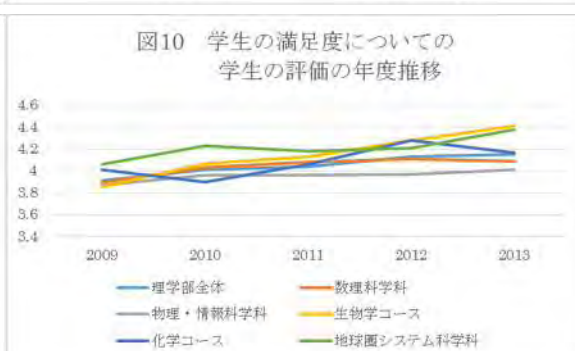
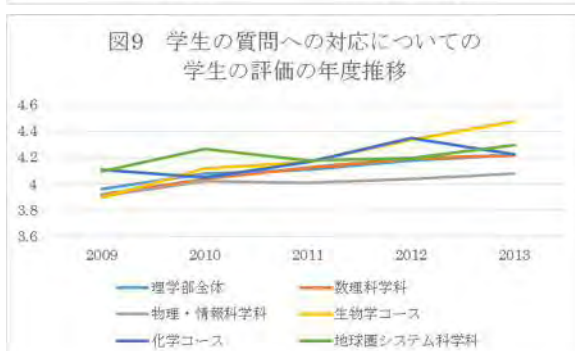
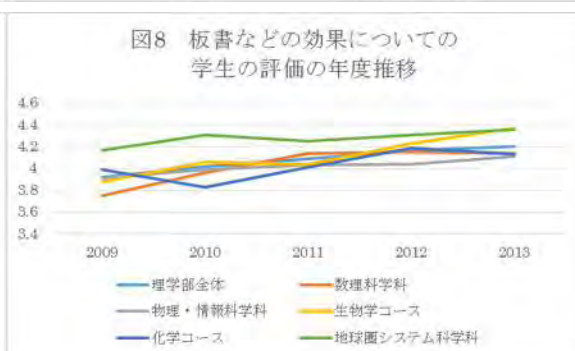
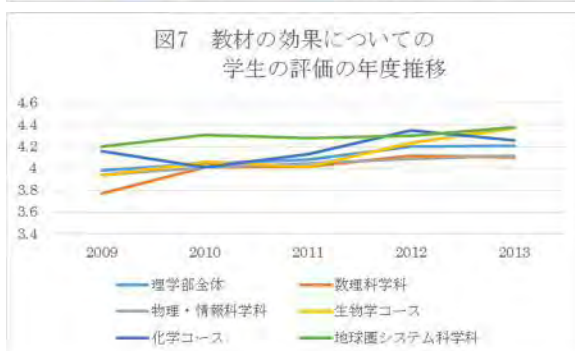
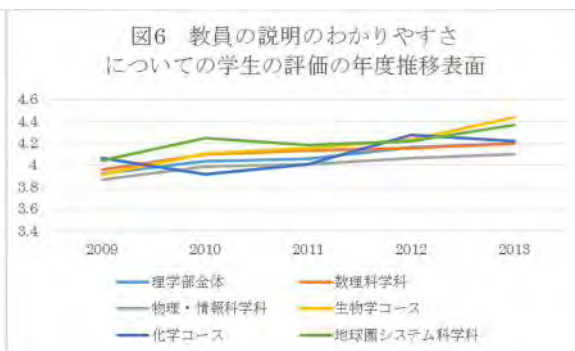
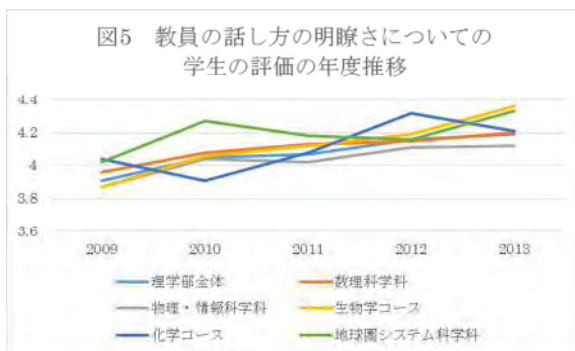
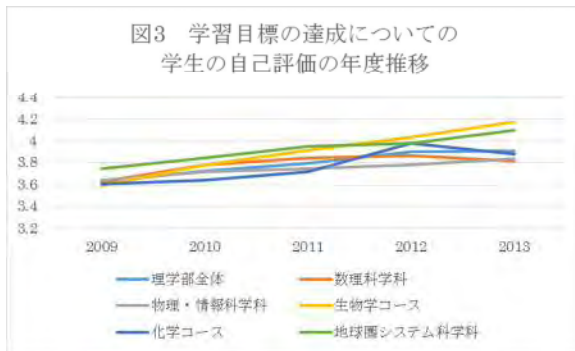
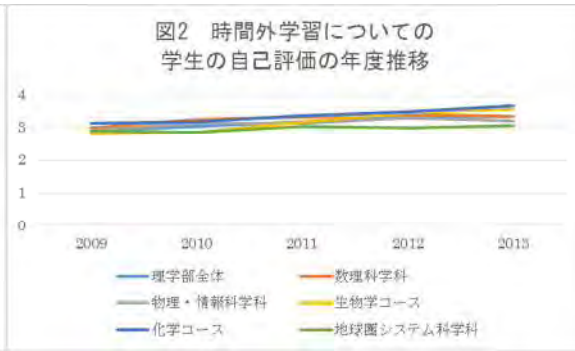
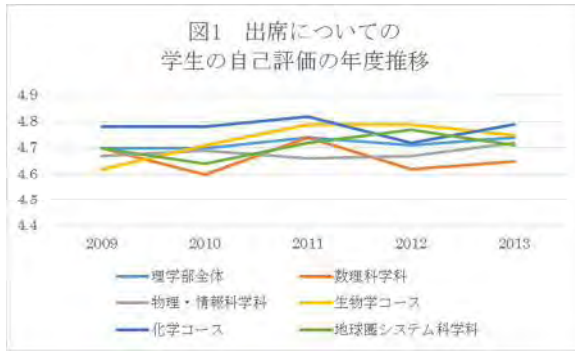
地球圏システム科学科は、「地域環境科学コース」「環境物質科学コース」の2コースからなり、教育改善ワーキンググループにおいて定期的に両コースの教育の質の点検、改善を行っている。さらに「地域環境科学コース」は、日本技術者教育認定機構(JABEE)による審査を受け、技術者教育にふさわしいプログラムに認定されている。この認定を継続するため、学科内のJABEE対策ワーキンググループにおいて学習・教育目標、学習・教育の量、教育手段、教育環境、学習・教育目標達成度、教育改善などの共通基準と「地球・資源およびその関連分野」の分野別要件について常に厳しい点検を行っている。今年度は、教育効果のさらなる向上を目的に、授業の新設、現行科目の統合および科目名の変更、選択科目の必修化、開講時期の変更等を行った。新カリキュラムは平成25年度入学生より適用される。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

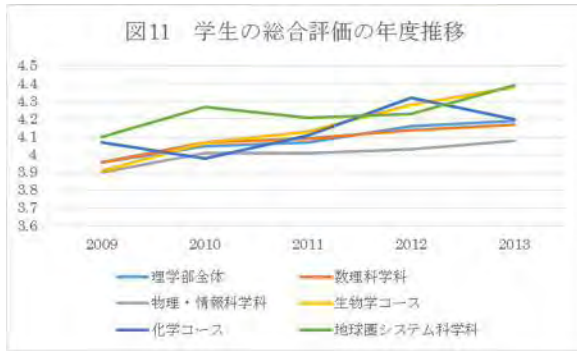
### 1. 学生授業評価

理学部で開設している専門科目223のうち、学生授業評価対象科目は171科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは166科目で実施率は97.1%であった。

学生の授業評価の結果を理学部全体と各学科について、年度推移をグラフ化したものを以下に与える。グラフの数値はすべて、正規化された指標である。年度推移を見ると、全体的に上昇している。これは、理学部や学科・コースでの日頃の努力の成果が現れているものと思われる。

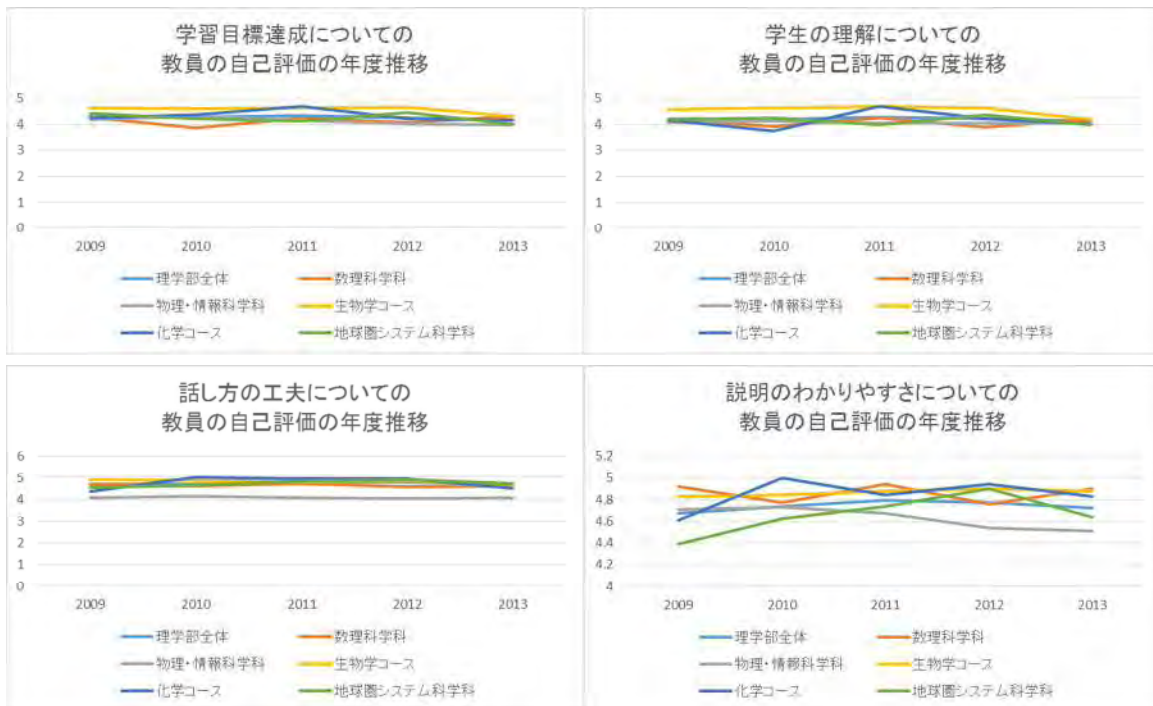


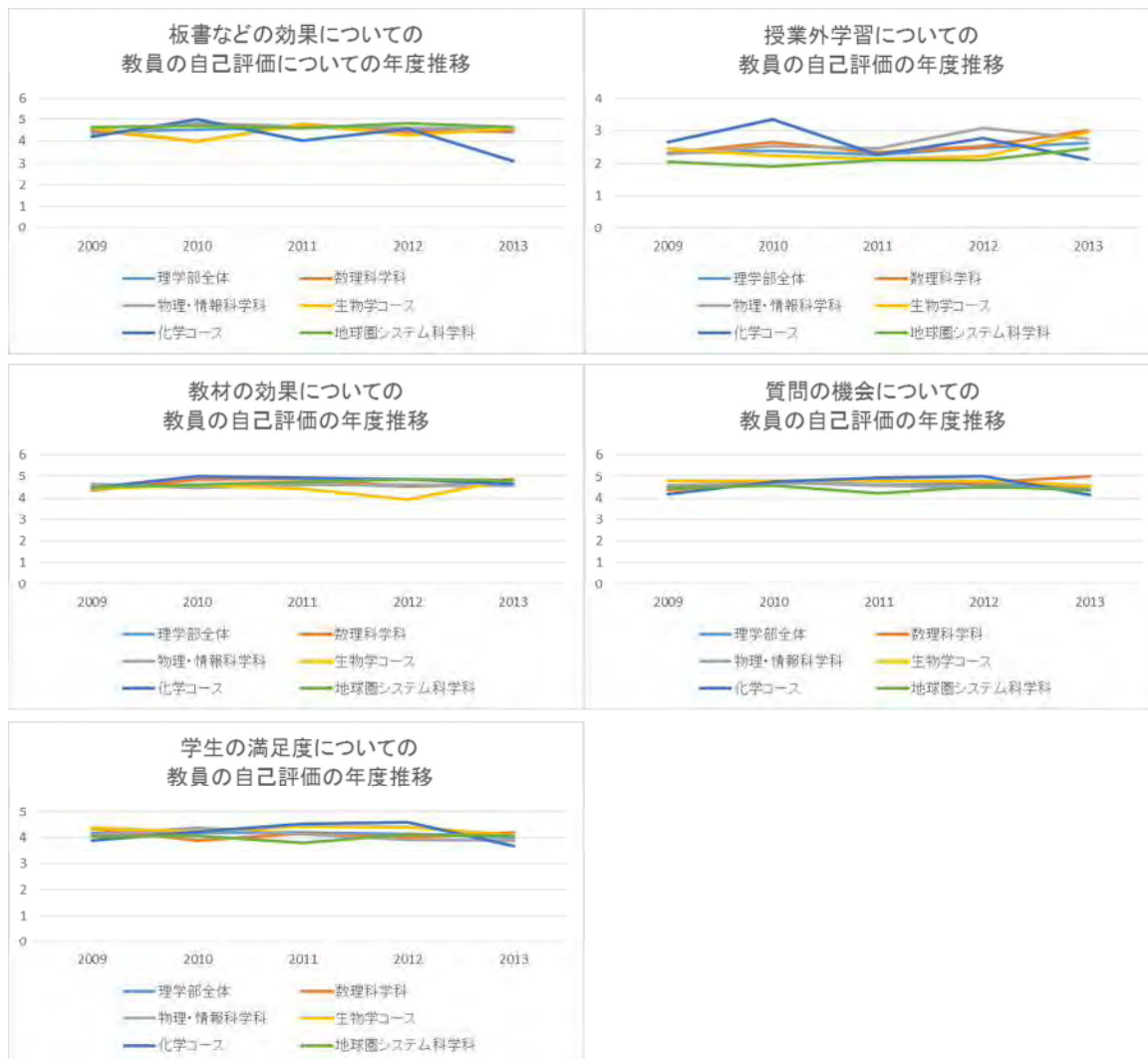




## 2. 教員の自己評価

教員の自己評価の結果を理学部全体と各学科について、年度推移をグラフ化したものを以下に与える。グラフの数値はすべて、正規化された指標である。年度推移は全体的に横ばいか、あるいは少し下降している。学生の授業評価が上昇しているにもかかわらず、教員の自己評価が下降する傾向にあるのは、授業にはまだまだ改善の余地があるとしても、良い方向に向かっているものと考えられる。





## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額	FD活動の効果 (簡潔に)
理学部	高大連携FD	新学習指導要領に対応した数学と理科の教科書の購入	95640	平成27年度入学者から対応しなければならない新学習指導要領の内容を把握し、授業の内容の修正・計画を行う。
<b>計</b>			<b>95,640</b>	

## 第6節 来年度の課題

理学部では、理学教育企画センターが中心となり、教育改善に努めている。その中で表面化した課題は、学生の自己学習習慣と能力の不足である。数理科学科では他の学科に先行して、個々の学生の学力に応じたきめ細かい指導を行うために、1年次から少人数のクラスに分けて個別指導を行うセミナー系の科目を設けている。低年次の学生に対しては現状ではまだ不十分と思われる状況であるが、少しずつ学生との個別の面談を取り入れたり、学生の個別の相談に対応している。このような低年次教育の充実についての取り組みを今後も継続し、その効果を見極め、理学部全体での教育改善へと繋げていくことが必要である。

# 第8章 医学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### 1. 保健学科

#### (1) 授業公開（ピアレビュー）

- 1) 日時：平成25年10月22日（火）10：20～11：50
- 2) 科目名：基礎看護学方法論Ⅱ
- 3) 項目：検査の援助技術
- 4) 対象：看護学専攻2年生（必修）
- 5) 担当教員：看護学専攻 正村啓子教授
- 6) 参加者：看護学専攻教員22名、検査学専攻教員8名 計30名

#### 【講義の目的】

- 1) 単元のねらい：検査を受ける人を看護するために必要な基礎となる知識と技術を習得する。
- 2) 学習目標
  - ①検査の意義を説明できる。
  - ②検査における看護者の役割を説明できる。
  - ③検査の前・後の看護の継続性、ヘルスケアチームの連携の重要性を説明することができる。
  - ④検査の種類（生体検査、検体検査）とその特徴を説明することができる。
  - ⑤生体検査の主要な例を挙げ、看護上の注意点を述べることができる。
  - ⑥検体検査の主要な例を挙げ、看護上の注意点を述べることができる。
  - ⑦正しく検体の採取ができる。（静脈血・一回尿）
  - ⑧尿比重測定・尿定性試験（試験紙による）を実施できる。

#### 【ピアレビュー】

「検査の援助技術」は、看護学専攻および検査技術科学専攻教員に共通する技術の講義であったため、双方にとって関心のある授業内容であった。参加者の約8割からカリキュラムにあった内容で、授業方法が適切であるとの評価が得られた。具体的な意見としては、写真・動画などの活用によりイメージしやすく、大変わかりやすい授業である、理論と技術の実際が分かりやすく説明されていたなどが聞かれた。学生にとって「採血・採尿の援助技術」の知識を身につけるために必要な講義であり、次週に行われる演習に役立つものであると考えられた。

次年度以降のピアレビューに関しては、約7割の教員が希望しており、教員の中から数名の授業者を選び、開催していくことが必要であると考えた。また、時期としては、後期（10月頃）が好ましいとの意見が多かった。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 保健学科

#### (1) 保健学科主導FD研修会

- 1) 講師：温品 富美子
- 2) 日時：平成26年2月4日（火）13:00～14:30
- 3) 場所：山口大学医学部保健学科第2研究棟 HD1-1
- 4) 演題：「学生のモチベーションが上がる指導法」
- 5) 研修対象者：医学部保健学科の教職員
- 6) 研修スケジュール：約90分
- 7) 参加者：看護学専攻教員22名、検査技術科学専攻教員8名 計30名
- 8) 内容：

今回の研修は、(有) ケイ・アンド・ワイ 人材育成部門の主任講師である温品富美子先生をお招きし、「学生のモチベーションが上がる指導法」について講演をしていただいた。温品富美子先生は、平成10年やまぐち女性起業スクールを終了され、接遇マナー・ビジネスマナー・コミュニケーション能力開発の研修講師として官公庁・学校・企業等で活躍されている。また、平成14年よりCoach21プロコーチ養成プログラムを受講され、コミュニケーションスキル・マネジメントスキルトレーニングの手法を習得し、(財)生涯学習開発財団の認定コーチの資格を習得されている。現在は、保健・医療・福祉に携わる職員や学生などを対象に幅広くコーチングについて指導されているエキスパートである。

保健学科の教育においては、専門知識と技術を教授するとともに豊かな人間性を涵養する教育を行い、今後の社会の変化に対応しうる医療技術者の養成を行っている。そのため教員は、信頼関係を基盤として、学生のモチベーションを引き上げ、学生自らが解決していく力を身につけさせていく指導方法を身につける必要があると考える。そこで、今回の研修では、コーチングスキル、特徴的なステップ、コーチングのセットアップ、効果的な質問の仕方、課題解決・目標達成のテクニックについて講義と演習を行って頂いた。

教員（コーチ）の心構えとして①相手が学ぶこと、自信を持つこと、成長することを重視する②どうしたら相手が動けるようになるかを共に考える。③相手が行動を起こすまで、行動が変わるまで関わりを続ける。などの講義を受け、具体例をもとにしたロールプレイングなど実施し、楽しく学ぶ機会となった。教員は、「ティーチャー」として知識を正確に伝える、「コーチ」として相手の中に既にある答えや能力を引き出す、「コンサルタント」として経験と知識を活かして相手に最良の解決策を提案する、「カウンセラー」として問題や悩みを抱える相手の相談にのる役割を担っていることをあらためて感じた。

参加者からは、大半から有意義な研修であったとの評価が得られた。しかし、演習を取り入れた研修は、これまでなかったこともあり、苦手であるとの声もあった。講師から提案された問題解決シートは、自分が研究や教育をしていく上でも有効なシートであり役立てたい、効果的な質問が大変役立ったとの意見が聞かれた。次年度以降も教育に活かせるような研修会の企画を行っていきたい。

## 2. 医学科

### (1) テーマ(分野) CBT、試験問題作成

- 1) テーマ: CBT 試験問題の作問及びブラッシュアップ
- 2) 開催日時: 平成 25 年 4 月 19 日～ 1 日間
- 3) 実施時間/回数: 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者: 医学部長
- 5) 開催場所: 学内
- 6) 企画立案者: 医学教育センター
- 7) 講演出席者: 講演者: 1 人 聴衆者: 38 人
- 8) 講演 1: CBT 作問について
- 9) 演者/専門: 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間: 1.00 時間
- 11) 主な内容: CBT 作問に関する説明

### (2) テーマ(分野) カリキュラム関連

- 1) テーマ: シラバス説明会
- 2) 開催日時: 平成 25 年 12 月 20 日～ 1 日間
- 3) 実施時間/回数: 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者: 医学部長
- 5) 開催場所: 学内
- 6) 企画立案者 医学教育センター
- 7) 演出席者講演者: 1 人 聴衆者: 30 人
- 8) 講演 1 : シラバス説明会
- 9) 演者/専門: 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間: 1.00 時間
- 11) 主な内容: 平成 26 年度シラバスの作成に関する説明

### (3) テーマ(分野) PBL/テュートリアル教育

- 1) テーマ: プレ臨床実習テュートリアルテューター講習会
- 2) 開催日時: 平成 25 年 12 月 16 日～ 2 日間
- 3) 実施時間/回数: 合計 2.00 時間 1.00 時間/2 回
- 4) 主催者: 医学部長
- 5) 開催場所: 学内
- 6) 企画立案者: 医学教育センター
- 7) 講演出席者: 講演者: 1 人 聴衆者: 57 人
- 8) 講演 1 : プレ臨床実習テュートリアルテューター講習会
- 9) 演者/専門: 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間: 1.00 時間
- 11) 主な内容: プレ臨床実習テュートリアルテューター講習会



#### (4) (分野) 医学教育全般

- 1) テーマ： 国際基準に対応した医学教育について
- 2) 開催日時： 平成 25 年 11 月 12 日～ 1 日間開催 (大学院と共催)
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：16 人
- 8) 講演 1： 国際基準に対応した医学教育について
- 9) 演者/専門： 学外・医学系有識者/医学教育
- 10) 講演時間： 1.50 時間
- 11) 主な内容： 国際基準に対応した医学教育について

#### (5) テーマ (分野) 医学教育全般

- 1) テーマ： 高度学術医(アカデミックドクター)育成
- 2) 開催日時： 平成 25 年 12 月 18 日～ 1 日間
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： SMAC (Student Medical Academia Center)
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：28 人
- 8) 講演 1： 高度学術医(アカデミックドクター)育成
- 9) 演者/専門： 学外・医学系有識者/医学教育
- 10) 講演時間： 1.50 時間
- 11) 主な内容： 高度学術医(アカデミックドクター)育成

#### (6) (分野) 医学教育全般

- 1) テーマ： 国試対策セミナー
- 2) 開催日時： 平成 26 年 2 月 6 日～ 1 日間開催 (大学院と共催)
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：27 人
- 8) 講演 1： 医師国家試験に向けて医学生はいかに勉強するべきか
- 9) 演者/専門： 学外・医学系有識者/医学教育
- 10) 講演時間： 1.50 時間
- 11) 主な内容： 国試対策セミナー

## 第3節 教育改善に関する活動

### 1. 医学科

#### (1) ログブックの振り返り評価

24年度から、臨床実習の手引き、さらには臨床実習ログブックを、毎年作成し配布するようになり2年が経過した。これは、臨床実習が始まる5年生、および6年生を対象としたものである。山口大学の医学部医学科5年生は、一年間、大学病院の全診療科を1・2週間ずつ、一班5人のグループでローテーションする形式での臨床実習を行う。さらに6年生は、合計12週間、大学病院外の施設も含め、自由選択で研修を行うカリキュラムとなっている。ローテーション先での実習内容は、それぞれの診療科に任されており、多くの診療科では実習すべき内容やそれに関しての到達目標も、明確に定められてはいなかった。臨床系教員は、日々の忙しい臨床業務の中で教育を行う必要があり、さらに実習の場は、外来や病棟だけではなく、手術室や検査室等を含め多岐にわたる。実習で経験すべき内容も多岐にわたるものの、実際に経験することができたかどうか不明であった。このように、臨床実習の内容に関しては、学生と教員双方の熱意による部分が大きいことは否定できない上に、どのような内容を経験したのか、統一された記録様式等はなかった。作成された臨床実習の手引きでは、その診療科で経験、学習可能な内容を明らかにし、その上で実習の目標を明確にした。この手引きを作成する過程で、診療科内では年度毎の教員間の意思統一を図っていただいた。さらに学生は、ログブックに各診療科での日々の実習で経験した内容を毎日記録する。さらに、一週間の終わりには、本人の感想、振り返りを記入し、その上で指導教員がフィードバックとしてのコメントを記入することにした。いわゆる、ポートフォリオ形式のログブックを活用することで、学生と教員のコミュニケーションに役立つのみならず、それぞれが経験した内容を振り返り、成長の過程を自身が確認するようになっている。これらが実際にどのように学生教員に活用されているかを年度末の2月に調査した。対象は、臨床実習学生と全診療科臨床実習担当教員に実施した。調査の結果から、学生、教員ともにログブックが臨床実習の場に浸透しているとは言いがたい現状だった。しかしながら、本来のログブックの目的である「復習や振り返りに役立つ」が学生からの自由記述回答で最も多かった。また、学生からの改善策として「診療科毎のログブックの扱いに対する温度差が大きく、全体での統一した活用法を決めて欲しい」との回答が最も多く、早急な改善が必要であると思われた。

#### (2) 教育主任制度の新規開始

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的とした。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗りつつあると思われる。

#### (3) 学外での地域医療実習の新規開始

医学教育モデル・コア・カリキュラムに示されているように、これからの卒前医学教育は、幅広い臨床現場での、診療参加型の臨床実習が求められる。大学病院の高度先進医療とは異なる医療の教育を行うことが必要であり、大学病院外の地域の施設での臨床実習の充実が課題となってくる。このため、将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を

養成することが必要になってきており、医学科5年生を対象に、山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心とした診療参加型地域医療臨床実習を、今年度より導入した。山口大学医学部附属病院での全診療科をローテーションして行う実習（臨床実習1）が終了した5年生98名を対象に、必修臨床実習の一部として、平成26年3月に一週間行った。実習対象施設は、各診療科から大学近辺の同門診療所や病院を中心に推薦してもらい、臨床研修指定病院となっている施設については、本実習の趣旨と異なるために除外した。一施設あたりの学生は1～2名程度とした。実習内容としては、外来見学、診察、採血、処置、褥瘡・緩和ケア、予防接種、症例カンファレンス発表、訪問診療同行、巡回診療、あるいは、一次・二次救急体験等の、大学病院や臨床研修指定病院での実習経験が困難と考えられる内容を期待し、学生、および指導医を対象に、別々に説明会を開催した。学生の評価は、当学部が導入している臨床実習ログブックへの記入による形成的評価と、各施設の指導医からの総括評価で行った。

#### （4）成績不振者への個別指導の拡充を開始

卒業後に国家試験を受験し、その合格率が全国共通の教育成果の評価尺度としてある。これに加えて臨床実習が開始される前の時点で、共用試験CBT、およびOSCEが施行され、知識、技能、および態度に関する全国レベルの評価を受けることになっている。これらを勘案した結果、在学中の早い時期から成績不振者へ介入の行うべきであるとの方針に達し、2年生の段階からの個別指導を開始した。また、現行で行われている5年生からの個別指導も対象者を更に拡充して引き続き行っている。

## 2. 保健学科

本学科では、国家試験の合格がゴールであり、学年ごとの緻密な指導、模擬試験の計画等を行っている。また、高年次には附属病院の協力のもとに臨地実習を行っており、全人的な医療従事者の育成を目指している。

看護学専攻においては、看護技術経験一覧表を作成し、学生に配布している。この看護技術経験一覧表は、2年生で行う基礎実習から卒業するまでの臨地実習で活用している。本校の教育・実習の状況から独自の看護技術項目、各分野における到達基準、卒業時到達基準を設定している。今年度は、ワーキングを立ち上げて看護技術項目の見直しを行い、17項目169技術として作成した。学習項目・到達目標は、「2007年厚生労働省の看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」および2011年文部科学省の「5つの能力群と20の看護実践能力」を参考に作成し、看護技術を経験した回数と到達レベルを評価させている。今後も医療・看護ニーズに対応できる看護師等を養成するための教育方法について検討していきたいと考える。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価については、医学科では医学教育総合電子システム[eYUME]上で、教保健学科は、保健学科授業支援システム[FHS Web Campus]上で、教員自己評価及び学生による授業評価を行っている。

## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
医学部医学科	他大学から講師を招いてのFD講演会	講師謝金・旅費1名	167	「国際基準に対応した医学教育について」と題する講演をいただき、理解を深めた。
医学部医学科	他大学から講師を招いてのFD講演会	講師謝金・旅費1名	111	「医師国家試験に向けて医学生はいかにに勉強するべきか」について講演いただき、理解を深めた。
医学部保健学科	認定コーチによるFD研修会	講師謝金・旅費1名	32	コーチングを用いた「学生のモチベーションが上がる指導法」の講義およびロールプレイングを行っていただき、理解を深めた。
<b>計</b>			<b>310</b>	

## 第6節 来年度の課題

### 1. 医学科

#### (1) カリキュラムの国際認証に向けての準備の加速

卒前の医学教育の中では、米国 ECFMG (Educational Commission for Foreign Medical Graduates) が 2010 年 9 月に出した通達に端を発した教育カリキュラムの国際認証が、大きな話題となっている。これは、国際認証を受けた医科大学出身者に、ECFMG の受験資格を限定するとなっている。米国での臨床医学の修練を受けるためには、この試験を受験することが必要であるが、これをきっかけに単に ECFMG の受験資格というより、グローバル化に対応した医学教育が求められてきている。日本国内の現状は、この評価機関そのものが立ち上げられたばかりであり、国際基準に基づく認証評価制度が確立されようとしているところである。一部の先進的な大学では、すでに米国の認証機関の評価を受けている。この中で日本の医学部に共通した問題となっているのは、臨床実習 (時間数、内容) が欧米に比べて後塵を拝していることである。山口大学も例外ではなく、このことを含め、PDCA サイクルに基づいた、医学教育改善のシステムの構築が求められおり、それを外部から評価されることになる。患者安全の視点からも、医学教育の質の担保は、近年の大きな流れの一つであり、本学でも、これに対する準備を組織的に進めていく必要がある。そのための情報収集等を今年一年掛けて行い、来年度からのカリキュラムに反映させる準備を開始した。今後は DP の作成、OBE のためのカリキュラム改訂を予定している。また臨床実習も現行の 52 週から約 70 週へ増やすカリキュラム改訂も昨年度より開始しており、平成 28 年度を目処に改訂カリキュラムの完成を目指している。

#### (2) 教育主任制度の更なる充実

平成 25 年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的とした。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗ったものと思われる。来年度は、この制度の更なる活用により、より充実した内容の教育を目指して

いく予定である。

### **(3) 学外での地域医療実習の更なる充実**

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきた。そこで、医学科5年生を対象に、山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心にした診療参加型地域医療臨床実習を、昨年度より導入した。次年度は、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図りたい。

### **(4) 成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充**

個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論を加速させる方向である。また個別指導対象学生のアウトカム調査も行うことを考慮したいと考えている。

### **(5) 学生携帯用臨床実習ログブックの充実**

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの改訂を予定している。学生と指導教員の双方にログブックの有用性を理解してもらい、活用を積極的に働きかける予定である。

## **2. 保健学科**

本学科では、国家試験の合格率 100%を目指し、その先に社会人としての医療従事者を育成するとともに、大学院への進学者の増加を目指し、医学科と協力して取り組んでいく予定である。

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通じた国際交流や交換留学を行っており、より国際的な人材育成のための努力を行っていききたい。来年度は、本校がホスト校であるため、全教員で準備を行い、学生とともに国際交流を深めたいと考える。

## 第9章 工学部のFD活動

### 第1節 授業公開

工学部では、毎年、前期と後期に公開授業を実施している。今年度も学部の全開講授業を対象に、前期は7月、後期は12月に公開授業を実施した。参観者は「公開授業参観感想表」を提出し、授業を行った教員にその参観感想表が配付され、授業改善に役立っている。

今年度の学科別参観者数と参観率を以下の表に示す。参観率は20%であり、昨年度は21%であったので、同程度の参観率であった。

平成25年度 学科別参観者数及び参観率(1年間・実人員)							
						※教員数は、25年12月1日付	
	教員数合計	25年度前期参観者	25年度後期参観者	参観者合計	参観者(実人員)	未参観者数(実人員)	参観率
機 械	22	2	0	2	2	20	0.09
社会建設	25	3	7	10	7	18	0.28
応用化学	24	2	0	2	2	22	0.08
電気電子	25	3	2	5	5	20	0.20
知能情報	22	5	3	8	8	14	0.36
感性デザイン	15	1	1	2	2	13	0.13
循環環境	17	0	1	1	1	16	0.06
工学基礎教育	11	3	3	6	5	6	0.45
計	161	19	17	36	32	129	0.20

・参観者は重複があるため(1人が両方を参観、又は同期に2回参観)、参観者合計と参観者(実人員)は必ずしも一致しない。

この学科別参観者数と参観率の表については、参観者数の集計後に、前期と後期のそれぞれの表を学科長・専攻長会議に報告し、各学科長を通して、各教員に参観を促している。工学部では、各教員が1年間に最低1回は公開授業を参観することを目標にしているが、目標の達成には至っていない。しかし、教員の5人に1人が参観しており、第4節で報告する学生授業評価の結果から判断すると、工学部の教員の授業は、公開授業、学生授業評価などを通して授業改善に取り組んできた結果、大きく改善してきている。今後、公開授業の参観率を高めるために、点検・評価委員会において、改善策を検討していく必要がある。



以下に、工学部の公開授業で用いている「公開授業参観感想表」を示す。

### 公開授業参観感想表

参観した公開授業科目 名等	実施月日	平成 年 月 日	
	授業科目名		
	担当教員	所属学科	
		氏名	
1. 優れていると思われる点			
2. 改善を検討すべきと思われる点とその理由			
3. その他（何でも）			
提出年月日	平成 年 月 日		
参観者	学科名	氏名	

※ 提出先 : 学務課副課長 (E-mailアドレス [en291@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:en291@yamaguchi-u.ac.jp))

※ 提出期限 : 授業参観後3日以内で、提出は電子メールをお願いします。

※ 「参観した公開授業科目名等」「提出年月日」「参観者」だけの記入でも構いません。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 教育改善FD研修会

以下の日時等で実施した。

日時：平成25年9月4日(水) 14:00～14:30

場所：工学部D講義棟D11教室

講師：糸長 雅弘(大学教育センター長)

参加者：31名

この研修会は、新しい共通教育の導入に伴って明らかになってきた様々な教育課題について、大学教育センターと工学部・理工学研究科が相互に共有理解を深めるとともに、その課題解決のための意見交換をする目的で実施した。

この研修会の開催にあたっての事前調査票で、工学部は以下の様な意見を伝えていた。

#### (1) 再履修クラスの開講について

平成26年度以降の共通教育の授業提供について、工学部が最も懸念していることは、共通教育の単位未修得の学生(2年生)に対する再履修クラスが常盤キャンパスにおいて開講されるのかどうか、非常に大きな不安をもっている。再履修クラスは、開講部局の責任において常盤キャンパスで実施していただくことを強く要請する。

#### (2) 「環境と人間」を担当した工学部教員の意見

受講学生数が100名を超えているため、TAの助力が必要である。

どのような趣旨でこの科目が導入されたかが、担当教員に伝わっていなかった。

「環境と人間」だけではなく、来年度の「山口と世界」についても、どのような趣旨の授業であるかを担当教員に伝える配慮が必要である。

研修会では、大学教育センター長から、特に上記の工学部からの意見について、以下のような説明があった。

#### (1) 再履修クラスの時間割を組むことが難しい現状にあるが、後期終了時点で、再履修者向けに集中講義を開講するなどの解決策を検討している。

#### (2) 「環境と人間」「山口と世界」については、学習の目的に沿っていれば、内容は担当教員に任される。

この他、共通教育の出席率、理系基礎科目の非常勤講師、共通教育の時間割などについて、工学部教員と大学教育センター長の間で活発な意見交換が行われた。研修会に参加しアンケートに回答した21名中、14名(67%)が「非常に良かった」または「良かった」と回答しており、大学教育センターと工学部・理工学研究科の意見交換の場として、意義のある研修会であった。

## 2. 工学部 FD 研修会

学部・学科等の FD 活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する「講師派遣型アラカルト研修会」として、今年度は「大学教員として知っておくべき発達障害学生に対する対応と支援」と題して、以下の日時等で実施した。

日時：平成 25 年 10 月 30 日(水) 16:10 ~17:30

場所：工学部 D 講義棟 D11 教室

講師：木谷 秀勝（教育学部 附属教育実践総合センター 教授）

参加者：48 名

昨年度も、発達障害学生への対応と支援について、木谷先生を講師に同様の研修会を実施したが、昨年度に聴講できなかった教職員からの要望、学科からの要望もあり、今年度も再び木谷先生にお願いをした。昨年度とは異なる新たなデータなども示していただける研修会として、発達障害学生への対応について関心のある教職員に参加を呼びかけたところ、予想を超える 48 名の参加があった。

木谷先生から、

- (1) 発達障害の基本的な視点
- (2) 軽度発達障害
- (3) 軽度発達障害の能力差
- (4) 主な軽度発達障害
- (5) 高機能広汎性発達障害
- (6) 特異性発達障害
- (7) 行動障害
- (8) なぜ、入学から就労までの支援が必要か
- (9) 事例紹介
- (10) 具体的な対応（大学として考えるべきこと）

について、わかりやすい講演があり、その後、質疑応答を行った。多くの質問があり、木谷先生には丁寧に答えていただき、参加者にとって大変に有意義な研修会であった。研修会に参加しアンケートに回答した 25 名の全員(100%)が「非常に良かった」または「良かった」と回答した。工学部でも、発達障害学生に対する関心が増しており、アンケートにおいても、多くの具体的事例について知りたい、1 年に 2 回実施していただいてもよい、などの意見があった。

大変に意義のある研修会であったため、次頁に、当日に木谷先生から配付された資料を掲載し、記録しておく。なお、大学教育センターにより、この研修会における木谷先生の講演内容と質疑応答の詳細な記録が残されていることを付記する。

## 発達障害学生の理解と対応 入学から就労までを視野に入れて

木谷 秀勝  
教育学部附属教育実総合センター  
コミュニケーションサポートルーム室長

### FD研修の流れ

- ・ 発達障害について
- ・ なぜ、入学から就労までの支援が必要か
- ・ 事例の紹介
- ・ 具体的な対応

### 発達障害の基本的な視点

- ・ 先天的な大脳機能障害・多因子疾患
- ・ 成長するにつれて脆弱性が顕在化する(ただし、社会適応上の問題の有無が分岐点)
- ・ 早期からの多面的な支援の重要性
- ・ 医学・教育・心理・福祉等の連携と一生涯にわたる支援の必要性
- ・ 家族への支援の重要性

### 軽度発達障害

- ・ 知的障害を合併しない
- ・ 早期発見・対応が遅れる場合が多い
- ・ 行動面で「ふざけている」「甘えている」と誤解されやすい
- ・ 二次障害を呈しやすい

### 主な軽度発達障害

- ・ 高機能広汎性発達障害  
高機能自閉症  
アスペルガー症候群
- ・ 特異性発達障害  
学習障害  
発達性協調運動障害
- ・ 行動障害  
注意欠陥/多動性障害

### 大学教育における発達障害学生の 支援の重要性

- ・ 学生相談での来談件数の増加と対応の困難さ
- ・ 大学入学センター試験での発達障害への配慮が認知される
- ・ 専門的スタッフの不足と大学職員へのソーシャルスキル(山崎, 2011)の重要性
- ・ 二次障害への丁寧な対応と全学体制での支援の必要性(西村, 2009)
- ・ 就職活動と就労の困難さ(福田, 2011)

### なぜ、入学から就労までの支援が必要か

在学中から就労後までを追跡調査した  
2事例を提示します

### 事例の紹介(主に理系の発達障害学生)

現在、対応をしている理系の発達障害学生  
の事例を提示します

### 事例を通してわかる発達障害学生の課題

- 課題①:木谷他(2009)の報告
- ・ 継続的に支援している青年期HFDOS 各のSNS 上の実生活報告
  - ・ その結果、次の4点が青年期HFDOS の心身特性として明らかになった。
  - 1) 単独の状況判断が求められる場面が多くなり、的確な状況判断(限定的)の成長は見られる
  - 2) 交友の機会、社会的関与(オンライン)で出る機嫌度種や情報の特異性が低下(情報の偏り)しやすい
  - 3) 本来持つが通用しが限るな場合は、状況判断へのこだわりや自傷の発露が生じやすい
  - 4) 将来展望に欠け、20歳前後での同一性混乱が生じやすい
- 課題②:青年期HFDOSとしての「障害の3つ顔」(木谷, 2011)
- ・ 感覚(過敏・鈍感)・態度の障害  
「どこまで頑張ればいいのか」  
わからない  
時や感覚の調整の困難さ
  - ・ 不器用さがもたらす人間関係  
「何も変わらない」と言われ続け  
る他を評価と自己評価とのギャップ
  - ・ 孤立化と疎外感
  - ・ 情報収集の偏りと臨場性  
「どうすれば自分を救えられるか」  
わからない  
間に失敗を繰り返す

### 就労を視野に入れた大学での支援

- ・ 短期的な目標作りを通した「達成感」の獲得
- ・ 自己肯定感を維持するためのメンタルサポート(家族・大学の協力)
- ・ 幅広い分野ではなく、得意分野を活かしたプレゼンテーション能力の向上
- ・ 早期からの就労体験によるイメージ作り(専門機関との連携)
- ・ 生活リズムを含む心身の健康状態をモニターできる能力(自己理解)
- ・ 長期休暇に対する生活・学習スキル対策

## 第3節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

### (1) 工学部サロン

工学部では、2006(H18)年度から、吉田キャンパスの研究1号館の1階に「工学部サロン」を開設している。「工学部サロン」では、工学部1年生のいろいろな相談にいつでも対応できるように、工学部の教員OB、大学院生が待機している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになっている。

### (2) 工学教育研究センター

先駆的な教育実践活動について情報を収集・分析して新しい企画を提案し、教育実践活動を文章としてとりまとめ、学内外に公表するため、工学部附属の「工学教育研究センター」がある。今年度は、ステップアップノート作成、工学部教育方針に対するアンケート調査(企業対象、卒業生対象)、センタースタッフの学外シンポジウム・ワークショップへの参加などの活動を行った。また、『山口大学工学教育』の発行も行っており、これまでに第8巻まで発行され、工学部教員に配付されている。

### (3) 「ステップアップノート」の配付

2011(H23)年度から、全学科の1年生に対して「ステップアップノート」の配付を始め、2012(H24)年度に「ポートフォリオ」として利用することが工学部学生委員会で承認されて以来、1年生オリエンテーションで配付を行っている。今年度から、1年生には初年次版、新2年生には高年次版を配付した。

初年次版では、オリエンテーション、グローバル人材育成教育プログラム、フレッシュマンセミナー(自己分析)、基礎セミナー、個人別学習目標、卒業までの生活プランなどについて、新入生にわかりやすく説明され、学生が自ら記入する項目があり、これからの工学部での生活に役立つノートになっている。高年次版では、修得単位の記録、就職活動に向けての自己アピールの作成など、卒業、就職活動のために役立つノートになっている。

### (4) 『山口大学工学教育』の発行

冊子『山口大学工学教育』では、教育に関する論文の掲載、教育に関する調査報告、学外シンポジウムなどの参加報告、各学科における教育改善の事例報告など、工学教育に関する様々な論文、報告、資料が掲載されており、工学部における教育改善に役立っている。

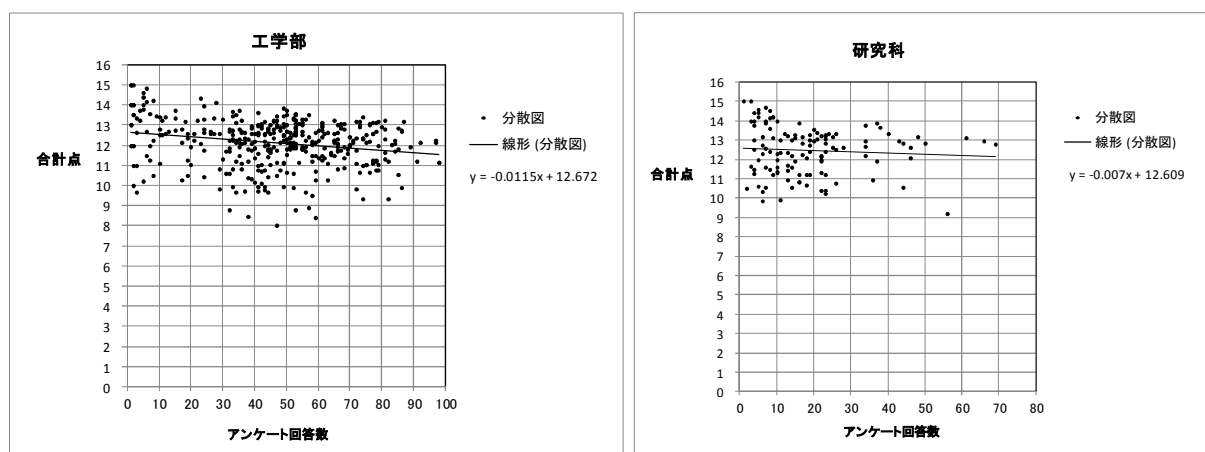
## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。2007(H19)年度に「学生授業評価表彰実施要綱」を制定し、この要綱に従って、優秀授業を選考している。学生授業評価の質問項目の中で、

- 項目 2： 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？
- 項目 9： あなたは授業の内容を理解しましたか？  
(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)
- 項目 10： この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

の3項目の合計点を出し、アンケート回答数と合計点の相関を考慮した補正合計点(Z 値)を算出する。この補正合計点について、学部では上位 10%、大学院では上位 20%の授業を「優秀授業」とし、各学科、各専攻で最高点の授業を「最優秀授業」として、授業を担当した教員を表彰している。

昨年度の工学部と研究科における授業について、上記3項目の合計点と授業のアンケート回答数の分布を以下に示す。学部授業 395 科目、大学院博士前期課程授業 121 科目の分散図である。



学生に対する質問では、「そう思う」が5点、「ややそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「そう思わない」が1点である。したがって、3項目の合計点が9点を超えていれば概ね良い評価、12点以上であれば良い評価と判断してよい。上記の分散図から、学部、大学院の授業のほとんどは、概ね良い評価以上であり、約半数の授業は良い評価を受けている。公開授業や学生授業評価表彰の制度が良好に教育改善に効果をあげていると判断している。

このような評価は昨年度も同様で、ここ数年間は同様な結果が得られている。工学部では、このような学生授業評価結果に満足せず、今後も授業改善のための活動をさらに進めていきたい。来年度からは、非常勤講師と年度末退職(転任)者の授業も表彰対象に含めることにした。

次の2頁には、工学部内で報告された今年度の優秀授業、最優秀授業の一覧表(学部と大学院)を記載する。



工学部 優秀授業 H24 (2012) 年度

(黄色) 優秀授業: 全 395 科目の上位 10% = 40 科目。ただし、アンケート回答数が10人未満の科目と非常勤講師の担当科目は除く。  
なお、全学科対象科目の1科目を追加したので、優秀授業科目は 41 科目。

(水色) 最優秀授業: 優秀授業の中で、各学科と工学基礎教育の最上位

開設科目	主担当教員	学科	区分	履修 登録 者数	アン ケート 回答数	Q2	Q9	Q10	合計点	Z値	備考
流体力学I	星月 慎介	機械工学科	講義	83	50	4.64	4.46	4.62	13.72	14.20	
材料力学I	大木 顕明	機械工学科	講義	89	53	4.57	4.43	4.57	13.57	14.18	
機械力学I	佐伯 壮一	機械工学科	講義	86	79	4.46	4.29	4.43	13.18	14.09	
流体力学II	星月 慎介	機械工学科	講義	78	52	4.53	4.27	4.45	13.35	13.95	
機械工学演習②	佐伯 壮一	機械工学科	演習	85	76	4.53	4.26	4.27	13.06	13.83	
土質力学I	中田 幸男	社会建設工学科	講義	43	35	4.66	4.40	4.66	13.72	14.12	
建設情報基礎工学	鈴木 泰之	社会建設工学科	講義	77	73	4.34	4.34	4.37	13.05	13.89	
ものづくり創成実習I	渡邊 学歩	社会建設工学科	実験・実習	91	67	4.30	4.36	4.43	13.09	13.86	
土質力学演習I	中田 幸男	社会建設工学科	演習	39	33	4.64	4.30	4.52	13.46	13.84	
分析化学	吉本 慎子	応用化学科	講義	103	74	4.59	4.39	4.45	13.43	14.28	
応用化学工学演習I	渡多 喜久	応用化学科	演習	89	87	4.44	4.33	4.40	13.17	14.17	
配位化学	中山 崇晴	応用化学科	講義	100	50	4.70	4.33	4.51	13.54	14.12	
応用化学工学演習IV	大石 勉	応用化学科	演習	193	73	4.41	4.37	4.42	13.20	14.04	
電気化学	森田 昌行	応用化学科	講義	87	65	4.49	4.35	4.38	13.22	13.97	
基礎有機・高分子化学	亀村 健二郎	応用化学科	講義	88	65	4.45	4.06	4.33	12.84	13.82	
半導体工学I	山田 清一	電気電子工学科	講義	124	81	4.60	4.18	4.43	13.22	14.15	
電気機器学	田中 信彦	電気電子工学科	講義	119	68	4.50	4.18	4.40	13.00	13.80	
電気法規	長井 正治	電気電子工学科	講義	55	47	4.53	4.30	4.43	13.26	13.80	非常勤
電気回路I	山田 清一	電気電子工学科	講義	114	66	4.59	4.06	4.38	13.03	13.79	
プログラミング演習I (実習を含む)	菊本 浩一	知能情報工学科	演習	88	77	4.49	4.21	4.44	13.14	14.03	
プログラミングI	菊本 浩一	知能情報工学科	講義	88	80	4.55	4.05	4.53	12.93	13.85	
論理設計	松元 隆博 (大学非常勤)	知能情報工学科	講義	77	61	4.52	4.20	4.42	13.14	13.84	
プログラミングII	山口 真悟	知能情報工学科	講義	101	73	4.59	4.12	4.26	12.94	13.78	
空気調和計画法	小金井 真	感性デザイン工学科	講義	59	23	4.87	4.73	4.74	14.34	14.60	
感性心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	講義	41	28	4.75	4.61	4.74	14.10	14.42	
デザイン心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	講義	59	49	4.73	4.43	4.67	13.83	14.09	
空間心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	講義	81	57	4.85	4.35	4.54	13.54	14.20	
素描計画学	橋 心治	感性デザイン工学科	講義	66	41	4.80	4.24	4.59	13.63	14.10	
染織紡績工学	小金井 真	感性デザイン工学科	講義	57	33	4.95	4.24	4.58	13.67	14.05	
設計製図I	小林 剛士	感性デザイン工学科	実験・実習	62	49	4.50	4.33	4.64	13.47	14.03	
アーバンデザイン論	橋 心治	感性デザイン工学科	講義	16	15	4.87	4.20	4.67	13.74	13.91	
西洋美術史	富田 英夫	感性デザイン工学科	講義	71	55	4.59	4.26	4.43	13.20	13.91	非常勤
ものづくり創成実習II (CAD/CG演習)	小林 剛士	感性デザイン工学科	実験・実習	89	34	4.53	4.44	4.53	13.50	13.89	
デザイン概論	内田 文雄	感性デザイン工学科	講義	56	53	4.45	4.36	4.43	13.24	13.85	
管理環境工学実験II	樋口 隆規	管理環境工学科	実験・実習	59	53	4.55	4.38	4.57	13.50	14.11	
環境微生物学	湯坂 栄一	管理環境工学科	講義	56	47	4.70	4.28	4.50	13.48	14.02	
環境プロセス論及び演習	佐伯 隆	管理環境工学科	講義	66	58	4.55	4.38	4.29	13.29	13.93	
環境情報学及び演習	田中 一安	管理環境工学科	講義	62	52	4.51	4.35	4.44	13.30	13.90	
単位操作I	中倉 英雄	管理環境工学科	講義	71	53	4.62	4.17	4.43	13.22	13.83	
応用物理学 (電気電子工学科)	真田 寛志	工学基礎教育	講義	95	72	4.58	4.27	4.35	13.20	14.03	
応用解析I (機械工学科)	柳 研二郎	工学基礎教育	講義	128	78	4.40	4.33	4.38	13.11	14.01	
応用物理学 (機械工学科)	嶋村 健二	工学基礎教育	講義	114	76	4.43	4.26	4.36	13.05	13.92	
特許法	佐田 洋一郎 (准学士 課程・イノベーション推進課 長)	全学科対象科目	講義	35	24	4.79	4.46	4.71	13.96	14.24	全学科

理工学研究科(工学系)・医学系研究科(工学系) 優秀授業 H24 (2012) 年度

(黄色) 優秀授業: 全 121 科目の上位 20% = 24 科目。ただし、アンケート回答数が10人未満の科目は除く。□  
 なお、全理工学研究科(工学)対象科目の1科目を追加したので、優秀授業科目は 25 科目。

(水色) 最優秀授業: 優秀授業の中で、各専攻の最上位

開設科目	主担当教員	学科	区分	履修 数 得 者 数	アン ケ ー ト 回 答 数	Q2	Q9	Q10	合計点	Z値
材料強度学特論	合田 公一	機械工学専攻	講義	47	34	4.58	4.58	4.65	13.77	14.01
構造力学特論	麻生 健彦	機械工学専攻	講義	19	16	4.79	4.00	4.47	13.28	13.36
都市環境工学特論	今井 剛	社会建設工学専攻	講義	22	15	4.47	4.40	4.40	13.27	13.38
構造力学特論	麻生 健彦	社会建設工学専攻	講義	30	25	4.04	4.04	4.46	13.18	13.24
反応制御化学特論	中山 雅晴	物質化学専攻	講義	23	18	4.08	4.33	4.69	13.90	14.01
複素分子合成特論	山本 泰紀	物質化学専攻	講義	46	38	4.88	4.39	4.59	13.88	13.93
高分子化学特論	大石 隆	物質化学専攻	講義	25	20	4.60	4.50	4.45	13.55	13.69
表面材料化学特論	満多 喜久	物質化学専攻	講義	82	61	4.43	4.25	4.43	13.11	13.54
高分子設計特論	鬼村 勝二郎	物質化学専攻	講義	56	46	4.46	4.37	4.34	13.17	13.51
光機能材料工学特論	岡本 浩明	物質化学専攻	講義	28	26	4.23	4.50	4.58	13.31	13.48
固体化学特論	中山 新昭	物質化学専攻	講義	29	23	4.61	4.14	4.52	13.27	13.43
機能性高分子材料特論	比嘉 光	物質化学専攻	講義	30	23	4.52	4.35	4.35	13.22	13.38
固体触媒特論	今村 通夫	物質化学専攻	講義	20	15	4.60	4.20	4.33	13.13	13.24
半導体物性特論Ⅱ	山田 隆一	電子デバイス工学専攻	講義	23	21	4.71	4.29	4.36	13.38	13.53
材料・デバイス工学シミュレーション特論Ⅰ	山本 節夫	電子デバイス工学専攻	講義	14	13	4.54	4.15	4.54	13.23	13.32
新幹情報特論	若佐 裕治	電子情報システム工学専攻	講義	48	43	4.56	4.08	4.28	12.93	13.23
建築設計学特論Ⅰ	内田 文雄	感性デザイン工学専攻	講義	14	12	4.42	4.25	4.67	13.34	13.42
建築設備設計特論	小金井 真	感性デザイン工学専攻	講義	30	17	4.65	4.24	4.29	13.18	13.30
都市防災システム特論	瀬本 浩一	環境共生系専攻	講義	45	37	4.70	4.65	4.51	13.86	14.12
地域情報システム工学特論	三石 真也	環境共生系専攻	講義	15	10	4.70	4.40	4.90	14.00	14.07
精密分離プロセス工学特論	中倉 英雄	環境共生系専攻	講義	48	40	4.48	4.43	4.40	13.31	13.58
リサイクル工学特論	今井 剛	環境共生系専攻	講義	87	86	4.48	4.20	4.28	12.96	13.42
環境・エネルギー技術特論	三浦 厚紀	環境共生系専攻	講義	27	22	4.50	4.38	4.38	13.22	13.37
環境共生学原論	山本 浩一	環境共生系専攻	講義	108	68	4.30	4.16	4.32	12.78	13.26
科学・技術英語特論A	ANTHONY GRENVILLE HOYSTED	理工学研究科(工学)	講義	30	24	4.50	4.29	4.54	13.33	13.50

## 第5節 FD実施経費報告書

今年度に使用した FD 実施経費は以下の表の通りである。

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
工学部・ 理工学研究科(工学系)	学生授業評価と優秀授業表彰	最優秀授業の表彰状	3	学生にとってわかりやすい授業の実施
	教育改善のため高校の数学・理科の教科書を各学科に配付	新学習指導要領に基づく数学と理科(物理・化学・生物・地学)の教科書	97	平成27年度以降の新入生に対する教育改善の準備
計			100	

## 第6節 来年度の課題

来年度の課題として、以下のようなことを検討したい。

(1) 公開授業の参観率の向上

参観率は20%であるため、参観率を高めるための改善策を工学部の点検・評価委員会で検討する。

(2) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取組み

これまでも、入力率向上のために、学科長・専攻長会議などにおいて、学科長などを通して、入力を促すことをしている。今後もこのようなお願いをしていく。

なお、教員授業自己評価の項目の中で、学生授業アンケートと同様な質問をしているが、どのような教育改善効果があるのか疑問に思う教員もいる。実質的な教育改善が期待できるように、教員授業自己評価の項目の見直しなどの改善を大学教育センターに要望したい。

(3) 授業外学習時間の確保，適正な成績評価，共通教育における試験監督体制

これらの課題については、今後、工学部の点検・評価委員会で、問題点の整理をした上で検討していきたい。

# 第10章 農学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### 1 授業公開（ピアレビュー）

授業科目	生物無機化学特論	実施日	平成25年 4月 23日
授業担当教員	右田たい子	評価担当教員	薬師寿治
授業の内容・進行			
アミノ酸の異化系代謝について、「ストライヤーの生化学」に基づいて解説。			
本授業の実施に際して高く評価できる点			
学生が（学部時代などに）まだ学んでいない分野を解説。 学生が目線でわかりやすく解説。 学生が集中して聴講。			

本授業をより良いものにするための提案	
学生からの発言を促す場面。	
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点	
理解度を確認する小課題。 これは評定にも使用可。	

### 2 授業公開（学術セミナー）

農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科（農学）の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。

1) 「植物はどうして／どのようにしてあれほど多彩な匂い化合物を作るのだろうか？」

講演者：松井健二

日時：6月28日（金）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

2) 「酢酸菌の酸化発酵を担う膜酵素の生理学的役割と分子構築：遺伝子工学的アプローチ」

講演者：薬師寿治

日時：5月31日（金）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

3) 「病原性細菌によるヘム取り込み機構：タンパクは如何にヘムを掴んでいるのか？」

講演者：小崎紳一

日時：10月25日（金）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

4) 「エタノール生産性微生物の耐熱化及び耐熱性機構を探る」

講演者：高坂智之

日時：11月27日（水）17：00～18：00

場所：農学部7番教室

5) 「N<sub>2</sub>OとNO：脱窒から環境へ、生物間相互作用へ」

講演者：横山和平

日時：1月16日（木）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会、および2) 教育改善FD研修会を以下の日程で開催した。

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

研修名：「山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法

ー 学生を就職させるためにー」

日程：平成25年9月18日（水）

場所：農学部2F 会議室

講師：平尾元彦（学生支援センター教授）

2) 教育改善FD研修会

研修名：「新しい共通教育導入に伴う意見交換会」

日程：平成25年10月17日（水）

場所：農学部2F 会議室

講師：糸永 雅弘（大学教育センター長）

## 第3節 教育改善に関する活動

2008年4月1日に、以下のような農学部グラジュエーションポリシー(Graduation Policy: 以下GP)を定めている。

1) 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれら相互関係を把握するとともに、それらの将来有るべき姿を考える能力を身につけている。

2) 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。

3) 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。

農学部のGPを基礎として、各学科（生物資源環境科学科、生物機能科学科）でのGPは、2008年4月1日に定めており、2011年度も本GPに基づいて活動を実施している。

以下、各学科の GP を示す。

#### 生物資源環境科学科の Graduation Policy

1. 修学計画能力：生物資源環境科学科において何を学ぶか、生物資源環境科学とは何かの概念を得る。また、生物資源環境科学科教育プログラムの学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案できる。
2. 一般的基礎能力：語学、人文、社会系科目を含む幅広い教養科目および生命倫理を学び、社会に対する責任感を養う。
3. 農学基礎能力：自然科学的および社会科学的農学系基礎に関する知識と応用力を身につける。
4. 専門応用能力：生物資源環境科学に関する総合的専門知識及び技術の取得とそれらを用いて諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力を身につける。
5. コンピュータ応用能力：生物統計等に関するソフトウェアの理論と使用法を理解し、生物生産、環境計測、農業経営などの様々な過程で現実的な複雑さを持つ農学的諸問題を迅速に解決できる。
6. 農学研究能力：農学的諸問題に対して、農学的かつ論理的な考察を行い、自ら解決方法を発想し成果を得ることができる。また、発想から成果に至る研究経過を明解にレポートにまとめ、わかりやすくプレゼンテーションするとともに、討議できる能力を身につける。さらに、得られた成果を客観的に評価し、改善することができる。
7. 農業・農村地域の環境の課題における指導能力：生物多様性をはじめ、農業・農村地域の環境課題を解決するための能力を発揮し、指導者となる素養を涵養する。
8. 自己研鑽能力：多様化・複雑化する生物生産システム、生命、環境、自然に関する諸問題に関心を持ち、それらの問題を理解あるいは解決するために自己の能力を継続して向上させることができる。
9. 進路計画能力：農業ならびに関連産業界の動向、求められる人材、就職環境などを把握して、将来の進路を展望し、自ら進むべき方向を決定できる

#### 生物機能科学科の Graduation Policy

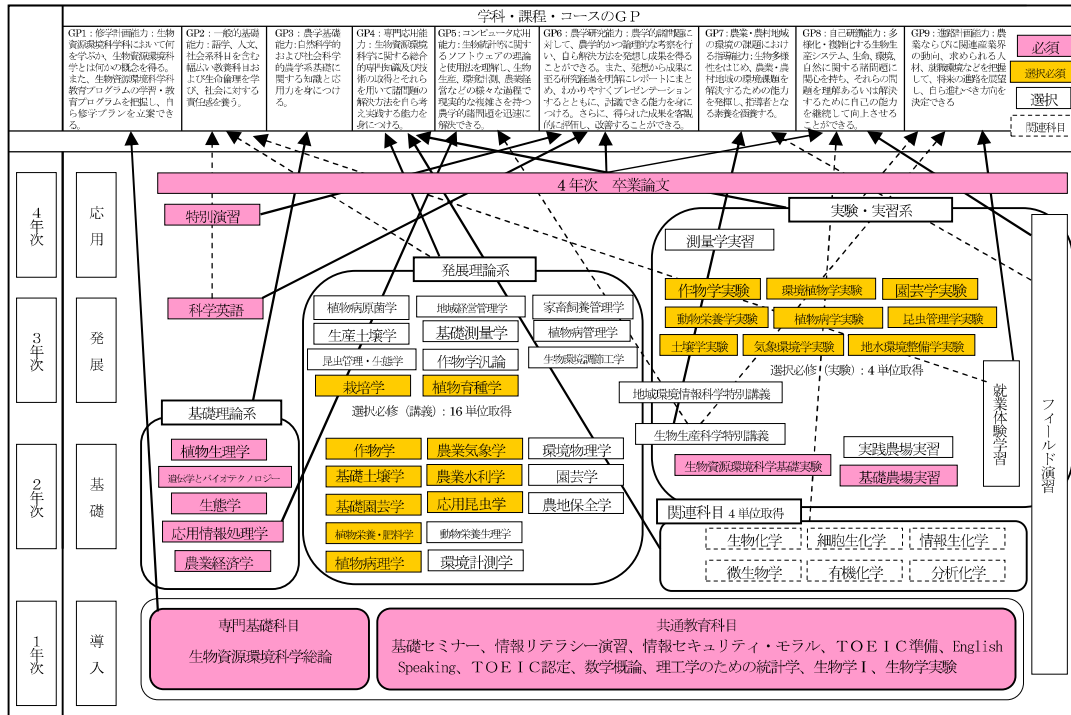
1. 生化学の基本的な知識とバイオテクノロジー等の技法を修得し、生物科学分野で社会貢献できる。
2. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、環境問題に対処できる。
3. 科学技術の発展に関連した社会全体の問題について、自ら課題を見出し解決しようとする姿勢を持つ。

カリキュラムフローチャート(Curriculum Flow Chart: 以下CFC)は、全学組織の教学委員会より農学部各学科への作成の依頼があり、平成23年7月に完成した。本CFCに基づいて、新入生オリエンテーションの履修の説明などで利用している。以下、各学科の CFC を示す。



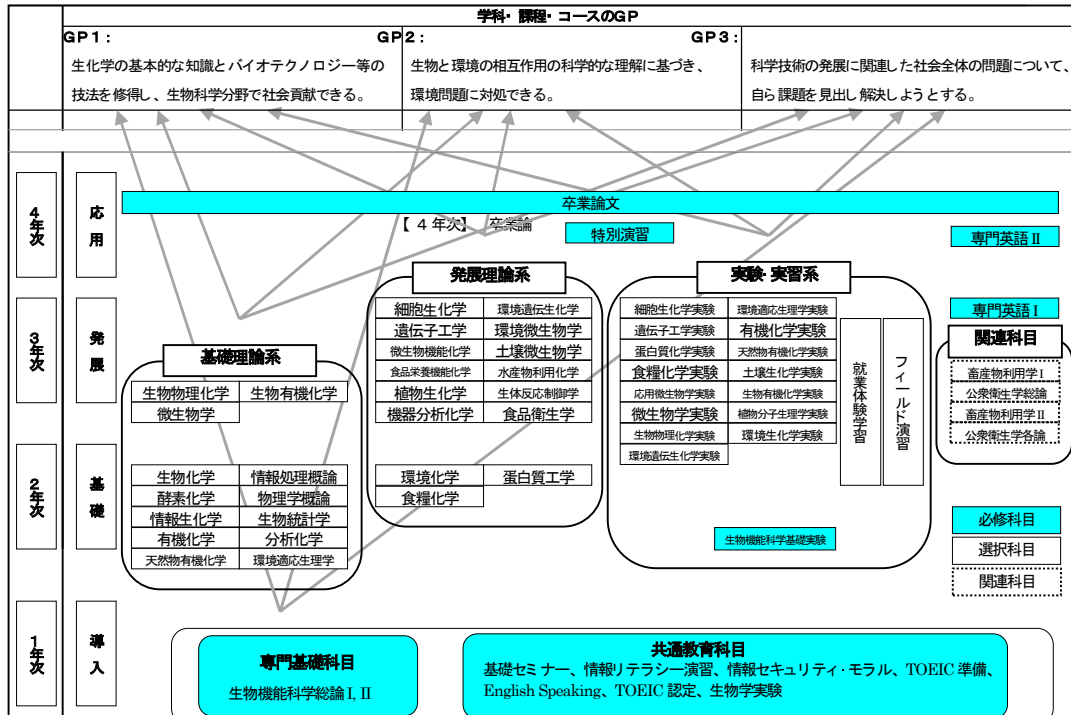
農学部 生物資源環境科学科 カリキュラム・フローチャート

2011年7月23日版



農学部 生物機能科学科 カリキュラム・フローチャート

2011年7月1日版



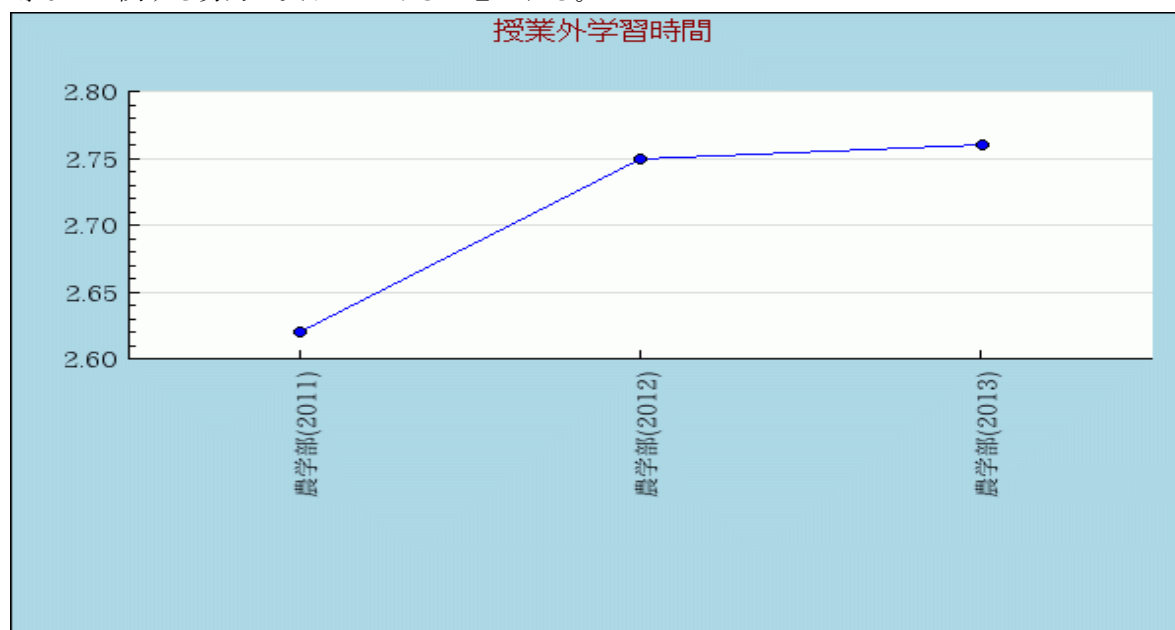
## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

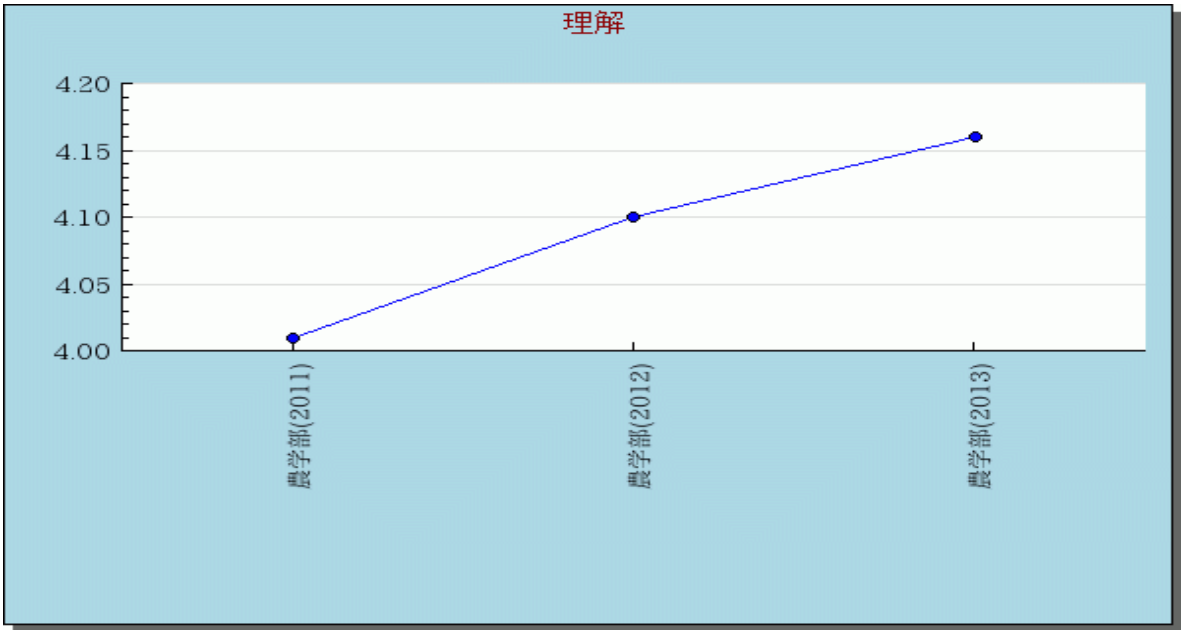
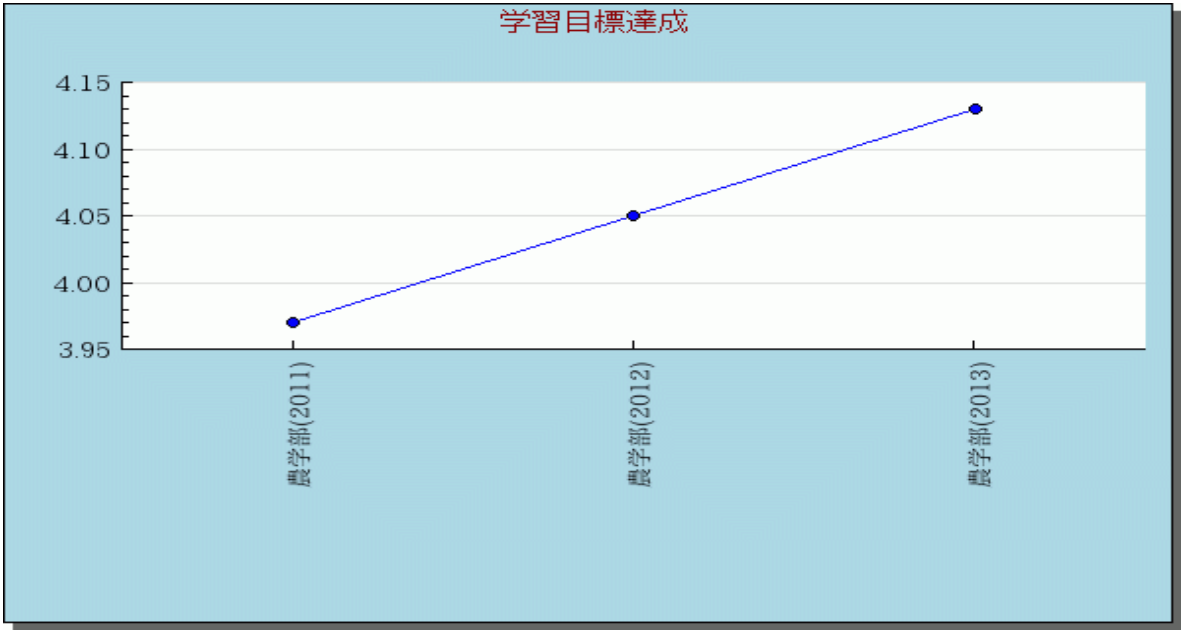
### 1) 学生授業評価

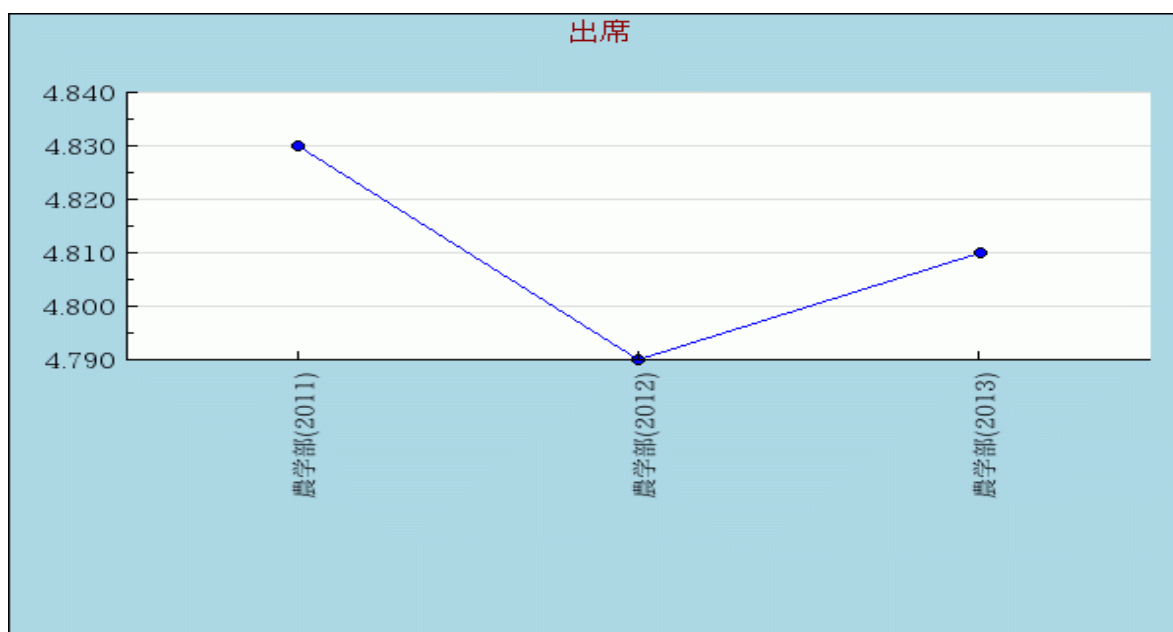
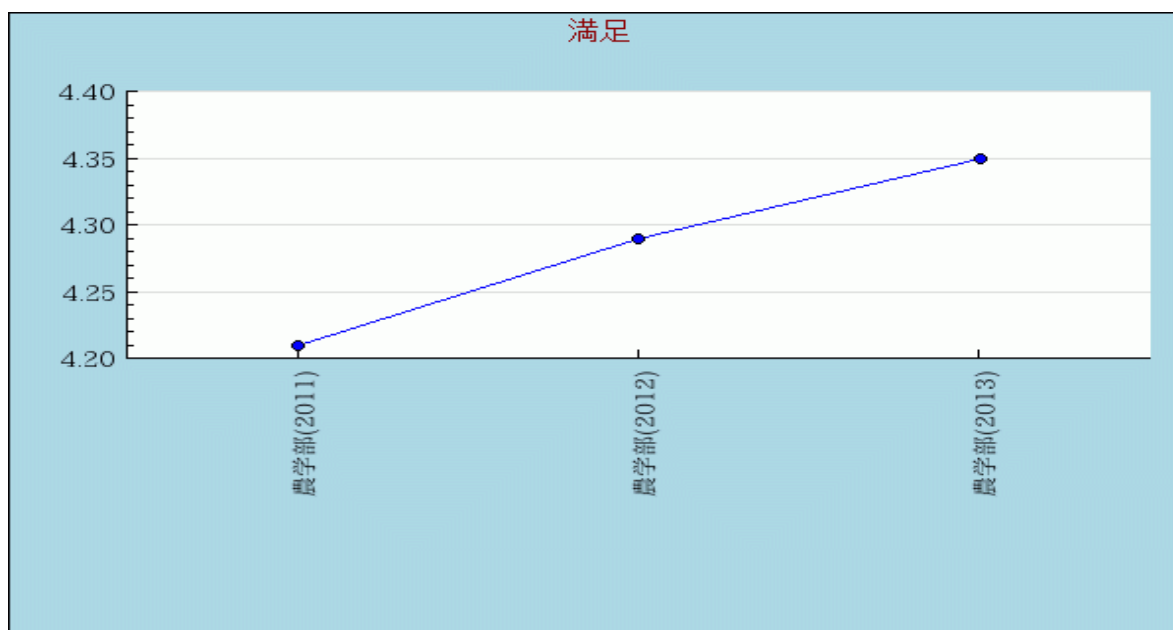
回答数

	講義	実験実習	合計
2011	3815	935	4750
2012	3575	697	4272
2013	3512	750	4262

2011年度以降、学生授業評価の実施率は高い値を維持している。今後もこのまま継続していくべきである。学生授業評価では2013年度はいずれの項目もポイントが上がる傾向にあり、教員の学習指導などに関する努力が実りつつあると思われる。





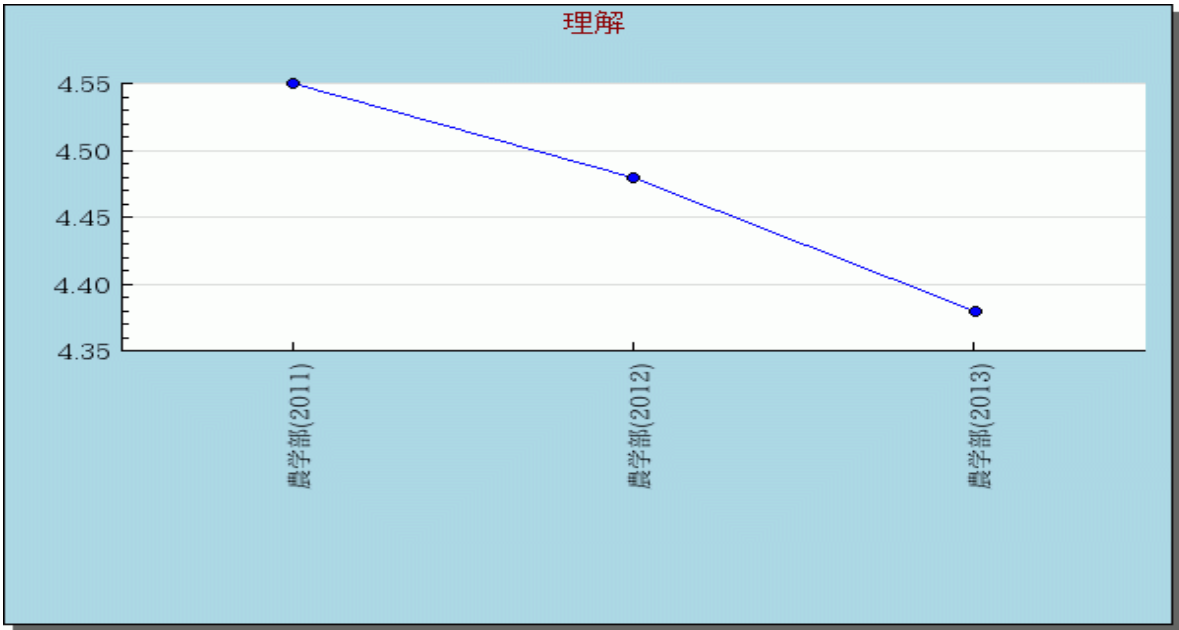
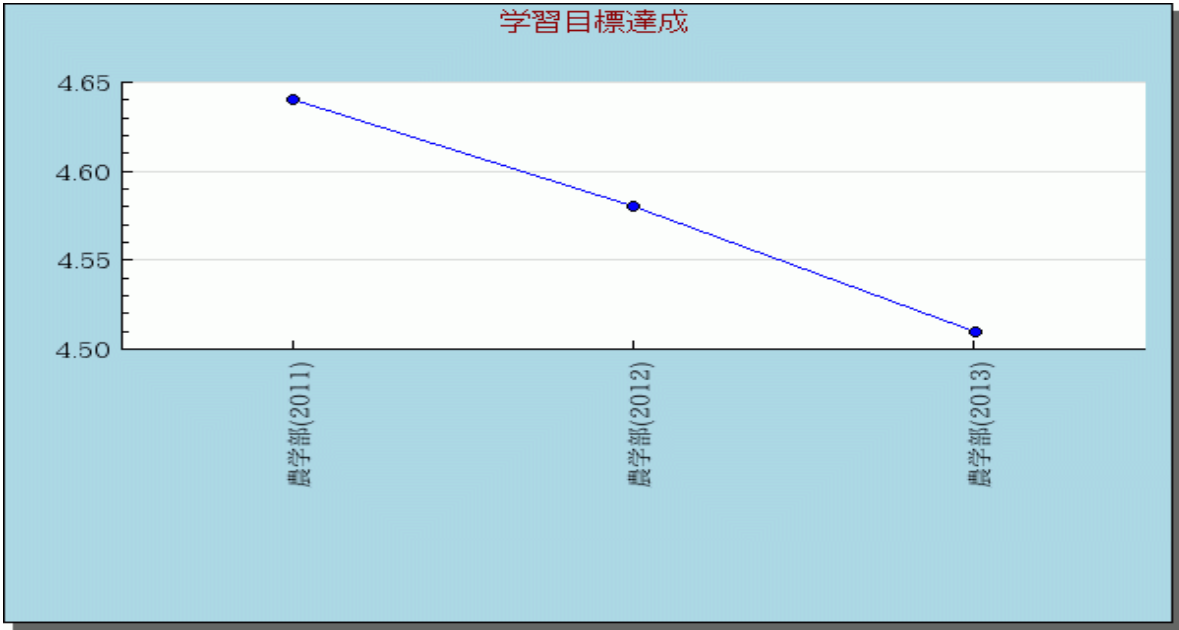


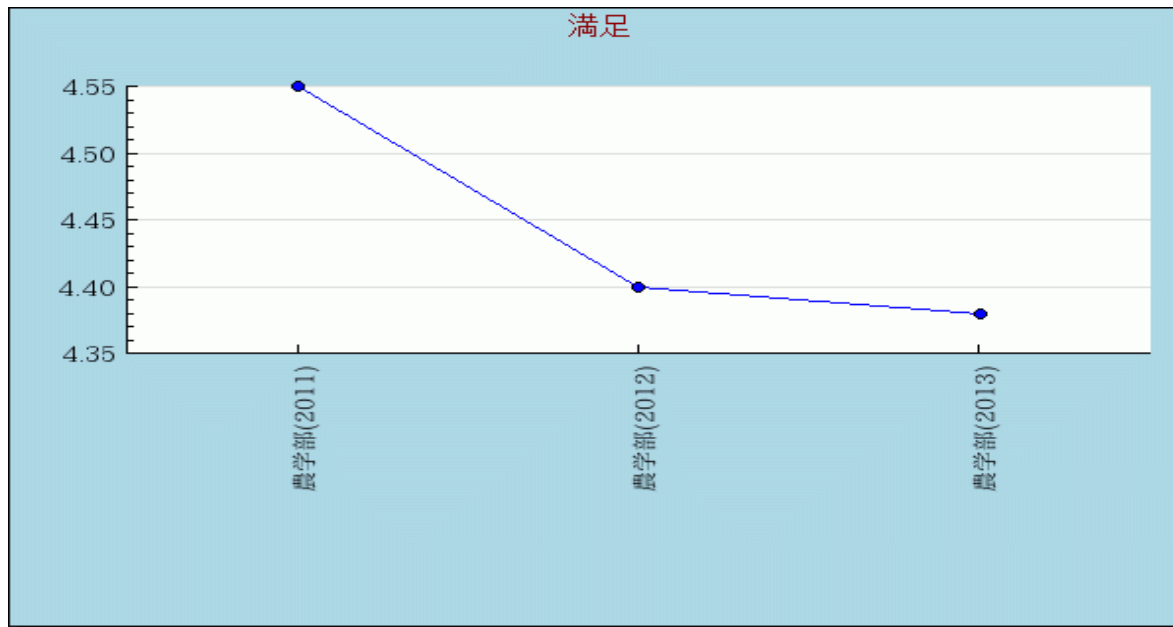
## 2) 教員授業自己評価

回答数

	講義	実験実習	合計
2011	79	30	109
2012	80	25	105
2013	40	15	55

回答数が減少傾向にある。自己評価を実施するよう今後、よりいっそう周知徹底する必要がある。一方、各評価項目に関しては低下している傾向が著しい。今後教員自身の自己分析を促す必要があるかもしれない。





## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
農学部	就職情報の共有化	案内ボード(FD用)	91	就職情報を整理して掲示・閲覧することにより教員と学生が就職情報を整理して理解することができ、就職活動の促進を図った。
<b>計</b>			<b>91</b>	

## 第6節 来年度の課題

1、 授業外学習時間、学習の目標達成度、理解度、および満足度等に関して上昇傾向にある。この傾向をより高めるためにいっそうの対策が必要と思われる。

教員授業自己評価の入力率を向上する工夫が必要である。そもそも、いったい何のためにFDをやっているのか、をきちんと理解していない(あるいはきちんと説明していない)ことが問題だと思われる。単に時代の趨勢でこういった数字をまとめておくのが必要だから、と思われがちであり、ややもすれば冷めた目で見られているとも実感している。いったい何のためにFD活動をしているのか、この報告書にまとめられているような数字はいったいどのように今後に反映していくのか、についてきちんと説明し、もし無駄な努力があるなら排除し、積極的に活用すべきところがあれば活用するようにしなければならない。ただし、こうした取捨選択は学部によっても大きく異なると思われるので一様に設定するのは問題がある。



# 第11章 共同獣医学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### (1) 授業公開（学術セミナー）

- 1) 「微生物の運動と病原性との関連性」  
講師：清水 隆 先生（獣医公衆衛生学）  
日時：平成26年1月22日(水) 17:00～18:00  
場所：農学部6番教室
- 2) 「Vision in Animal Kingdom～動物の視覚と視力～」  
講師：伊藤 良樹 先生（獣医放射線学）  
日時：平成25年11月20日(水) 17:00～18:00  
場所：連合獣医棟4F 大講義室
- 3) 「麻痺・痛みの画像診断～画像でどこまで診断できるのか？」  
講師：仲澤 宏 先生（獣医外科学）  
日時：平成25年9月25日(水) 17:00～18:00  
場所：農学部本館6番講義室
- 4) 「胎盤の生物学—prospective view からの検討」  
講師：日下部 健 先生（獣医解剖学）  
日時：平成25年6月19日(水) 17:00～18:00  
場所：連合獣医棟4F 大講義室
- 5) 「異種間での体細胞クローン技術の展開」  
講師：音井威重 先生（獣医繁殖学）  
日時：平成25年5月29日(水) 17:00～18:00  
場所：連合獣医棟4F 大講義室
- 6) 「消化管粘膜上皮細胞の微小環境とその調節機構」  
講師：佐藤晃一 先生（獣医薬理学）  
日時：平成25年4月24日(水) 17:00～18:00  
場所：連合獣医棟4F 大講義室

### (2) 授業公開（臨床例総合検討会）

- 1) 「後天性ファンコーニ症候群の犬の一例」  
講師：馬場健司 先生（獣医内科学分野）  
日時：平成25年9月24日（火）17:00～18:00  
場所：農学部本館6番教室

2) 「胆嚢、胆管系手術を実施したイヌの3例」  
講師：板本和仁 先生（動物医療センター）  
日時：平成25年6月25日（火）17:00～18:00  
場所：農学部本館6番教室

3) 「犬の肝動脈塞栓術」  
講師：谷 健二 先生（獣医外科学分野）  
日時：平成25年5月28日（火）17:00～18:00  
場所：農学部本館6番教室

(3) 授業公開（総合臨床セミナー）

1) 第1回山口大学動物医療センター総合臨床セミナー  
日時：平成25年12月8日（日）13:00～17:00  
場所：連合獣医棟4F大講義室  
「小動物臨床における癌の早期発見について」  
講師：中市統三（獣医放射線学分野）

「イヌのリンパ腫に対する抗癌剤の choice」  
講師：奥田優（獣医内科学分野）

「細胞診と病理組織検査の使い方」  
講師：下山由美子（IDEXX ラボラトリーズ解剖病理医）

「線維組織球結節と診断された犬の二例」  
講師：田村欣也（山口大学） / 下ノ原望（IDEXX ラボラトリーズ解剖病理医）

「IgAによる二峰性高 $\gamma$ グロブリン血症を呈した猫の一例」  
講師：伊賀瀬雅也（山口大学） / 下山由美子（IDEXX ラボラトリーズ解剖病理医）

2) 第2回山口大学動物医療センター総合臨床セミナー  
日時：平成26年3月2日（日）12:00～17:00  
場所：連合獣医棟4F大講義室  
「小動物臨床における抗菌薬の使い方」  
講師：下川孝子（獣医内科学分野）

「エマージェンシーのガイドライン～実際のエマージェンシーに対する対処法～」  
講師：板本和仁（動物医療センター）

「細胞診と病理組織診断の使い方 Part2 リンパ節を中心に」  
講師：下山由美子（IDEXX ラボラトリーズ解剖病理医）

「門脈体循環シャントを伴った小葉細分型肝炎の犬の1例」  
講師：藤井祐介（山口大学）

(4) 授業公開（共同獣医学部特別セミナー）

- 1) 「麻醉中のヒトの脳波、動物の脳波」  
講師：荻平哲（大阪大学大学院医学系研究科麻醉集中治療学講座講師）  
日時：平成 26 年 3 月 7 日（金）17:00～18:00  
会場：連合獣医棟 4F 大講義室
- 2) 「Global Burden of Disease 2010 (GBD 2010) Study and its policy implication」  
講師：渋谷健司 先生（東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室教授）  
日時：平成 25 年 12 月 18 日（水）10:30～11:30  
会場：農学部 3 番教室
- 3) 「インド国コルカタ市での研究生活 5 年—VBNC コレラ菌と赤痢ワクチン開発」  
講師：竹田美文 先生（公益財団法人野口英世記念会 副理事長）  
日時：平成 25 年 11 月 22 日（金）16:30～17:30  
会場：連合獣医棟 4F 大講義室
- 4) 「マンモスの復活を目指して」  
講師：加藤博己 先生（近畿大学先端技術総合研究所 教授）  
日時：平成 25 年 10 月 31 日（木）16:30～17:00  
会場：連合獣医棟 4F 大講義室
- 5) 「動物福祉と動物実験 - ILAR 指針は AAALAC の基準-」  
講師：鍵山 直子 先生（実験動物中央研究所 理事）  
日時：平成 25 年 7 月 23 日（火）14:30～16:00  
会場：農学部 7 番講義室
- 6) 「米国における実験動物医学の歴史と現状」  
講師：佐藤 晶子 先生（カリフォルニア大学リバーサイド校 動物施設長）  
日時：平成 25 年 7 月 16 日（火）10:30～11:30  
会場：農学部 7 番講義室
- 7) 「宮崎県で発生した口蹄疫（FMD）と高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）防疫について」  
講師：谷口 岳 先生（宮崎県延岡家畜保健衛生所 防疫課）  
日時：平成 25 年 6 月 26 日（金）15:00～16:00  
会場：連合獣医棟 4 階大講義室
- 8) 「ザンビア国でのカバ調査 1995-97」  
講師：鈴木和男 先生（和歌山県田辺市ふるさと自然公園センター）  
日時：平成 25 年 6 月 17 日（金）15:30～16:30  
会場：連合獣医棟 4 階大講義室

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

(1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

平成25年度教育改善FD研修会（共同獣医学部）

日時 平成25年11月13日（水）14:30～15:00

場所 農学部大会議室

講師 糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者 23名（アンケート回収 23名）、小川勤（大学教育センター）

内容

「教育改善FD研修会開催にあたっての事前調査票」において共同獣医学部から回答があった事項に対して、糸長センター長からコメントを行う形で実施された。主要な質問とそれに対する回答は以下の通りである。

1. 自学部生を担当する機会が少なくなった。

【糸長センター長からのコメント】

今回の共通教育のカリキュラム改革上、ご指摘の件はどうしようもない部分である。クラス選択を利用するしかないが、現在、新カリキュラムと旧カリキュラムが同時に運用されている状況では時間割編成上、難しい状況にある。旧カリキュラムがなくなれば、改善したカリキュラムを導入することは可能である。

2. クラスサイズが大きくなり、学生の主体的な学びを促進させるアクティブ・ラーニングの手法が実施しにくくなった。

【糸長センター長からのコメント】

工学部から提供されている共通教育の授業の内、他学部生が主に受講している授業では、担当者が工夫して、調べ学習やピア学習などを導入して教育成果を上げている事例が報告されている。確かに受講生が多く、さらに他学部生を教える機会が増えてきているが、従来の「教え込む」教育（知識注入型教育）から、新しい共通教育では、「何を教えるかではなく、何ができるようになるか」、受動的学修から能動的学修に転換し、教え過ぎずに考えさせる機会を与えることが重要なポイントである。また、受講者の所属学部などを考慮して、クラスごとに到達目標を適度に調整しながら授業を行う工夫が必要であろう。

この後、糸長センター長より、今年度前期（クォータ1・2）終了時点における新しい共通教育を巡る課題が明らかにされた。一つ目は、クォータ2からクラス指定を行ったが、指定されたクラスを間違い、そのまま最後まで受講していた学生がいたこと。その学生の当該科目の単位は認定しなかったことが報告された。二つ目は受講生の履修上の不正が一部目立ってきたことが報告された。例えば、出席登録を他人に任せたり、他人のレポートをほとんど真似たり、組織的にレポートを作成したりする不正が発生している。三つ目は新しい教育ニーズに対応する必要があること。具体的には、現在、課外授業として開講している「TOEICスコアアッ

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	17.4%
良かった	7	30.4%
どちらとも言えない	7	30.4%
あまり良くなかった	3	13.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	2	8.7%
合計	23	100.0%



「大戦略」を来年度から単位化すること。知財関係の科目や初習外国語などの科目を共通教育の外枠で開講し、大学教育センターが責任部局として運営していくなどの説明があった。



### 第3節 教育改善に関する活動

共同獣医学部設置にあたってグラジュエーションポリシー(Graduation Policy)およびカリキュラム・フローチャートの作成を開始し、2012年5月30日に鹿児島大学共同獣医学部と統一化した。以下の表に、グラジュエーションポリシー (GP1~5) および、リキュラム・フローチャートを示す。

共同獣医学部 カリキュラム・フローチャート 2012年5月30日確定版



## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

共同獣医学部は発足から2年であり、1年目は対象科目が2科目のみであったため、経年変化についての分析は省略する。

### (1) 学生授業評価アンケート

共同獣医学部

2012年度			2013年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
2	2	100%	26	25	96%

#### 2013年度結果—講義—

あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	2.88
--	------

1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満

あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	2.20
---------------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない  
6. 答えられない

あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	2.14
------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	1.97
---------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	1.34
-------------------------	------

1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12回～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）

対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	1.97
------------------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

#### 2013年度結果—実習・実験—

あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	2.76
--	------

1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満

あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	1.88
---------------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない  
6. 答えられない

あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	1.74
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	

この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	1.50
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	

あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	1.04
1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12回~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~60% (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)	

対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	1.97
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	

講義、実習ともに満足度は高く、概ね良好な学生評価を受けていると考える。また、鹿児島大学との遠隔講義について、対面式の講義と遜色ないかという質問に対しても講義・実習ともに満足度は高く、教員の努力が伺える。共同獣医学部として2年目であり、1年目は対象科目が2科目のみであったため、経年変化を分析することは難しいが、農学部獣医学科のアンケート結果を参考データとすると、全体的に改善傾向が確認された。

## (2) 教員授業自己評価アンケート

共同獣医学部

2012年度			2013年度		
対象科目数	実施数	実施率	対象科目数	実施数	実施率
2	2	100%	15	6	40%

学生は、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	1.83
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	

学生は、授業の内容をよく理解できたと思いますか？	2.00
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	

学生は、授業の内容に満足していると思いますか？	1.67
1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない	

実施数が少なく分析が困難であるが、概ね学生の評価と一致する。

## (3) 今後の課題

共同獣医学部への移行によって、従来までの授業評価項目に加え、遠隔授業に関する評価項目が本学部にとって重要な授業改善要因となる。本年度は学生側からは概ね良好な評価を受けたが、教員側の自己評価に関しては実施科目が少なく、また入力率が40%と低いいため、問題点を分析するには不十分である。組織的な努力により、未入力者に対して入力の呼びかけを続けることが必要であるが、自己評価システムへの入力方法の検討、未入力者へのアラートシステムの構築、複数の自己評価システムの統合など、分かりやすいシステムへの改修も有効であると考えられる。



## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
共同獣医学部	獣医学セミナー(ピアレビュー)の開催: 毎月1名の教員が教員・学生を対象としたセミナーを開催し、学部の研究力・教育力の向上を図る。		0	各教員の研究活動状況について報告された。
	獣医学科特別セミナーの開催: 年2回(8月・2月、講師計4・5名)の学外講師を招聘し、教員・学生を対象としたセミナーを開催することで、学部の研究力・教育力の向上を図る。		324,380	学外講師を招くことで、各分野の先端的な研究に対する理解を深めた。
	獣医症例検討会(ピアレビュー)の開催: 毎月1名の臨床系教員が教員・学生、学外獣医師を対象としたセミナーを開催し、学部の研究力・教育力の向上を図る。		41,600	小動物臨床に関する症例検討会を行い、症例に関する知見を得た
<b>計</b>			<b>365,980</b>	

## 第6節 来年度の課題

共同獣医学部は始まって2年目であり、今後学生が進級するにつれ、新たな専門科目が始まることでこれまでに見出されなかった問題点が明らかになる可能性もあり、学生の意見を取り入れ、早期に対処する必要がある。また、遠隔講義・実習など、これまで教員側も経験してこなかった新しい教育システムが導入されているため、教授法についての知識や技術の取得が不可欠である。各教員の自助努力とともにFD活動が重要な意味を持ち、教員同士が積極的に問題点・改善点を意見交換できる場が必要であると考え。また、2大学間および科目間で試験の実施・評価に関して若干の認識の違いが存在しており、共通の成績評価基準を設ける必要がある。共同獣医学部のシステムが有効であることを証明するためには、始めの6年間で特に重要であると考え。

## 第12章 人文科学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

人文科学研究科としてのFD研修会は実施していない。

### 第3節 教育改善に関する活動

人文科学研究科としての教育改善活動は特に実施していないが、大学院生アンケートを実施した。25年度は人文学部棟の耐震改修工事のため、研究環境は必ずしも良くなかった。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

#### (1) 学生アンケート

受講学生数が少ないことから、IYOCAN2を利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。平成25年度もこれを踏襲し、人文科学研究科在籍中の大学院生10名を対象に、平成25年10月31日を締切として、記述式の無記名アンケートを実施した。アンケート提出者は5名で、回収率は50.0%であった。

アンケートの質問項目と回答は以下のとおりである。

1. 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、お教えてください。
  - ・授業が少人数であるため、指導教員との意志の疎通がはかりやすいのは良いと思います。
  - ・テーマや課題について、ペアで話し合う形は良いと思う。
  - ・先生のもとで、自らの論文を検討するという点、特に演習では、先生の意見のみならず、ほかの学生の意見や感想などいただけるので、論文の作成にとって大変いいことである。
  - ・特にありません。計画的な分かり易い授業をされる方もおられますが、かなり行き当たりばったりの授業も多いと感じます。

- ・少人数授業になり、関心に合わせた指導が受けられること。
2. 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、お教えください。
- ・研究方法（データの分析方法等）、自分の使っている方法以外のもも講義でいくつか学ぶことができれば、将来に役立つと思う。
  - ・予告や承諾なしに大幅に授業を延長されるのは困ります。
  - ・受講できる授業は本来演習より講義の方が多くなければならないはずだが、実際には講義の開講数が明らかに少なく、修了要件と現状の調整が不十分を感じる。その様な状況にあつて、集中講義なども受講できないのでは、学生・教員いずれの負担も大きいと思う。
3. その他、ご意見ご要望ご感想があれば、お教えください。
- ・講義・演習共院生だけの授業となったことで専門性は高まったのかもしれませんが、他専攻の授業を取りに行きにくくなったと思います。制度上他専攻の授業を取ることになっていますが、本来の専攻の学生にしても、他専攻の院生と一緒に演習を受けると困ると思います。また入学時と制度が変わったことで授業数が激減し、履修する上で困りました。入学してから卒業するまでは同じ制度のままにすべきです。
  - ・授業アンケートは個別（授業別）にとった方がいいと思います。メンバーが少ないので個人を特定しないようにするのは難しいと思いますが、ご配慮をお願いします。
  - ・とても有意義に感じる（先生が厳しくても、自らの理解が不十分でしんどくても）授業もありますが、残念ながらそう感じられない授業もあります。アンケートは個人的にフィードバックできるシステムの方が望ましいと思います。
  - ・修了要件と現在の授業構成に齟齬が生じている部分もあると思うので、今後の入学者が悩むことのない様、バランス調整をお願いします。少人数の授業では「講義」「演習」という区分自体無意味化してしまうので、区分を無くしてしまっても良いと思います。

まとめると、質問1に対する回答では、少人数教育や教員の丁寧な個別指導が評価された。質問2に対する回答では、カリキュラムについて不満があった。質問3に対する回答では、アンケートの実施方法の工夫、制度やカリキュラムの問題点について貴重な意見があった。アンケートに答えてくれた院生の数は少なかったけれども、今回はかなり有益な回答が得られた。この結果を28年度以降予定されている大学院の改組のためのデータとして提示できればと思われる。

## （2）教員授業自己評価

平成25年度も、前年度同様、集中講義以外の人文科学研究科の全授業110科目(昨年度は157科目)について教員自己評価の対象としたが、IYOCAN2に入力された授業は13科目で、実施率最大でも26.2%に留まった。ここ数年40%台を維持してきたが、急激に減少した。25年度は昨年度までと制度が大きく変更になったことにより、大学院の授業数が激減し、殆どが少人数教育の授業となったことが要因と考えられる。

## 第5節 FD実施経費報告書

人文科学研究科で実施したFD活動に伴う経費執行はない。

## 第6節 来年度の課題

規模が小さいため研究科独自のFD活動は展開しにくいですが、少人数であるがゆえに、よりきめ細やかな大学院生アンケートを継続させて、学生の要望をよく聴取し、学生の研究や研究環境の充実・改善に向けた提言を行っていくべきである。

## 第13章 教育学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

本研究科においては授業公開を実施していない。しかし、今後、大学院での授業公開も実施する方向で検討すべきであろう。学部で実施している授業公開に研究科も共催の形で実施する方法も考えられる。

### 第2節 研究科主催FD研修会

平成25年度は研究科主催のFD研修会は実施していない。これをどういう形で実施するかについては、大学院の現状と課題について分析し、現在最も必要とされている研修会がどのようなものかを検討する必要がある。

### 第3節 教育改善に関する活動

今年度教育改善に関するFD活動は特に行わなかったが、これについても将来どういう活動が求められているのか、検討していく必要がある。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成26年4月にIYOCAN2システムで確認した学生授業評価、教員授業自己評価の結果を示し、考察する。表1は学生授業評価の実施状況を、表2は教員授業自己評価の実施状況を示す。学生授業評価実施率、教員自己評価実施率のいずれも、過去5年間の実施率の中では低い水準にあり、実施率を上昇させるために、教員へのPR活動を一層強化するなど積極的な取り組みが必要であろう。

表1 2009年度～2013年度学生授業評価アンケート実施状況

部局名(コード)	全数(A)		開設科目(B)		
	CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2009年度	236	125	236	125	53
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2010年度	343	141	343	141	41.1

大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2011年度			346	108	346	108	31.2	
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2012年度			339	103	339	103	30.4	
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2013年度			360	121	360	121	33.6	
対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			B&C		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
235	125	53.2	177	124	70.1	235	125	53.2
218	141	64.7	308	141	45.8	218	141	64.7
151	108	71.5	270	108	40	151	108	71.5
148	103	69.6	258	103	39.9	148	103	69.6
187	121	64.7	315	121	38.4	187	121	64.7
B&D			C&D			B&C&D		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
177	124	70.1	176	124	70.5	176	124	70.5
308	141	45.8	185	141	76.2	185	141	76.2
270	108	40	151	108	71.5	151	108	71.5
258	103	39.9	148	103	69.6	148	103	69.6
315	121	38.4	187	121	64.7	187	121	64.7
実施率最大								
70.5								
76.2								
71.5								
69.6								
64.7								

表2 2009年度～2013年度 教員授業評価アンケート実施状況

部局名(コード)	全数(A)		開設科目(B)		
	CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2009年度	236	70	236	70	29.7
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2010年度	343	102	343	102	29.7
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2011年度	346	73	346	73	21.1
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2012年度	339	78	339	78	23
大学院教育学研究科(修士課程)(072) 2013年度	360	66	360	66	18.3

対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			B&C		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
236	70	29.7	177	68	38.4	236	70	29.7
343	102	29.7	308	98	31.8	343	102	29.7
151	73	48.3	270	73	27	151	73	48.3
148	78	52.7	258	78	30.2	148	78	52.7
187	66	35.3	315	66	21	187	66	35.3
B&D			C&D			B&C&D		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
177	68	38.4	177	68	38.4	177	68	38.4
308	98	31.8	308	98	31.8	308	98	31.8
270	73	27	151	73	48.3	151	73	48.3
258	78	30.2	148	78	52.7	148	78	52.7
315	66	21	187	66	35.3	187	66	35.3
実施率最大								
			38.4					
			31.8					
			48.3					
			52.7					
			35.3					

次に、2009年度～2013年度にわたるアンケート結果の経年変化の中で、学生満足度の数値を挙げる。教育学部の数値に比べて教育学研究科の数値は全体として高い値を示しているだけでなく、研究科だけを見ても年を追うごとに上昇している傾向が表れており、研究科教員の努力と工夫の結果であるといえる。

表3 2009年度～2013年度 アンケート結果の経年変化

Q 学生満足（この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？）

	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計
教育学部(2009)	4.1	4.46	4.48	4.16	4.11	4.15
教育学部(2010)	4.28	4.6	4.34	4.35	4.52	4.33
教育学部(2011)	4.24	4.61	4.47	4.3	4.42	4.29
教育学部(2012)	4.34	4.52	4.48	4.4	4.67	4.38
教育学部(2013)	4.38	4.56	4.65	4.42	4.45	4.41
大学院教育学研究科 (修士課程)(2009)	4.64	4.79	4.48	4.56	5	4.65
大学院教育学研究科 (修士課程)(2010)	4.82	4.75	4.28	4.56	4.88	4.66
大学院教育学研究科 (修士課程)(2011)	4.8	4.62	4.44	4.72	5	4.71
大学院教育学研究科 (修士課程)(2012)	4.78	4.88	4.71	4.73	5	4.78



大学院教育学研究科 (修士課程)(2013)	4.82	4.91	5	4.86	5	4.85
---------------------------	------	------	---	------	---	------

## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度教育学部FDにおいては経費を使わなかった。

## 第6節 来年度の課題

平成25年度における学生授業評価、教員授業自己評価の入力率は落込みが見られた。来年度以降入力率向上にむけてPR活動を強化するなど、取り組みを重ねていく必要がある。

授業公開においても研究科の取り組みは全体として学部よりも低調で、例えばゼミを授業公開の中に組み込むことができないか等、充実させる方策を考えていく必要がある。

## 第14章 経済学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

本年度は経済学部と合同の若手教員対象のゼミ活動改善FD研修活動に注力し、これをもって授業公開に代えた。(第6章の第3節を参照のこと。)

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成25年10月23日(水)、13時30分より14時20分にわたり、大学教育機構との共催により、新しい共通教育が半年間行われた経験をふまえ、その改善をテーマとした教育改善FD研修会が実施された。機構側からの説明の後、質疑応答が行われた。本研修会は経済学部の定例教授会の直前に行われ、ほとんどの教員が研修会に参加した。

### 第3節 教育改善に関する活動

本年度は経済学部と合同の若手教員対象のゼミ活動改善FD研修活動を行った。(これについては第6章の第3節を参照のこと。)

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価について近年の経済学研究科の実施率は2009年度は49%、2010年度は39%、2011年度は47%、2012年度は33%、2013年度は43%であった。教員授業自己評価は、2009年度は48%、2010年度も48%、2011年度は39%、2012年度は33%、2013年度は10%であった。

このように学生授業評価はほぼ4割前後の実施率であるが、教員授業評価は低下傾向にあり、2013年度は急激な落ち込みを記録した。学部の同様の入力率の低下と合わせ、その改善について、その必要性の理解を強めることも含めて、組織として検討する必要がある。

## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
経済学研究科	ゼミ運営改善のための研修活動	資料費	100,000	多くの若手教員が参加し、改善のための参考となった。
<b>計</b>			<b>100,000</b>	

## 第6節 来年度の課題

来年度のFD活動の対象としては経済学部とほぼ同様に、以下の課題が考えられる。

- 1、教員授業自己評価の入力率向上に向けた組織的な取組みの強化。
- 2、今年度のゼミ運営改善のための活動は若手教員にとって非常に有益であったと考えられるので、次は授業運営の改善に向けた同年代の教員を主な対象とした研修が考えられる。その場合、中堅以上の経験を積んだ教員から赴任後間もない若手教員への経験の伝達が有効ではないか。
- 3、ゼミ、授業、両方の改善のために、両者をビデオに撮り、教員自身に見てもらうことが有益であろう。これはたとえばアメリカの大学で行っているところがあり、その効果は確かめられている。ただそのためにはある程度の人と資金が必要であるので、その点の確認が必要となろう。

以上。

## 第15章 医学系研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは理工学系研究科（第16章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは農学系研究科（第17章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

## 第16章 理工学研究科のFD活動

### 理学系

#### 第1節 授業公開

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独では授業公開を実施していない。理学系教員は、理学部のピアレビューに参加した。詳細は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

#### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

理学部教育改善FD研修会

講師派遣型アラカルト研修会「山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法  
ー学生を就職させるためにー」

講師派遣型アラカルト研修会「今、山大生は何を考え、悩み、不安を覚えているのか  
ー学生相談所から見えてくる山大生の実態ー」

高大連携FD研修会「新教育課程での高校生の学力保障を見据えた  
カリキュラム編成と教育現場での実態について」

理学部FD研修会「e-learning」

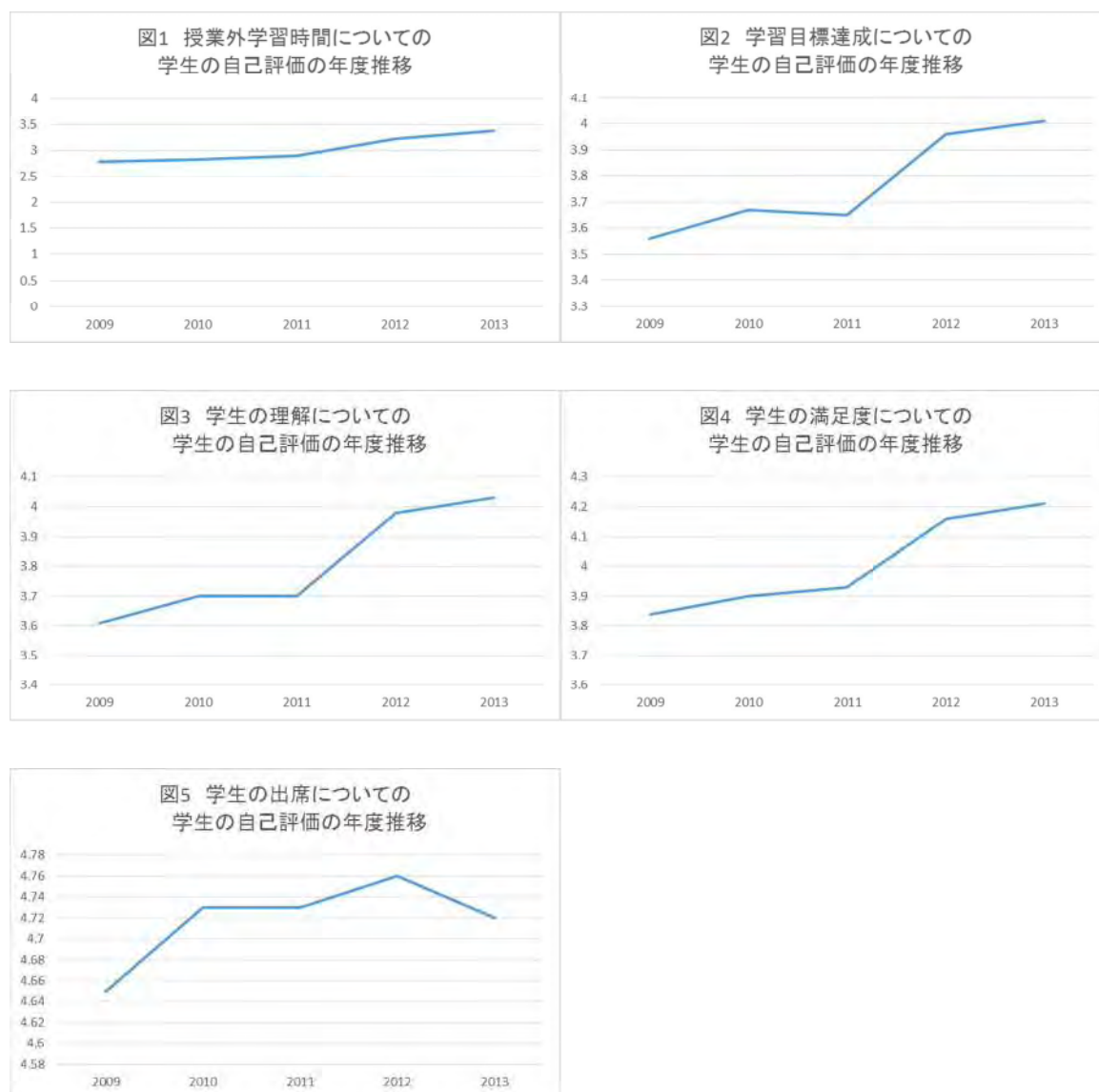
#### 第3節 教育改善に関する活動

理工学研究科単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

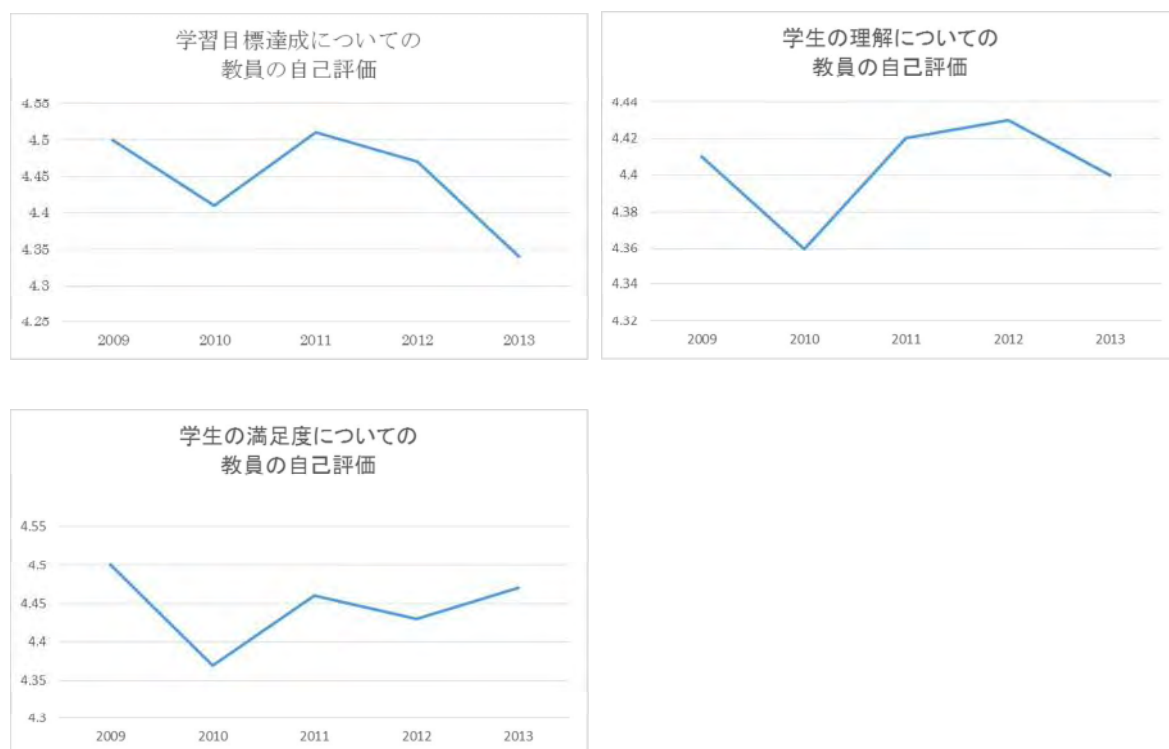
### 1. 学生授業評価

理工学研究科理学系で開講している授業科目の学生授業評価結果を以下に挙げる。数値は、正規化した指標である。「出席についての学生の自己評価」以外は上昇の傾向にあり、日頃の教員の努力が表れたものと思われる。



## 2. 教員の自己評価

理工学研究科理学系で開講している授業科目の学生授業評価結果を以下に挙げる。数値は、正規化した指標である。教員の自己評価は下降気味であるのに対し、学生の授業評価は上昇していることから、教員が自己評価をより厳しく、授業を改善しようとする意識が増え、良い方向に向かっているものと思われる。



## 第5節 FD実施経費報告書

理工学研究科（理学系）単独では、FD 実施経費を使用していない。理学部と共通で使用した。したがって、実施経費報告は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

## 第6節 来年度の課題

学生の授業アンケートでは、出席についての学生の自己評価が2013年度は下がっているため、授業への出席の意識を上げるような取り組みが大学院授業において必要であろう。



# 工学系

## 第1節 授業公開

理工学研究科（工学系）では、工学部と同様に、毎年、前期と後期に公開授業を実施している。今年度も研究科の全開講授業を対象に、前期は7月、後期は12月に公開授業を実施した。学部の授業と同様に、参観者は「公開授業参観感想表」を提出し、授業を行った教員にその参観感想表が配付され、授業改善に役立っている。第9章の第1節では、公開授業で用いている「公開授業参観感想表」を示した。

第9章の第1節では、学部と研究科を合わせた今年度の参観者数と参観率を示した。参観者数は、参観した教員の所属（主に担当している学科）で集計している。第9章の第1節で述べたように、参観率は20%であった。今後、公開授業の参観率を高めるために、点検・評価委員会において、改善策を検討していく必要がある。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

FD研修会は、学部と研究科が合同して主催し、実施した。実施した以下の研修会の詳しい報告については、第9章の第2節に記した。

### 1. 教育改善FD研修会

日時：平成25年9月4日(水) 14:00～14:30

場所：工学部 D 講義棟 D11 教室

講師：糸長 雅弘（大学教育センター長）

参加者：31名

### 2. 工学部FD研修会

「大学教員として知っておくべき発達障害学生に対する対応と支援」

日時：平成25年10月30日(水) 16:10～17:30

場所：工学部 D 講義棟 D11 教室

講師：木谷 秀勝（教育学部 附属教育実践総合センター 教授）

参加者：48名

## 第3節 教育改善に関する活動

第9章の第3節で工学部における教育改善活動について報告した。工学部附属の「工学教育研究センター」では、学部の教育改善だけではなく、大学院の教育改善も対象にしている。

工学部キャンパスに「グローバル技術者養成センター」が設置され、工学部と理工学研究科でグローバル化教育プログラムが実施されているが、教員のグローバル教育力の向上のための体制を整備する取組が進められている。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の授業と同様に、理工学研究科の授業の学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。第9章の第4節で、学部と研究科の優秀授業表彰について報告した。そこでは、研究科の121科目の分析データを示し、今年度の研究科の優秀授業、最優秀授業の一覧表も記載した。

記載したデータから判断すると、理工学研究科のほとんどの授業は概ね良い評価以上であり、約半数の授業は良い評価を受けている。このような学生授業評価結果に満足せず、今後も理工学研究科の授業改善のための活動をさらに進めていきたい。

## 第5節 FD実施経費報告書

工学部・理工学研究科(工学系)の経費報告書は、第9章の第5節に記載した。

## 第6節 来年度の課題

来年度の課題として、

- (1) 授業外学習時間の確保
- (2) 適正な成績評価

が挙げられる。今後、点検・評価委員会で、問題点の整理をした上で検討していきたい。

# 第17章 農学研究科・医学系研究科（農学）の FD活動

## 第1節 授業公開

### 1 授業公開（学術セミナー）

農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部全教員と学生および農学研究科と医学系研究科（農学）の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。

#### 1) 「植物はどうして／どのようにしてあれほど多彩な匂い化合物を作るのだろうか？」

講演者：松井健二

日時：6月28日（金）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 2) 「酢酸菌の酸化発酵を担う膜酵素の生理学的役割と分子構築：遺伝子工学的アプローチ」

講演者：薬師寿治

日時：5月31日（金）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 3) 「病原性細菌によるヘム取り込み機構：タンパクは如何にヘムを掴んでいるのか？」

講演者：小崎紳一

日時：10月25日（金）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 4) 「エタノール生産性微生物の耐熱化及び耐熱性機構を探る」

講演者：高坂智之

日時：11月27日（水）17：00～18：00

場所：農学部7番教室

#### 5) 「N<sub>2</sub>OとNO：脱窒から環境へ、生物間相互作用へ」

講演者：横山和平

日時：1月16日（木）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会、および2) 教育改善FD研修会を以下の日程で開催した。

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

研修名：「山口大学の教員として知っておくべき就職支援の方法

ー 学生を就職させるためにー」

日程：平成25年9月18日(水)

場所：農学部2F 会議室

講師：平尾元彦（学生支援センター教授）

2) 教育改善FD研修会

研修名：「新しい共通教育導入に伴う意見交換会」

日程：平成25年10月17日(水)

場所：農学部2F 会議室

講師：糸永 雅弘（大学教育センター長）

## 第3節 教育改善に関する活動

農学研究科および医学系研究科（農学）は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1) 学生授業評価

学生授業評価は、農学研究科および医学系研究科（農学）でそれぞれ独自に実施しており、学生による自由記述欄の内容をもとに、授業に対する評価を確認し、改善努力を行っている。授業評価実施率が低い点については、早急に原因を解析し、改善する必要がある。

2011年度			2012年度			2013年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
-	-	36.4	-	-	37.5	-	-	32.0

## 2) 教員授業自己評価

教員授業自己評価は、年々入力率は増加しているが、まだ5割程度であり、組織的な取り組みが必要と考える。評価項目（学習の目標達成度、理解度、満足度）に関しては、いずれについても、学部と同様、年々点数が下がっている。この原因についても解析が必要である。

2011 年度			2012 年度			2013 年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
19	11	57.9	21	20	95.2	17	8	47.1

## 第5節 FD実施経費報告書

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
農学研究科・医学 研究科(農学)	学術セミナー			
<b>計</b>			<b>0</b>	

## 第6節 来年度の課題

農学研究科および医学系研究科（農学）のFD活動は、授業評価以外は全て学部と重複した内容となっている。しかしながら、研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間でもカリキュラムや教育方針は同じではない。このようなことから、それぞれの研究科独自のFD活動を新たに計画する必要があるかもしれない。また、学習の目標達成度、理解度、満足度の点数が年々低下傾向にある点については原因の解明が望まれる。

# 第 18 章 東アジア研究科の F D 活動

## 第 1 節 教育改善に関する活動

博士課程のみの独立した大学院として、学生に対する研究指導が主たる教育活動となっている本研究科の現実に鑑みて、25年度も昨年度に引き続き、「研究指導法についての検討会」を企画した。同検討会は、毎年11月に、本研究科の経済・経営・法律コース、比較文化コース、教育開発コースのそれぞれにおいて行われている準備論文報告会の場を利用し、当該報告会の終了後に行うものである。今年度は発表を行う学生が多く、報告会が長時間にわたったため、参加教員に対するアンケート調査のみとした。すなわち、学生の報告及び主指導教員の指導法に関して、報告会に参加した各教員に書面でコメントしてもらい、これをFD委員会において集計し、後日主指導教員にお渡しする形式にした。

### 1. 平成 25 年度 第一回「研究指導法についての検討会」(経済・経営・法律コース)

#### (1) 概要

日時 平成 25 年 11 月 8 日  
19:00-19:15  
場所 東アジア研究科・経済学研究科棟 307 演習室  
参加教員 7 名

#### (2) 内容

7名の学生の報告に関して、及び6名の主指導教員の指導法について、アンケート用紙(参考資料参照)を利用してたずねた。

#### (3) 結果

研修会の終了後、アンケート用紙を回収した。寄せられたコメントを整理すると、次の通りである(注:学生・教員の個人名等が判明しないよう、文章を加工しています。以下同じ)。

[学生 A の報告に関して]

- ・論文の構成を再検討すべき。
- ・論文の目的と構成(内容)とが対応していないと思う。
- ・インタビュー、アンケート等のデータ分析の結果を詰めるべき。

[学生 B の報告に関して]

- ・パワーポイントの字が小さすぎる。
- ・文献が示されていない。
- ・一定の方向性にまとめようとする点は評価できるが、データが不足している。
- ・論文全体の構成・構造が全く分からない。アンケート調査が成功していない。
- ・パワーポイントに盛り込むべき内容をできるだけ少なくしたほうがよい。どんな点を強調すべきかを絞り込んだ発表にすると、時間内に的確な発表がなされるものと思う。

[学生 C の報告に関して]

- ・発表者は、[...]が可能であると考えているようだが、私は困難だと思う。
- ・どのように[...]を調査するのか？
- ・[...]の定義について、応答と資料とが矛盾していた。
- ・論文の構成がよくできて報告もわかりやすかった。

[学生 D の報告に関して]

- ・検討されている問題については、法との関連で考えるべきものと、法との関連では考えられないものがあるのではないか。
- ・今後、問題の調査結果をどのように法整備に結び付けるか、期待される。

[学生 E の報告に関して]

- ・方法(調査)対象と論文のテーマが一致していない。
- ・大学生を対象としたアンケートで何が言えるか、まずしっかり詰めた上で、アンケートを設計すべき。構成・課題を再検討する必要あり。

[学生 F の報告に関して]

- ・アンケート・データの比較だけでは問題が見えないので、ケーススタディが欲しい。
- ・日本との比較は不必要との意見が出たが、中国の特徴を浮き彫りにするためにも是非比較研究をしてもらいたいと考える。

[学生 G の報告に関して]

- ・よくできていると思う。
- ・発表そのものはある程度のレベルが保たれている。ただし、学位論文のタイトルとその学位論文の内容を結び付ける必要がある。発表内容を絞る必要もあった。

[A 先生の指導法へのコメント]

- ・アンケート調査及び面接調査についての指導がなされていないのではないか。
- ・実際に台湾の事例で計算・分析をされているようですが、成功する可能性があるのか、少し気になった。Bさんのオリジナルの計算、モデルに基づく分析とするほうが、論文のインパクトが強くなると思う。

## 2. 平成 25 年度 第二回「研究指導法についての検討会」(比較文化コース)

### (1) 概要

日時	平成 25 年 11 月 11 日 18:50-19:05
場所	東アジア研究科・経済学研究科棟 307 演習室
参加教員	10 名



## (2) 内容

2名の学生の報告に関して、及び2名の主指導教員の指導法について、アンケート用紙を利用してたずねた。

## (3) 結果

研修会の終了後、アンケート用紙を回収した。寄せられたコメントは次の通りである。

[学生Aの報告に関して]

- ・積極的に作品を解釈しようとする意識が伝わってきた。
- ・具体的に作品を取り上げつつ、それらを観念的な次元で考察し、展開しようとしており、その方向性には賛同する。
  - ・考察のラインアップを見るに体系化されており、順調に進んでいると思われた。
  - ・順調に進んでいるように見える。
  - ・各作品の読み込みは進めているのですが、今日の発表では、テキスト分析の具体的な点についてはあまりふれられませんでした。問題を広げすぎないように集中させることも考える必要があるように感じました。
  - ・目次は各論を完成させてから作った方がよい。
  - ・方法であるテキスト分析・解釈学的方法について、何か最近の文学理論を援用したりするのでしょうか？もしそういう部分があれば、目次・構成の中に盛り込んだ方がよいのではないのでしょうか？
  - ・「私は～と思う」という表現は、学術論文や学会発表では不適切である。解釈や説明には「妥当な理由」に基づく必要があり、「誰でも～と考えざるを得ない」という形で論理構築しなければならない。
  - ・一つ一つの著者の分析の列挙とグルーピングから成っていますが、総体として、あるいは結論として何を言いたいかわからない。
  - ・日本語の発音が去年よりもだいぶ自然になっていると思います[本報告書執筆者注：本学生は留学生]。
  - ・着実。
  - ・通して聞くことができ“全体”像を知ることができた。“テキスト分析”という言葉がどのような含意があるのか理解できなかった。

[学生Bの報告に関して]

- ・順調に進んでいるように思われる。
- ・論文の結論(仮説)が先にあって分析を進めているように思われるところを感じる(仮説に関する柔軟性が必要であるように思います)
  - ・精細な分析を進めているように見られるが、全体の焦点化を図るところがあってよいように思う。
  - ・問題意識はたいへん興味深く、意欲的な研究だと思いますが、現時点で「ストーリー」を発見・再構成しうる地点まで研究が進んでいるのでしょうか？
  - ・話の内容がどんどん展開して行き、納得することができません。一つ一つの事柄をていねいにまとめることをまずやる必要があると思います。
  - ・明確な論拠を示して論を展開してほしい。
  - ・テーマに対するパッションが感じられない。何が知りたいのか不明確、何を論じたいのか不明確。

[A 先生の指導法へのコメント]

- ・修士論文のフレームを踏襲するという判断は賛成いたします。
- ・作品の元の素材や、作者自身の人生のあり方と主人公の造型をどう結びつけるかわからなかった。焦点が定まっていて、専門化していく指導をなさっていることがよくわかります。
- ・指導学生の日本語(文章語)がすばらしいと思いました。

[B 先生の指導法へのコメント]

- ・能力に関しては十分あると思うので、良いところを伸ばしてあげてください。
- ・指導の要を得ている
- ・本を読み込む訓練が必要なのではないのでしょうか。
- ・ご苦労がよくわかった気がしました。
- ・指導学生に存在する問題点を見つけて論理的に指摘する手腕の鮮やかさにいつも感服しています。

### 3. 平成 25 年度 第三回「研究指導法についての検討会」(教育開発コース)

#### (1) 概要

日時	平成 25 年 11 月 15 日 19:00-19:15
場所	東アジア研究科・経済学研究科棟 307 演習室
参加教員	7 名

#### (2) 内容

6名の学生の報告に関して、及び4名の主指導教員の指導法について、アンケート用紙を利用してたずねた。

#### (3) 結果

研修会の終了後、アンケート用紙を回収した。寄せられたコメントは次の通りである。

[学生 A の報告に関して]

- ・手許の資料にはすべてのスライドを示して欲しい。
- ・研究でやろうとしていることがはっきりしていてわかりやすかった。これからニーズを抽出する、それに基づいた学習モデルを作るとのことで、今後の仕事がまだ多く残されていると感じた。
- ・小〜大まで長期スパンでの傾向の抽出を目指していて、博士論文として十分に研究に値する課題と思う。但し、小学生は1年から6年まで、中学生でも1年から3年までは異なる特徴をもつと思われるので何年生(何人)にアンケートを取ったのかまで報告してほしい。
- ・学習者の意識・意欲とは実態的客観的に把握できるものである以前に、アンケートの質問の仕方によって出てくる結果が大きく異なると思われる。アンケート内容とその集計の仕方が、最も工夫すべき point であると思う。

[学生 B の報告に関して]

- ・手許の資料を大きくして欲しい。
- ・具体的にどのようなタスクを処理するのかについて知りたい。
- ・授業時の内容と比べ研究が順調に進んでいる様子がわかった。もう少し聞き手の理解を意識した説明をすればなおよかった。
- ・スライドが多すぎる。
- ・[...]の扱いがよくわからなかった。
- ・内容的に理解が難しいが健闘を祈る。

[学生 C の報告に関して]

- ・報告テーマが当日変更されていたが…

[学生 D の報告に関して]

- ・先行研究だけでなく厳密な実態調査をお願いしたい。本日の報告にはあまり具体性がないように感じられる。
- ・[...]教育の背景は素質の導入によってもたらされたということなのか。大学の大量化、就職難という社会問題への対応なのか？
- ・「就職難という新たな社会問題」において「大学生の社会性への要求」とは大学生への要求なのか、大学生から大学への要求なのかわからない。
- ・[...]という極めて包括的・全体的テーマに対して調査範囲が限られすぎている印象がある。このテーマを掲げるにはもっと広くデータを取り、多くの大学から集めるべきではないか。内容に比べてタイトルが大きすぎる感じがする。

[学生 E の報告に関して]

- ・音声言語との対比が必要。音声言語にあつて書記言語にあるもの、ないものを考える。
- ・パワーポイント資料の書き方に無駄が多い。
- ・定義の段階ですでにとっても難しい研究だと思った。

[学生 F の報告に関して]

- ・研究内容を文章に表す場合とパワーポイントに表す場合とは根本的に異なるので、次回の発表では後者のものを見たいと思う。
- ・[...]について、何が論じられてきたかの資料がさらに加わって、趣旨がよくわかった。論文の目指す方向がはっきりしてきた。
- ・ゆっくり話していただければよりわかりやすかった。
- ・重要なタームの定義を(変容するものだとされているが、ならばもっと丁寧に流れと差異について)示す必要がある。そうすれば論がすっきりしてくるはず。

[A 先生へのコメント]

- ・三名のご報告とも非常に興味深く拝聴した。
- ・多忙の中一人一人と毎週討議されているのは大変なことだと思う。三人の問題点と課題も的確に把握されている点に感服する。
- ・Bさんの研究は「東アジア」を取り込まなくてもよいのではないか。

[B 先生へのコメント]

- ・具体的なデータ分析を期待する。

- ・資料不足で苦労しているという点に納得した。

[C 先生へのコメント]

- ・発表者の直面している課題への対応策をきちんと考えていらっしやると感じた。

[D 先生へのコメント]

- ・使用している資料とそれによる方向のずれを把握されており、適切に導かれている様子をうかがい知ることができた。

## 第2節 FD実施経費報告書

第1節に述べた「研究指導法についての検討会」の実施に当たり、教員同士の経験の交流やアンケート調査の実施を行ったが、その過程においては、特段の経費を要せずにFD活動を遂行することができた。

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
東アジア研究科	第一回「研究指導法についての検討会」	特段になし	0	
	第二回「研究指導法についての検討会」	特段になし	0	
	第三回「研究指導法についての検討会」	特段になし	0	
<b>計</b>			<b>0</b>	

## 第3節 まとめと来年度の課題

今年度は、全てのコースで一回ずつ「研究指導法についての研修会」を行うことができ、指導学生を抱える教員同士の経験の交流を図ることができた。学生のプレゼンの行い方や教員の指導法に関して、多くの教員から要を得た指摘が出され、これを主指導教員に確実に手渡し得たことは、アンケート調査の効用であったと考える。今回は時間の関係があり、教員同士が顔を突き合わせて討論する場が設けられなかったが、多くの教員が多忙の中、研究指導の改善に時間を割いたことを多としなければならないであろう。

博士課程専門の研究科である本研究科にとって、我が国において今年(2014年)明るみに出た STAP 細胞の研究をめぐる一連の問題が与えた衝撃は大きく、論文執筆の基本的なルールへの周知、及び学位授与に係る諸手続きの明確化への取り組みが、研究科全体の課題として改めて浮上してきた。来年度の本研究科FD活動においては、こうした課題に取り組むことが求められる。

(参考資料)「研究指導法についての検討会」において配布したアンケート用紙

平成 25 年度 第〇回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

〇〇コース

お名前\_\_\_\_\_

※本コメント票は、FD 研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出ください。

※コメントは2種類あります。一つは準備論文報告に関してであり、もう一つは指導法に関してとなります。両方とも主指導教員へのメッセージとしてご記入ください。

準備論文報告 〇〇氏の報告に関して

研究指導法報告者 〇〇先生の指導法に関して

平成 25 年度 山口大学大学院東アジア研究科FD委員会

葛 崎偉  
更科 慎一  
角田 由佳  
有元 光彦

# 第 19 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

## 第 1 節 授業公開

大学院技術経営研究科はいわゆる専門職大学院で、社会人向けの授業を広島・福岡の教室で行っていることもあり、授業公開等については実施していない。

## 第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

技術経営研究科における研究科主催による F D 研修会は、平成 25 年 11 月 26 日（火）午後 1 時から技術経営研究科内会議室において開催、研究科の教員 10 名が参加した。内容は、特許庁審査第一部調整課の澤井課長を招き講演ならびに質疑応答を行った。テーマは技術経営における重要な要素である特許を中心とする知的財産を巡る課題についてであり、実施内容は次の通り。

講演者：特許庁特許審査第一部調整課 澤井智毅課長  
講演題名：「成長戦略としての特許」

<講演要旨>

2030 年の世界と日本：相対的にプレゼンスを失う日本

空洞化の懸念とそれを補う研究開発

高付加価値製品の需要が伸びる新興国

米・中における研究開発投資の急増、経済成長を牽引

経済再生に向けたイノベーションの重要性

米国における特許制度の沿革

～建国と共に歩む特許制度(18c~19c)～

大恐慌とアンチパテント (1930s~1980s)

プロパテント時代の到来 (1980s~)

-- 今世紀においても引き続き知財を重視する米国（米国発明法 AIA の成立）

海外での円滑な権利取得を促す国際戦略

制度・運用の国際調和

新興国での円滑な特許権取得

中国対策

経済成長への課題

研究開発を促すためには、投資を容易に回収できるよう、排他的な独占権である特許権の活用が有効。

安定的な権利の付与に資する施策の検討・体制強化等の必要性を指摘。

(参考) 知財の活用事例

企業の取組事例

なお、大学教育機構との共催による FD 研修は実施していない。

## 第3節 教育改善に関する活動

本研究科は平成 17 年度に開設されて以来、9 年が経過するところであるが、平成 25 年度からカリキュラムの大幅な改訂を行うとともに、海外からの留学生向けに英語による教育を開始することとなった。このため、研究科のビジョン・ミッション、グラデュエーションポリシー、カリキュラムポリシーなども改めて見直し、研究科内での議論を重ねたうえで再構築する取組みを行った。

また、これに先立ち技術経営研究科の教育内容が MOT 専門職大学院協議会において採択された「MOT 教育コア・カリキュラム」に則しているものであることを確保するため、25 年度から実施しているカリキュラムについて、それぞれの科目がカバーする領域をカリキュラムマップによる確認作業を行っている。

これにより再定義された教育上の理念・目的、ミッション、ビジョン、アドミッションポリシー、グラデュエーションポリシー、カリキュラムポリシーは次の通りとなった。

<山口大学大学院 技術経営研究科 理念，ミッション，ビジョン，ポリシー>

### 1. 教育上の理念，目的

技術経営（Management of Technology : MOT）とは、「技術を事業の核とする企業・組織が次世代の事業を継続的に創出し、持続的発展を行うための創造的、かつ戦略的なイノベーションのマネジメント」を意味し、わが国の産業の活性化と持続的発展のために、MOT 教育は、研究開発・技術開発において必要な専門的経営能力向上を目指します。

本研究科は、科学技術および企業経営の普遍的原理ならびに最新の知識を統合し、イノベーションを持続的に創出するためのマネジメントの研究を行い、もって総合的・学際的な知識・教養・倫理観に立脚し、自身の課題ならびに地域および地球規模での資源の最適利用を考え、判断する能力を持つ人材を養成することを目的とします。

### 2. ミッション

本研究科は、高い倫理観を備え、地域に根差しながらグローバルな視点で問題解決に取り組む<技術経営>者を養成します。ここで、<技術経営>者とは、社会や企業・組織における様々な問題に対し、技術と経営の二つの視点から取り組み、創造的な成果を生み出していく能力を持つリーダーを指します。

本研究科は<技術経営>者を養成することを通じて、地域社会と国際社会の発展に貢献します。

この<技術経営>者養成のため、本研究科では製造業を中心として、技術を核とする企業・組織に所属する人々ならびにこれらの企業・組織を目指す人々に対し、技術と経営に関する高度かつ最新の知識・スキルを提供します。さらに、個別に習得した知識・スキルを複合的に活用して創造的な問題解決に取り組む総合的・実践的教育を実施します。

また、本研究科では、技術と経営に関する高度かつ最新の知識・スキルを効果的な教育手法によって提供し続けられるよう、教員の教育研究活動を推進する体制を整備します。

### 3. ビジョン



本研究科は、<技術経営>者を目指す人々、そして技術経営を教育研究する人々の「最優先志望」となることを目指します。

#### 4. 中長期ビジョン

本研究科は、国内では西日本地域において、国外では東アジア・東南アジアにおいて<技術経営>者を目指す人々の「最優先志望」となることを目指します。

本研究科は西日本の経済を牽引する、技術を核とする企業・組織から学生を受け入れ、各学生が自らの所属企業・組織における問題をグローバルな視点で解決できるような教育を実施します。

また、本研究科は<技術経営>者を目指す東アジア・東南アジアの留学生を受け入れ、日本の産業に接しながら、技術経営に関する高度な教育を受ける場を提供します。

さらに、本研究科では日本人学生と留学生とを交流させます。これにより、日本人学生にはアジア新興国のダイナミズムを感じさせ、西日本の産業を活性化させるためのヒントを与え、留学生には日本の産業人の知見を直接学ぶ機会を与えます。

これらの教育の実施により本研究科の評価を高め、西日本およびアジアにおいて〈技術経営〉者を目指す人々にとって魅力的な大学院となることを目指します。

本研究科では、本ビジョン実現のために必要な教育・研究・運営に関わる戦略を立案し実行します。

#### 5. アドミッションポリシー

##### ●「教育理念」「目標」

科学技術および企業経営の普遍的原理ならびに最新の知識を統合し、イノベーションを持続的に創出するためのマネジメントの研究を行い、もって総合的・学際的な知識・教養・倫理観に立脚し、自身の課題ならびに地域および地球規模での資源の最適利用を考え判断する能力を持つ人材を養成することを目的とします。

##### ●求める学生像

本研究科では以下のいずれかに該当する者を学生として受け入れます。

- ① 企業、組織、地域、国内外などで自らが中核となってイノベーションに携わり、成果の創出や活用を目指した取り組みをしようとする人
- ② 企業経営や組織運営において、戦略的な視点から技術を活用した価値創造や経営課題解決に意欲を持つとともに実践に必要な理論や手法を習得して、自ら経営にあたる、経営層を補佐する、将来に向けての経営の一翼を担おうとする、などの意志を持つ人
- ③ 知的資産の創出と活用、蓄積した業務経験の活用や体系化などに基づく新規起業や事業・職務の遂行における高度化などに挑戦的に取り組もうとする人

#### 6. グラデュエーションポリシー

本研究科では学生が修了までに以下の5つの資質を満たすよう、教育を行います。

- イノベーションの意義と歴史的役割を理解し、自らがそれに参画していく気概と具体的な方法論を習得する。
- 事業活動を通じて地域社会や国際的なコミュニティへの貢献を行なうことができるよう、高い倫理観を持って取り組む精神を涵養する。
- 知的資産の重要性を認識し、事業遂行に役立てていく原理を学ぶとともに、自らアイデアを創出し知的資産化することを目指す。
- 事業活動の成果を経済的価値に結びつけるため、経済法則の原理と価値の計測方法を正しく理解する。
- 研究開発や事業活動などを組織的に遂行していくうえでの課題を正しく理解し、合理的かつ効率的におこなうための能力を身につける。

## 7. カリキュラムポリシー（教育課程の編成・実施方針）

本研究科は、<技術経営>者として備えるべき技術と経営に関する見識を体系的・段階的に学生に提供すると同時に、学生の多様なバックグラウンドやニーズを踏まえ、上記の見識を実践的に活用する能力を涵養するよう教育課程を編成します。

- <技術経営>者として最低限習得しておくべき技術と経営に関する基本的理論および分析手法を、必修科目である基盤科目群で提供する。
- 基盤科目で習得した理論や分析手法を、学生のバックグラウンドに応じた形で体系的に進化させるために、選択必修科目である展開科目群を提供する。
- 基盤科目群、展開科目群で習得した理論や分析手法を、今日的なテーマに適用して応用力や実践力を高めるために応用科目群を提供する。
- 講義科目等で獲得した見識を自らが設定した課題に適用し、技術と経営の複眼的な視点から社会や企業、組織における様々な問題に対して解決を目指して取り組む力を養うために特定課題研究を実施する。
- グローバルなフィールドで活躍する<技術経営>者として必要な外国語でのコミュニケーション能力と、他国における技術経営に関する知識を習得する機会を提供するために、特別科目を設ける。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

当研究科の学生は基本的にすべてが社会人学生で入学以前の職務経歴は様々であり、また入学年度によってもばらつきが大きいことが特徴的である。そのため授業の成績についても科目ごと、あるいは年度ごとによる差異が大きく全般的な評価を行うことは困難である。

※今年度の状況および経年変化について分析し、今後の課題を記述してください。

<IYOCAN を利用されている学部・研究科>

IYOCAN 集計データが直接ダウンロードできるようになりました

IYOCAN2 に直接アクセスし、必要なデータが自由にダウンロードできるようになっております。詳細につきましては、別紙「IYOCAN 集計データへのアクセスおよびダウンロードの方法について」を御覧ください。

なお、後期分教員授業自己評価については現在実施中ですので、ダウンロード時点のデータをもとに作成していただいで結構です。

【IYOCAN2】 URL : <http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/IYOCAN2.html>

## 第5節 FD実施経費報告書

第2節で記載した FD 研修の実施に関しては、講師が先方の業務上の出張の一部として来学していただいたことから、当方において特段の経費は発生していない。

平成25年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
技術経営研究科	特許庁審査第一部調整課・澤井課長による講演並びに質疑応答		0	技術経営における重要な要素である特許を中心とする知的財産を巡る今日的な課題について理解を深めた
<b>計</b>			<b>0</b>	

## 第6節 来年度の課題

技術経営研究科の学生はすでに記したように基本的に社会人学生であり、平日はそれぞれの職場において勤務しながら週末に通学して勉学に励んでいるが、学習意欲・態度はきわめて積極的である。ただし入学までの職務経歴や知識経験・得意分野などでの違いなどが大きいことから教育指導の上では科目により様々な課題があり、多角的な取組が必要とされる。また、25年度から留学生を対象とした英語での授業を開始している点については、まずそれぞれの科目における授業内容および方法の確立が当面のところ最大の課題と考えている。

## 第20章 連合獣医学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

山口大学大学院連合獣医学研究科は山口大学，鳥取大学および鹿児島大学の共同獣医学部獣医学科あるいは農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備，施設を連合した基本的に修業年数4年の大学院博士課程である。したがって，各教員の授業公開は主に各大学における学部教育で行われている。しかしながら，下記教育活動については三大学共通で実施されており，他大学の教員ならびに学生の前での授業を行っている（アンケート，学生授業評価結果は第3節，第4節に記載）。

三大学共通で実施される主な教育活動

- 1、共通ゼミナール
- 2、各大学における特別講義
- 3、Eラーニング

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成25年度 教育改善FD研修会（共同獣医学部，連合獣医研究科）

日程 平成25年11月13日（水）

[吉田地区] 14:30～15:00

場所 農学部・共同獣医学部本館 会議室

講師 糸長 雅弘（大学教育センター長）先生

参加者 23名（アンケート回収 23名）、小川勤先生（大学教育センター）

内容

「教育改善FD研修会開催にあたっての事前調査票」において共同獣医学部から回答があった事項に対して、糸長センター長からコメントを行う形で実施された。主要な質問とそれに対する回答は以下の通りである。

#### 1. 自学部生を担当する機会が少なくなった。

【糸長センター長からのコメント】

今回の共通教育のカリキュラム改革上、ご指摘の件はどうしようもない部分である。クラス選択を利用するしかないが、現在、新カリキュラムと旧カリキュラムが同時に運用されている状況では時間割編成上、難しい状況にある。旧カリキュラムがなくなれば、改善したカリキュラムを導入することは可能である。

#### 2. クラスサイズが大きくなり、学生の主体的な学びを促進させるアクティブ・ラーニングの手法が

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	17.4%
良かった	7	30.4%
どちらとも言えない	7	30.4%
あまり良くなかった	3	13.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	2	8.7%
合計	23	100.0%

実施しにくくなった。

【糸長センター長からのコメント】

工学部から提供されている共通教育の授業の内、他学部生が主に受講している授業では、担当者が工夫して、調べ学習やピア学習などを導入して教育成果を上げている事例が報告されている。確かに受講生が多く、さらに他学部生を教える機会が増えてきているが、従来の「教え込む」教育（知識注入型教育）から、新しい共通教育では、「何を教えるかではなく、何ができるようになるか」、受動的学修から能動的学修に転換し、教え過ぎずに考えさせる機会を与えることが重要なポイントである。また、受講者の所属学部などを考慮して、クラスごとに到達目標を適度に調整しながら授業を行う工夫が必要であろう。



この後、糸長センター長より、今年度前期（クォータ1・2）終了時点における新しい共通教育を巡る課題が明らかにされた。一つ目は、クォータ2からクラス指定を行ったが、指定されたクラスを間違い、そのまま最後まで受講していた学生がいたこと。その学生の当該科目の単位は認定しなかったことが報告された。二つ目は受講生の履修上の不正が一部目立ってきたことが報告された。例えば、出席登録を他人に任せたり、他人のレポートをほとんど真似たり、組織的にレポートを作成したりする不正が発生している。三つ目は新しい教育ニーズに対応する必要があること。具体的には、現在、課外授業として開講している「TOEIC スコアアップ大作戦」を来年度から単位化すること。知財関係の科目や初習外国語などの科目を共通教育の外枠で開講し、大学教育センターが責任部局として運営していくなどの説明があった。

## 第3節 教育改善に関する活動

年1回開催される共通ゼミナール、年3回実施される特別講義では毎回、学生アンケートを実施し、教育改善にフィードバックしている。

(1) 平成25年度山口大学大学院連合獣医学研究科 獣医学共通ゼミナールに関するアンケート結果（抜粋）

期 日	平成25年8月21日（水）～8月24日（土）		
場 所	山口大学		
参加学生	55名	アンケート回収	43名分

1) 英語論文執筆のすすめについて

1. これからの研究に、非常に有用な情報が得られたと思います。Raw Data、ノートの重要性を再確認できました。

2. 非常に興味深い内容でした。来年以降は「研究者倫理」と「論文投稿テクニック」の2つの講義を実施するのもいいのではないのでしょうか。
  3. 論理的な問題について非常に考えさせられる内容でした。実際に問題に立ち会った方のお話も聞けて良かったです。一方で、昨年のような研究計画から論文投稿までの一連の流れのような話が大幅に削られていたので、1年生には少しものたりなかったのではないかと思います。
  4. 同じ研究という分野でおこった不正というのは、タブー化されがちにあるが、研究者を目指すなら必ず考えなければならないテーマだと思うので題材として取り上げられてとても良かったと思います。
  5. 度会先生の本講義を1年次（鳥大）でも受講しましたが、今回は研究者としてのモラルを中心に、不正の実例等を含め学ぶことができました。今後、英語論文を執筆していく上で参考にしながら取り組んでいきたいと思います。
- 2) 実践プレゼンテーション論について
1. とても有意義だった。時間が許せばポスターの作り方も聞きたかった。また、日本語と英語でスライドの作り方など異なるところがあるのかも知りたかった。
  2. 話が分かりやすく、実例も多く示していただいたので参考になった。プレゼンテーションの方法論に関する講義は受けたことがなかったの、内容的にも満足が高かった。
  3. プレゼン準備からスライド作成、プレゼン方法まで非常に分かりやすく今後すぐに役立つ内容であり非常に有意義でした。堀口先生のプレゼン本を購入することにしましたが、プレゼン力をみがきながら今後活かしていきたいと思いました。
- 3) セミナーC, D 2年生以上
1. That were very interesting seminars due to the good speaking and clear slides of the professors. I am enjoyed it very much.
  2. Both seminar are interesting and I learned new things that I' ve never heard before. Prof Sato' s seminar was particularly interesting and fun.
  3. 二人の先生はおもしろくて楽しかった。刺身の寄生虫で、食中毒を起こすなど、みんなが興味があって各々質問がありました。
  4. The presentation of animal locomotion is good although the way to present is not interesting. The professor didn' t answer the questions. I enjoyed the presentation about parasitology.
- 4) ポスター研究紹介について
1. 自分の発表を色々聞いてくれたので良かった。英語での説明は難しいが、トライして良かった。
  2. 1人1分ずつなど内容をしゃべる時間を設けた方が良かった。何度も説明するのは大変だし、完全にフリーだと内容を聞いてディスカッションするのは30分だと2~3人が限界だった。
  3. 自分の専門だけでなく、専門以外の分野の知見に触れられて勉強になった。自分の研究にも応用できそうなものもあった。1時間ではなかなか全てをまわれるのは難しかったので、もう少し時間があるとなお良かった。
  4. ポスター発表数に比べて発表者以外の学生や教員の数が多く、会場もやや狭かったため若干ゴミゴミしていた感はありましたが、その分、質疑や意見交換も活発に行われよい時間だったと思います。
  5. some students speak only Japanese, which make discussion is very difficult.
- 5) 学生研究紹介について

1. 今年は学生からの質問が活発だった。座長によっては全く通訳なしとトライしてから通訳して頂けることの差が大きかった。できたら統一して頂きたい。
  2. There are not too many presentations, which makes it earner to concentrate and understand. I' m glad that every graduate student tried their best to speak English in public on stage.
  3. どの発表者も英語で上手なプレゼンができていて驚いた。自分が発表するときに十分な危機感を覚えたので、これを機に英語での会話などを訓練していきたい。
  4. 普段自分の研究とは異なる分野の研究について、知ることができる数少ない機会なので興味深い演題も多く、良い刺激になりました。
  5. 今回3回目の参加で自らも発表したが、過去2年に比べ、質疑も活発で良かったと思います。日本人学生からも英語で訓練も含め積極的に質問や回答している姿も見受けられ、充実した時間だと思いました。
  6. 山口大学の発表舞台上はいつもフロアの声が聞こえないと聞きます。前回の山口大学の発表した人たちも山大の会場はフロアの声が聞こえないからやりにくいと言っていました。改善できないでしょうか？
  7. I enjoyed some presentations, but many students should practice to use English Language.
- 6) 特別講演について
1. Special lectures are very important for growing scientist. This section was very informative.
  2. professors present the lecturer clearly. The lectures is very interesting and useful for student. It possible, please give more special lecture (about 2 special lecture)
  3. 獣医分野では、あまり聞くことがない、共生やゾウリムシについての話はとても興味深いものでした。
  4. 専門用語が多く、その解説が若干不足していたように思え、自分自身の英語力の問題も大きいですが、十分理解できたとは思えませんでした。この点では、昨年、一昨年に比べるとやや期待とは異なっていましたが、自らの英語力もみがき、自分の専門外でもついていけるように努力していきたいと思います。
  5. 英語で聞くと専門用語が一切分からなくて前半から内容を追えなくなりました。多少、背景部分の用語説明などhand outがあれば良いのですが。

(2) 平成25年度第1回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成25年度第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成25年6月7日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鹿児島大学

〈担当教員名〉 鳥取大学 日笠 喜朗 教授

『Effects of  $\alpha$ 2-Adrenergic Agents on Platelet Aggregation in Animals  
(動物における $\alpha$ 2-アドレナリン受容体作用薬の血小板凝集への効果)』

山口大学 森本 将弘 教授

『Recent topics of Th2 immune responses ; understanding the roles of CD4 T cells  
(Th2 免疫反応最近の話題について ; CD4 陽性 T リンパ球の機能理解のために)』

〈受講者〉

- |                |    |
|----------------|----|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 4名 |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 2名 |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 2名 |



- |                |       |
|----------------|-------|
| 4. 連合獣医学研究科4年生 | 2名    |
| 5. 共同獣医学部 6年生  | 1名    |
|                | 合計11名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- |        |            |
|--------|------------|
| 1. はい  | 11名 (100%) |
| 2. いいえ | 0名 (0%)    |
| 3. 無回答 | 0名 (0%)    |

〈講義についての意見・感想〉

- ・英語での講義がとても新鮮でおもしろかったです。ご講義ありがとうございました。

(3) 平成25年度第2回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成25年度第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成25年10月4日(金) 10時20分～11時50分

〈実施大学〉 山口大学

〈担当教員名〉 鳥取大学 森田 剛仁 教授

『Immunohistochemical approach for some neurological diseases in animals (動物のいくつかの神経疾患における免疫組織学的アプローチ)』

鹿児島大学 帆保 誠二 教授

『Characteristics of the respiratory system and respiratory disorders of Thoroughbred horses』

〈受講者〉 75名

〈アンケート回答者〉

- |                |       |
|----------------|-------|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 3名    |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 1名    |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 4名    |
| 4. 共同獣医学部 2年生  | 1名    |
| 5. 共同獣医学部 3年生  | 17名   |
| 6. 共同獣医学部 4年生  | 21名   |
| 7. 共同獣医学部 6年生  | 12名   |
|                | 合計59名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- |        |           |
|--------|-----------|
| 1. はい  | 55名 (93%) |
| 2. いいえ | 1名 (2%)   |
| 3. 無回答 | 2名 (5%)   |

〈講義についての意見・感想〉

- ・特別講義は普段聞く機会がないテーマの講義なためとても興味深く勉強になります。要望として、開講の連絡をもっと早く欲しいです。大学院生はほぼ毎日学校にいますが、毎日実験の計画をしています。実験は準備を数日前からやっているものも多いので、連絡は早めに欲しいです。

- ・ 普段、なじみのない分野の話を受けて、とても有意義だった。今回のような臨床分野の研究にも興味を持って聞いていきたい。
- ・ 山口大学とは違う他大学の研究の一部を知ることができたのは、とてもいい機会だった。
- ・ 日本語での説明を交えた講義は学部生にとってもわかりやすく、特に馬の呼吸器に関する講義はたいへん興味深かったです。

(4) 平成25年度第3回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成25年度第3回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成25年11月8日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 鹿児島大学 三好 宣彰 教授

『Lung carcinomas in dogs and cats - immunohistochemical analysis -  
(犬と猫における肺癌-免疫組織化学的検索-)』

山口大学 奥田 優 教授

『Diagnostic methods for canine leptospirosis』

〈受講者〉 13名

〈アンケート回答者〉

1. 連合獣医学研究科1年生	1名
2. 連合獣医学研究科2年生	2名
3. 連合獣医学研究科3年生	4名
4. 連合獣医学研究科2年生	3名
5. その他	1名
	合計11名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

1. はい	11名
2. いいえ	0名
3. 無回答	0名

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 以前、レプトスピラ症の診断に苦労したことがあったので、とても有意義な研究であると思います。面白かったです。
- ・ 肺癌に関する講義は、私にとっては少し理解が困難であった。レプトスピラ抗原の同定から、レプトスピラ症への応用に至るまでのストーリーが素晴らしく感じた。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

### 山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価(結果)

<授業科目名> 平成25年度獣医学共通ゼミナール セミナー(平成25年8月22日 実施)

<担当教員名> 山口大学 担当教員(水野、前田)

参加学生 55名 アンケート回収 44名分

#### <学年>

1. 1年生	12人
2. 2年生	19人
3. 3年生	17人
4. 4年生	5人
5. 無回答	1人

#### <学生区分>

1. 一般学生	17人
2. 留学生	11人
3. 社会人	15人
4. 無回答	1人

#### <質問 I >

##### 1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

1. そう思わない	0人
2. 余りそう思わない	0人
3. どちらとも言えない	2人
4. ややそう思う	9人
5. そう思う	33人
6. 無回答	0人

##### 2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

1. そう思わない	0人
2. 余りそう思わない	0人

3. どちらとも言えない	3 人
4. ややそう思う	19 人
5. そう思う	22 人
6. 無回答	0 人
<b>3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？</b>	
1. そう思わない	2 人
2. 余りそう思わない	3 人
3. どちらとも言えない	9 人
4. ややそう思う	11 人
5. そう思う	19 人
6. 無回答	0 人
<b>4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？</b>	
1. そう思わない	1 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	3 人
4. ややそう思う	9 人
5. そう思う	31 人
6. 無回答	0 人
<b>5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？</b>	
1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	2 人
4. ややそう思う	12 人
5. そう思う	30 人
6. 無回答	0 人
<b>6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？</b>	
1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	1 人
4. ややそう思う	13 人

5.	そう思う	30	人
6.	無回答	0	人
<b>7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？</b>			
1.	そう思わない	0	人
2.	余りそう思わない	0	人
3.	どちらとも言えない	1	人
4.	ややそう思う	9	人
5.	そう思う	34	人
6.	無回答	0	人
<b>8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？</b>			
1.	そう思わない	0	人
2.	余りそう思わない	0	人
3.	どちらとも言えない	4	人
4.	ややそう思う	28	人
5.	そう思う	12	人
6.	無回答	0	人
<b>9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？</b>			
1.	そう思わない	1	人
2.	余りそう思わない	0	人
3.	どちらとも言えない	2	人
4.	ややそう思う	10	人
5.	そう思う	31	人
6.	無回答	0	人
<b>10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？</b>			
1.	そう思わない	0	人
2.	余りそう思わない	0	人
3.	どちらとも言えない	4	人
4.	ややそう思う	13	人
5.	そう思う	27	人

6. 無回答

0 人

## 山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価(結果)

<授業科目名> 平成25年度獣医学特別ゼミナール (平成25年8月20日、21日 実施)

<担当教員名> 山口大学 担当教員

(大濱、渡邊、谷口、加納、谷、清水、日下部、角川)

参加学生 27名 アンケート回収 24名分

### <学年>

1. 1年生	9 人
2. 2年生	7 人
3. 3年生	7 人
4. 4年生	0 人
5. 無回答	1 人

### <学生区分>

1. 一般学生	10 人
2. 留学生	6 人
3. 社会人	7 人
4. 無回答	1 人

### <質問 I >

#### 1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	2 人
4. ややそう思う	9 人
5. そう思う	13 人
6. 無回答	0 人

#### 2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	1 人

3. どちらとも言えない	1 人
4. ややそう思う	7 人
5. そう思う	15 人
6. 無回答	0 人
<b>3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？</b>	
1. そう思わない	2 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	12 人
4. ややそう思う	3 人
5. そう思う	7 人
6. 無回答	0 人
<b>4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？</b>	
1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	1 人
4. ややそう思う	6 人
5. そう思う	17 人
6. 無回答	0 人
<b>5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？</b>	
1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	0 人
4. ややそう思う	10 人
5. そう思う	14 人
6. 無回答	0 人
<b>6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？</b>	
1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	2 人
4. ややそう思う	8 人



5.	そう思う	14 人
6.	無回答	0 人
<b>7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？</b>		
1.	そう思わない	1 人
2.	余りそう思わない	0 人
3.	どちらとも言えない	2 人
4.	ややそう思う	10 人
5.	そう思う	11 人
6.	無回答	0 人
<b>8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？</b>		
1.	そう思わない	0 人
2.	余りそう思わない	2 人
3.	どちらとも言えない	4 人
4.	ややそう思う	12 人
5.	そう思う	6 人
6.	無回答	0 人
<b>9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？</b>		
1.	そう思わない	0 人
2.	余りそう思わない	0 人
3.	どちらとも言えない	4 人
4.	ややそう思う	7 人
5.	そう思う	13 人
6.	無回答	0 人
<b>10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？</b>		
1.	そう思わない	0 人
2.	余りそう思わない	1 人
3.	どちらとも言えない	2 人
4.	ややそう思う	6 人
5.	そう思う	15 人

## 第5節 FD実施経費報告書

該当なし

## 第6節 来年度の課題

- (1) 教育改善について  
各大学の代議員で構成される学務担当者会議を毎月開催し、教育の充実を目的とした改善を検討しており、FDに関しても更なる充実を図りたい。

## 平成 25 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	任 期	備 考
	副学長 (教育学生担当)	瀬 瀬 厚		大学教育 機構長
大学教育センター	センター長	糸 長 雅 弘		
学生支援センター	センター長	宮 田 浩 文		
保健管理センター	所 長	奥 屋 茂		
留学生センター	センター長	福 屋 利 信		
人文学部	教 授	高 橋 征 仁	H24.4.1~H26.3.31	
人文学部	教 授	磯 部 佳 宏	H25.4.1~H25.10.26	
人文学部	教 授	宮 原 一 成	H25.11.20~H27.3.31	
教育学部	教 授	中 野 伸 彦	H24.4.1~H26.3.31	
教育学部	教 授	丹 信 介	H25.4.1~H27.3.31	
経済学部	教 授	河 村 誠 治	H24.4.1~H26.3.31	
経済学部	教 授	鴨 川 啓 信	H25.4.1~H27.3.31	
理学部	教 授	山 崎 鈴 子	H24.4.1~H26.3.31	
理学部	教 授	本 多 謙 介	H25.4.1~H27.3.31	
医学部	教 授	園 田 康 平	H25.4.1~H27.3.31	医学科
医学部	教 授	田 中 満由美	H25.4.1~H26.3.31	保健学科
工学部	教 授	山 田 陽 一	H24.4.1~H26.3.31	
工学部	教 授	多田村 克 己	H25.4.1~H27.3.31	
農学部	教 授	伊 藤 真 一	H24.4.1~H26.3.31	
農学部	教 授	松 井 健 二	H25.4.1~H27.3.31	
共同獣医学部	教 授	奥 田 優	H24.4.1~H26.3.31	
共同獣医学部	准教授	大 濱 剛	H25.4.1~H27.3.31	
学生支援部	学生支援部長	大 西 真 次		
学生支援部	教育支援課長	庄 野 栄 二		
学生支援部	学生支援課長	杉 山 美由紀		

## 平成 25 年度 山口大学 学部・研究科 FD 担当者 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	准教授	乾 秀 行	
教育学部 教育学研究科	教 授	村 上 林 造	
経済学部 経済学研究科	教 授	塚 田 広 人	
理学部 医学系研究科（理学） 理工学研究科（理学）	教 授	中 内 伸 光	
医学部（医学科） 医学系研究科（医学）	教 授	松 井 邦 彦	
医学部（保健学科）	教 授	山 根 俊 恵	
工学部 理工学研究科（工学） 医学系研究科（工学）	教 授	嶋 村 修 二	
農学部 農学研究科 医学系研究科（農学）	教 授	松 井 健 二	
共同獣医学部	准教授	大 濱 剛	
東アジア研究科	准教授	更 科 慎 一	
技術経営研究科	教 授	向 山 尚 志	
連合獣医学研究科	教 授	奥 田 優	

平成 25 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	糸 長 雅 弘	
//	主 事	菊 政 勲	
//	主 事	野 村 厚 志	
//	教 授	小 川 勤	
//	教 授	川 崎 勝	
//	准教授	木 下 真	
//	准教授	林 透	
//	講 師	岡 田 耕 一	

平成 25 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」  
平成 26 年 11 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会  
山口市吉田 1677-1  
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)